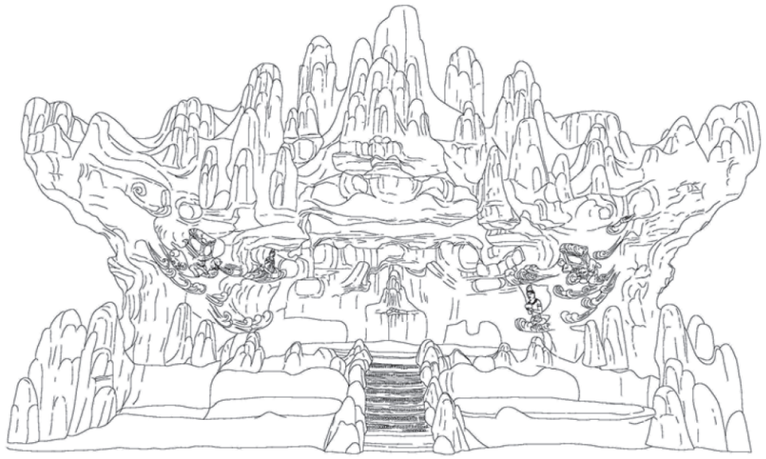


法隆寺五重塔 塔本塑像東面背景・描き起こし図

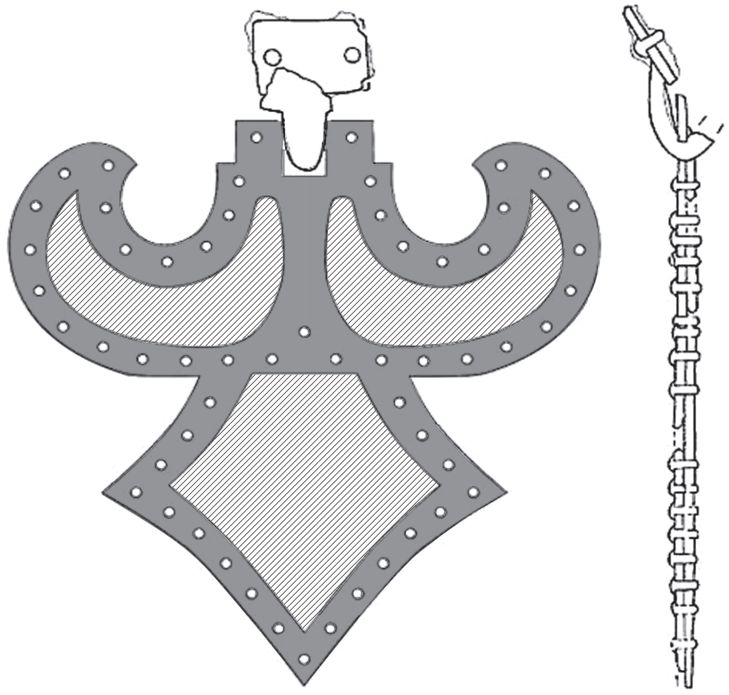
大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録２　2016　前橋市教育委員会

地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

The Omuro Park

大室古墳の教室

考古学講演会・講座の記録 2



前二子古墳双葉剣菱形杏葉の復元案その２

2016. 12

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

目　　次

1　平成27年度大室古墳の教室事業について……　1～ 12

2　匠の教室・制作品完成記念
考古学講演会
「盾持人埴輪の世界 ～古墳をまもる埴輪～」
（日高　　慎：東京学芸大学教授）……　13～ 20

3　講座・赤城山南麓の考古学2015
『赤城山南麓の古代を学ぶ』

1　「石やり大型流通センター・武井遺跡」
（小菅　将夫：岩　宿　博　物　館）……　21～ 30

2　「縄文・尖底土器の謎」
（橋本　　淳：群馬県教育委員会）……　31～ 45

3　「古墳時代の豪族の館」
（横澤　真一：伊勢崎市教育委員会）……　47～ 59

4　「赤城山南麓古墳めぐりバスツアー」
（深澤　敦仁：群馬県立歴史博物館）……　61～ 71

5　「櫃石と巨石祭祀　～赤城山南麓の巨石祭祀と土器集積祭祀の比較～」
（杉山　秀宏：群馬県埋蔵文化財調査事業団）…　73～ 95

6　「赤堀花しょうぶ園の女堀を掘る」
（川道　　亨：伊勢崎市教育委員会）……　97～107

付録　「後二子古墳範囲確認調査出土の円筒埴輪について」
（前原　　豊：前橋市教育委員会）……109～139
（永井　智教：日本考古学協会会員）
（横澤　真一：伊勢崎市教育委員会）

1　本書は、平成27年度に史跡 前二子古墳等 歴史活き活き！ 史跡等総合活用整備事業で開講した考古学講演会・講座の発表をまとめた記録集である。

2　本書の編集は文化財保護係専門員　前原　豊が行った。

3　講演会・講座の文章化については、文化財保護係嘱託員　中島侑子が行った。

4　本事業の開催にあたっては、市民ボランティアの阿部上枝、阿部信一、柴崎まさ子、柴田敏子、戸丸澄江、野下登志子、萩原保彦、峰岸あや子、吉田真理子の協力があった。

5　講演会・講座については講演内容と配布レジュメを掲載し、当日使用したスライドについては、紙数の都合から割愛した。

平成27年度大室古墳の教室事業について

1　事業名称

史跡　前二子古墳･中二子古墳･後二子古墳ならびに小二子古墳､歴史活き活き！ 史跡等総合活用整備事業

前橋市事業名 大室古墳の教室

2　目　　的

大室古墳群（史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳ならびに小二子古墳）は、大室公園とともに整備が完了し、市民の憩いの場として、また歴史学習の拠点として、様々な体験学習や活用事業に多くの市民が参加している。

ここに計画する大室古墳の教室は、土地の歴史の実証として維持されてきた大室古墳群を、広く市民が知り、親しみ、学び、誇ることを通して、これからのまちづくり、人づくりに資することを目的とする。

3　事 業 費

5,000,000円（50％国庫補助対象）

平成26年度・27年度　歴史活き活き！活用整備事業

3,600,000円（50％国庫補助事業）

平成28年度～30年度　地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

4　開催した普及事業

⑴　小学生夏休み森の考古学教室

期間：平成27年７月23日㈭～８月21日㈮の毎週木・金曜日

時間：午前９時～午前12時

講師：文化財保護課職員

会場：大室公園管理事務所ホール

図１　小学生夏休み森の考古学教室・鏡つくり

第１回　土偶つくり１

平成27年７月23日㈭　９名

第２回　土偶つくり２

平成27年７月24日㈮　５名

第３回　埴輪つくり１

平成27年７月30日㈭　20名

第４回　埴輪つくり２

平成27年７月31日㈮　９名

第５回　勾玉つくり１

平成27年８月６日㈭　21名

第６回　勾玉つくり２

平成27年８月７日㈮　18名

第７回　鏡つくり１

平成27年８月20日㈭　19名

第８回　鏡つくり２

平成27年８月21日㈮　21名

○見本の埴輪と土偶の焼成

平成27年７月13日㈪　一心窯の簡易窯焼成

○小学生作成の埴輪と土偶の焼成

平成27年８月17日㈪　一心窯の灯油窯焼成

平成27年８月18日㈫　一心窯の簡易窯焼成

○作品引渡　平成27年８月19日㈬～

⑵　講座・赤城山南麓の考古学2015

「赤城山南麓の古代を学ぶ」

期間：８月29日㈯～10月３日㈯の毎週土曜日

時間：午前９時半～午前11時半

会場：大室公園民家園離れ

図２　講座・赤城山南麓の考古学2015

第１回　赤城山南麓の旧石器時代

「石やり大型流通センター・武井遺跡」

講師：小菅　将夫氏（岩宿博物館）

平成27年８月29日㈯、24名

第２回　赤城山南麓の縄文時代

「縄文・尖底土器の謎」

講師：橋本　　淳氏（群馬県教育委員会）
平成27年９月５日㈯、24名
第３回　赤城山南麓の古墳時代
「古墳時代の豪族の館」
講師：横澤　真一氏（伊勢崎市教育委員会）
平成27年９月12日㈯、27名
第４回　現地講義
「赤城山南麓古墳めぐりバス・ツアー」
講師：深澤　敦仁氏（群馬県立歴史博物館）
平成27年９月19日㈯ 午前９時～午後３時半 21名
第５回　赤城山南麓の古墳時代
「櫃石と巨石祭祀」
講師：杉山　秀宏氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
平成27年９月26日㈯、27名
第６回　赤城山南麓の中世
「赤堀花しょうぶ園の女堀を掘る」
講師：川道　　亨氏（伊勢崎市教育委員会）
平成27年10月３日㈯、23名

⑶　匠の教室

図３　匠の教室第２回・盾持人埴輪をつくる

第１回　縄文土偶をつくる
会場：大室民家園主屋・離れ
講師：八木　孝男氏（縄文土器制作家）
期間：平成27年10月９日㈮～10月18日㈰
時間：午前９時～午後４時
参加者数：16名　延べ人数：89名
第２回　盾持人埴輪をつくる
会場：大室民家園主屋・離れ
講師：石井　政幸氏（一心窯主宰）
期間：平成27年10月30日㈮～11月８日㈰
時間：午前９時～午後４時
参加者数：23名　延べ人数：145名
第３回　天平の塑像をつくる
会場：大室民家園離れ
講師：桜岡　正信氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
期間：平成27年11月21・28日、12月５・12・19・26日㈯
時間：午前９時～午前12時
参加者数：16名　延べ人数：62名
第４回　前二子古墳の双葉剣菱形杏葉をつくる
会場：大室民家園主屋・離れ
講師：杉山　秀宏氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
日時：平成28年１月30日㈯　雪　午前９時～午後４時
参加者数：15名　延べ人数：15名
第５回　盾持人埴輪窯詰め
会場：鼻毛石町一心窯
日時：平成27年12月11日㈮　午前９時～午前12時
参加者数：４名
第６回　盾持人埴輪焼成と縄文土偶野焼き
会場：鼻毛石町一心窯
日時：平成27年12月14日㈪　午前９時～午後４時
参加者数：14名
第７回　盾持人埴輪窯出し・窯詰め
会場：鼻毛石町一心窯
日時：平成27年12月20日㈰　午前９時～午後２時
参加者数：18名
第８回　盾持人埴輪第２回焼成
会場：鼻毛石町一心窯
日時：平成27年12月21日㈪　午前９時～午後４時
参加者数：３名
第８回　盾持人埴輪第２回窯出し
会場：鼻毛石町一心窯
日時：平成27年12月26日㈯　午前９時～午後２時
参加者数：３名

⑷　制作品完成記念考古学講演会

図４　制作品完成記念考古学講演会・日高　慎先生

期日：平成27年２月６日㈯
時間：午後２時～午後４時
演題：「盾持人埴輪の世界～古墳をまもる埴輪～」
講師：日高　　慎氏（東京学芸大学教授）
会場：前橋市総合福祉会館多目的ホール
聴講者：215名

⑸　大室はにわ館展示

場所：西大室町2510　民家園土蔵
面積：１階24㎡・２階24㎡計48㎡
開館：４月～12月木曜日～日曜日・祝日１月～３月土・日曜日・祝日、年末年始は休館
時間：午前９時～午後４時
展示資料
①　大室古墳群・内堀遺跡群出土品。旧石器・縄文・古墳時代の遺物・埴輪など
②　前二子古墳石室復元市民プロジェクトの市民ボランティア制作品。埴輪・馬具・玉・鏡・須恵器・冠など
③　韓国慶州民俗村新羅窯の新羅焼き。高杯・壺・装飾土器など
④　東京福祉大学柴田研究室制作学習教材。「３Ｄ映像でみる大室古墳群」
⑥　お面をつくる・土偶をつくる・縄文文様体験しようコーナー
⑦　大室古墳群模型・前二子古墳石室模型
⑧　入館者数：平成27年度8,165人

４月	989	10月	828
５月	947	11月	877
６月	1,057	12月	307
７月	329	１月	425
８月	400	２月	541
９月	726	３月	739
合計		8,165	

⑹　ボランティア活動

第１回　藤棚ベンチペンキ塗り替え
平成27年９月20日㈰　３名
第２回　匠の教室土偶つくり会場準備
平成27年10月８日㈭
場所：民家園離れ　参加者：４名
第３回　会場撤去・埴輪つくり会場準備
平成27年10月19日㈪　３名
第４回会場撤去・塑像つくり会場準備
平成27年11月９日㈪
場所：民家園主屋・離れ　参加者：６名
第５回　匠の教埴輪窯詰め
平成27年12月11日㈮
場所：鼻毛石町一心窯　参加者：４名
第６回　匠の教室埴輪・土偶焼成
平成27年12月14日㈪
場所：鼻毛石町一心窯　参加者：14名
第７回　匠の教室埴輪窯出し
平成27年12月20日㈰
場所：鼻毛石町一心窯　参加者：18名
第８回　匠の教室埴輪窯出し
平成27年12月26日㈯
場所：鼻毛石町一心窯　参加者：３名
第９回　考古学講演会準備・撤去
平成28年２月６日㈯
場所：日吉町総合福祉会館　参加者：11名
第10回　盾持人埴輪展示
平成28年２月８日㈪
場所：大室民家園主屋ウマヤ　参加者：２名

図５　大室公園民家園主屋ウマヤの展示

⑺　盾持人埴輪制作品の展示場開設

期日：平成27年12月22日㈫
場所：大室公園民家園主屋ウマヤ
目的：床面積15㎡のウマヤに床を貼り展示場に改装

図６　大室公園民家園庭の展示

し、盾持人埴輪、四天王寺宝物館蔵の盛装した人が乗る飾り馬形埴輪制作品を展示して公開。また、民家園の庭にも中二子古墳盾持人埴輪制作品を設置した。

⑻　前二子古墳石室模型の製作委託

期間：平成27年11月６日～平成28年１月15日

内容：前二子古墳石室模型を縮尺１/15で製作。
文化財保護課総社ギャラリーに展示。

図７　前二子古墳の石室模型

⑼　ユニット・ハウスの電気工事

期間：平成27年６月12日～７月31日まで

内容：民家園北側に設置した小ユニット・ハウス（5.4m×2.8m）に民家園ポンプ室から電源を引き込む。エアコンと電灯が使用可能となった。

⑽　古墳の藤棚基礎の補強

期日：平成27年12月25日㈮

内容：藤棚が強風にあおられて傾いたため、基礎に切砕を入れ、モルタルで６か所補強した。

⑾　古墳の藤棚植栽

内容：渋川森林事務所主管の「平成27年度緑豊かな地域づくり事業」による植栽が実施された。

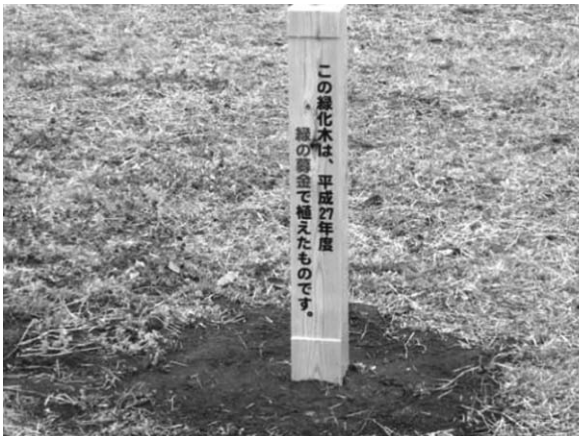


図８　「緑豊かな地域づくり事業」による植栽

期日：平成28年３月５日㈯

樹木：藤３本、モッコウバラ６本

⑿　印刷物の刊行

カラー・普及パンフレットの作成・Ａ４判

①「大室古墳群」20頁　1,000部

②「赤城山南麓の旧石器」16頁　2,000部

③「赤城山南麓の縄文時代」16頁　2,000部

④「赤城山南麓の古墳」16頁　2,000部

⑤「総社古墳群」16頁　2,000部

記録集の作成

「大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録１」Ａ４判144頁　400部

5　来年度に向けて

平成26・27年の２か年にわたって体験学習場や展示場の整備を終えることができた。

平成27年度の小学生考古学体験教室は大室公園管理事務所ホールで開催した。全面ガラス貼りの円形建物は室内にいるのに、あたかも公園にいるようなイメージが味わえる贅沢な空間である。空調機器が３台備わっており快適な環境で体験学習を終えることができた。

また、県文化振興課主催の沼田市奈良古墳群での古代東国文化サミットに参加し、アイロン転写シートを使った「埴輪金ピカ・ストラップつくり」を行った。120名を超す小学生が作成を行い好評であった。今後も、古墳や遺跡を題材にした楽しくワクワクする付加価値のあるイベントグッズの開発にあたっていきたい。

来年度の考古学講座や匠の教室の開催にあたり、大室古墳群や総社古墳群を基本にして、より深く、楽しく学べるような内容で実施していきたい。

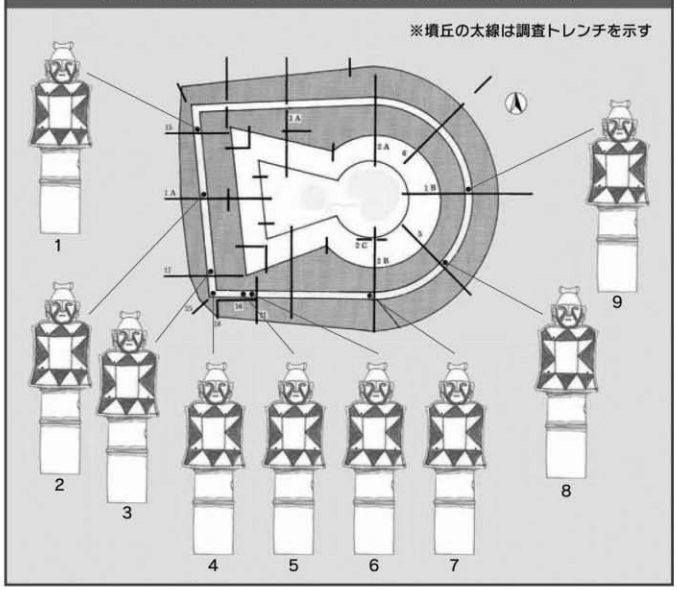
大室古墳の教室　盾持人埴輪をつくる

● 中堤で古墳をまもる人

中二子古墳の調査では、南側を中心に９本の盾持人埴輪が出土しています。盾持人埴輪は、墳丘にはまったく設置されず、すべて中堤から見つかりました。また中堤北側からは、出土していません。このことは、南面から古墳を見せることを意図して設計されたことに関連するものと考えられます。盾持人埴輪は、円筒埴輪や朝顔形埴輪と組み合わせて約６ｍ間隔で設置されていることがわかりました。中堤の約300ｍの距離にわたって盾持人埴輪が設置されたことが考えられるため、約40本の盾持人埴輪が設置されていました。このように中二子古墳の盾持人埴輪は、墳丘には設置されず、南側を中心とする中堤上の外縁部に設置されており、外から古墳に侵入しようとする邪悪なものから、古墳をまもる役割を果したものと考えられます。

● 中二子古墳の中堤に復元された盾持人埴輪

● 中二子古墳のトレンチ調査で見つかった中堤の盾持人埴輪



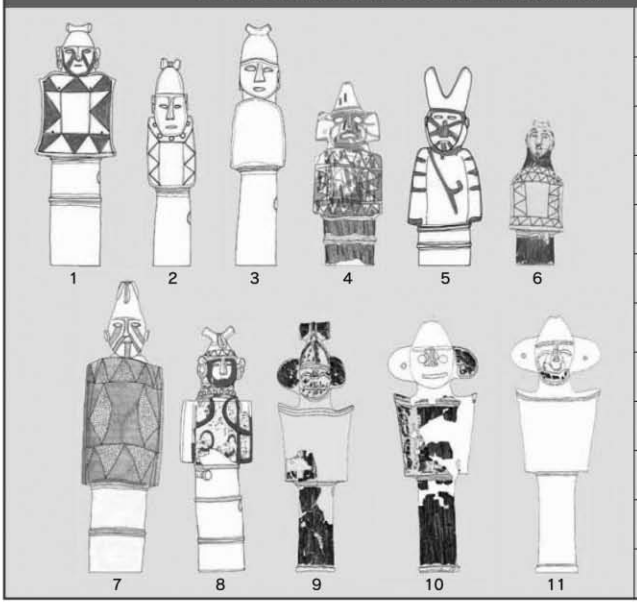
● いろいろな盾持人埴輪

大きな盾と人の顔をつけた盾持人埴輪は「人」と「盾」の両方の性格をもっています。盾持人埴輪は腕がなく、盾を大きく表現しています。高崎市箕郷町太子塚古墳(No.5)から出土した盾持人埴輪は棒の先に鎌をつけたような武器が表現されています。盾持人埴輪の顔は個性的で、独特の髷を結ったり、帽子をかぶったり、頭の形もさまざま。また、大きな耳(No.9～11)をもっていたり、あごひげ(No.6)をはやしたり、顔にイレズミ(No.1、4、5、7、8)をしたり、いかめしい顔や怖い顔(No.2、4)、にっこりと笑った顔(No.9、11)などさまざまな顔が表現されています。おそらく、古墳から邪悪なものを追い払うため、人物埴輪の穏やかな表情とは異なった表現を用いています。

● 窯出しを終えた盾持人埴輪

● 中二子古墳の盾持人埴輪

● 大室古墳の教室で制作したいろいろな盾持人埴輪



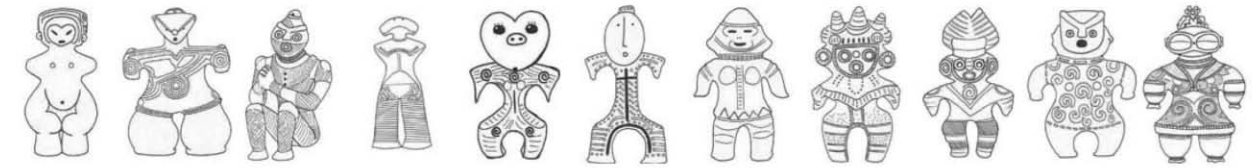
No. 時期	古墳名 所在地・高さ
1	中二子古墳 6世紀 群馬県前橋市 112cm
2	内堀１号墳 6世紀 群馬県前橋市 98cm
3	赤堀59号墳 6世紀 群馬県伊勢崎市 112cm
4	保渡田八幡塚古墳 5世紀 群馬県高崎市 86cm
5	太子塚古墳 5世紀 群馬県高崎市 92cm
6	おくま山古墳 6世紀 埼玉県東松山市 67cm
7	塚廻り１号墳 5世紀 群馬県太田市 135cm
8	綿貫観音山古墳 6世紀 群馬県高崎市 114cm
9	前の山古墳 6世紀 埼玉県本庄市 116cm
10	前の山古墳 6世紀 埼玉県本庄市 117cm
11	前の山古墳 6世紀 埼玉県本庄市 119cm

大室古墳の教室　縄文土偶をつくる

● 赤城山南麓の縄文遺跡と土偶

赤城山南麓では神沢の森にある横俵遺跡群大道遺跡や粕川町室沢の安通・洞No.２遺跡で縄文後期から晩期の土偶が多数見つかっています。さらに、赤城山南麓に隣接した群大附属中学校の南に拡がる幸塚町西新井遺跡第４地点でも遮光器土偶が発掘されています。このように赤城山南麓でも土偶は数多くみつかっていますが、縄文ビーナスに対抗できる中期土偶は残念ながらありません。しかし、赤城山南麓にはいくつも中期の大型遺跡が存在していることから近い将来、国宝級の土偶が発見されることが期待できます。匠の教室で制作した土偶は、多くの美術書に掲載されている国内を代表する有名な土偶です。粘土を吟味し、川砂を２割ほど混入して素地を作りました。赤色塗彩もベンガラに粘土を入念に磨りつぶして作成した「鬼板」を塗布しました。焼成は「野焼き」を行い、真っ黒な遮光器土偶は燻炭処理を施しました。
土偶は、縄文時代草創期から出現します。そして遮光器土偶が作られた晩期までの約１万年もの長い間作り続けられました。出産間近な女性の姿を表現するものが多く、縄文時代の人々の精神世界や信仰のありかたを表現した芸術品といえます。その解釈をめぐっては、生命の再生や安産祈願、豊饒な獲物の象徴、病気やケガの身代わり説などがあります。

● 大室古墳の教室で制作したいろいろな土偶



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
縄文のビーナス	仮面土偶	合掌土偶	縄文の女神	ハート形土偶	ハート形土偶	山形土偶	仮面土偶	みみずく形土偶	遮光器土偶	遮光器土偶
棚畑遺跡	中ツ原遺跡	風張Ⅰ遺跡	西ノ前遺跡	郷原遺跡	荒小路遺跡	椎塚貝塚	滝馬室遺跡	千網谷戸遺跡	板倉遺跡	亀ケ岡遺跡
高さ27cm	高さ35cm	高さ20cm	高さ45cm	高さ30cm	高さ18cm	高さ12cm	高さ18cm	高さ17ｃｍ	高さ29cm	高さ34cm
縄文中期	縄文後期	縄文後期	縄文中期	縄文後期	縄文後期	縄文後期	縄文晩期	縄文晩期	縄文晩期	縄文晩期
長野県茅野市	長野県茅野市	青森県八戸市	山形県舟形町	群馬県東吾妻町	福島県郡山市	茨城県稲敷市	埼玉県鴻巣市	群馬県桐生市	群馬県板倉町	青森県つがる市

● いよいよ野焼きが開始

● 焼きあがった縄文ビーナス

● 燻炭処理をした遮光器土偶

● 縄文の女神勢ぞろい

大室古墳の教室　天平の塑像をつくる

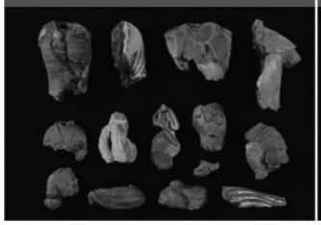
● 山王廃寺跡出土の塑像

山王廃寺に粘土製の塑像が存在することは、昭和 34 年に女性像頭部が出土したことなどから、推測されていました。平成９年の調査では、塔が火災にあったため焼けた塑像などをまとめて埋めた大きな穴（埋納坑）が、塔から西に約 40m で発見されました。その中から、瓦片や土器に混じって人物、動物、山岳、磯形、壁画などいろいろな塑像片をみつけることができました。さらに平成 11 年には、この大きな穴の詳細な調査で 3,000 点以上の塑像片がみつかりました。この中から昭和 34 年に発見された女性像頭部と対になる像も発見されています。

● 女性像頭部（昭和 34 年発見）

● 女性像頭部（平成 11 年発見）

● 塑像



● 山岳と磯形

● イノシシ・獣毛・ラクダ

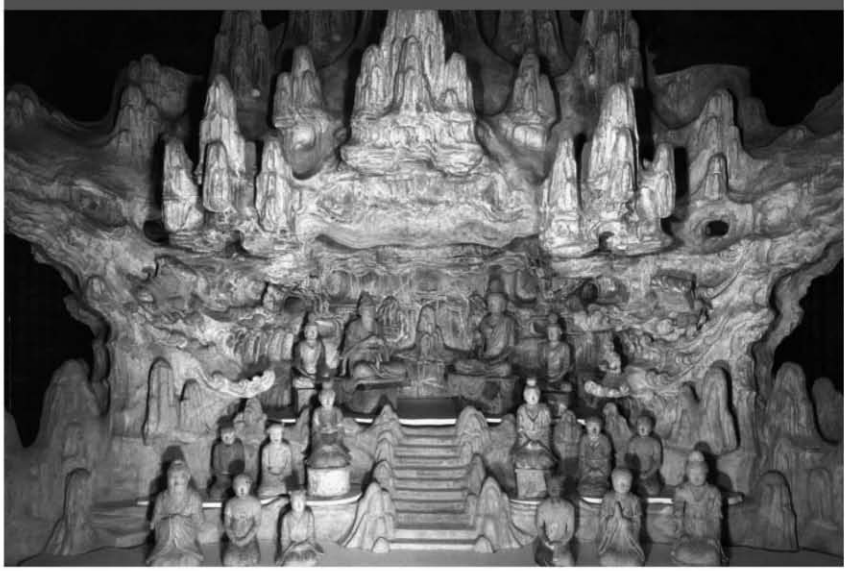
● 八部衆・神将・待者（女性）頭部

● 法隆寺五重塔の塑像

山王廃寺跡で発見された塑像は、東京藝術大学の松田誠一郎教授の研究により、塔本塑像であり、その製作年代は興福寺の八部衆とほぼ同じ８世紀の中頃ということが判明しました。かつて川原寺や薬師寺西塔、元興寺、四天王寺などにも塔本塑像は存在してましたが、現在では法隆寺五重塔初層の塔本塑像しか残っていません。法隆寺の塔本塑像は東西南北残されており、東面は「維摩詰像土」、西面は「分舎利仏土」、南面は「弥勒仏像土」、北面は「涅槃像土」が表現されています。仏伝に記録された重要なシーンがジオラマとして表現されたもので、山王廃寺跡にもこのようなジオラマがありました。

● 法隆寺五重塔初層東面

● 塔本塑像　東面（維摩詰像土）



大室古墳の教室「匠の教室」盾持人埴輪をつくる No.1

進む盾持人埴輪の制作（西大室町・民家園主屋）

前の山古墳と太子塚古墳の盾持人埴輪（民家園主屋）

完成間近な盾持人埴輪（民家園主屋）

保渡田八幡塚古墳と内堀１号墳の盾持人埴輪（民家園離れ）

中二子古墳の盾持人埴輪（民家園離れ）

塚廻り１号墳の盾持人埴輪（民家園離れ）

埴輪工房となった制作会場（民家園離れ）

時を忘れて制作が進む（民家園離れ）

大室古墳の教室「匠の教室」盾持人埴輪をつくる No.2

進む盾持人埴輪の制作（西大室町・民家園主屋）

２号窯で焼成を待つ盾持人埴輪（鼻毛石町一心窯）

完成間近な盾持人埴輪（民家園離れ）

１号窯の隣にある小型の２号窯での窯焚き（鼻毛石町一心窯）

焼きあがった１号窯の内部（鼻毛石町一心窯）

盾持人埴輪を囲んで記念撮影（鼻毛石町一心窯）

作品に見入る制作者（鼻毛石町一心窯）

さあ、お昼ができたよ～どうぞ（鼻毛石町一心窯）

大室古墳の教室「匠の教室」盾持人埴輪をつくる No.3

窯出しされた盾持人埴輪（鼻毛石町一心窯）

埴輪を囲んでお昼のひととき（鼻毛石町一心窯）

並べられた盾持人埴輪（鼻毛石町一心窯）

盾持人埴輪を囲んで記念撮影（鼻毛石町一心窯）

塑像教室が開かれている民家園離れ（西大室町民家園）

細かな作業に奮闘している参加者（民家園離れ）

1/3 サイズの仏像制作は難しい！（民家園離れ）

見事に完成した法隆寺五重塔の東面塔本四面具像

大室古墳の教室「匠の教室」土偶をつくる No.1

土偶をつくる（民家園主屋）

土偶をつくる（民家園離れ）

縄文の女神の制作もすすむ（民家園離れ）

ハート形土偶の制作（民家園離れ）

完成に近づいた縄文の女神（民家園離れ）

野焼きの準備も整った（鼻毛石町一心窯）

野焼き用の薪を運ぶ（鼻毛石町一心窯）

焼きあがった縄文の女神（鼻毛石町一心窯）

大室古墳の教室「匠の教室」土偶をつくる No.2

野焼き用の薪をつくる（鼻毛石町一心窯）

土偶をオキで乾燥させる（鼻毛石町一心窯）

これから本焼きを開始（鼻毛石町一心窯）

薪に火がつきはじめた（鼻毛石町一心窯）

燃えさかる炎（鼻毛石町一心窯）

焼きあがった土偶（鼻毛石町一心窯）

見事に焼きあがった土偶（鼻毛石町一心窯）

土偶を囲んで記念撮影（鼻毛石町一心窯）

匠の教室・制作品完成記念考古学講演会

盾持人埴輪の世界 ～古墳をまもる埴輪～

日　高　　慎（東京学芸大学教授）

はじめに

匠の教室制作品完成記念考古学講演会にお招きいただき、ありがとうございます。東京学芸大学の日高と申します。さきほど、展示されている作品を拝見しましたが、素晴らしいものばかりで、皆さんの技術の高さに驚いております。

さて、本日お話しするのは、盾持人埴輪についてです。盾持人埴輪は、他の形象埴輪と少し異なる性格があったようで、独特な場所に並べられていることが知られています。このことについては、後ほど詳しく話していきたいと思います。

形象埴輪は、人や動物、器物などを象ったものです。人物や馬などという粘土でつくった造形物というと、中国秦始皇帝の兵馬俑を思い浮かべる方もおられると思います。リアルな造形で、一人ひとりの表情まで作っているものですが、埴輪と兵馬俑とは根本的に大きく異なる点があります。それは、埴輪が墳丘上や堤上など外に立て並べられていたのに対して、兵馬俑は始皇帝陵の陵園に土を掘って空間を作り、地下に並べられていたということです。粘土を用いてつくられた俑は、後の時代になっても墓室の中や墓道など地下に埋められたということでは、中国の歴史上、幾度と王朝が代わろうとも一貫していました。

ただし、注視しなければならないこととして、中国の陵墓には石造物を地上に立て並べる風習もあったことです。墳丘地下につくられた内部主体から地上に出たあと、神道と呼ばれるまっすぐに伸びる道の両脇に武官や文官、馬、華表石柱などが立てられていました。かつては、これこそ形象埴輪の起源だという意見もありましたが、現在はあまり比較検討されていません。同時代性を考えると、関係がないとは言えないとも思われます。改めて検討する必要があると思います。

1　古墳の造りと埴輪

埴輪は粘土で細工して作り出されたものです。当初は野焼き焼成で、平窯と呼ばれる比較的簡便な施設で焼成されていたようです。奈良県奈良市東院地区埴輪窯、香川県高松市中間西井坪埴輪窯、三重県鈴鹿市石塚遺跡焼成土坑、長野県飯田市殿村遺跡方形土坑などが知られています。焼かれていた埴輪には、炭素が付着した黒斑があります。

一方、中二子古墳の埴輪のような硬質な焼き上がりとなっているものは、窖窯焼成のものです。地面を斜めに刳り貫いてトンネル状にした地下式や、地面を溝状に斜めに掘って上半は粘土などで構築した半地下式のものがあります（日高2016）。

群馬県域でも、野焼き段階の埴輪は前期から中期前半の大型前方後円墳などで出土しています。前期では太田市朝子塚古墳、高崎市浅間山古墳、藤岡市下郷天神塚古墳などがあげられますし、中期では藤岡市白石稲荷山古墳、太田市太田天神山古墳、伊勢崎市御富士山古墳などがあげられます。これ以外にも中小古墳を中心に野焼き段階の円筒埴輪が出土していますし、いわゆる壺形埴輪の存在も見逃せません。しかしながら、群馬県内での野焼きの窯の検出は皆無です。

埴輪窯の遺跡は全国で118遺跡が知られていますが、野焼きの埴輪窯は４遺跡、わずか３％で、それ以外は窖窯ということになります。これほどまでに野焼き段階の窯が発見されない理由としては、窯自体が浅く掘り窪められた程度の構造であって、地表面が耕作などで削平されると痕跡すら残らないからと考えられます。また、構築される場所が比較的平坦な場所であり、その後の開発行為、すなわち人びとの住居や耕作地などに使われ易いということも残らない理由の一つでしょう。縄文土器や弥生土器、土師器の焼成遺構の発見例が極めて少ないことも、同様な構造であったからと思われます。一方の窖窯は地下式、半地下式のいずれも地面を深く掘るもので、斜面地に構築されている場合が殆どなので、開発行為が及びにくく遺構が保存されやすいことが発見例の多い理由と考えられるでしょう。

2　中二子古墳の盾持人埴輪

前橋市中二子古墳は、墳丘長111mの前方後円墳です（図１）。６世紀前半ころの築造と考えられますが、この時期としては群馬県域最大の古墳です。直前の時期には、100m級の前方後円墳が３基連続して築造された高崎市保渡田古墳群がありますが、その後、首長墓の築造場所が前橋市大室古墳群に移ります。ただし、連続して大規模前方後円墳が築造されるのは墳丘長93mの前二子古墳→中二子古墳ということになります。規模を縮小した墳丘長76mの後二子古墳、墳丘長36mの小二子古墳が少し時期を隔てて築造されたようです。また、中二子古墳と同時期か、少し遅れて墳丘長145mという破格の規模の七輿山古墳が藤岡市に築造されます。

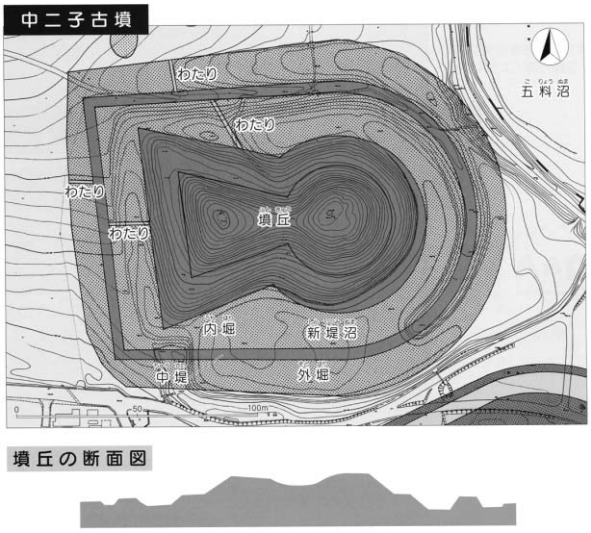


図１　中二子古墳の墳丘

さて、中二子古墳の形象埴輪群像は、おそらく墳丘南側の中堤上に立て並べられていたと推定されますが、その部分が後世に掘削されてしまっており、詳細が分かりません。しかしながら、盾持人埴輪は、中堤上の円筒埴輪列の中の各所に立てられていたことが分かっています（図２）。中堤上に設定された調査区の９か所から見つかっており、中堤上の円筒埴輪に交じって墳丘という墓を護るように配置されていたことがわかります。その場所は南側および西側です。こちら側が墳丘の正面であり、重要な方向だったのでしょう。

中二子古墳の盾持人埴輪をみると、残存状況が良くないものも多いのですが、横方向に棒状の器物を配した笄帽と呼ばれる独特な形の頭をしています。盾面は通常の盾形埴輪と同様な赤く塗られた三角文を配しています。顔面の表情は、目や口も比較的小さく開けられていて無表情な印象を受けますが、頬には斜めに赤い線が塗られています。入れ墨あるいは化粧をしていることを表しているのでしょう（図３）。

3　盾持人埴輪の類例と樹立位置

盾持人埴輪は、４世紀後葉頃に築造された墳丘長85mの前方後円墳である奈良県桜井市茅原大墓古墳が

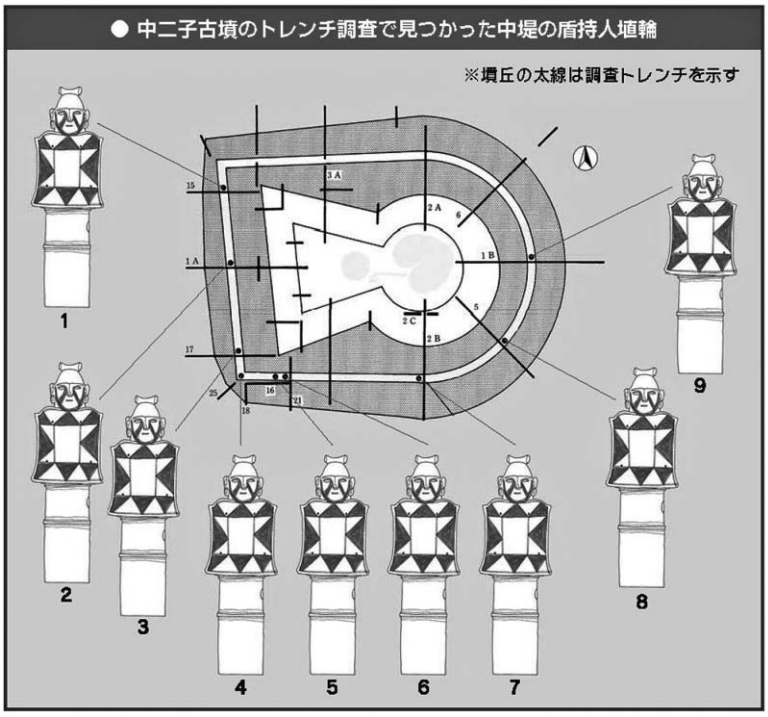


図２　中二子古墳の盾持人埴輪の出土位置

図３　中二子古墳の盾持人埴輪と形象埴輪

図４　保渡田八幡塚古墳の盾持人埴輪

最も遡る資料です。衝角付冑とも思われる被り物をつけ、顔面全体を赤く塗った姿は無表情ですが異様な威圧感を感じます。東側くびれ部の墳丘裾に立てられていました。

また、墳丘長75mの前方後円墳である福岡県福岡市拝塚古墳も、５世紀前半の比較的古い盾持人埴輪の事例です。衝角付冑を被り、両耳を大きくつくっている特徴は後の盾持人埴輪に共通します。前方部裾の真ん中の入隅部と呼ばれる場所で出土しました。

同じく５世紀前半の墳丘長225mの前方後円墳である大阪府藤井寺市墓山古墳でも、前方部側の外堤南西隅付近から顔面の破片が出土しており、盾持人埴輪と推定されています。

中二子古墳の盾持人埴輪は無表情でしたが、墳丘長102mの前方後円墳である高崎市保渡田八幡塚古墳の盾持人埴輪は、頭部の形も様ざまであり、大きく見開いた目とへの字に曲がった口が印象的です。頭が尖っているように造形されたものは、顔の両側面に大きな板状の粘土が貼り付けられています。冑のような被り物をしている盾持人にも同様な粘土板が貼り付けられているので、独特な被り物であったのかもしれませんが、耳を異常に大きく表現したものなのかもしれません（図４）。

保渡田八幡塚古墳では、これらの怪異なる表情を

持った盾持人が外堤の各所に立てられていたことが分かっており、10体以上が円筒列に混じって並べられていたようです。中二子古墳の場合と同様に、墳丘という墓を護ることを目的としていたことが推察されます。このことは、一口に形象埴輪といっても、それぞれに役割が異なっていたことを示していると思われます。

怪異なる表情を持った人物埴輪は、盾持人埴輪にだけみられる特徴です。それは、八幡塚古墳のようないかめしい顔だったり、あるいは笑った顔だったりします（かみつけの里博物館2012）。中には群馬県高崎市山名原ロⅡ遺跡１号墳で出土した盾持人と推定される埴輪のように、鼻の孔や口に白い石を刺しているものまで存在します。口は歯を表現しているのでしょうが、歯を表現した埴輪などはほとんど類例がなく、当時としても異様だったはずです。

笑った顔は、一見すると楽しげに見えるかもしれませんが、おそらくそういう意図ではなく、笑いによって邪気を寄せ付けない効果を狙ったものなのでしょう。６世紀後半の築造と考えられる径24mの円墳の埼玉県本庄市前の山古墳では、横穴式石室の左右に盾持人が配置されていましたが（図５）、いずれも笑いの表情をもっており、耳が異常に大きく表現されています。どんな小さな音でも聞き逃さないとでも言っているかのような姿です。

一方、その他の形象埴輪はまとまって立て並べられたようです。例えば、保渡田八幡塚古墳では前方部前面に位置する中堤上のＡ区とされた場所で、いくつかの場面を表現して立てられていました。そのなかでもシーン１とされた場所が中心の場面と考えられます（図６）。椅子に座った冠の男子を中心として、向かい合う椅子に座った坏を差し出す女子、椅子に座る丸帽の男子、椅子に座る性別不明の人物、半身像の女子、壺の埴輪などによって構成されています。壺の埴輪、器台に載った壺の埴輪の存在からも、このシーンは飲食儀礼を行っていた場面であると考えられます。八幡塚古墳の場合、最も重要なシーンが飲食儀礼であるということです。

形象埴輪がまとまって出土している古墳をみると、八幡塚古墳と同様にいくつかのシーンが表現されていることが確認できます。６世紀前半の築造と考えられる墳丘長181mの前方後円墳である大阪府高槻市今城塚古墳では、中堤上に設けられた張り出し部で４つに区画された形象埴輪群像があります（図７）。そのう

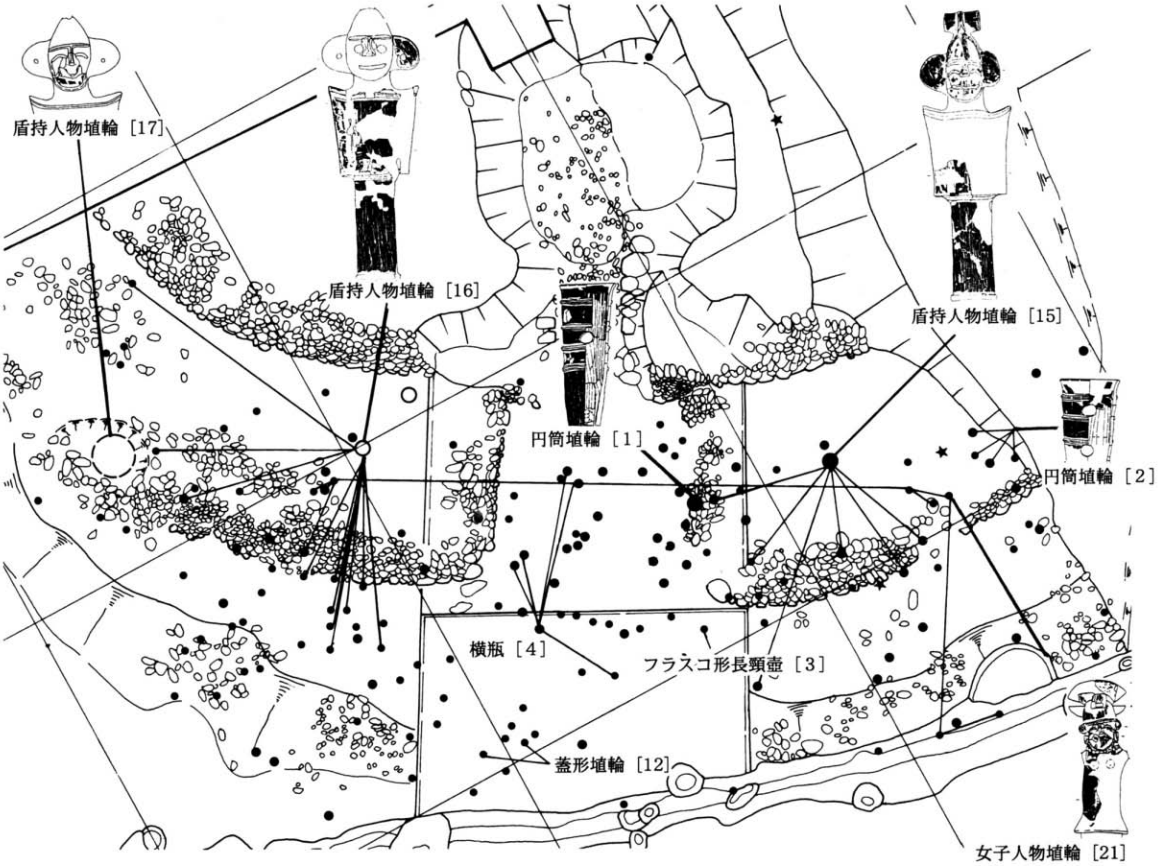


図５　前の山古墳の盾持人埴輪出土位置

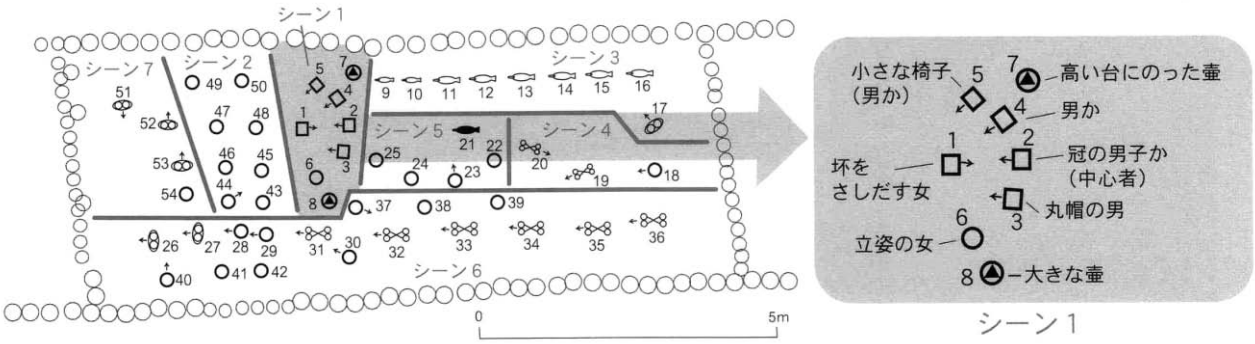


図６　保渡田八幡塚古墳Ａ区の埴輪配列

ち、３区とされたシーンが中心的な場面と考えられ、胡坐をかく男子像と捧げものをする女子像などがいます。おそらく胡坐をかく男子像の中に被葬者たる継体大王の姿が表現されていると私は理解しています。盾、甲冑、大刀などの器財埴輪は配置されていますが、これらの中に盾持人埴輪は存在していません。おそらく、中堤の別の場所や外堤などには、盾持人埴輪が立てられていたのではないかと思われます。

以上のように、形象埴輪のなかでも盾持人埴輪は他とは別の場所に立て並べられることが多かったようです。それは、墳丘や内部主体、つまり被葬者を護ることを目的としていたと考えられます。それは、笑いも含めた怪異なる表情や形態などからも、被葬者に寄り付く邪気を払うといった効果を狙ったのだと思われます。

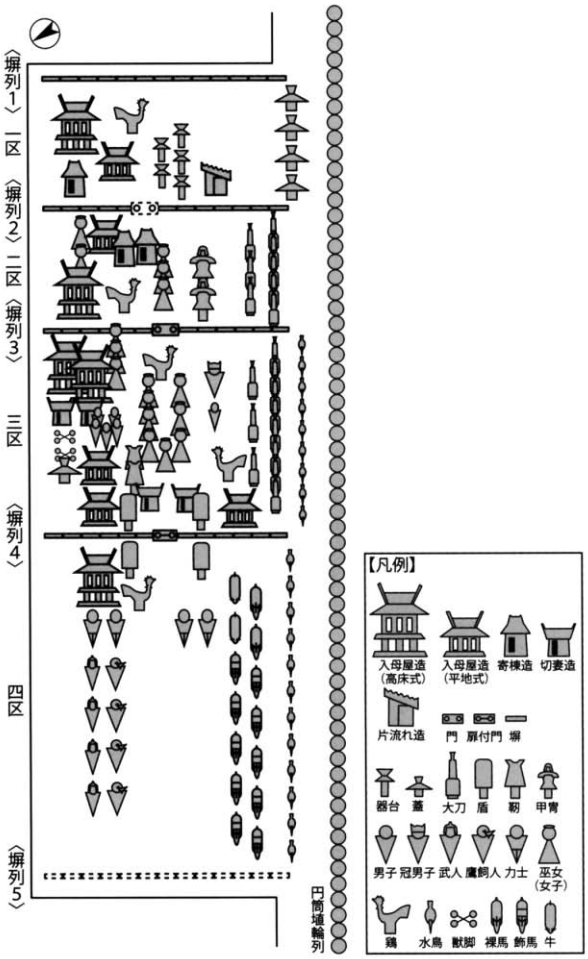


図７　今城塚古墳の埴輪配列

４　方相氏とは

寄り付く邪気を払うという役割ときくと、思い出されるのは節分の儀式です。「鬼は外、福は内」などと言って鬼を払います。それは「鬼やらい」あるいは「追儺」などと呼ばれるものと同様です。現在でも「追儺」の儀式を行っているところがありますが、そこで登場するのが方相氏です。方相氏とは、中国の『周礼』「夏官司馬第四」条にみえ、以下のような特徴を有しています。

１．熊皮を被り獣の形相
２．黄金の四つ目の仮面をつける
３．黒い上衣、朱の下裳をつける
４．片手に戈、もう一方に盾をもつ

墓に寄りつく邪鬼を駆逐する、霊柩の前にあって先に立って進む、墓に着くと壙に入り戈もって墓室の四隅を打ち払うといった役割を担っていたようです。

図８は『政事要略』巻廿九　年中行事十二月下（追

図８　『政事要略』にみる方相氏

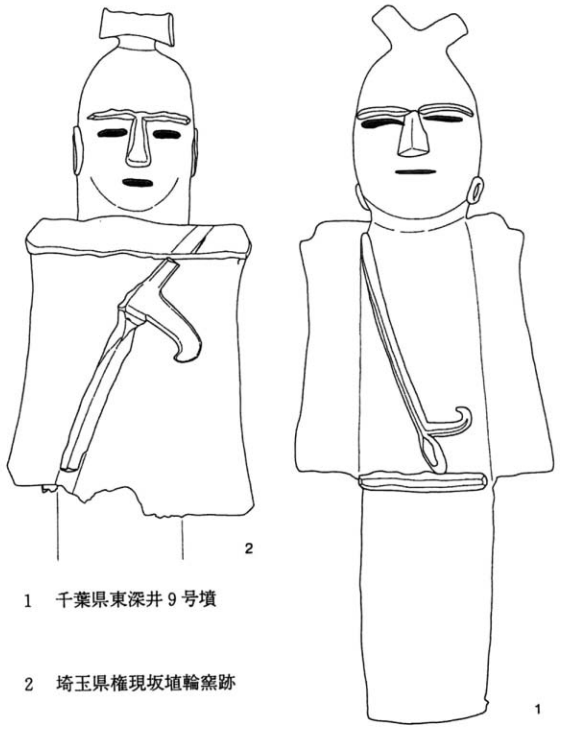


図９　盾持人埴輪にみる句兵（戟・戈）

儺）にみる方相氏とそれに追われる疫鬼の姿です。目が４つもあるということは盾持人埴輪と共通しておりませんが、おどろおどろしい顔つきや頭の形、何よりも盾を持つ姿は盾持人埴輪によく似ています。さらに、片手に戈をもつという特徴は、探すと盾持人埴輪にもみられます。例えば埼玉県熊谷市権現坂埴輪窯や千葉県流山市東深井９号墳（図９）、埼玉県美里町十条などであり、太田博之氏は句兵という武器であることを論じています（太田1995）。このほか群馬県高崎市太子塚古墳でも多くの盾持人埴輪が出土しており、そのすべてに句兵が表現されていた可能性があります（かみつけの里博物館2012）。

すべての盾持人に句兵（戟や戈とする意見もある）が表現されているわけではありませんが、盾と句兵という組み合わせを確認できるということは、方相氏の姿に重なります。盾持人埴輪の諸要素について詳細に検討を行った塩谷修氏によれば、盾持人埴輪は古墳時代の葬儀において活躍した方相氏を造形したものと考えられ、「中国の葬送儀礼と神仙思想の影響下、墓主が生活する他界の守護を意図して造形され、古墳に配置された」と理解しました（塩谷2001：p.209）。非常に魅力的な意見です。さらに塩谷氏は、「人物埴輪の諸形式は、この埴輪祭祀の体系の中で、被葬者をとりまく死後の世界すなわち葬送儀礼終了後の他界の情景を表現している」と理解しました（塩谷前掲：p.209）。

上田早苗氏は、中国の墓室壁画や磚などの画題や文献史料を渉猟し、その原初形態から変遷過程までを通観しました（上田1988）。上述した『周礼』「夏官司馬第四」条以外の文献に示された方相氏の特徴や東晋墓室磚画などとの共通性から、奈良県斑鳩町藤ノ木古墳の金銅製馬具後輪海部に存在する透彫図像を方相氏と理解し、中国南朝や北朝の影響を指摘することができるとされました。古墳時代後期に、中国の思想を表現した図像が日本列島に流入してきていることを示しています。

古墳時代の盾持人埴輪という造形から、方相氏という中国の思想が日本列島に浸透していた可能性の高いことがお分かりいただけたかと思います。それは古墳時代中期初頭、すなわち４世紀後葉頃の茅原大墓古墳において確認できます。それでは、この方相氏はこのころ日本列島に伝来したのでしょうか。これらの事例より遡ること300～400年の弥生時代中期の絵画のなかに、盾と戈を持つ人物像があります。

図10は弥生時代中期の土器、銅鐸、後期の石棺に描かれた人物像です。これらの図像について、以前から方相氏との共通性が指摘されてきたものもありますが、設楽博己氏や岡崎晋明氏は改めて方相氏の可能性が極めて高いことを述べています（設楽2011・2014、岡崎2013）。説得力があり、すでに弥生時代中期には中国の文物とともに思想そのものも日本列島に流入していたことを如実に物語っている資料群といえるでしょう。

以上、弥生時代から古墳時代にかけて、中国から方相氏が日本列島に伝来し、古墳時代には墳丘という墓を護ることを目的として盾持人埴輪が並べられたと考えることができるのではないでしょうか。

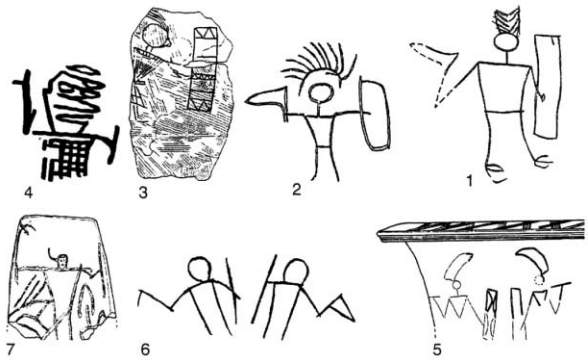


図10　弥生時代の盾と戈をもつ人物像

１・２ 清水風遺跡、３ 瀬ノ尾遺跡、４ 城野遺跡、
５ 日吉塚遺跡（墳丘内）、６ 石上銅鐸、７ 川寄吉原遺跡

5　まとめと展望

ここまで、中二子古墳の盾持人埴輪をもとに、その役割とともに思想的な背景について述べてきました。まとまりのある人物埴輪群像とは別の場所に立てられた盾持人埴輪には、群像としての他の人物埴輪にはない役割があったと考えました。それは、古墳そのものを護るというものであり、延いては被葬者を護るという役割を担っていたと思われるのです。その考えは中国の方相氏につながると考えました。すなわち墓に寄りつく邪鬼を駆逐することを期待して立てられたと思われるのです。

そもそも、人物埴輪を中心とする埴輪群像の意味とはいかなるものであったのでしょうか。主要な意見は以下の通りです。

・「首長権（霊）継承儀礼」
・「殯あるいは殯宮」
・「葬列」
・「生前顕彰」
・「供養・墓前祭祀」
・「他界における王権祭儀」
・「集落や居館での祭祀・墓前祭祀・生前の儀礼」
・「神宴儀礼」
・「殉死の代用から来世生活」
・「古墳の被葬者に服属して奉仕にあたる近侍集団」

いずれの説も納得できるところもありますが、なお疑問点もあり、いずれにも決しがたいというのが正直なところです。私が形象埴輪の意味を考えるとき最も重要だと考えていることは、埴輪とはいつ発注され、製作され、立て並べられたのかという点です。古墳という墓に立て並べられたものであるから墓専用の品々であり、被葬者という特定個人のためにつくられたはずです。しかし、埴輪がいつ作られたのかは、判断がつかない部分が多いのです。ただし、古墳の多くが寿陵という生前に造られ始めた墓ならば（茂木1994）、埴輪についても被葬者の生前に発注・製作されていた可能性があるのではないかと思います。

もう一つ重要な観点があります。それは、人物埴輪の中に被葬者は存在するのかどうかです。首長と目される人物像が存在することは従来から指摘されてきたことですが、例えば群馬県高崎市綿貫観音山古墳の胡座し腰に大帯を巻く男性、埼玉県行田市酒巻14号墳の筒袖で冠と円形浮文のある冠帯をつける男性、千葉県市原市山倉１号墳の頭巾状被り物をつけるやや大振りな双脚男性などは、被葬者と理解すべきだと考えています（日高2015）。

以上のような観点から、私は生前における神を祭る儀礼を再現したものが人物埴輪群像であると考えています。それは、生前に埴輪群像が製作されていた可能性を重視したいからです。また、人物埴輪群像が現す場面の共通点は、先学の指摘するとおり、飲食ないし歌舞・音曲です。儀礼に登場するのは、中心人物の首長（被葬者）とそれにつき従う人物たちであり、そこには男性も女性も登場します。中には首長と同様な姿として表現されているものもありますが、これらは後継者あるいは周辺の首長などもいたのではないでしょうか。また、儀礼を警護する武装男子や首長の生産基盤を支える人びとなども登場しているのでしょう。

おわりに

ここまで、盾持人埴輪や人物埴輪群像の意味について私の見解を述べてきました。もとより埴輪の意味するところについては、多くの先学によって様ざまな意見が出されています。私の見解はその中の一つに過ぎません。埴輪とは古墳という墓の墳丘や周堤、別区・造出しと呼ばれる施設に立て並べられたものです。つまり、日常的にその場所に近づけば、姿を見ることができる造形物だったのです。埋葬施設に納められた副葬品が被葬者にとともに秘匿された、いわば「私」のものであったのに対して、埴輪は外部に晒された、いわば「公」の存在だったといえるでしょう。

図版引用一覧

図１～３　前橋市教育委員会提供
図４　かみつけの里博物館提供
図５　太田2001
図６　かみつけの里博物館2000
図７　今西2016
図８　黒板編1935
図９　太田1995
図10　岡崎2013

引用文献

今西康宏　2016『継体大王と筑紫君磐井』高槻市立今城塚古代歴史館
上田早苗　1988「方相氏の諸相」『橿原考古学研究所論集　第十』pp. 345-377　吉川弘文館
太田博之　1995「句兵を表現する埴輪」『古代』100 pp. 345-356
太田博之　2001『旭・小島古墳群－前の山古墳－』本庄市教育委員会

岡崎晋明　2013「盾持ち人埴輪の諸相」『龍谷日本史研究』36　pp. 26-75
かみつけの里博物館　2000『はにわ群像を読み解く』
かみつけの里博物館　2012『古墳の守り人－盾持ち人はにわと古墳－』
黒板勝美編　1935（2004）『政事要略』（新訂増補国史大系　第28巻）吉川弘文館
塩谷　修　2001「盾持人物埴輪の特質とその意義」『日本考古学の基礎研究』pp.188-215　茨城大学考古学研究室
設楽博己　2011「盾持人埴輪の遡源」『東国の地域考古学』pp.123-134　六一書房
設楽博己　2014「日本列島における方相氏の起源をめぐって」『中華文明の考古学』pp.342-353　同成社
日高　慎　2013ａ「「公の芸術作品」だった人物埴輪」『週刊新発見日本の歴史　古墳時代２』pp. 30-32　朝日新聞出版
日高　慎　2013ｂ『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』雄山閣
日高　慎　2014「しもつけの埴輪群像－国分寺甲塚古墳を中心に－」『しもつけの〝埴輪群像〟－そのすがたをさぐる－』pp.55-64　栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
日高　慎　2015「埴輪の造形」『日本美術全集』第１巻　pp. 198-205　小学館
日高　慎　2016「埴輪窯構造からみた地域相研究」『考古学論究』17　pp.43-50　立正大学考古学会
茂木雅博　1994『古墳時代寿陵の研究』雄山閣

講座・赤城山南麓の考古学2015　第１回

石やり大型流通センター・武井遺跡

小　菅　将　夫（岩宿博物館）

はじめに

今日は、これから赤城南麓の大遺跡として知られている武井遺跡についてお話ししたいと思います。本日の話は、まず遺跡の位置や立地についてお話しし、遺跡の調査の歴史、武井Ⅱ石器文化と呼ばれる石器群の特徴、そして武井遺跡でさかんに作られていた石やりと岩宿時代を代表するナイフ形石器との違い、最後にまとめとして岩宿時代社会と武井遺跡についてという内容で進めていきたいと思います。

ところで、私は日本の旧石器時代、特に後期旧石器時代を私のいる岩宿遺跡にちなんで「岩宿時代」と呼んでいますが、皆さんが聞いたことのある「旧石器時代」と同じですので、頭の中で変換しながらお聞きください。

武井遺跡の位置と立地

武井遺跡は、群馬県の東部、桐生市新里町武井にある遺跡で、赤城山南麓のちょうど東南端に位置しています。遺跡の中心地は、赤城山の裾野の一番端にある丘陵上で、その部分は赤城火山の山麓が形作られるよりも前、数千万年前にできた「石山凝灰岩」が基盤となっています。北側には赤城山中から流れてくる鏑木川があり、その右岸の丘陵ということになります。遺跡の西側は赤城山の長い裾野がそのまま続いていますので、何の障害もなく赤城山とその裾野を望むことができます。それに対して東側は一段低い平坦地が続きますが、こちらは渡良瀬川か形作った大間々扇状地が広がっており、遺跡はどの方面にも大変見晴らしの良い場所に立地しています。

現在群馬県内では325ヶ所の岩宿時代遺跡が発見されていますが、武井遺跡は図のように群馬県内で一番遺跡が集中した地域に位置していることが分かります。遺跡の分布は、必ずしも当時の遺跡の集中度合いをそのまま示しているわけではありません。それでもこの地域に遺跡が集中することは、あとで述べることとなりますが、武井遺跡と関連する遺跡が多いためと考えられます。

武井遺跡の調査の歴史

1949・50年、岩宿遺跡において日本列島で最初の「旧石器時代」段階の発掘調査が行われたことはご存知のことかと思います。岩宿遺跡の発見者は相沢忠洋さんですが、それから数年後の1953年、新里村（当時）で郷土資料の展示会があって、そこに展示されていた石やりが相沢さんの目に留まり、明治大学考古学研究室に通報したことから武井遺跡の調査が始まります。

遺跡の発見者は、武井遺跡の近くに住んでいた千本木政一さんです。千本木さんも考古学に興味があり、石器や土器を拾い集めていたようです。集めた資料を展示した中に武井遺跡の石やりがあったのでしょう。ちょうどその年に、石やりが岩宿時代のものであることが中部・関東地方で確かめられたばかりであったことも好都合だったのかもしれません。千本木さんは、その後も旧新里村で発掘調査の作業員として長く働いておられました。私も生前、旧新里村の発掘調査現場で何度かお会いしたことがあります。

相沢さんから通報を受けた明治大学考古学研究室では、その年1953年10月には早速、試掘調査を実施しています。そして翌1954年１月に予備調査が行われ、それに基づいて同年５月に本調査が行われました。「岩宿層」と呼ばれている現在の「暗色帯」から武井Ⅰ石器文化、その上の「阿左美層」と呼ばれる黄褐色ローム層の軟質部から武井Ⅱ石器文化というように二つの石器群が発見されました。武井Ⅰ石器文化は岩宿Ⅰ石器文化とほぼ同じ時期の約３万年前のナイフ形石器を主体とする石器群で、44点の石器が発見されました。一方、武井Ⅱ石器文化は、石やりを中心とした石器群で、4,803点という当時としては大量の石器が発見されました。109点に及ぶ石やりは、そののちの研究によって粗雑な加工が多く、片面加工の石器があるなど、古い様相をもつものとして位置付けられていまし

た。まだ、岩宿遺跡の発掘調査から間もない時期でしたので、地層が異なる二つの時期の石器群が同じ遺跡から発見されたこと、武井Ⅱ石器群については石やりを中心とした多くの資料が発見されたことなどから、武井遺跡は、研究上大変重要な遺跡として全国に知られていきました。最初の発掘調査地点は寄居山地区と呼んでいますが、そこは発掘調査でも土塁や堀跡が発見されたように戦国時代の砦があった場所で城館に因んだ地名です。

その後、1982年の新里村教育委員会（当時）によって寄居山地区から南南西約200メートルの地点で工場用地の発掘調査が行われ、やはり石やりを中心とした688点の石器が発見されました。この地点は群馬県史の資料編（1988年）で「峯岸遺跡」として紹介されましたが、のちに述べるように、武井遺跡がこの地区を含む大遺跡であることが分かりましたので、現在では峯岸地区として武井遺跡に含めて考えられています。

1986年には群馬県史の編纂に伴って寄居山地点の地層観察が行われました。地層を観察しただけの狭い範囲の調査でしたが、40点ほどの石器が発見されています。

1992年には、新里村教育委員会（当時）によって農業用の土地整備事業に伴って、寄居山地区の隣接地である内出東地区の発掘調査が行われました。約2,600㎡に及ぶ広い面積が発掘調査され、3,612点もの石器が発見されました。また、隣接した寄居山地区と同様に、武井Ⅰ石器文化に相当する石器群も多数発見されています。

そして1993年から95年にかけて寄居山・内出地区の南の丘陵で工業用地の開発に伴って発掘調査が行われることとなりました。この地域は、寄居山よりも高くまた広い丘陵地形となっています。最初に調査対象地域全体にわたって畑として耕していた表土を剥ぎ取りましたが、既にその時点から大量の石器が発見されました。遺跡の重要性が認められて、丘陵の頂上の平坦部は保存地区として残されることとなりました。その周辺部は、工業用地として発掘調査が進められ、78,815点にも及ぶ膨大な数の石器が発見されました。その中には石器が集中して発見されたブロック１ヶ所で１万点を超える石器が発見された場所もありました。また、石やりの時期では珍しい直径1.5mにも及ぶ大形の礫群が数基まとまって発見された場所がありました。それに加え、表土を剥いだ際に地表に露出している石器を採集したところ、それだけで10万点を超える資料が発見されていると聞いています。このように1993年から95年の調査によって、武井遺跡は最初に調査された寄居山ではなく、南側の峯岸山地区が遺跡の中心にあたるのではないかと考えられるようになりました。

その後、2010年から2014年まで、最初に武井遺跡の発掘調査を行った明治大学考古学研究室が、それらの地区の北西方面にあたる内出地区の学術調査を実施しています。発掘調査の目的は、武井遺跡の範囲の確認と周辺部の遺跡の性格を明らかにすることでした。そのため、数㎡という狭い面積の調査区を発掘しただけですので、石器の数量は約200点と多くはありません。それでも、多くの地点で石器が発見され、武井遺跡が広範囲にわたっていることが明らかになりました。また、2013年には岩宿博物館主催の「岩宿大学」と呼んでいる市民連続講座の一環で発掘調査が実施されました。この調査も約６㎡の狭い範囲でしたが、石やり１点を含む300点ほどの石器が発見されました。

石やり研究の歴史と武井遺跡

ここで武井遺跡の話からやや離れて、石やりの研究の歴史をひも解いてみましょう。

石やりは、岩宿遺跡の発見にも深くかかわっていることは多くの方がご存知のことかと思います。1949年岩宿遺跡から黒耀石製の石やりを発見したことによって、相沢さんはローム層中から人工品が発見されることを確信しました。そして、その直後研究者に積極的に岩宿遺跡の事実を発信することとなり、それがその年の発掘調査に発展しました。従いまして、その石やりは岩宿時代研究の扉を開く契機となった石器といわれています。しかしながら、実際の発掘調査では、ついに石やりを発見することはできませんでした。1949・50年の岩宿遺跡の調査では、謎の岩宿Ⅲ石器文化ということになったのでした。

しかし、1950年に相沢さんは赤城山南麓の前橋市三ツ屋遺跡で石やりを中心とする石器群を発掘します。この調査は、実は岩宿遺跡に次ぐ学術発掘で、同じ年に明治大学が行った太田市藪塚遺跡の発掘より早いものでした。そこでもローム層中から石やりが発見されましたが、まだ多くの研究者を納得させることはできなかったようです。武井遺跡の最初の試掘調査が行われた1953年、長野県上ノ平遺跡、馬場平遺跡の発掘調査が行われ、ここでもローム層中から石やりが発見されたことから、ようやく石やりが岩宿時代の石器とし

て広く認められるようになりました。その直後に武井遺跡の調査が始まりましたので、武井遺跡から発見された大量の石やりが、当時の研究者の注目を浴びたことはお分かり頂けるかと思います。

そのころになると、早くも岩宿時代の全体像が、岩宿遺跡の調査を中心となって進めた、杉原荘介氏と芹沢長介氏によって公表されていきます。その大枠はナイフ形石器から石やり、そして細石器というもので、現在考えられている岩宿時代の全体像の根幹といえるものでした。その中では、武井遺跡は石やりの石器文化で、粗雑な作り方であるとされました。一方上ノ平遺跡の石やりは押圧剥離でより精巧な作りであって、武井が古く、上ノ平の石器群が新しいというように石やりの時期の中にも新旧の時期差があるとされました。なお、明治大学は発掘調査をした寄居山地区の発掘調査報告書は、1977年に刊行されています。

現在では、武井遺跡の石器群はどのように考えられているのでしょうか。私は岩宿時代全体が５つの時期に分かれると考えています。日本列島の中央部である関東、中部地方について述べてみましょう。ⅠからⅢ期はナイフ形石器が中心となる時期で、Ⅰ期は尖った石刃の打面側を基部に加工した杉久保系ナイフ形石器と幅広で小形の薮塚系ナイフ形石器が発達します。Ⅱ期には杉久保系ナイフ形石器もありますが、石刃を切り取るように加工して槍先形に作り上げた茂呂系ナイフ形石器が達します。Ⅲ期になると関西方面の瀬戸内技法と呼ばれる技術の影響があり、横長の剥片を材料とするナイフ形石器が多く認められます。また、切り出し小刀に似た形の切出系ナイフ形石器も発達し、石器の全周を荒く加工して作られた角錐状石器が組成に加わるようになります。Ⅳ期は再び茂呂系ナイフ形石器が発達しますが、この時期に石やりが登場して徐々に発達していきます。そして最後のⅤ期は、長さ２・３㎝、幅７・８㎜の細石刃が発達する時期となります。こうしてみると、石やりは岩宿時代全体の中では、後半期のⅣ期に属する石器であることが分かります。

この石やりの時期をさらに詳しくみて行きましょう。岩宿時代の石器群の新旧関係は、石器が発見されるローム層の上下関係によって明らかになります。石やりが認められる頃のローム層が最も厚く堆積しているのは、南関東地方の相模野台地ですが、その地域では石やりは４つの層にわたって発見されています。その地層をより古い下のほうから紹介すると、第２黒色帯上部（B2U）、第２ローム層（L2）、第１黒色帯（B1）、第１ローム層硬質部（L1H）という地層です。それらの地層から発見される神奈川県の石器群を中心に簡単に紹介しながら、石やりの時期の変化を追ってみましょう。

第２黒色帯上部（B2U）からは、高座渋谷団地内遺跡などまだ数遺跡から石やりが発見されているだけです。全体に粗雑で、先端側から左側に樋状の加工があるものがあります。石器主体はナイフ形石器で、Ⅲ期の最後の時期であると考えられています。

第２ローム層（L2）のから第１黒色帯（B1）の下部では茂呂系ナイフ形石器とそれを作るための石刃技法が発達しますが、石やりはまだ少ない時期です。石やりは、やはり先端側から左側に樋状の加工がある独特なもので、黒耀石製のものが多く発見されています。

第１黒色帯（B1）の上部では、神奈川県では箱根山の黒耀石が多く使われ、石やりが増加してナイフ形石器とほぼ同じくらいの数量になります。そして石やりの材料とナイフ形石器の材料に同じ石材を使い、同じ技術で割られたものが使われるようになります。この時期は、武井遺跡でもたくさんの石器が作られた時期に当たります。

最も新しい第１ローム層硬質部（L1H）の段階では、ナイフ形石器はほとんどなくなり石やりが発達して石器群の中心となった時期です。特に細身の石やりが多く発見される時期といえましょう。この時期も武井遺跡ではたくさんの石やりが作られていました。

以上のように武井遺跡は、石やりが使われるⅣ期でも後半期にその中心があったと考えられます。

ナイフ形石器と石やりの製作技術の違い

石やりが岩宿時代Ⅳ期に発達した理由を検討する前に、主要な石器とその作り方を見てきたいと思います。岩宿時代では、大きくは３つの主要な石器が時期を追って現れていました。主要な石器として最も長く使われていたのはナイフ形石器で、Ⅰ期の最初からⅣ期までどの遺跡でも必ずといってよいほど発見されています。石やりはⅣ期に現れ、ナイフ形石器と並行しながら徐々に石器の主役になりました。そして、最後のⅤ期は、細石器の時期で、日本列島では小さくて細長い細石刃が使われていました。さらに、細石刃は岩宿時代の最後から土器の出現期まで利用されていました。

岩宿時代を代表する石器、ナイフ形石器は、材料となった薄いカケラ、剥片をうまく生かして作られてい

ます。ナイフという言葉がついているように、剥片の鋭い縁を石器の刃としてそのまま残し、先端を尖らせてやり先の形に加工するとともに、根元となる基部を作りだした石器です。従いまして、どのような技術によって材料を用意したのかという、材料の剥片の作り方や形が重要になります。さらに材料のどの部分に加工を施して、どんな形に仕上げたのかといったことを研究することでナイフ形石器の特徴を理解することができるのです。

それに比べ、石やりは、剥片だけではなく石核や転礫などから作られることもあります。材料全体に加工することで目的とする石器が作られるため、素材の形にあまり左右されないのです。そのような作り方の特徴から、よく加工された石やりは、作り始める前の素材の面を最終的にほとんど残していない石器が多いのです。

このようなナイフ形石器と石やりの作り方の違いを、その材料の消費状況から見てみましょう。ナイフ形石器は、スライドに示したように根元の基部と先だけを加工した石器では、材料の約75％が製品として残っています。素材を切り取るようにして作ったナイフ形石器でも、２分の１あるいは３分の１くらいが石器として残されるようです。それに比べよく加工された石やりでは、材料の10分の１しか製品にならないという実態があります。ナイフ形石器に比べると石やり作りは材料を多く消費してしまうことが分かります。

この様な石器作りの特徴は、単に石器が時期によって変化するということだけではなく、私は当時の生活や社会の様子にも関係していたと考えています。ナイフ形石器は、移動生活を送っていた各遺跡で必要に応じて作られていたと考えられています。各遺跡で割り取った石刃や剥片から石器を作るのですが、元のカタマリである石核からいくつもの石器の素材を作り出したほうが有利ですので、石核や素材を多く消費する石器は効率がよくないと考えられます。材料の消費率がより低いナイフ形石器は移動生活にあった石器といえるでしょう。

一方、石やりは10倍もの重さの材料が必要となりますので、その材料あるいは材料を割り取る前の大形の石核を持ち歩くとしたら、大変な労力が必要となると考えられます。このⅣ期になると、そうしたことと対応するように大量の石器石材が入手可能な石材産地で集中した石器作りを行った原産地遺跡が出現するようになります。例えば長野県の黒耀石原産地では男女倉遺跡群や鷹山遺跡群などで石やりを大量に製作していた遺跡が発見されています。

岩宿時代社会と武井遺跡

武井遺跡で発見された膨大な数量の石やりについてみてみましょう。武井遺跡から発見された石やりを並べてみると色とりどりであることが分かります。それは、先ほど触れた黒耀石原産地のようにそのすべてが黒耀石で石やりが作られているのとは異なり、様々な石材から作られているからです。その石材には、黒耀石のほか、東北地方で産出する硬質頁岩、房総半島の南側で取れる嶺岡の頁岩、栃木県矢板市の高原山周辺の頁岩、群馬県内では利根川で採集可能な黒色頁岩や黒色安山岩、さらに地元の渡良瀬川などで取れるチャートと様々な産地のものがあることが分かります。また、黒耀石の産地分析を行ったところ、和田鷹山、男女倉、西霧ケ峰（星ヶ塔や星ヶ台）、麦草峠といった多くの長野県内の産地の他、栃木県高原山、神奈川県箱根畑宿、伊豆半島の柏峠、伊豆七島の神津島というように関東・中部地方で知られているほとんどの黒耀石が含まれていることも分かっています。

武井遺跡から石材が入手可能な場所までの距離を調べてみると、25㎞以内は地元ということになりますが、チャートが取れる足尾山塊、黒色頁岩や黒色安山岩が取れる利根川があります。50㎞圏内には黒色頁岩や黒色安山岩の原産地、100㎞圏内になると60～70㎞では黒耀石が産する栃木県内の高原山とその周辺の頁岩類の産地、黒色安山岩では長野県境付近の八風山や栃木県内の産地があります。ちょうど100㎞の距離には良質な黒耀石が取れる長野県内の各産地が位置しています。150㎞くらいに距離には箱根山や伊豆半島の黒耀石の産地があり、房総半島の頁岩産地である嶺岡もそれくらいの距離になります。そして、伊豆七島の神津島は250㎞も遠く、また海を渡って入手したことになります。このように武井遺跡から発見された石材を見ていくと関東地方を中心としたあらゆる石器石材が集められて石やり作りが行われていたと考えられます。ここでそれらの石器石材を使って多量の石やりを作っていましたので、武井遺跡は当時の石器工場のような役割を持っていたことが分かります。

このようにして作られた大量の石やりは、もっぱら武井遺跡で生活していた人々が使ったのでしょうか。作られた石やりはあまりにも大量ですので、赤城山麓を中心に近隣の遺跡で生活していた人々に行きわたる

ように作られていたと考えられるのではないでしょうか。石器の材料が関東・中部地方一円から集められ、武井遺跡でさかんに石やりが生産されて、それが各ムラへと広がっていくという石器の流通が行われていたと想像することができます。そして、武井遺跡はその要の位置にあったと考えられるのです。

また、武井遺跡の周辺には、石やり作りがさかんに行われたと考えられる遺跡も発見されています。元宿遺跡、梨子木遺跡、広間地西遺跡等、それぞれの遺跡で特徴ある石やりがたくさん作られたことが知られています。武井遺跡とその周辺の遺跡を含め、この地域で石やりがさかんに作られていた状況が明らかにされつつあるのです。今後は、武井遺跡に留まらず、その周辺を含めた武井遺跡群全体を解明することも重要な課題となることでしょう。

日本列島の旧石器時代にあたる岩宿時代の人々は、一般的に自給自足的な生活を営んでいたと考えられています。それは、移動しながら必要に応じて各自でナイフ形石器を作り、生活用具として利用していたことに示されているのではないでしょうか。ところが、石やりを使うようになると大量の石器石材が必要になりますので、各遺跡でその都度石器作りをするのでは効率が悪くなります。そのため、石材原産地には大量の石やりを作る原産地遺跡が登場し、さらに原産地を離れた場所にも武井遺跡のような石器石材を集積して石やりを集中して作り、流通させる遺跡が出現するようになっていったと考えられるのです。

このように考えると、岩宿時代の終わりころには自給自足での生活から、ものが流通するような社会が徐々に形作られつつあったと考えられます。武井遺跡は、石やりの大形流通センターとして位置付けられ、それを成立させることができる社会へと大きく転換していく状況の一端を示している、その変化を象徴する遺跡といえるのではないでしょうか。

講座・赤城南麓の考古学20150829

石やり大型流通センター・武井遺跡

岩宿博物館
小菅将夫

石やりの大型流通センター武井遺跡

- 武井遺跡の位置と立地
- 武井遺跡の調査の歴史
- 武井Ⅱ石器文化の時期
- 武井遺跡の石やりの特徴とその石材
- 岩宿時代の主な石器とその作り方
- 石やりとナイフ形石器
- 岩宿時代の社会と武井遺跡

武井遺跡の位置と立地

- 所在地　群馬県桐生市新里町武井
- 赤城南麓の東南端に位置
- 中心部は、丘陵上の地形に立地
- 丘陵は数千万年前にできた石山凝灰岩が基盤
- 赤城山中から流れる鏑木川の右岸
- 西側は、赤城山麓
- 東側は、大間々扇状地の桐原面

群馬県の
岩宿時代
遺跡と
武井遺跡

武井遺跡の調査の歴史

① 1953年～1954年、明治大学により寄居山地区の調査
② 1982年、新里村教育委員会による峯岸地区の調査
③ 1986年、群馬県史編さん室による寄居山地区の確認調査
④ 1992年、新里村教育委員会による内出東地区の発掘調査
⑤ 1993年～1995年、新里村教育委員会による峯岸地区の発掘調査
⑥ 2010年～2014年、明治大学による内出地区の調査

石やり研究の歴史と武井遺跡

① 1949年、岩宿遺跡で相沢忠洋が石やりを発見する。
② 1950年、相沢が前橋市三ツ屋遺跡で石やりを中心とした石器群を発掘調査。
③ 1953年、長野県上ノ平遺跡、馬場平遺跡を発掘調査。石やりが岩宿時代の石器であることが明らかとなる。
④ 1953・54年、岩宿時代の最初の編年
⑤ 1950年代、武井Ⅱ石器文化は粗雑な石やりの時期として位置付けられる。
⑥ 1977年、寄居山地区の発掘調査報告書が刊行される

武井遺跡で発見された石器の数量

調査	石器の出土数	備考
①1953・54年	4803	明治大学
②1982年	688	新里村教育委員会
③1986年	41	群馬県史編さん室
④1992年	3612	新里村教育委員会
⑤1993～95年	78815	新里村教育委員会 その他に10万点ほどの採集資料
⑥2010～14年	200	明治大学
2013年	300	岩宿博物館

武井Ⅱ石器文化の時期

- 岩宿時代の全体像
- 石やりが伴う時期、Ⅳ期
- 相模野台地の地層と石やりの変遷
- 岩宿時代Ⅳ期の前半と後半
- 武井Ⅱ石器文化の時期的な位置
- 武井遺跡で利用されている石器石材
- 利用石材の産地と武井遺跡

岩宿時代の主な石器とその作り方

- ナイフ形石器、石やり、細石刃と変化した。
- ナイフ形石器は、カケラ（剥片）鋭いヘリを刃として簡単に加工して石器が製作された。
- 石やりは、カケラ（剥片）全体に加工して石器を作る。
- 細石刃は、調整したカタマリ（細石刃石核）から押しはがして割り取られる。

石やりの流通センター、武井遺跡

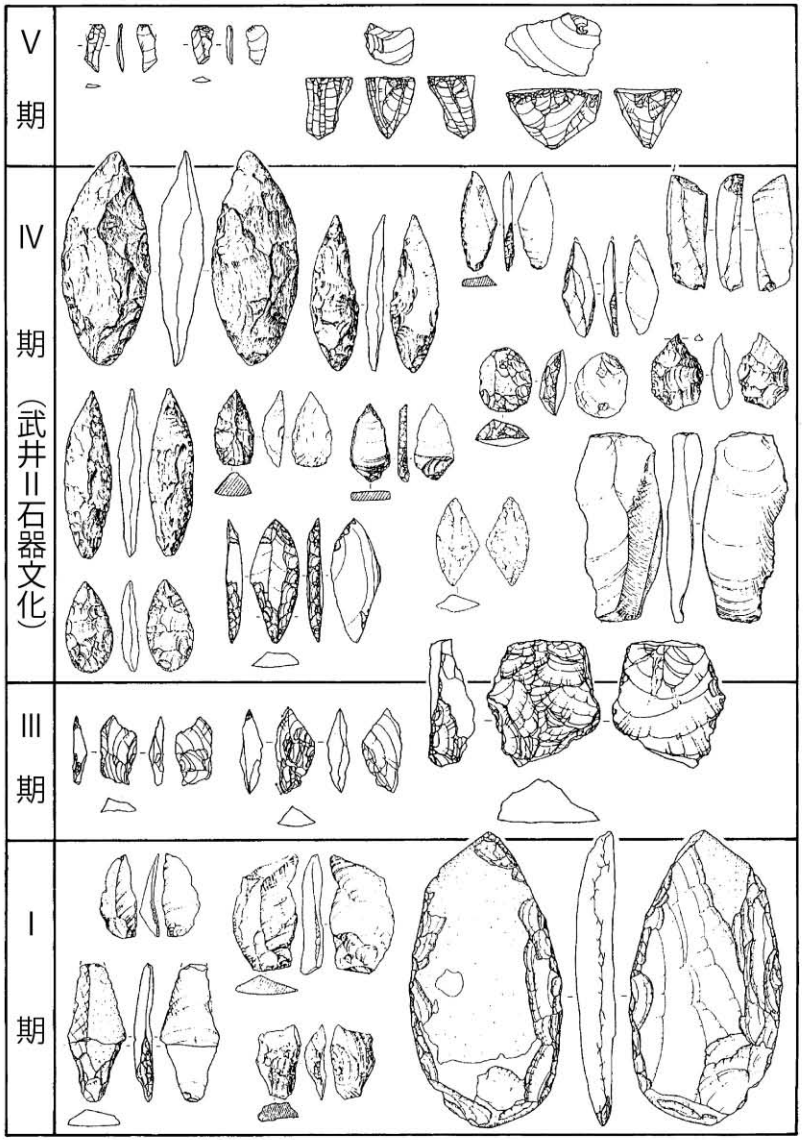
- 石やりを使う時期（Ⅳ期）が始まると、石やりを原産地で集中して作るようになる。
- 原産地遺跡では、その場所でとれる石材で集中して石器が作られている。
- 武井遺跡（Ⅳ期後半）では、大量の石器が集中して作られていたことがわかる。
- 武井遺跡で作られた石やりは、地元のチャートのほか、様々な産地の石材で作られていた。
- 武井遺跡では、あらゆる石材が集められ、石やりが大量生産され、そこから、赤城山麓の遺跡に石器が流通していった可能性がある。

ナイフ形石器と石やりづくりの違い

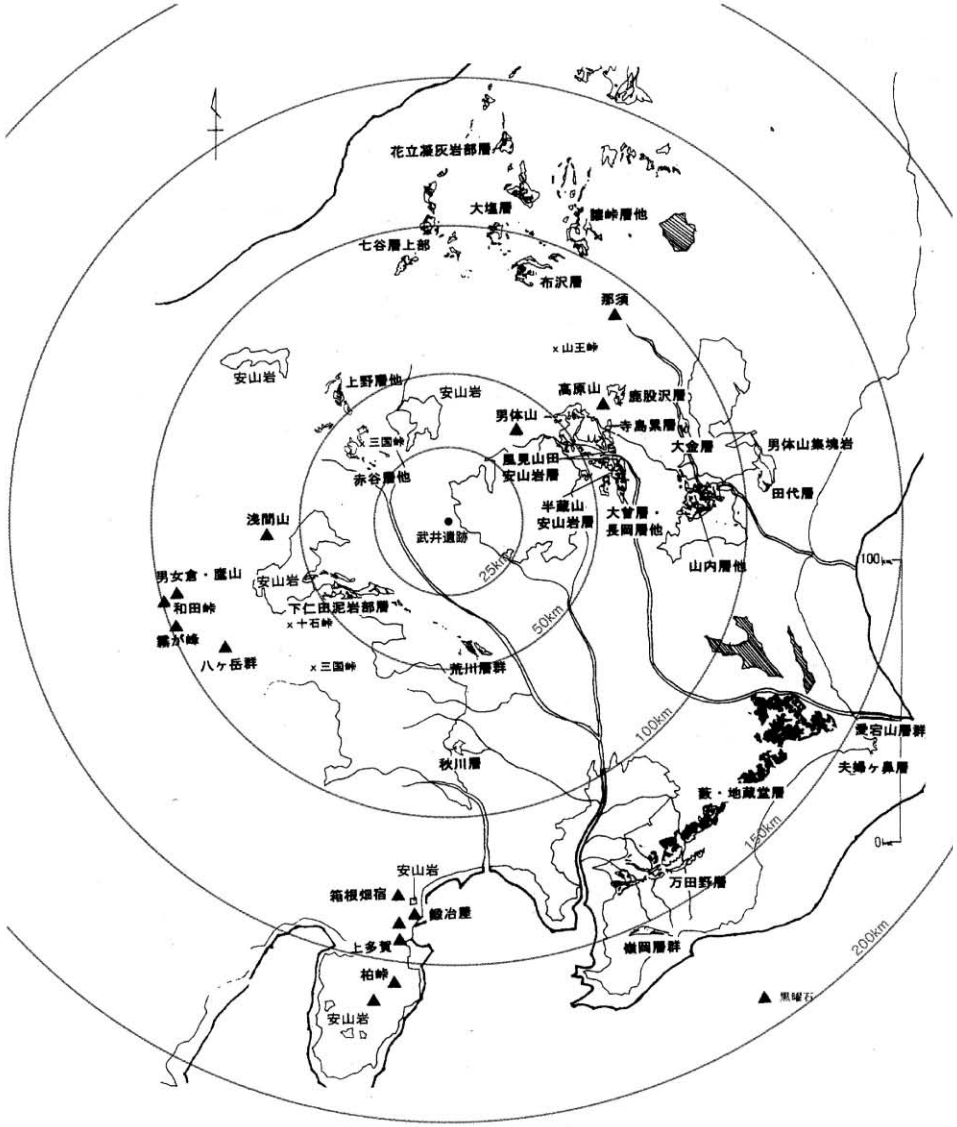
- ナイフ形石器は、素材の剥片を生かして石器が作られる。
- ナイフ形石器は、遺跡の場所で、石核から剥片を剥ぎ取って作られた。
- ナイフ形石器は移動生活に適した石器作りの方法。
- 石やりづくりは、製品は素材の10分の1程度であり、材料を大量に消費する。
- 石やりづくりが行われたⅣ期には、黒耀石などの石器石材産地で集中して石器が作られるようになる。
- 武井Ⅱ石器文化は、Ⅳ期の後半期で石やりが盛んに作られた時期にあたる。

岩宿時代遺跡と武井遺跡

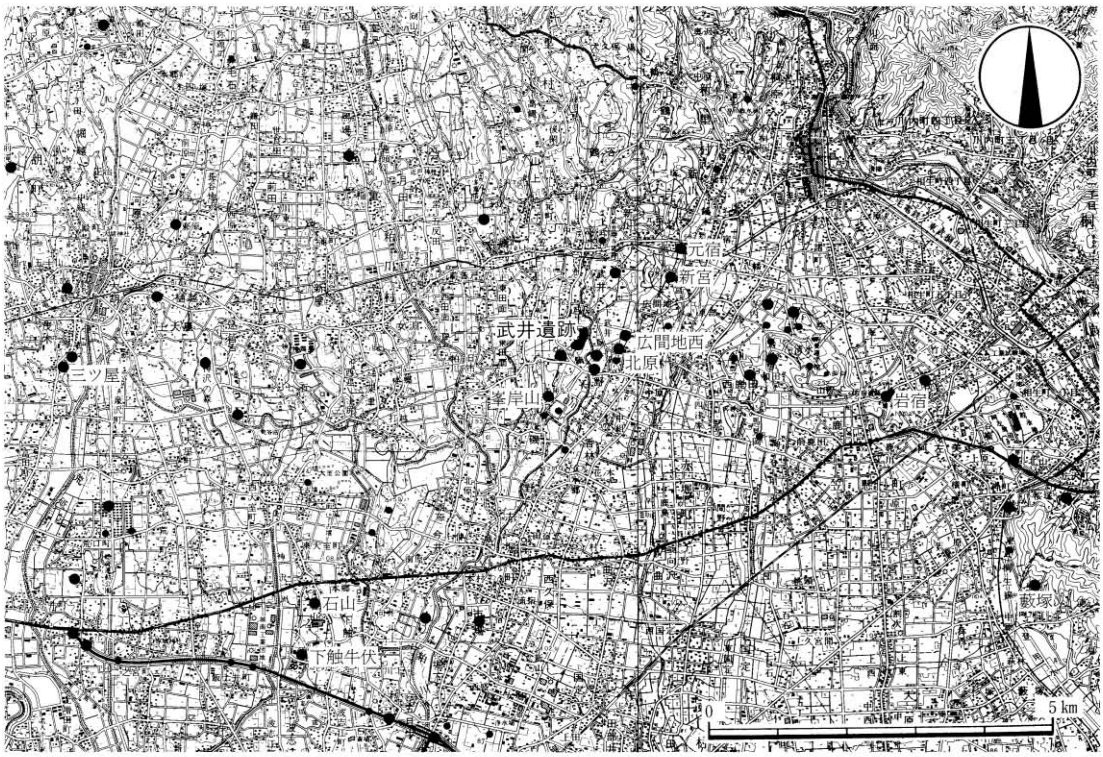
- 岩宿時代は、自給自足的な生活であったと考えられる。
- 石やりの登場により、石器の製作に大量の石材が必要となる。
- 石やりの時期には原産地に遺跡群ができるが、さらに原産地を離れた武井遺跡が出現する。
- 岩宿時代の終わりころには、モノの流通がさかんに行わるような社会が出来上がっていた可能性がある。
- 武井遺跡は、岩宿時代社会が変化いていく状況を象徴する重要な遺跡であると考えられる。



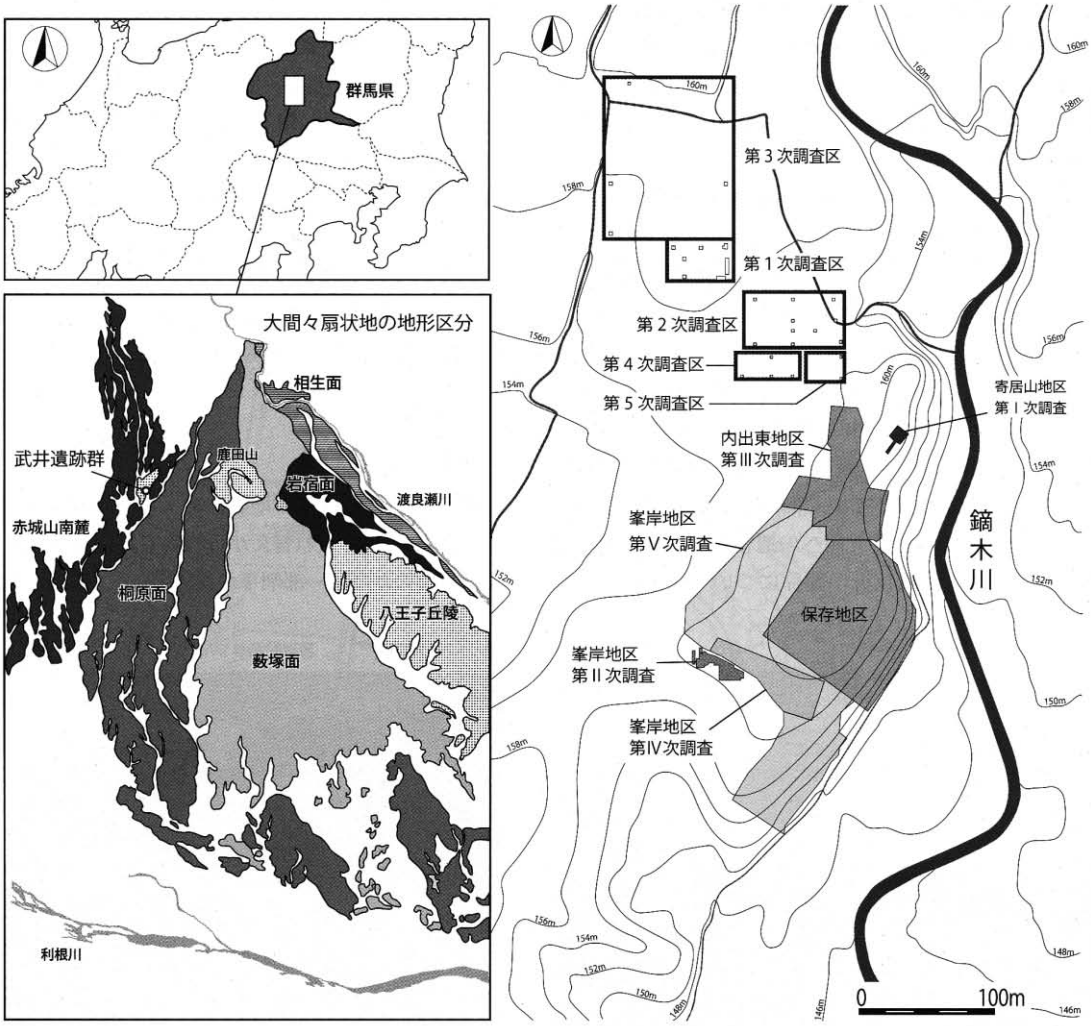
武井遺跡の時期



武井遺跡と石材産地の位置関係



武井遺跡と周辺遺跡



武井遺跡の立地と地形、発掘調査区

講座・赤城山南麓の考古学2015　第２回

縄文・尖底土器の謎

橋　本　　淳（群馬県教育委員会）

はじめに

先ほど紹介していただいた通り、平成24年度から県の文化財保護課のほうに異動になりまして、上野国分寺の調査を担当していましたものですから、実は正直言いまして国分寺の担当になってから縄文土器の研究は封印していました。国分寺の調査をしていますと、やはり中途半端ではできなくて、それ一本でやらなきゃというくらいの心構えというか、覚悟でやっておりましたので、もう縄文土器の研究は一旦やめたというか、とりあえずしばらくはやめておこうということで、縄文土器を見ないできていました。たまたま今回お願いしますという話が出たので、資料作りながら断っておけばよかったと後悔しましたが前原さんには昔からお世話になっていますので、断れなくて、次回は断ろうと思いながら作ってきました。

私の研究の原点は大学時代の発掘調査で、運よく尖底土器の時代の調査をしたことで、それが卒業論文のテーマになりました。それから群馬に就職して、ずっと事業団に長く勤務をしてまして、群馬ではほとんど早期の土器は出ないので、ほとんどそれを掘ることはなかったのですが、仕事は仕事、自分の研究は研究ということで、なんだかんだ言って早期に関してはずっと、正直封印はしていましたが、今でも追いかけている所はあります。

国分寺のほうも４年目になりましたので、少しは縄文にも行ってもいいかなと考え始めた頃にこの話もあって、資料を作りながら見直してみたという感じになります。なかなか早期の土器の話をやることはないので、これまで呼ばれることもなかったし、話す機会もなかったんですけれども、こういう機会をいただきましたので、話をしてみたいと思います。楽しいかどうかは分からないし、マニアックな話になるかなと思うのですが、少しの時間お付き合いいただければなと思っていますので、よろしくお願いします。それでは早速始めたいと思います。

縄文土器の編年

最初に、いきなり縄文早期と言ってもなんですので、縄文土器の全体についてざっと概要をお話しして、それから入っていきたいと思っています。縄文土器というか縄文時代は、最近どんどん年代の方も炭素14といって放射性炭素の理化学的な年代測定がありまして、だんだんそれが発達してきています。１万６千年前とか１万３千年前とか、だんだん古くなってきていて、例えば弥生時代の始まりも古くなってなんてニュースも出てきましたが、ざっと縄文時代というのは、１万３千年前くらいに始まったとして、紀元前500年までと教科書に載っています。ざっと縄文時代が１万年はあったというふうに一般的には言われています。１万年が思いもよらないくらい長い期間ですけれども、自分たちは80そこそこで平均寿命が終わってしまうけれど、それが何世代も何百世代も続きながら、１万年くらい続いたと言われています。

それで、その長い縄文時代ですけれども、私たちがしているのは歴史の研究ですから、当然年代が分からないと人々の生活がどのように変化したというのは分からないので、年代の基準が必要になってきます。縄文時代なんて古い時代ですから文献も残っていなくて、何年に何がありましたなんて当然そういう記事なんかありませんので、何で年代の判断をするかというと、基本的には土器で判断をします。縄文時代に限らず、弥生時代もそうですし、古墳時代とか平安時代とかでも土器がずっとありますから、そうするとその土器がどんどん変わっていくんですね。なので、例えば遺跡を掘って土器が出てきました。その土器を見ると、これはいつ頃の土器だと分かりますので、それで年代を判断しています。

土器編年の方法

その年代をどのように作ったかといいますと、その前に縄文土器、先ほど１万年くらいあったと言いましたが、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期という

ことで、ふつう６期に区分されています。それで、資料を１枚めくって２ページの左側に縄文土器の編年ということで編年表を載せています。これは関東地方の土器の編年表ということで、資料によって違いますが、ざっと簡単に書いてあるのを見つけてきまして、このように土器の型式は何々式という呼び方をします。

草創期は豆粒文土器とか隆起線文土器とか文様の名前が付いています。早期になりまして、撚糸文系とありますけれども、井草Ⅰ式土器というような言い方をしまして、こういう順番で土器の編年から、時代の目安にしているわけです。これが関東地方の土器群ですので、当然、例えば中部地方の土器群があり、東北地方の土器群があり、また関西の方に行けば関西の方の土器群がありますので、これのざっと数倍の土器型式があるわけです。なので、当然私なんかも関西の方の土器は分かりませんが、基本的には関東中心にやっていますので、だいたいこの辺の土器があるということになります。

どうやってこの編年表を組み立ててきたかというのを簡単にお話ししたいと思います。地層累重の法則というのがありますが、聞いた事がありますか？　難しい言い方になっていますけれども、これは先ほど言った私が大学の時に掘った貝塚の貝層の断面になります。千葉県の小見川町と言ったのですけど、今は香取市か何か、おそらく合併して名前が変わっていると思います。そこの城ノ台南貝塚という所なんですけれども、ここが貝層ですね。貝が捨てられている所。これの下に貝混じりのそんなに貝ばっかりではないですけど、土が主体の貝混じりの混貝土層と言いますが、その下には貝が混じらない土層があって、この貝層の上にも薄いですけど貝の混じる層があってと、積み重なっていくわけです。その貝の入り方の状態とかで地層を分けていって、当然下の方が古いわけです。そこで、この層から出てきた土器、それからここの層から出てきた土器、この貝層から出てきた土器というので、それぞれの層ごとに取り上げていって、そうすると当然下から古い、どんどん上に向かって新しくなっていきますので、その土器の特徴を見ながら、これがこれよりも前、これよりも後というように、だんだん組み立てていきます。それが地層累重の法則というものです。特に貝塚ですと、どんどん食べた貝を廃棄しますので、だんだん時代時代で積み重なっていきますから、その土器の順番を探るのには最も都合がよくて、今まで一番調査されている方法になります。あとはあまり多くないですけれども、洞穴遺跡です。洞穴遺跡もやはりヒサシがあって、人間が住みやすい所で、住みながら、ある時期には少し落盤があったりして、間に挟まって、また間が空いて人が住み始めてというので、やはり層位的に土層が堆積していきますので、洞穴遺跡も土器の順番を組み立てるのには非常に有効な調査になります。

それから遺構の重複関係というのもあります。早期に関しては、ほとんど遺構は出ないので、何とも言えないですけど。例えば、竪穴住居を掘って、ここで人が住んでいました。それで少し土器を置いたまま住まなくなって、自然に埋まっていきます。今度は後からまた違う人間が入ってきた時に、ここがもう埋まっていて、住居があったのが分からないので、こちら側に竪穴住居を造りました。また、この辺で土器を残したままいなくなって、こういうのを私たちが調査した場合、よくセクションベルトを残して、どっちが古いか新しいかというのを確認して、そうするとこちらの方が新しいと、こちらの方が古いというように判断ができれば、こちらの住居に入っている土器よりも、こちらの住居に入っているほうが古いというのは間違いなく分かるわけです。そういう積み重ねで土器の編年表を作ってきて、今だいぶ縄文土器の編年というのも、よりどんどん細かくなってきて、すごくレベルの高い、所謂ものさしですね。年代を調べるものさしができつつあります。

それから最後に型式論という方法があります。ものがどういうふうに、こういうものだったのが、こういうふうに変わるという。例えば、よく例に出されるのが車ですね。車はよくモデルチェンジしますけれども、同じ車種なんですが、この車を見るといつ頃作られた車、これがいつ頃作られた車と年代が分かります。それが時にはガラリと変わることもありますけれど、昔の名残を残しつつ変わるという、そういうものの移り変わりを見ながら、土器に関しても例えばこういう器形だったのが、口縁部がこんなに分厚かったのが薄くなる、細くなったとか、そういうのを捕まえながら、こういうのからこういうふうに変わったんだろうと考えていくわけです。型式論というのは主観も入るので、考えようによっては自分の好き勝手に考えられるので、なかなかこれだけで論を組み立てるのは難しいのですが、それも１つの方法になります。

これまで言ったような方法を駆使して、最終的には２ページの左側にある編年表というのができてきてい

ます。縄文土器と一言で言ってもいろんな種類の土器があって、いろんな形もあるし、いろんなのがあるわけですね。それを見れば、じゃあこれがどこの土器で、いつ頃の土器で大体何年前というのもそれが分かるようになってきています。

さまざまな尖底土器

その中で今日は早期の土器ということで、少しお話しさせていただきたいと思います。早期と書いてある通り、撚糸文系というのがあって、沈線文系土器というのがあって、条痕文系土器というのがあります。特に今日は尖底土器ということなので、最も尖底なのは沈線文系土器の段階なので、それを主体的にお話しします。尖底がいつ頃できたかというと草創期頃から尖底土器というのはあるんです。早期をずっといきまして、前期の初めくらいまで尖底土器というのは残ります。花積下層式土器とかその辺りまで残ってきます。ただ、あまりあちこち言ってもまとまらなくなってしまうので、代表的なものについて紹介します。

撚糸文系からざっとこんなもんだと紹介します。撚糸文土器です。丸底と書いておきましたけれども、まあ平底ではないですよね。尖底と言っていいのか、丸底と言っていいのかはっきり何とも言えませんけど、尖底と言ってもいいんですかね。これが早期の初めの土器で、絡条体と言って、縄を軸の棒にぐるぐると巻いて、これをコロコロと転がすと、縦方向にこういう縄文の文様が付きます。こういう土器がある時期、流行る時代があります。先ほど型式論でお話ししました撚糸文系土器もこの表にある通り何段階かあって、井草Ⅰ、井草Ⅱ、夏島、稲荷台、花輪台とかあります。余談ですが古い撚糸文土器というのはこの撚糸文がすごく密なのです。ぎゅっと詰まって、もう全面に密接して入った土器が古くて、これは、あまり口縁部は出てないですけれども、口縁部がぴょこんて厚くなる土器が古くて、だんだんと真っ直ぐになってきて、この撚糸もまばらになってくるんです。それが最後は撚糸も無くなってしまう。無文になってしまうんです。文様が全く付かなくなって、なので撚糸文土器の型式論的な見方というのは密な撚糸文からだんだん手抜きの方向性でまばらになって、最後には文様を付けなくなってしまう。所謂手抜きの方向です。器形的な変化というのはそれほどなくて、先ほど言った口縁部の分厚いものから真っ直ぐなものになるというぐらいです。

それから、この編年表には載っていないのですけれども、押型文土器というのもありまして、どちらかというと中部以西、もう関西とかあちらの方で広がります。関東はあまり主体的にはならないのですが、なぜか関東を挟んで西と東、東北の方でも押型文土器というのが広がります。これは乳房状尖底とおっぱい状というわけで、ここにちょこんと特徴的な尖底です。押型文は棒に彫刻して、その棒を転がすとこういう文様になります。これは山形文と言いまして、こういう丸い棒に山形に彫刻をして転がすと、このような文様になります。これは伊勢崎市の波志江中屋敷遺跡という所から見つかった土器です。これが主体に出てくるというのは基本的にはありません。沈線文土器に伴ってくる、あるいは撚糸文土器に伴ってくるという出方がふつうです。群馬県は当然関東ですから、関東の土器がメインになっていて、他の地域の土器がおそらく交流の中で入り込んでくるので、そういうので入ってきます。押型文土器も結構県内では出ているのは出ています。

それから、マニアックになってきますけれども、沈線文土器の一番古い土器は三戸式という型式の土器があります。だんだんと何々式と言いますけど、一番最初に発見されて１つの土器のまとまりを新しい型式として認められた場合、初めて見つかった遺跡の名前をとって、型式名をつけます。だから三戸式というのは三戸遺跡で見つかったもので、神奈川県の三浦市。よく早期とかの貝塚の調査で発見される場合が多いので、特に早期については神奈川県で見つかった貝塚の名前がつけられることが多いです。沈線文土器というのは沈んだ線というふうに書きますけれども、沈線、棒とかで引っかいて、要するに線を描くわけです。拓本とって、黒い所が平らな部分、白い所が線が引かれて凹んでいる部分になります。先ほどに比べると少し複雑になってきまして、ざっと横線を描いて、また縦を描いて、いろいろやってというので、少し複雑になってきています。これはあまり残っていないですけれども、三戸式というのはこれくらいの、もうさすがに尖がっている尖底と。だんだん尖底の尖り方が強くなってくる時期ですね。

それから次に田戸下層式土器というのがあるんですけれども、やはりこれも神奈川県横須賀市の田戸遺跡を標式とする土器で、最も顕著な尖底を持っている土器です。本当に肉厚で、よく言われるのが天狗の鼻状の底部なんて言い方をしますが、縄文土器の中でも一番尖底がすごい時期です。

それから次に田戸上層式土器というのがきます。これはどちらかというと丸底っぽいような、微妙に尖って丸っぽい土器。どこまで尖底というかというと、少し主観もありますけれども、平底でなければ尖底かと。この後にも条痕文土器というのがあるのですけど、あまりたくさんあげるとなんなので、ここまでにします。

群馬県内の遺跡分布

それから群馬県内の遺跡分布ということで、沈線文土器の遺跡というのは、なかなか見つかりません。群馬県でふつうに調査、遺跡を発掘しますと前期とか中期はもうたくさん出てきて、住居もたくさんあって、土器も多量に出てきますけれども、早期はほとんど出てきません。ここでドットを落としてみましたけれども、集落遺跡は１つもないです。だから沈線文土器期の住居が見つかることはまずありません。撚糸文の時代はあるのですけど、沈線文のここにあげた三戸、田戸下層、田戸上層式で、住居跡が見つかったという例は群馬県内では１軒もないです。関東を見渡してみても、住居跡は、ほとんど見つかりません。千葉の方では何軒か見ますけれど、それも１つの謎と言えば謎なんですけど、なんで見つからないのかなというのはなぜなんですかね。それだけ人が多くなかったのか。ただ同じような時期で東北の方に行ったりしますと、北東北はよくでもないですけど住居跡は見つかってくるんです。それから北海道の函館市に、空港を拡張する時に調査した遺跡があるんですけれども、そこに行くと早期の物見台式土器段階が600軒以上出ている所があって、地域によってとても差があるわけです。早期の住居で600軒以上なんていうのは全国的にもたぶん一番で、少なくとも他の時期含めても600軒以上の住居・集落があるというのはあまりないです。例えば、群馬でも集落というと三原田遺跡が有名だったりしますけれども、旧赤城村ですね。あそこでも399軒、中期の集落で399軒ですから、それに比べても多いですけれども、その時の時代がどうだったのか、まあ謎のまま終わってしまいます。

今ここで取り上げたのはそれなりに形になるものが出ている遺跡を取り上げてみましたけれども、出ても破片が数点出てくるぐらいのパターンは多いです。今後も見つかる可能性はあまり期待できなそうです。例えば、沈線文土器の段階の住居跡が見つかりました。その中に完形の土器が入っていましたというと、ものすごい研究が進む成果なんです。私もずっと縄文土器の早期の研究をやってきましたが、こんな小さな破片を見ながら一所懸命編年を組むわけです。ふつう中期の研究者とかだったら、それ完形になっていますけれども、こういうのを見ながらやるんです。私の場合、本当に１点１点こんなのを見ながら、これがこうだ、文様だ、というふうにずっとやっているわけです。他の時期の縄文土器の研究者から言うと、本当に早期はマニアックな世界だというふうに言われます。要するにあんまり見つからない時期、そういうような時代の土器群ということです。それから資料の４番にいきましょう。

尖底土器、１番目の謎

尖底土器の謎ということで、謎①。なぜ尖底が生まれたのかということですが、いろいろな考えはできます。

ふつう土器というのは煮炊きをする道具です。底が尖っているので煮炊きする時には、何か添え物したりとか、穴を掘ってやればいいと思うのです。普段は寝かせておけばいいので、普段の使い勝手には問題はないのだろうなと思います。ただそれが何でその時期にだけ尖底土器があるのかというのは、やっぱり縄文人になってみないと分からないですね。やはり私たちが一番苦手としているのが、土器自体を見てこれがこうだというのは分かるんですけど、なんでこれを作ったの？　なんでこうなったの？　というのは、やはり踏み込めないというか、想像しかできないので、やはりどうしても答えが出ないものです。おそらく当時の縄文人がこういう土器がいいんだという、１つの規則ではないですがそういった約束ごとがあるのだと思うんですね。で、ある時期だけあってというのは分かりますけれども、草創期にも少しあるし、それがずっと続いてきて前期にもあるし、なのでその時の流行り廃りじゃないですが、そういうのもあるのだろうなと思います。尖底の方が早くお湯が沸いてとか、そういうのであればずっと尖底土器が残っていていいはずです。それが途中で平底になるということは、平底のほうがよかったということです。どちらかというと機能性よりは形の問題、あるいは縄文人の意識の問題のほうがおそらく強いのだろうと思います。縄文土器というと、こんなので煮炊きしたの？　というような、ものすごい文様で装飾したものがあったりしますから、機能はもちろん保持しつつ、それ以上のものを縄文土器

に表現する、そういうのがおそらく縄文人なのだろうなと思います。なぜ尖底が生まれたのか？　というのは簡単なようで簡単ではないし、謎なので謎のままでいいのかなと思いますけど、人それぞれがこうだったのではないの？　と思いをめぐらすようなテーマでいいんじゃないのかなというふうに個人的には思っています。ただそういう時期があったんだなということです。

２番目の謎

それから謎②ということで、田戸上層式期に何があったのか？　ということで、これについて少し具体的にお話しをしようかなと思います。で、私が本当に専門としているのが田戸上層式期なんですね。これを今日一番の重要なテーマにしたいと思っています。まず土器の流れを見ていこうと思います。

これは草創期の一番古いほうと言われる隆起線文土器です。口縁部に横の隆起線という粘土紐を貼りめぐらせています。この隆起線文土器というのが日本全国一様に広がるわけなんですけれども、やはり縄文土器の古い段階ということで、非常にシンプルに作っています。粘土紐をめぐらすだけです。刻みみたいな、指押しみたいなこともしていますけれども、粘土紐をめぐらすだけ。これは最初から丸底で平底じゃないです。縄文土器の古いのは、このようにまだシンプルな土器です。

次の段階になると爪形文土器というのが出てきます。爪形、要するに刻みですね。刺突列と書きましたけれども、これも文様を横方向に多段にめぐらす土器で、これもやっぱりシンプルな文様の付け方。これ乳房状の底部で、爪形文の段階でも尖底土器というのはあるんです。やはり文様としてはシンプルです。もう全面にずっと爪形文、刺突列をめぐらすだけです。

次に多縄文系というのがありますが、あまりいい資料がなかったので持ってこなかったのですけれども、縄文を転がしたり、縄文を押し付けたりする土器なので、やはりシンプルな土器が続いてきます。

その後、撚糸文土器、先ほど見ましたけど、これも縦方向にやはり撚糸を転がして、土器の器面全面に撚糸を施すものですので、全面撚糸文だけの土器という事で、やはりこれもシンプルな土器です。それで、これが先ほども言いましたけれど、手抜きの方向でだんだんとまばらになってきて、無文になって、その後いきなりこういうのが出てくる。なかなか繋がってこないのですけれど、この間に少しずつの変化はあると思うのです。先ほどの撚糸文土器から急に撚糸の撚紐を持ち替えて、棒で文様を描く土器に変わってきます。

これが三戸式ということで、これまで見てきたものよりもだいぶ複雑になってきています。しかも文様構成も、この右下に文様帯の発生と書きましたけど、割り付けをします。一番上に横方向のみの沈線帯、帯の文様帯を作ります。この間に縦方向で区切って、斜めの格子目の複雑な、斜めの方向のを入れたりして、３段目がまたあります。３段目に同じように斜めの格子目の文様があって、４段目があって、これが斜格子目文です。間が空いて５段目もこの辺にあるということです。これ以前の土器は全体がもう文様帯というか、ここからここまでをこういう文様にしようという意識ではなくて、全面に文様を入れていました。例えば爪形文なんかも全面に文様を入れ、先ほどの撚糸文も全面に転がすような土器だったのが、三戸式になると区画をするわけです。ここまでで１段、ここまでで２段、３段、４段というふうに割り付けをするようになってきます。だから、それ以前の撚糸文土器に比べると全く違う土器のように、土器の作り自体、文様の付け方自体も一歩発展しているといいますか、そういう土器の文様の付け方になっています。

それが次の田戸下層式になってきますと、なぜかややシンプルになってきて、基本的には直線です。沈線による直線がメインになります。先ほど見てきました三戸式の、格子目は一切使われなくなっちゃうんです。どちらかというとシンプルに沈線を横、斜め方向にいくつも入れるくらいになります。ただ、貝殻腹縁文といって、貝殻を持ってきましたけれども、こういう貝殻、こういうここの縁のギザギザを使って文様をいっぱいつけるんです。貝殻の腹の縁をキュッキュッとつけるとこういう波状の文様になるのですが、沈線を描いたこういう空間に貝殻腹縁文というのをいっぱい入れてという、そういうパターンをするのが多かったりします。それで横方向の区画文といいますが、土器の文様を描く前にまず割り付けをして、区画文で区切るわけです。ここでひとまず横方向の沈線を入れて、こちらも胴部の方にも１回入れます。それでここの上の口縁部文様帯といいますが、上に縦方向の沈線を入れて矢羽根状とか言います。Ｖ字の矢羽根の文様とかを入れたり、ここにやはり１つの文様帯を作って、斜めの沈線と貝殻で文様を構成するというような、これも三戸式からの文様帯の構成というのが残っ

ているわけです。下の方は沈線をいくつも入れていて、基本的には沈線による直線の文様で構成する土器群が田戸下層式ということになります。

これがこの後にここまで変わる。これまで直線だったのが曲線を使うようになります。非常に進歩したというか、ずっとシンプルな文様であったのが沈線文段階になって初めて棒を持って土器に描くことを覚えます。それがまずは直線だけを描いていたのがこの田戸上層式の段階になると、曲線や図形文様、幾何学文というのが初めて描かれるようになります。土器の文様としては非常に発達したというか、出来上がってきているという言い方は変かもしれませんけど、すごく完成された土器になってきます。あまり早期なんて注目されないので紹介されることはないですけれども、本当に素晴らしい土器があるわけです。曲線も、曲線文などの図形文様、入組文といいますけれども、クルっと回って、こういうふうに組む、入り組むという文様です。こちらもそうですけど、胴部のほうも入り組む曲線文を持つようになってきます。それから器形もキャリパー状の器形といって、土器実測する時にキャリパーという道具があるんですけど、口縁部が屈曲するんです。まっすぐ立ち上がり、一度くびれて口が開く。これをキャリパー状の器形というふうに言います。早期のこの段階でもキャリパー状の器形というのが出てきて、頸部で１回屈曲しますから、ここで文様帯が分かれるわけです。この波状文で１度区画をして、口縁部の文様帯と胴部の文様帯で２帯構成にするのが一般的です。これが田戸上層式という土器になります。皆さんの資料でも３番として１つ載せておきましたけれど、この田戸上層式の時期は似たような土器が北は青森から南は岐阜の方とか愛知の方にもあって、少なくとも北海道を除く東日本全域に同じような顔つきを持った土器が一気に広がります。

今見てもらったのはこの土器です。１は前橋市の頭無遺跡、鶴が谷町の団地造成の所の調査で出てきたものです。２は田戸上層式の典型的な例としてよく紹介される、新東京国際空港№７遺跡から出てきた土器です。空港を造る時に面積はものすごい広いですから、遺跡をたくさん調査していまして、この空港関連からは早期の遺跡や早期の土器がたくさんあって、関東では基準になる資料が多いです。これもやはり口縁部に入組文が入っていて、胴部には雷文というふうに呼んでいますけれども、ラーメン丼文様です。ラーメン丼の縁の文様が描かれています。

それから北の方に行きますと、３は青森県の八戸市田面木平⑴遺跡から出ている土器ですけれども、口縁部は幅広いですけど口縁部の文様帯があって、非常に複雑なモチーフを描いています。胴部は２段になっていますけれども、やはり入組状の文様が描かれるわけです。

それから４は岩手県の盛岡市新茶屋遺跡から出ているもので、口縁部の文様帯は狭いですけれども、やはりキャリパー状の器形になっていて、口縁部文様帯、それから胴部が２帯構成になってくるんです。

それから左側の５は福島県西会津町塩喰岩陰遺跡から出土した土器で、やはりキャリパー状の器形で、口縁部の入組状の文様と、胴部も入組状の文様ですね。

それから最後、６は長野県の信濃町野尻湖のそばの貫ノ木遺跡ですけれども、やはりキャリパー状の器形で、口縁部の文様帯と胴部の文様帯というふうに、微妙な、当然地域が離れていれば少し違いはありますけれど、基本的な土器の作り方というか、キャリパー状の器形をしていることと、口縁部の文様帯と胴部文様帯という２帯構成は同じです。

北の方に行くと北の特徴で、胴部文様帯というのが２帯重なる、重畳すると言いますけれど、そういうパターンが多いです。

田戸上層式期の段階は東日本に広がりを見せます。１つの早期のピークの時期なんだろうなと思うんです。土器の精巧な文様と完成された形とこの土器の広がり方が、それを物語っています。ここまで大きく広がる段階はそんなにないんです。南は岐阜とか愛知、これだけ広がった背景といいますか、その時代背景がどうだったのかというのは、またそれが難しいというか、またそれも１つの謎なんです。なぜこの時期にこうした土器が大きく広がっていったのかなというのは、ものすごく魅力のあるストーリーなんですね。

さらにマニアックな話をしてしまいますけれども、土器がどこで作られて、どういうふうに広がったかということを考えるのは、すごく難しい問題なのですけど、田戸上層式に関しては私が勝手に考えているだけですが、こうなんじゃないのかという仮説があります。これは東北地方の南部の田戸下層式の土器なので、田戸上層式よりも１段階前の土器です。遺跡名を載せませんでしたが、これは福島県の土器で、これも福島県ですね。上の２つと左は福島県の土器です。これが右下の写真だけが秋田県の南部の湯沢市という所から出てきた土器です。田戸下層式と書いてあります

が、田戸下層式の中でも段階があって、古い段階、中くらいの段階、新しい段階とあるんですけど、おそらく最終段階の土器群になります。文様は沈線と刺突列で多段構成になりますけれど、この中に文様帯が入り込んできて、その中にこう、ここは菱形の文様、こっちもそうですけど菱形の文様。こっちも同じですけれども菱形の文様というように、単純に沈線を入れているのではなくて、図形が描かれるようになります。菱型でシンプルはシンプルなんですが、これは、くの字みたいな感じです。１つの空間に沈線、特に２本の沈線を使った文様を描くようになります。文様というか菱形の図形文様です。この右下のも菱形です。ここで菱形を横並びにしていますけれども、次の田戸上層式の曲線文に至る手前の段階で、直線的ですけれども図形文様が東北南部から出てきています。

関東地方ではこういう土器はほとんどないです。田戸上層式というと関東地方の土器なので、当然前段階の田戸下層式の関東から移り変わっているのだろうとふつう考えますけれども、直接的には繋がってこないので、こういう変化があったんだろうと思っています。こちらが田戸下層式から田戸上層式への系譜ということで、左側の２つは田戸下層式。右側は田戸上層式。これは際どい土器ですけれど、私は田戸下層式の一番最後なんだろうなと思っていて、先ほど見た土器に一番近い土器です。ここに沈線で挟まれた中に、今度は横に連続する文様が描かれていて、やはり２段になっているわけです。これが右側の田戸上層式の段階になって、このように入組んできたんだろうというふうに考えています。これは型式論ですね、最初にお話した型式論です。なので、これは私の主観です。私がこう思うというだけで根拠はないのですけれども、おそらくさっき見た菱形状の文様とかの一群です。それが横に連続し始めて、これが入組んできましたよと。なので田戸下層式の一番新しいのから、これを基にして田戸上層式のこういう入組文が発生してきただろうと、こういうふうに考えています。

それからこの左側のも田戸下層式ですけど、田戸下層式の新しい段階になってくると、ここに口縁部の文様帯ができてくるんです。ここで１回区切られて、下の文様と上の文様というので違ってきます。これがそのままこっちにどう見ても繋がってこないです。これは関東地方の田戸下層式で、これも成田空港関連の田戸上層式です。なので文様帯の、口縁部の文様帯があって、これがこっちにきてっていう文様帯の構成は繋がってきますけれども、文様帯の中に描く文様、モチーフというのは、関東のものからは繋がってこないだろうというふうに考えていて、おそらくこういう東北地方南部の方の入組文とかが、取り込まれて成立したんだろうというふうに考えています。先ほど東日本に広がってきましたよと言いましたけれども、おそらく田戸上層式の発生というのは、たぶん福島県とか宮城県の南の方とか、おそらく南東北なんだろうと私は思っています。そこで発生したのが、こう北、南にずっと拡散して東日本全域に広がってきたんだろうというふうに考えています。

ちょっとマニアックな話になってしまいましたが、それで、その謎と言えば謎なんです。左側は、田戸上層式の段階です。ずっと田戸上層式の同じような系統の土器がこんなに一気に広がって、ほぼ東日本全体が同じような土器を使っている時期があります。ところが、その後の段階になってくるとこんなに分立しちゃうんです。関東で言うと子母口式という編年表にも載っていますけれど、田戸上層式の後に条痕文系の一番最初の段階で、子母口式という土器の時期があります。この時期になると小地域、狭い地域の中で、１つの型式を作って、もちろん周りとの交流もありますし、似たような土器も使っていますけれども、型式が分立しちゃうんです。これも私の好き勝手な型式も入っていますけれども、関東では子母口式です。

そして栃木県を中心に出流原式というのがあるんです。やはり子母口式とは異なっていて、違う１つの型式を作ります。これまでずっと栃木にあるのになんで群馬にないんだろうと思っていたんですけど、最近になって群馬でもちらほら見つかってきて、太田市の方とかで出ています。気付いていなかったんですけれども、頭無でも実は出流原式が出ていたので、もう少し群馬にも広がるんだろうなと最近思っています。

福島県を中心に常世式という、やはりまた違った型式の土器群があって、宮城県あたりですと大寺式というまた違う土器があって、北東北に行くと今度は吹切沢式というまた違う土器群があるんです。

長野の北の方、あと八ッ場ダムでしばらく調査をしていますけれども、八ッ場ダムは群馬なんですけれども、関東とは全然違い、実はこの時期の八ッ場ダム地区は長野文化圏です、土器を見てみると。この上林中道南式というのが広がってきまして、また違った文化圏です。

山梨や神奈川西部の方とか行くと平石式というまた

違う土器があったりして、なので田戸上層式の時にはこんなに分布圏が広がっていたのが、なぜかまた次の時代に変わってくると、狭い地域で１つの型式ができて、文化圏が小さくなってきます。この変化は何なのかなという、その時の時代の、時代背景というのが何だろう、環境がどうだろうとか、色々な要因は考えられるんでしょうけど、ものすごく不思議な変化ですね。当然、縄文時代は時期によってこのように大きく広がる時期と、こんなに狭まる時期と、また広がって狭まってという様々な交流や文化圏があります。やはりその時の生活の背景というか、それにおそらく原因があるのでしょうけれど、だからなんだと分からないですけど、これがこの辺の時期の大きな謎かなというふうに思っています。なので、１回田戸上層式の時期に、すごく縄文人の意識が表された、図形文様がしっかり描かれて、こういうキャリパー状の立派な土器ができて、ピークを迎えたのですけど、その後また実は無文化しちゃうんです。無文化して、この子母口式というのもほとんど無文の段階なんですけれども、やはりそういうふうに時代は変わっていってしまっていて、一気に広がったものが小さい地域でちょこちょこというふうな時代になってくるので、これが田戸上層式期に何かあって、その後何があってこういうふうになっちゃったのかなというのは、早期の非常に大きな謎と言えば謎です。

頭無遺跡の土器

ちょうどここに頭無遺跡の土器がありますけれども、せっかくなのでお見せします。これがキャリパー状。ここでくびれをもって、口縁部の文様帯と胴部の文様帯。これが１番で、丸底ですね。シンプルと言えばシンプルですね。線が細くて。群馬県でこの時期の土器が出て、ここまでちゃんとしているのはここしかないです。前橋市鶴が谷町の住宅団地、そこの調査は30年以上前に行われていて、この後資料はほとんど増えてないですね。

２は口縁部をよく見てもらうと、雷文です。これは胴部がなぜか無文なんですけれども、本当はここにも文様があってもいいんだろうなと思いますけれども、口縁部に雷文みたいな文様が入って、貝殻腹縁文がすごくたくさん入って、本当に典型的な田戸上層式の土器です。

それから、この時期の後にもう１段階あるんですけれども、その後になると、６になります。もう全然キャリパーでもなく、ちょっと尖底は残っていますけれど、真っ直ぐなシンプルな形になって、無文になるんです。これだけ文様がつけられたのが、後になるとこうなっちゃうんです。口縁に少し刻みが入って、全くの無文ではないですけれども、これだけ土器が変わっちゃうわけです。何でこういうものからこうなるのかなというのは分からないです。

それから、これは４です。これは常世式です。常世式が来て、当然南東北の方と交流があって、そっちから来ているのかな。全然文様が違いますよね。やはりこれもシンプルになってきて、横方向の文様で、刻み、刺突列が横に広がるくらいの、またシンプルな感じに戻ってきます。

それから７がおそらく子母口式です。なので当然、頭無遺跡に在地の子母口式があって、東北地方の常世式が入っている。載せませんでしたが、出流原式もある。

それから５の土器が、私はすごく重要な土器だと個人的には思っているんですけど、５番の土器は何々式と言っていいか分からない土器です。こういう土器はほとんど類例がありません。資料を作りながら改めて思ったのは、やはり横方向の展開の仕方で、菱形状の１、２、３、４段になっているんです。しかも沈線が３本の沈線で、菱形をめぐらしているので、よく分からない土器ですけど、おそらく出流原式に近い特徴もあるし、常世の系統も入っているかもしれません。こういう資料がもうちょっと増えてくるとこれからの研究が進む土器ですね。

群馬県という地域が関東でも北の方にあって、どちらかと言えばこれまでの土器研究というのは南の方、千葉とか東京、神奈川の方の土器を中心に進んできています。群馬の土器が分かってきて、地域的にも南東北にも近いし、中部にも近いしということで、逆に分かりづらいと言えば分かりづらいですが、交差点というんですかね。それぞれの地域の交差点にある、それぞれの土器がどのように交流してどういうふうになってきたのかというのが、それを知るためには非常に重要な地域と言えると思います。特に頭無遺跡のこの土器群は、もったいないくらいこれから研究の対象としてやっていくべき資料だなと今改めて考えています。

おわりに

マニアックな話をずいぶん長くしてきましたので、なかなか分かりづらかったかもしれませんが、土器を

研究するということは、もちろん土器自体の研究もあるんですけど、その後ろにいる縄文人がどのように、その当時どんな状態だったのか。例えばこの分布の仕方、これがどうしてこうなっちゃったのかなというのが、やはり何かあるわけです。縄文人の生活の裏に何かがあるから、こんなに一気に広がった土器が、なぜか縮小するというか、小さい文化圏に分かれて違う型式が乱立するというような状態になるわけで、そういった土器の動きとか土器の分布を見ることによって、その裏に隠されている縄文人の生活スタイルというのが分かると、なかなかそこまで追い詰められないんですけど、１つの方法ではあるということです。ひたすら土器ばっかり追いかけているわけですけれども、縄文人がどのような思いでこういう文様を描いたのかとか、そういうのを考えつつずっとやってきているわけです。縄文土器を知るということ、見るということは、その時の縄文人を見るということに繋がるのだろうなというふうに考えています。

～質問～

Ｑ１　この編年表の、大体どのくらい前かというのを教えてもらいたい。

Ａ１　難しい所ですね。草創期の頭で、とりあえず13000年と言っておきますと、早期の始まりが10000年くらい、9000年くらいになると思います。よく早期で沈線文で8000前という言い方をするので、前期で……ちょっと難しくて、あんまり何年前という言い方は私たちはしなくて、前期とか何々式でとか。

Ｑ２　話を聞く時に縄文時代は何年くらいかなと思いがどうしてもあるので、だいたいの時期がわかればと思いました。

Ａ２　資料を持ってくれば載っていたのだけれど、前期の始まりは何年前くらいですかね。6000年とかなるんですかね。

（事務局）最近年代が古くなってきたんです。かつては橋本先生が言うように13000年くらい前が縄文時代の開始と言われてましたが、最近青森県の大平山元遺跡で、炭素14の半減期を調べた結果、16000年級の年代が出ています。ですから縄文時代の開始が16000年前じゃないかと言われているんです。

それから弥生時代もどんどん古くなってきまして、紀元前300年くらい250年くらいまでと古くなってきています。炭素14年代の新しい計測方法ができたものですから、ずいぶん年代が変わっているものですから、おおよそ前期の始まりが7000年くらい、中期が5000年くらい、後期が4000年くらいと言われていたんですけど。なかなかその年代が確定していないものですから、土器を専門に研究している人たちなかなか年代を言わないんですね。我々とすればいつ頃の話なのかなと一番関心の中心だと思うのですね。今後、もう少し炭素の半減期の研究が進めば、きちっとしたデータが出ると思うのです。最近、福井県の三方五湖の湖底地層から細かな年代測定ができるという話がありました。湖の底に堆積した土を使った年縞堆積物を使えば、もっと詳しい縄文時代の年代を決定できる可能性が増えてきました。

三方五湖の地層を見ていくと、現在から50000年前までびっちり１年毎の地層が残っているという話です。湖底地層の中に火山灰があるとする、その時期をきちんと判定できるわけです。

このほかの方法として年論年代学があります。木の年輪の幅を測定してその変化具合から年代を決定します。日本では1980年代に独立行政法人奈良文化財研究所の光谷拓実さんが始めたのですけど、法隆寺をはじめ奈良の寺の建築部材の年輪幅を調べはじめ現在では、弥生時代から中世くらいまで正確な年代がわかるようになりました。

Ｑ３　尖底土器が使われていたのは早期までで、それ以降には見られなくなったのですか？

Ａ３　前期の初めくらいまで花積下層式土器にも尖底土器がありますので、その頃までは少しずつ残っています。関山式土器になると、しっかり平底になってきますので、花積下層式土器くらいまででしょうか。

Ｑ４　尖底というと、煮炊きに使われる用途に使われたと思うのですけど、それ以降は、貯蔵にとか変わってきているのですか？

Ａ４　基本的には土器は煮炊きが主ですよね。もちろん煮炊き用、貯蔵用あるんでしょうけれど。別に尖底で貯蔵するにしても、どこか立て掛ければいいわけで、なので基本的には両方の機能は持っているのでしょう。

Ｑ５　それと変な質問ですけれども、よく見本が飾っ

てありますが、その下に鏡があったりして、底が抜けている土器があったりします。事故でそうなっちゃったのか、何か目的があったのか。

Ａ５　縄文土器で穴が開いて、底部穿孔土器というものです。普通の使い方ではないのでしょうね。あえて底を抜いて、例えばお墓のための棺にするとかそういうのはあるかもしれませんけど、普段使う中で底がないというのは普通ではないですね。特殊な土器ですね。土器で底がなかったら使い物にならないですね。

Ｑ６　ここに文という、縄文の文ですね。さっきの映像の中には糸偏の紋がありました。使い分けていますか。

Ａ６　実は私は、糸偏の紋を使うんですよ。今回は一般的な考え方で抜いてきたのですけど、変換していく中で、普段使っているのが出ちゃったんですかね。文と紋の違いについて、色々な学派の違いがあるかもしれませんし、簡単に言っちゃうと私が教わった先生が糸偏付けていた先生であったのと、あとは早期のさっきは６期区分と言いましたけれど、早期の区分の仕方も違ったりするんですね。さっきは撚糸文系から早期と言いましたけれど、実は撚糸文系を草創期に入れるのもあって、その辺の考え方も違ったりしています。

Ｑ７　学会でどっちがという区別はしないということですか？

Ａ７　しないですね。糸偏つける人も普通にいるし、おそらくつける人の方が少ないでしょうけれども。一般的にはつけないのが普通ですけれども、ちょっとした、こだわりを持っていると糸偏を付けたりして。自分の論文を書く時は糸偏をつけていますね。普段使っているものですから、変換した時に出ちゃったんですね。

Ｑ８　佐賀の吉野ヶ里遺跡では大きな甕の焼き物が出てきます。あれはあそこだけですか？　それとも東国には出てこないのですか？

Ａ８　甕棺は向こうの方が主体ですけど、こちらも少しはあります。ただし、大きいのはないですね。九州のは150～200㎝くらいです。

　九州と本州ではやっぱり文化圏が違いますね。私この間実は鹿児島に縄文のこの辺の時期、封印しているはずだったんですけれど、ちょっと大学の時の同級生が、この時期に似たのが鹿児島にあると言って、遊びがてら見に行ったんですけれども、全然違いました。早期なのにこんな壺が出てきたり、ふつうに見るとこれは弥生じゃないかというのが縄文早期に出てくるんですね。やはり地域地域で全然違う展開の仕方をしていて、おそらく関東の人間が鹿児島に行ってみると、向こうでは縄文早期の土器ですよと言うかもしれないですけど、これは弥生だね、ふつうにパッと見たら弥生だねというものがあったりするので、文化圏によって内容が全く違うということだと思います。

Ｑ９　焼き物の素材と言うと、粘土でしょうけど、粘土もかなり質の差があると思うのですけど、これなんかは発掘してみてどういう風に感じますか。

Ａ９　私たちは基本的には肉眼で差を見るくらいしかありません。科学的には胎土分析という方法もあります。

Q10　質が良ければなかなか割れないでいるものも多いわけですか。

A10　でも長い年月が経っているとみんな割れちゃいますよね。土もあるし、温度もあるし、焼き方もあるし、ふつう割れないで出てくるほうが難しいですね。ちゃんとこのまま入っていて、例えば埋甕みたいに埋っていて、そのまま埋っているというパターンならありますけれども、特に早期なんか埋甕はもちろんないですし、普段使いの土器が例えば出てくる時にやっぱり残らないですよね。土器の問題というよりも残り方の問題ですよね。

Q11　文様の意味というか、その装飾性以外にもあるんですか？

A11　そこは一番分からない所じゃないですか？

Q12　１万年前の人が土器の文様の美しさとかを今に通じるような意識があったのかなと、色々見せてもらって感じた所なんですけれど、非常に斬新ですよね。シンプルでモダンな感じがするし、そういう美意識が１万年前の人にもあったのかなという、それ以外にも、装飾性以外にも目的や作製過程で必要だったとかないですか？

A12　それも謎と言えば謎なんですね。時代によっ

て、こんなにすごいのを作る時と、またそれが無文になっちゃって文様つけなくて、またこう出てきてというのがあると思うんですね。やはり時代背景が影響しているものあるし、その時の生活スタイルもあるだろうし、縄文人の美意識もある、なきゃこういうのは出てこないし、だからいろんな考えがあっていいんですけど、それの答えは出せないですね。今回は早期しか扱っていないですけれど、他の時期を見るとものすごい立派な縄文土器がたくさんあります。

講座・赤城山南麓の考古学２０１５　第２回

「縄文・尖底土器の謎」

群馬県教育委員会　橋本　淳

１　縄文土器の編年

草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６期区分

２　さまざまな尖底土器

３　群馬県内の遺跡分布

４　尖底土器の謎

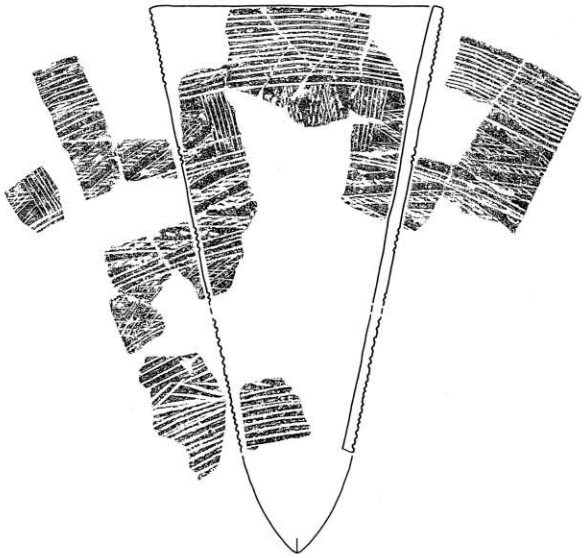
なぞ①　なぜ尖底が生まれたのか？

なぞ②　田戸上層式期になにがあったのか？

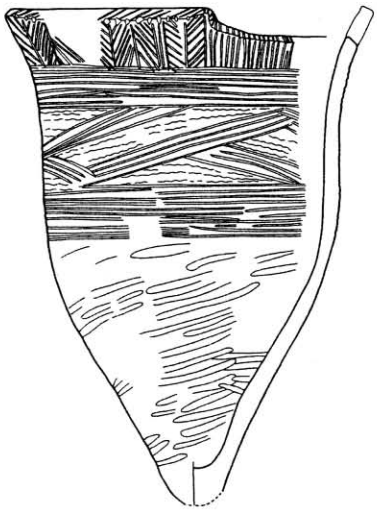
５　おわりに

時期	型式名	
草創期	豆粒文土器 隆線文系土器 爪形文土器 多縄文系土器 表裏縄文土器（大谷寺III）	
早期	（撚文系土器） 井草 I 井草 II 夏島 稲荷台 花輪台	
	（沈線文系土器） 三戸 田戸下層 田戸上層	
	（条痕文系土器） 子母口 野島 鵜ケ島台 茅山下層 茅山上層 〔下吉井・打越・神之木台〕	
前期	花積下層 関山 I（二ツ木） 関山 II 黒浜（植房） 諸磯 a 諸磯 b 諸磯 c 十三菩提	浮島 I 浮島 II 浮島 III 興津
中期	五領ケ台 I 五領ケ台 II 勝坂 1 勝坂 2 勝坂 3 中峠 加曽利 E I 加曽利 E II 加曽利 E III 加曽利 E IV	下小野 阿玉台 I a 阿玉台 I b 阿玉台 II 阿玉台 III 阿玉台 IV
後期	称名寺 堀之内 1 堀之内 2 加曽利 B 1 加曽利 B 2 加曽利 B 3 〔曽谷〕 安行 1 安行 2	
晩期	安行 3 a 安行 3 b 安行 3 c 前浦・安行 3 d 千網 荒海	

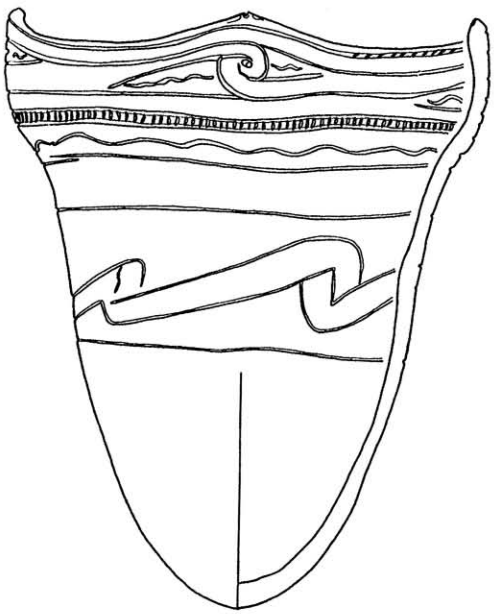
縄文土器の編年



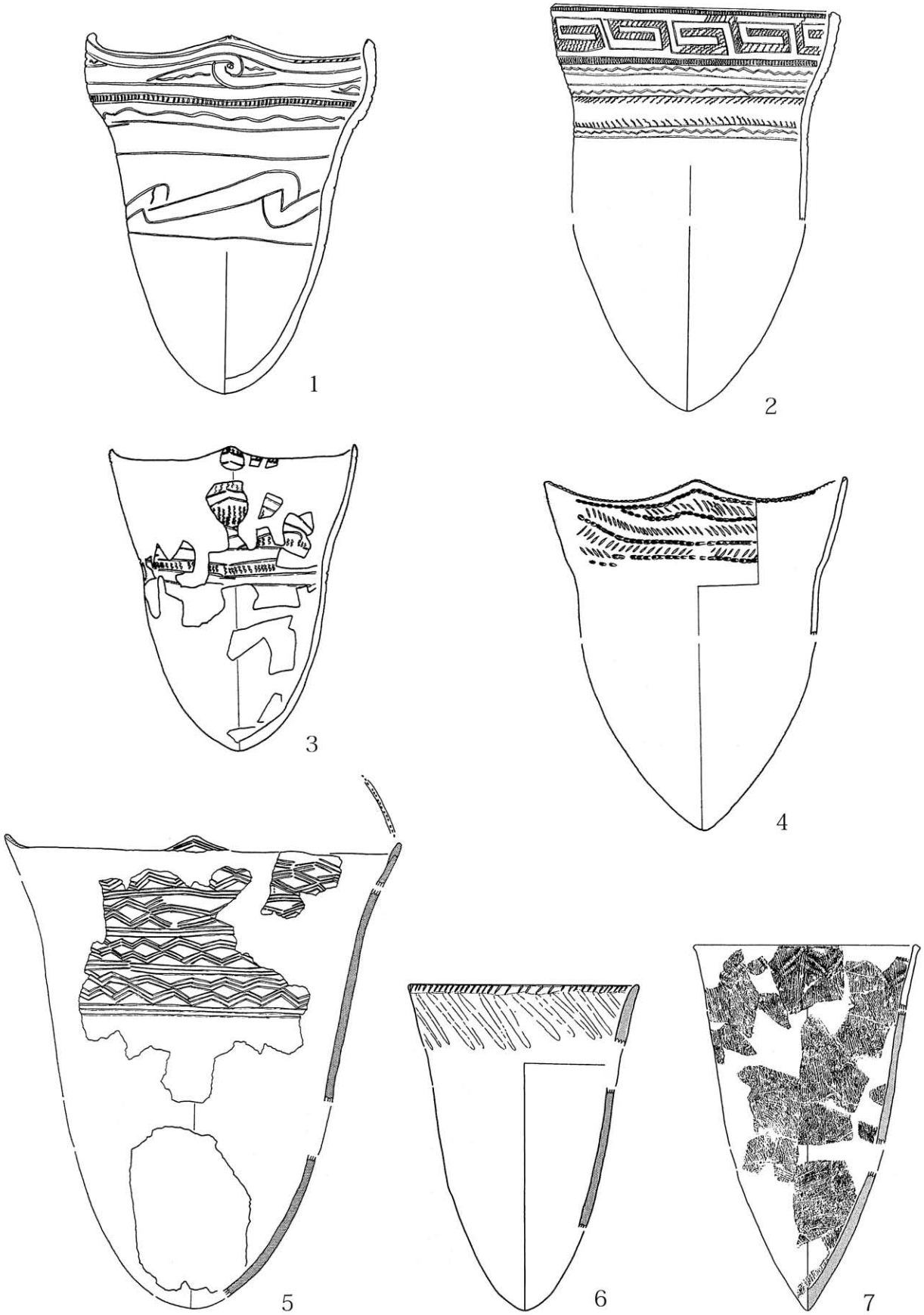
三戸式（太田市西長岡宿遺跡）



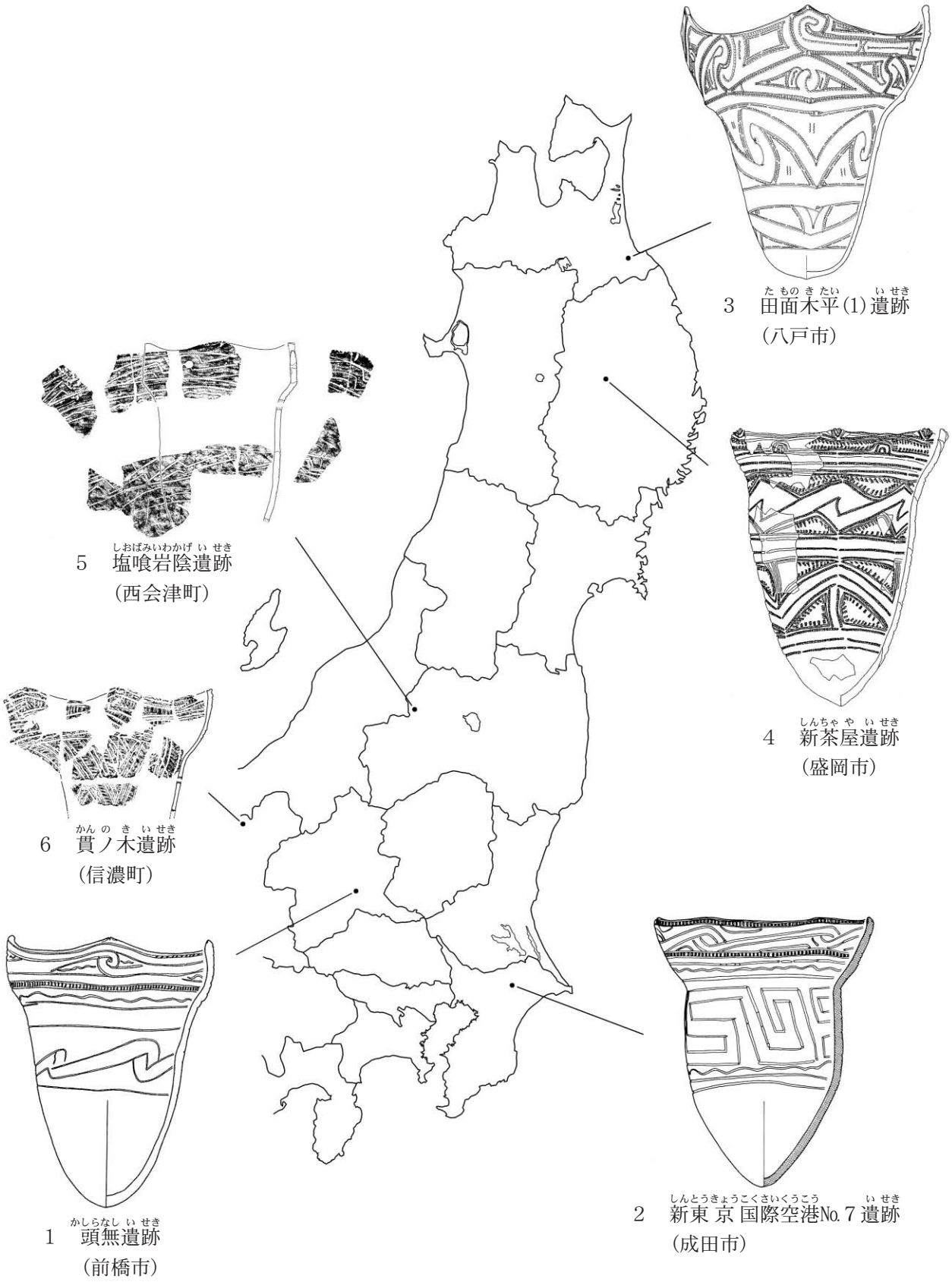
田戸下層式（下仁田町杣瀬Ⅲ遺跡）



田戸上層式（前橋市頭無遺跡）



前橋市頭無遺跡出土の土器（s＝1／5）



田戸上層式期の土器分布

古墳時代の豪族の館

横　澤　真　一（伊勢崎市教育委員会）

はじめに

伊勢崎市教育委員会文化財保護課の横澤といいます。今日は「古墳時代の豪族の館」ということでお話をさせていただきます。タイトルは「豪族の館」となっていますが、このような遺跡は「豪族居館」や「首長居館」など研究者により呼び方がまちまちです。今回はあとで理由を説明しますが「豪族居館」で統一します。

私が豪族居館を調べてみようと思ったのは大学の卒業論文の時からです。きっかけですが、群馬県は豪族居館の研究のスタートになった三ツ寺Ⅰ遺跡や原之城遺跡がありまして、研究の定点になるような遺跡が自分の身近にあったので、全国的にどのようなものがあるのか、と思ったからです。

豪族居館というのは古墳時代の人の活動の場ですので、今日は、豪族居館が発見されるまでの研究動向や発見後の動向、それと当時の中心地である畿内、主に奈良県の豪族居館を紹介し、その後に赤城山南麓の豪族居館について話をしたいと思います。

古墳時代というのは、古墳というお墓をたくさん造っていた時代です。縄文時代や弥生時代は使っている土器の名称から時代の名称がついていますが、古墳時代はお墓から時代の名称がついていますので、名称の由来となった古墳の研究が中心でした。古いところでは、水戸黄門として有名な徳川光圀が江戸時代に那須地方にある上侍塚古墳、下侍塚古墳とその近くにあります那須国造碑の関連で、調べてみようと実際に古墳を実際に掘ってみて、出土してきたものを記録しています。今でいう学術調査のようなことを徳川光圀は日本で最初にやった人と言われています。このように江戸時代から古墳そのものの研究というのが進んできたのですけれども、豪族の館、実際に古墳に葬られる人が生前に活動していた場所の研究というのはなかなか進んでいません。それはなぜかというとどうしても古墳というのは、地上に見えていますが、それ以外の遺構は地面に埋ってしまっている場合が多く、日常の生活の中で分かりません。また、遺構の規模が大きいので発掘調査をするにしても大きな面積を掘らないとなかなかそういう遺跡にめぐり合うチャンスはなかったというのも理由だと思います。

それでは豪族居館が発見される前は、生前の住まいとか、生活とかを研究してこなかったというと、そうではありません。古墳から出てくる出土品等から古墳に埋葬される人の生前の住まいの研究を進めていました。

三ツ寺Ⅰ遺跡と原之城遺跡の発見

実際の豪族居館の研究が大きく進むようになったのは昭和56年に、群馬県群馬町、現在の高崎市にある三ツ寺Ⅰ遺跡というのが発見されまして、その時に豪族居館という言葉も全国的に広まるようになって、研究されるようになってきました。三ツ寺Ⅰ遺跡というのは上越新幹線の建設に伴って発掘調査をされた遺跡で、全国の豪族居館の中でも一番典型例というか、三ツ寺を中心に話を進められます。しかし、新幹線の線路敷部分を中心に発掘調査していますので、全体の３分の１くらいしか様相は分かっていません。

三ツ寺が見つかった同じ年には伊勢崎市で原之城遺跡が発掘調査をされています。１つ見つかると今まで調査してよく分からなかったものもよくよく調べてみると同じような遺跡かなという遺跡がありまして、豪族居館と呼ばれるような遺跡は全国で100は超えています。見つかっている数では群馬県が一番多くて、20弱はあります。なぜ群馬に多いかというと、古墳が非常に沢山作られたからでしょう。昭和10年に群馬県内の古墳の数を調べる調査をしていますが、その時で8,423基、その時点でなくなっていたものを含めると１万基は超えていたと言われています。

居館の定義

三ツ寺での豪族居館が発見されてから、各地の博物館での企画展やシンポジュウムなどで活発な議論が交

わされ、多くの論文も発表され、それぞれの豪族居館論が展開されるようになりました。2002年に大阪府立弥生文化博物館で「王の居館を探る」という企画展が開催されました。その図録で居館の定義をまとめていますので、引用します（大阪府立弥生文化博物館2002）。

① 濠や柵で区画された特別な空間がある。

堀や柵で区画された特別な空間があるというのが１つの特徴になります。

② 区画の平面形は方形ないし長方形のものが多い。

基本的に平面形ですと四角い形をしています。弥生時代の環濠集落だと楕円形や不整形で区画をするのですけれども、古墳時代になると四角くなってくる。一部には不整形のものもあります。

③ 区画内には建物がある。

当たり前な話なのですけれども、区画内には建物があります。中にはお祭りだけをやったような区画というのもどうやらありそうなので、居館と呼ぶには建物があるのは１つの条件です。

④ 区画内の建物や特別な施設は，王の生活の場や政治の場、まつりの場、手工業生産の場など、それぞれの役割に分かれている。

堀や柵によって区画された中に住む場所、政治の場所、祭の場所、生産をする場所などにわかれます。生産は主に鍛冶遺構などの金属生産にかかわるものや玉生産にかかわるものが多いです。

⑤ 区画内の建物の規模や構成は、一般の集落とは大きな格差がある。

大きな古墳に葬られる人は力を持っていたので、普通の集落とは差が出る。建物でいうと、通常の竪穴建物よりも一回り、二回り大きい。

⑥ 王の権威を表す道具やまつりの道具が出土する。

堀など地下水がたまるようなところでは木製品が出土します。その中には蓋というえらい人に差し掛ける笠があったりします。

⑦ 存続期間が短い。

100年200年続くようなものではなくて、１世代か、もしくは２世代くらいの中で終わってしまうようなものが多いというのが言われています。

上記の①～⑦が豪族居館の特徴と言われています。ただ、全国的に豪族居館と呼ばれる遺跡を見ていくと、全部の遺跡がこのような特徴を持っているわけではありません。しかも、豪族居館というのは研究者によって呼び方がバラバラで、今回は前原さんが与えてくれたタイトルで、「豪族の館」で、居が付かない。ほかにも首長居館とか、研究する人によって呼び方が様々になっています。「豪族」という言葉から連想するイメージも人によってさまざまになります。豪族というと、どうしても日本書紀に出てくるような蘇我氏や物部氏、大伴氏、葛城氏といった、天皇の側近のような人や大きな勢力を持った人のイメージがあると思うのですけれども、豪族居館と呼ばれる遺跡は、明らかにそういう人よりも、もっと勢力の小さかった人たちの住まい、生活・活動していた場所なんかも含まれています。このため居館という呼び方が相応しくないのではないかという研究者もいます。今回は豪族居館ということで統一させてもらおうかと思います。

豪族と首長

「豪族」を尚学図書編『国語大辞典』で調べてみると、「ある地方に土着して富や勢力を持っている一族」とあります。「居館」を同じようにしらべますと、「住んでいる邸宅、屋敷、たち、やかた。」となります。研究者によって首長居館と呼ぶ人もいますが、「首長」を調べますと、「集団、団体を統率するもの、主宰者」というような意味です。「首長」よりは「豪族」の方が限定的ではないかと思います。豪族居館に統一した理由というのは、三ツ寺発見の時の豪族居館という言葉が生まれて、その後その言葉によってずっと研究が進んできた。考古学の世界では学史的に、豪族居館という言葉で認知されてきたと言えます。今後の研究の進展により、相応しい言葉があれば切り替えていけばいいのではないかと思います。

三ツ寺Ⅰ遺跡発見以前の研究その１・家屋文鏡

まず初めに、三ツ寺発見以前の古墳に埋葬されたような人が生活していた場所や住まいの研究を紹介します。１つ目は古墳から出てきた鏡から研究です。これは奈良県川合町の佐味田宝塚古墳という全長110mくらいの前方後円墳があります。宮内庁の陵墓参考地になっていて、家屋文鏡と呼ばれる家が描かれた鏡が出土しています。宮内庁が、3D 実測した図面を公開しています（宮内庁書陵部陵墓課2005）。４つ家が描かれていますが、模式図にしたのが、スライドです。便宜上の家を１番にして、そこから時計回りに２，３，４と番号を振ります。１番の家ですが、真ん中くらいで、建物の床になっています。手すりのついた階段のようなものも描かれています。屋根は、入母屋造で

す。屋根の左側に大きな傘がありますが、これが蓋という、貴人に差し掛ける笠です。この建物は、高床建物で、しかも位の高い人に差しかける蓋があるので、祭殿のような建物を表現したと考えられています。

次に２番の建物は、下に薄い横長の長方形があります。その上には縦長の長方形が４本表現されています。こちらは柱です。地面に直接建っていたような建物です。このような建物は平地式建物といいます。屋根は１番と同じで入母屋造です。上には鳥がとまっています。古墳時代は、鳥を表現しているものは多く、埴輪や古墳の壁画などで観られます。

続いて３番の建物です。こちらも高床式建物ではなさそうですね。屋根は入母屋造ですが、２番の建物と違い柱が表現されていません。上に跳ね上げるような扉が表現されています。屋根の左側には蓋も描かれています。これは竪穴建物です。古墳に埋葬されるような人も、竪穴建物に住んでいたと考えられます。

最後に４番目の建物です。１番の建物と同じような形で、左側に階段か梯子が表現されています。今まで入母屋造の屋根でしたが、今度は切妻造の屋根になっています。高床建物になるので、倉庫を表現しているようです。当時の豪族の館には、住まいとしての大きな竪穴建物や平地式建物、マツリゴトを行う祭殿、蓄えた財を収納する倉庫がある。４つのセットが基本的にあり、その象徴として鏡に表現されたのではないか。以上が、家屋文鏡から研究の概要です。

三ツ寺Ⅰ遺跡発見以前の研究その２・赤堀茶臼山古墳の家形埴輪

もう１つ、豪族居館を研究する手掛かりとして用いられたのが、古墳から出土する家形埴輪です。家形埴輪の研究のきっかけであり、話題の中心だったのが、赤堀茶臼山古墳です。今皆様のいらっしゃる大室公園からは非常に近い、多田山丘陵にある古墳です。

昭和４年に、当時の帝室博物館、今の東京国立博物館の技官だった、後藤守一氏が古墳の多い群馬県で是非状態の良い古墳を調査したいということで、目を付けて調査をしたのが、この赤堀茶臼山古墳です。茶臼山古墳の東には毛島城という遺跡があります。ここは豪族居館と呼ばれたこともあったのですが、伊勢崎市では中世の城館として史跡に指定しています。

赤堀茶臼山古墳の埋葬施設は木炭槨という珍しい構造のものです。刀とか剣とか、短甲という鎧などが出土しています。また、墳頂部から家形埴輪が８棟や高坏形埴輪、椅子または腰掛とも呼ばれる埴輪、囲形埴輪などが出土しています。昭和４年に調査したときの出土品は東京国立博物館が所蔵しています。平成館１階の考古展示室では時々赤堀茶臼山古墳の埴輪が展示されます。後藤氏の時の調査では墳丘全長43mと言われていましたが、平成７～９年にかけて当時の赤堀町が内容確認調査をして全長62.4m、２段築盛で葺石を持つ古墳であることが判明しました。墳丘には円筒埴輪を巡らせていたことも分かりました。この円筒埴輪は当時としてみると最新の情報で作られています。円筒埴輪の表面をよく観察するとハケ目というものがあります。縦方向だったり、横方向だったりするのですが、茶臼山古墳のものは横方向が目立ちます。すごく薄く綺麗に作られています。赤堀歴史民俗資料館に展示していますので、是非一度ご覧ください。

後藤守一氏による埴輪配置

調査をした後藤守一氏がまず埴輪の配置を復元したのが資料に載っています上の右側にある後藤案と書いてあるものです。真ん中にあるこの家形埴輪が一番大きくて立派なものになります。屋根の上に丸い棒状のものが乗っていますけれど、これは鰹木といいます。伊勢神宮など立派な神社の屋根の上に棒状のものが乗っているのですが、それと同じものです。８棟の中で最も立派なので中心の建物で「主屋」としています。出土状況を検討し、主屋の手前には一回り小さい家形埴輪が２棟向かい合います。これを「住居」と考えています。その脇に一番外側ですが４棟さらに小さい家形埴輪が並びます。それを「倉庫」としています。後藤氏は先ほどお話しした家屋文鏡も検討したうえで、入り口が一つで壁も開放されていない４棟を倉庫と考えたようです。残った一番小さい家を「納屋」としています。後藤氏は報告書の中で図のように実測図を並べたのではなくて、文字を四角囲みしているだけだったので、皆様がイメージしやすいように実測図を並べてあります。

藤沢一夫氏による埴輪配置

続いて藤沢一夫氏が、研究をされた配置図を紹介します。古代中国の唐の時代に、明器といって、ミニチュアの家やかまどなど亡くなった人用にお墓に入れます。赤堀茶臼山古墳の埴輪と同じような大きさのものがありまして、それの配置を検討すると藤沢案と表示した配置になります。赤堀茶臼山古墳の埴輪の配置

というのは、中国の様式がそっくりそのまま入ってくると考えたようです。

小笠原好彦氏による埴輪配置

小笠原好彦氏が藤沢案を若干修正しながら、中国の葬送様式がそのまま伝えられるとは考えにくいとのことで、向きを変えたりした配置案を考えました。藤沢案にはなかった囲形埴輪を建物群の前に配置して、「門」としました。また、最も小さい家形埴輪は納屋ではなくて、「霊屋（みたまや）」と想定しました。これは亡くなった人の魂を入れるものなので、一回り小さいものにしたのではないかということです。

青柳泰介氏による埴輪配置

最後が、橿原考古学研究所の青柳泰介氏が、家形埴輪の配置の研究をされまして、赤堀茶臼山古墳中心に家形埴輪の配置案は左右対称配置や、概念的な配置、いわゆる並びありきな配置が復元されている傾向があることを指摘しました。その上で出土位置の検討をされ、出土位置が分かる埴輪は２つしかない点を重視して、復元案を提示しました。後藤案で納屋とした小さい家形埴輪は出土位置が確実たどることができないので、通常の大きさの家形埴輪群からは離れた配置になっています。以上、赤堀茶臼山古墳出土家形埴輪配置復元案の紹介のみなってしまいましたが、このように古墳出土の家形埴輪を通して豪族居館を類推する研究がすすめられていました。

豪族居館が発見される

1981年、ついに豪族居館が、実際の遺構として発見されました。それが三ツ寺Ⅰ遺跡です。敷地を囲むような幅の広い濠が掘られ、古墳と同じように石が使われています。濠は単純に周るのではなく、途中で屈曲し大きな張出を作り出しています。三ツ寺遺跡の北西約１㎞には90m以上の前方後円墳３基を中心とした保渡田古墳群があり、居館と奥津城（墓）との関係もうかがえます。

高崎市の若狭さんが作成した全体図では、濠は屋敷の西面と南面に掘られ、北面と東面は猿府川を取り込むような形で掘られていたようです。屋敷の中に目を転じると柵により全体を囲み、されに半分ほどで南北を分けるかのような柵列があります。南側の区画には掘立柱建物が作られています。これは13mくらいある大きな建物になります。柵列によって厳重に区画されています。建物すぐ北には、二つの石敷遺構があります。濠の外から水道橋水を引き込んで、石敷で水を綺麗にして、お祭りを行っていたと考えられています。

張出や厳重に区画した柵列から非常に防御性も高いのではないかというようなことが言われていたのですが、近年の研究では防御性というよりは、人が入れないような、かつ外から見えないような施設なのではないかと考えられています。この三ツ寺Ⅰ遺跡を典型例としてその後の豪族居館研究は展開していきます。

南郷遺跡群極楽寺ヒビキ遺跡

1990年代の半ばくらいから、奈良県の御所市という所で土地改良事業とか圃場整備事業とかで大規模に発掘調査をしています。南郷遺跡群というところ、そこが発掘調査をされるようになってくると、どうも関西の豪族居館の様子は三ツ寺と違うのではないかというのが分かってきました。遺跡があるので、これがだいたい１平方㎞四方くらいの中の数々の遺跡というのが点在していて、その１つに極楽寺ヒビキ遺跡というのがあります。この遺跡は南郷遺跡群の中でも非常に標高が高い場所に作られています。調査の平面図を見ますと建物の柱穴が分かるかと思いますが、黒く塗りつぶされている箇所が、発掘調査で柱痕跡が確認できたところです。円形や長方形があるのがお若いでしょうか。通常、発掘調査をしていてよく確認される柱の痕跡は円形です。方形の柱跡というのはまず見たことがなかったです。スライドでお見せしている家形埴輪は南郷遺跡群のすぐ傍にある室宮山古墳から出土したものですが、柱が長方形に表現されているのがお分かりかと思います。今まで発掘調査で分かっていた実際の建物は円形の柱痕跡ばかりでしたので、家形埴輪は柱を模式化しているのかと思われていましたが、実はそうではなくて、結構忠実に当時の建物を再現していた可能性が高まりました。この遺跡だけで居館なのかというと、そうではなくて、ここは儀礼とかを行う用の建物だったのではないかと考えられています。

南郷遺跡群南郷大東遺跡

南郷遺跡群でもう１つ紹介しておきたいのが、南郷大東遺跡です。三ツ寺Ⅰ遺跡では水道橋を使い、館の外側からか水を引き込んできて、石敷で水を清めるような施設でしたが、こちらは、写真奥の方にある湧水点から水を流す施設になります。模型の写真で説明しますが、木樋の周りに掘立柱建物を作り、さらに外側

を柵で囲います。建物の中には人が並んでおり、木樋の中を水が流れています。ここでは水の儀式というのを行っていたのではないのかなという風に思います。

このような設備を導水施設といいますが、家形埴輪でも結構表現されています。大阪府八尾市の心合寺山古墳では囲形埴輪が出土し、その中に家形埴輪が入っているのが確認されました。囲の下の方には、水が抜けるような穴が表現されています。また三重県松阪市の宝塚１号墳からは、木樋を使った導水施設を表現した埴輪が出土していますが、それとは別に井戸を表現した家形埴輪も囲形埴輪と一緒に出土しています。当時のお祭りの中の水に関わる祭があるのですが、水を流すようなお祭りと井戸から水を汲み上げるような祭があったと思われます。

～休憩～

再開します。

畿内での豪族居館の事例は、先ほどの南郷遺跡群のように広大な範囲を領域としており、三ツ寺で理解していたような豪族居館像とは異なることがだんだんと分かってきました。

奈良県桜井市纒向遺跡

先ほどお話しした南郷遺跡群というのが、古墳時代の中期、５世紀の前半くらいの遺跡なのですが、今度は少し遡りまして弥生時代末から古墳時代初頭の事例を紹介します。絶対年代でいうと３世紀前半、古墳が出現する頃の遺跡で、奈良県桜井市にある纒向遺跡という遺跡で、ここも非常に広範囲にいろいろな施設が分布しています。「王の館」とも言われる中心施設や、先ほどの南郷大東遺跡で見たような導水施設等が見つかっております。遺跡範囲の南端には箸墓古墳という日本で最初に作られた前方後円墳があります。この古墳は卑弥呼の墓かと言われることもある古墳です。また、箸墓古墳よりもやや古くに作られたホケノ山古墳、ここは画文帯神獣鏡が出土したことで有名です。さらにそれよりも古いような古墳というか、纒向型前方後円墳という言い方をされるのですけれども、纒向石塚古墳とか、纒向勝山古墳、矢塚古墳、東側に東田大塚古墳という古墳があって、箸墓古墳よりも古くて、比較的規模も大きく前方後円墳形をした墳墓が集中して分布する地域になっています。

纒向遺跡の本当の中心部分で建物跡が見つかっているところから、同心円状に大きく広がり、ここも１平方km以上の範囲にかけて、居館に関連するような施設が、分布している、ということが度重なる調査で分かってきた遺跡です。纒向遺跡が注目された理由は、１つはその箸墓古墳など最初の前方後円墳やそれよりも古い墳丘墓がある点です。２つ目は、発掘調査で出土した土器に特徴があります。出土した土器の30％くらいは地元の土器ではなく、他所から持ち込まれたような土器が出土します。しかも出てくる土器というのは九州から関東地方くらいまでの特徴を持った土器が出てきますので、全国から人が集まるような遺跡だと分かってきます。

昔から注目はされてきたのですけれども、ついに平成20年度以降の調査で中心になる建物群が発見されました。上から撮った写真をお見せします。黄色いラインが建物になります。１棟は線路の下なので分からなくなってしまうのですけれども、１番大きい建物があり、その西側に２棟建ち前面を柵で囲い、さらに外側に１棟建物がある様子が分かるかと思います。新しい時期に掘られた溝によって壊される部分もあるのですけれども、平面図からも相当大規模な建物があることがお分かりになるかと思います。一番大きい建物は南北が11.2m、東西が12.4mくらいの大きさです。想定復元した建物は、扉が３か所付けられ、その前には階段も復元されています。

奈良県御所市秋津遺跡

続いて奈良県御所市にある秋津遺跡という遺跡を紹介します。現地説明会の資料が調査を担当した奈良県立橿原考古学研究所のHPにUPされていたので、それを元に説明をします。先ほどから南郷遺跡群とか秋津遺跡とか非常に御所市は豪族居館がたくさんあったと思うかもしれませんが、御所市周辺は古事記や日本書紀に登場する葛城氏という氏族の本拠地だと言われています。ですから日本の歴史を考えるうえでも重要な地域です。

秋津遺跡は柵列によって方形に区画された中に建物跡が見つかっています。方形だけでなくＬ字形になるものもあります。先ほどお話をした家形埴輪が入る囲形埴輪はこのような遺構を表現したものではないかと言われています。秋津遺跡ではこのような方形やＬ字形の区画施設というのが７つ見つかっています。その中に建物が色々入ってくるのですけれども、それぞれが重なっているので、全部が全部いっぺんにあったと

いうよりは、それぞれ時期を分けながらいくつかの施設が建っていたようです。柵列に囲まれた施設が中心にあって、その外側に竪穴建物群が作られますので、こちら側が一般の人達の住まいと考えられています。

先ほどの秋津遺跡で見つかった柵列に区画された施設を表現したのが囲形埴輪と言われております。奈良県広陵町の巣山古墳に220mくらいの前方後円墳の前方部の脇にある出島状遺構という島のような遺構からも見つかっております。先ほどの心合山古墳の場合は、壁の並行する二辺に水の出す口があったのですけれども、囲形埴輪の中に家が入るという施設は、水の祭祀を表したものと秋津遺跡のような区画の中に建物を建てるような施設と、何種類かありそうなことも実際の発掘調査と家形埴輪の関係で分かってきました。

赤城山南麓の豪族居館

群馬から遠く離れた畿内、奈良県のお話をしてきましたが、ようやく赤城山南麓の豪族居館についてご紹介します。スライドは、赤城南麓一帯の豪族居館の分布を示したものです。築造が古い方から説明しますと、桐生市新里町に大屋H遺跡があります。これが古墳時代前期の築造と言われています。前橋市荒子町に荒砥荒子遺跡、泉沢町に丸山遺跡、50号と駒形バイパスの高駒線のぶつかる先にある笂井八日市遺跡、桐生市新里町に一本木遺跡、伊勢崎市赤堀今井町一丁目にある今井学校遺跡、この大室公園のすぐ傍にある梅木遺跡。これらが古墳時代中期後半から後期、絶対年代でいうと５世紀後半から末になります。古墳時代後期ですが６世紀代では伊勢崎市豊城町原之城遺跡があります。

赤城山南麓の豪族居館その１・原之城遺跡

原之城遺跡は、1948年 GHQ が撮影した写真を見ると堀を含めて居館の形がよく分かります。スライドは原之城遺跡の全体図です。今日、お配りしたパンフレットにも同じ図面が載っていますので、どちらかをご覧ください。薄い水色で塗ったのが堀になります。居館内部北半分に濃い水色のクランク状に曲がっている溝がありますが、これが中溝と呼ばれるものです。四角の濃いピンクが点々と分布していますが、これは竪穴建物です。オレンジの所が掘立柱建物になります。北辺突出部の南にオレンジの細いＴ字型のものがありますが、これは柵列になります。北辺から東辺にかけてＬ字状にこげ茶の部分がありますが、これは土塁です。堀のすぐ内側に土塁が作られていることが分かったのですが、全周していたのかは不明です。千葉県佐倉市にある国立民俗歴史博物館で作った原之城遺跡の模型では土塁が全周するような形で復元されています。原之城遺跡のイメージと三ツ寺遺跡のイメージで「豪族居館＝幅広の堀や土塁があり、防御性が高い」というような印象が強くなりました。

居館の中の様子について説明します。居館中央東よりにある竪穴建物が、原之城遺跡で一番大きいものになります。大きさは一辺約12m。三ツ寺Ｉ遺跡で見つかった掘立柱建物が約13mなので、わずかに小さい竪穴建物にあります。写真だと分かりにくいのですけど、建物西辺にかまどが作られています。続きまして、もう一つ特徴的な竪穴建物を紹介します。匙状土製品や紡錘車が出土しています。匙状度製品とは、読んで字のごとくスプーンのような形をしたもので、居館の中で行われるお祭りに使用したものかもしれません。紡錘車は糸を紡ぐ時に使う道具なのですけど、この紡錘車の特殊な点は全面に漆が塗ってあったということです。

写真は西辺の突出部分です。三ツ寺と違って、堀の斜面には葺石がなく、素掘りになります。掘り込みも若干浅いので、防御性というよりはどちらかというと人の侵入や一般の集落とは異なることを示す区画のようなものと考えられます。

続いての写真は、真ん中を区画するように掘られた中溝です。溝から出土した遺物は、去年の大室の土器復元でもやっていたかと思うのですけど、子持器台と呼ばれるような、器台の上に須恵器の坏が付いているものが出ております。前原さんが実物を用意してくれました。このような土器はあまり一般集落で出てくるようなものではないので、祭祀に使っていたのではないかと言われています。

今度は北側の土塁の断面の写真です。土塁の断面になります。報告書の記載では古墳時代の旧地表面が残っていて、堀を掘削した土を乗せて土塁を造っていったと考えられています。北辺と東辺の一部に土塁があったのは確実ですが、残りは削られてなくなったのか、元々造られなかったのかは不明です。

土塁のすぐ傍の北東の角になるのですけど、土器が非常にまとまって出土した場所になります。ここから出土したのが須恵器大型器台３点や土師器坏70点、小型壺10点弱です。最も多いのが手捏ね土器で400点くらい出土しています。原之城遺跡を調査した当時は、

土器を集積したものは珍しかったので、土器の祭祀も居館の特徴と思われていましたが、最近だと甲冑を着た人骨が出土したことで有名な金井東裏遺跡でも土器を集積したような遺構が出てきますので、一概に居館と関わるものと言えません。金井東裏遺跡はここよりももっと多くて、1,000点以上土器が出ています。

また、円筒埴輪の出来損ないみたいな、楕円形をした突帯のない円筒埴輪状のものがあります。２号コ字状遺構から出土しました。コ字状遺構は居館の段階よりも前のものだという風に言われています。それが埋められた後に円筒状土製品が最後、居館が出来上がった時に捨てられているような形でバラバラになった状態で出土しています。

赤城山南麓の豪族居館その２・今井学校遺跡

今度は今井学校遺跡という、赤堀今井町にある遺跡の説明をします。スライドは、平成２年に当時の赤堀町教育委員会が発掘調査をした時のものと新潟大学が発掘調査をして、追加で居館の様相を調べた図面を合成したものです。今井学校遺跡の中の１つ特徴になるのが、図面の左上にある竪穴建物で、カマドに特徴があります。普通カマドというのは、壁から外に出るような形で煙道を作りますが、これは壁に沿うような形で作っており、Ｌ字型カマドと呼ばれています。このような形は朝鮮半島の影響が指摘され、床暖房になるようなオンドルという施設に関連するのではないかと言われております。渡来人の居館とまでは断定できませんが、朝鮮半島と関わるような人たちが住んでいた可能性があるのかなと思います。今井学校遺跡は柵列も作られています。写真では堀の内側に沿って柵が廻っていたような状況が分かるかと思います。

赤城山南麓の豪族居館その３・梅木遺跡

大室公園の中には梅木遺跡という遺跡があって、こちらも豪族居館です。梅木遺跡というのは実際に発掘調査で分かっているのは、全体の５分の１程度の範囲です。堀の外側でだいたい85m。内側だと65mくらいの大きさになります。居館の中の様子は、隣を流れる桂川の氾濫で失われているので、良く分かっていません。先ほどの今井学校と同じように、柵がまわっていたと想定されます。西辺には入口になる施設があったのではないかという風に言われています。大きさ的には65m四方なので、三ツ寺から見ると一回りか二回りくらい小さいものになります。中の状況が失われているのが非常に残念です。

赤城山南麓の豪族居館その４・荒砥荒子遺跡

今度は、荒子町にある荒砥荒子遺跡という遺跡になります。こちらも東辺と南辺でＬ字型に溝が掘られていたのが分かっています。南辺には突出するような形で、張出部があります。溝に沿うように柵が巡っています。ここも梅木遺跡と同様で氾濫によって半分くらい失われているので、詳細が分からなくなっております。

赤城山南麓の豪族居館その５・丸山遺跡

今度は泉沢町の丸山遺跡という遺跡です。これはさっきの荒砥荒子遺跡が東西59m、南北43mだったのですが、今度は更に小さくなって、東西32m、南北26mです。今まで、説明してきた居館に比べると非常に小規模なものになります。ただし、溝が掘られ１周していますし、柵列も回っています。柵列は、柱穴と柱穴繋ぐように布掘り状に掘られていますので、板塀のようなものがあったと考えられます。

赤城山南麓の豪族居館その６・笂井八日市遺跡

今度は笂井町にある、笂井八日市遺跡です。ここは原之城遺跡よりも大きい区画をしており、東西200m、南北160mの規模になります。実際に調査で分かっているのは僅かな部分しかありません。最近では新潟大学が発掘調査を行っていますので、今後の調査で詳細が判明すると期待しています。大きさだけでは赤城南麓最大というか、群馬最大というか、全国最大規模の遺跡です。三ツ寺と原之城と違って堀の幅が非常に狭くて、三ツ寺が30mくらい、原之城遺跡は広い所で20mくらい、ここは10mとか８mとかなので若干狭いかなと思います。全体の様子が分かってくれば、また１つ豪族居館の在り方も考える上で、面白い考え方でできる遺跡かと思います。

まとめ

最後に思いついたことを述べ、まとめたいと思います。先ほどの南郷遺跡群や纒向遺跡で、色々な所が調査されてきたことによって分かってきたのは、豪族居館と呼ばれる遺跡は、単準に遺跡の点だけを研究したところで理解は難しく、周辺の遺跡に立地する環境も含めて、周りにある遺跡というのを非常に研究していかないと豪族居館を理解するのは難しいということが

分かってきました。

三ツ寺Ⅰ遺跡に関しては、高崎市の若狭さんが榛名山東南麓の遺跡をまとめ上げて三ツ寺Ⅰ遺跡を理解していますし、その上でその後に出てきた三ツ寺と似たような北谷遺跡も含めて、榛名山東麓の遺跡を詳細に研究されています。また同じような方向性の研究では、福島大学の菊池先生という方がいらっしゃるのですけれども、その方は福島県の遺跡なんかで、一般集落と豪族居館と呼ばれるような遺跡との比較をしながら、「居館」というものの姿を描きだす研究をしています。そういった点を踏まえて、今後原之城遺跡を考えていく必要があるかと思います。原之城遺跡の近くに上武道路が通っていて、その時に調査された八寸大道上遺跡では子持ち器台が出土しています。それだけでなく、一般集落の調査例も多い地域ですので、上手く関連づけた研究ができればと思います。

最後まとめというよりは今後の中の課題で、豪族居館は果たして一人の権力者だけの住まいなのかという問題があります。三ツ寺では古墳を近くに造って、権力者の墓と居館の関係が非常によく分かる良い事例なのですけど、原之城遺跡というのは、三ツ寺よりも居館そのものの規模は大きいですが、居館の大きさと古墳の大きさが比例するのだという前提に立つと、どうも対応するような古墳が見つかりません。三ツ寺が80mくらいの敷地で、古墳が100mくらいの前方後円墳。すると原之城は200mくらいの古墳でもよさそうですが、そのような古墳は伊勢崎にはないんです。今なくなってしまった古墳で原之城遺跡周辺にあったものは80mくらいです。少し離れた五目牛町にあった古墳で110mくらいです。そういった古墳が対応するのかというのもありえますが、もしかすると原之城遺跡は、研究仲間とのお茶飲み話ででた話題ですが、権力者の住まいというよりは、周辺一帯の人の共同の場所というか、祭祀を行ったり、お祭りをするような場所だったのかもしれないということも考えられます。三ツ寺のように整っているような施設がないので、もしかすると作っている途中で使われなくなってしまったか、作るのを止めてしまったか、ということが考えられます。そういったものがあるのかという視点を検証しながら、原之城遺跡をまとめ直していければと思います。

以上で私からの豪族居館の話を終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

引用・参考文献

大阪府立弥生文化博物館　2002『王の居館を探る』大阪府立弥生文化博物館図録25

宮内庁書陵部陵墓課　2005『宮内庁書陵部所蔵　古鏡集成』学生社

古墳時代の豪族居館

伊勢崎市教育委員会文化財保護課
横澤　真一

1　はじめに

昭和 56 年（1981 年）、群馬町（現高崎市）の三ツ寺Ⅰ遺跡の発見により，日本で初めて「豪族居館」という言葉が実際の遺構ともに認知されるようになった。豪族居館とは，主に大型古墳に埋葬された人が生前に活動の拠点としていた場所を指す。研究者により，首長居館や豪族居宅，首長居宅など呼び方はさまざまである。考古学や歴史学で「豪族」という言葉に明確な定義づけがされているわけでもなく，豪族居館は曖昧な言葉だとして用いるべきではないという意見もある。

豪族とは・・・ある地方に土着して富や勢力を持っている一族。
居館とは・・・住んでいる邸宅，屋敷。たち。やかた。
（首長とは・・・集団・団体を統率するもの主宰者。）

尚学図書編　1981『国語大辞典』

三ツ寺Ⅰ遺跡の発見以降,「豪族居館」という言葉で研究が進んできており，学史的に一定の理解がされていると見做せる。

2　三ツ寺Ⅰ遺跡発見前の研究

古墳から出土する遺物を中心に，古墳に埋葬された人の住まいや活動の場を類推する研究が進められていた。

（1）家屋文鏡による研究

奈良県佐味田宝塚古墳から出土した家屋文鏡に４棟の建物が描かれている。竪穴建物１棟，平地式建物１棟，高床建物２棟で，竪穴建物と高床建物の１棟には蓋が立てかけられている。

（2）家形埴輪による研究

赤堀茶臼山古墳から出土した家形埴輪８棟を中心に，その配置状況を復元することにより当時の住まいの様子を想定した。調査を担当した後藤守一だけでなく，藤沢一夫，小笠原好彦，青柳泰介らによって研究がされている。

3　三ツ寺Ⅰ遺跡発見以後の研究

三ツ寺Ⅰ遺跡発見以降，伊勢崎市原之城遺跡をはじめ，同種の遺跡が発見されたり，従

来の調査の遺構が再検討され，豪族居館と再認識されたりした。橋本博文や小笠原好彦，都出比呂志らが独自の居館論を展開し，活発な研究が進められた。展示会や主に考古学系の雑誌での特集，シンポジウム等も企画され，豪族居館研究は大きく進展した。これらの成果により，一定の定義付もされるようになった。

①濠や柵で区画された特別な空間がある。
②区画の平面形は方形ないし長方形のものが多い。
③区画内には建物がある。
④区画内の建物や特別な施設は，王の生活の場や政治の場，まつりの場，手工業生産の場など，それぞれの役割に分かれている。
⑤区画内の建物の規模や構成は，一般の集落とは大きな格差がある。
⑥王の権威を表す道具やまつりの道具が出土する。
⑦存続期間が短い。

大阪府立弥生文化博物館　2002『王の居館を探る』から引用

三ツ寺Ⅰ遺跡のインパクトが強すぎる点と，当時の中心であった畿内の様相がわからない点から，三ツ寺的な要素が特徴の核になっていった。

一方，1990 年代の後半から奈良県御所市で南郷遺跡群の調査が進められ，畿内での豪族居館の一端が解明されるようになった。金剛山東麓に所在する径 1 ㎢におよぶ広大な敷地を有する孤軍時代中期の大規模集落である。首長層の区画された大型建物，導水施設，首長層の居住地，中間層の居住地，武器生産をおこなった特殊工房，大型倉庫群，鉄器生産・玉生産・窯業生産など盛んな手工業生産をおこなった一般層の居住地などが見つかっている。

畿内の大型古墳に埋葬された階層の豪族居館は，三ツ寺Ⅰ遺跡のような区画内だけで完結するような居館ではなく，もっと規模の大きいものの可能性が高くなった。

4　畿内の豪族居館の類例の増加

・纒向遺跡

奈良県桜井市に所在する。東西に整然と並ぶ４棟の建物が見つかっている。周辺には出現期の古墳や導水施設がある。

・秋津遺跡

奈良県御所市に所在する。家形埴輪と囲形埴輪の関係を彷彿とさせるような方形の区画施設と大型の竪穴建物，掘立柱建物が見つかっている。

5　赤城南麓周辺の豪族居館

（１）伊勢崎市

・原之城遺跡

豊城町に所在する。東西 110m，南北 170m，敷地内の面積は 17,000 ㎡を超える。濠の幅は広いところで 20m。北東の一角には土塁が残り土器が多量に出土した祭祀遺構がある。大型の竪穴建物や掘立柱建物が作られている。

・今井学校遺跡

赤堀今井町一丁目に所在する。東西は 80m程度，南北約 74m，東辺は粕川の段丘崖になるため不明。赤堀町調査では北西角に柵列を検出。L 字型の竈をもつ竪穴建物がある。

（2）前橋市

・梅木遺跡

前橋市東大室町に所在する。南辺の全長は約 85m。南辺には柵列も検出している。西辺には 2 間ないし 3 間の掘立柱建物があり，門の可能性が指摘されている。

・荒砥荒子遺跡

荒子町に所在する。東西 59m，南北 43m確認されている。館の半分程度を氾濫原によって失っている。南辺には突出部がみられる。濠の内側には柵列も検出されている。

・丸山遺跡

泉沢町に所在する。東西 30m，南北 26mで小規模である。堀に沿うような形で柵列が検出されている。

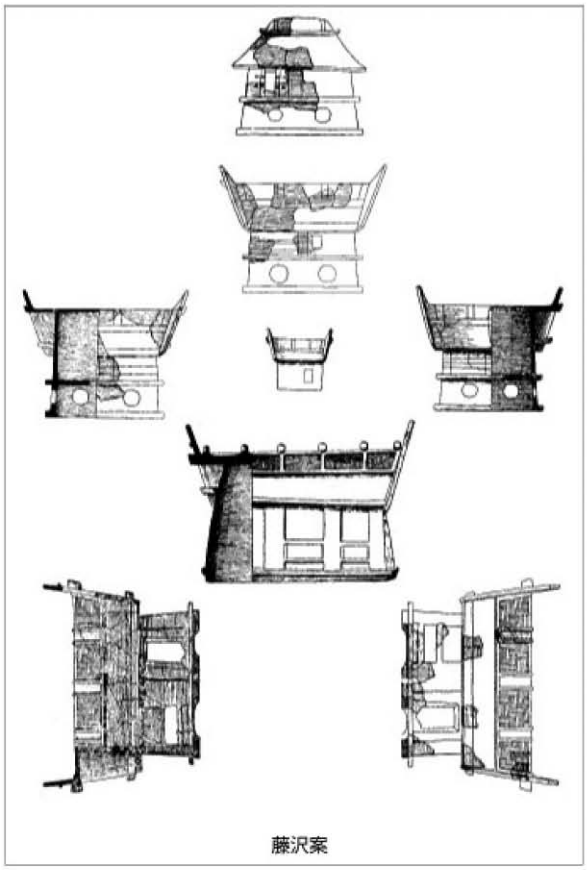
・笂井八日市遺跡

笂井町に所在する。東西 200m，南北 160m，敷地面積は 30,000 ㎡を超える。確認できた濠の幅は 8m，深さ 1.5m。

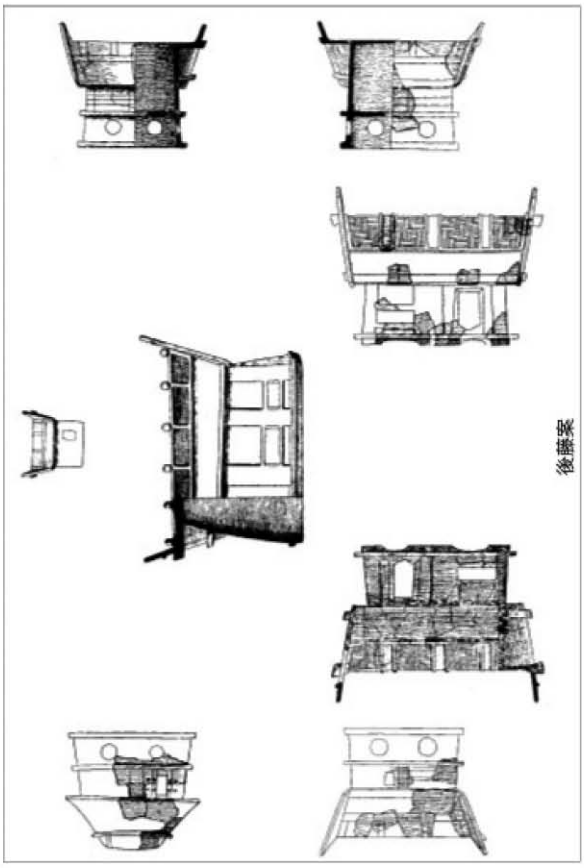
6　おわりに

古墳時代を通じて古墳は数多く作られている。群馬県では『上毛古墳綜覧』で 8,423 基記載されている。その後の発掘調査で記載漏れの古墳が見つかっており，１万基を超えると考えられる。古墳の数だけで豪族居館があったのかといえば，そうではなく，ある一定の規模を有した古墳以上の被葬者が居館を経営していた可能性が高い。また，居館と呼ばれる遺跡のなかには個別の首長に特定されるのではなく，共同径的な場所であったものも存在する可能性がある。

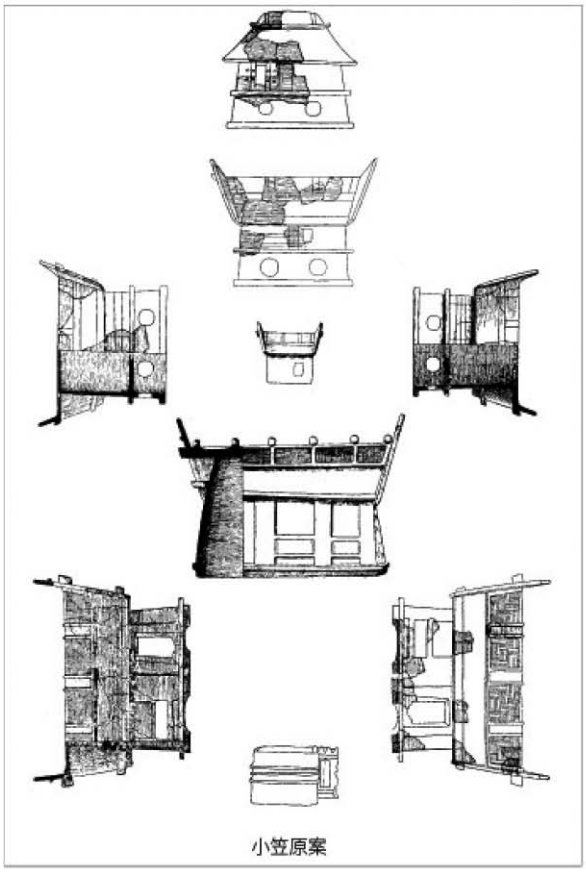
豪族居館は名称も定まらないほどであり，解明すべき課題は多い。



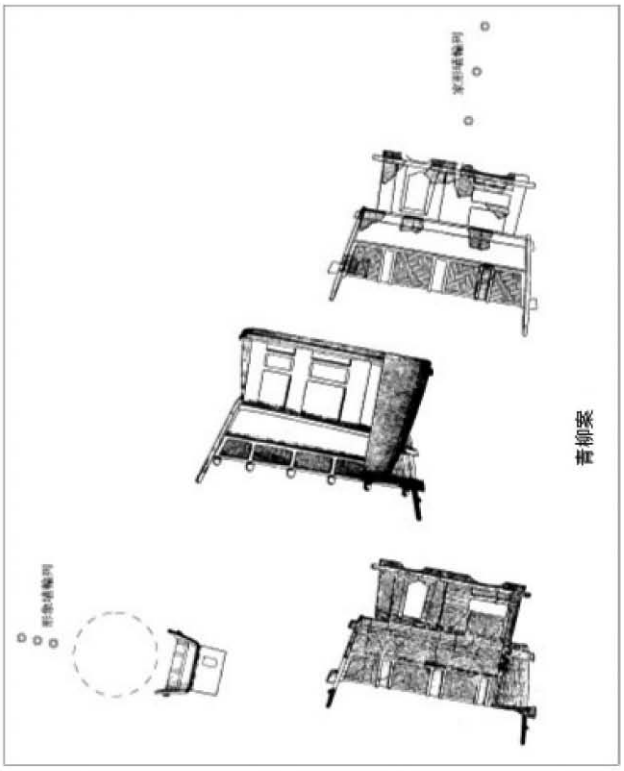
藤沢案



後藤案

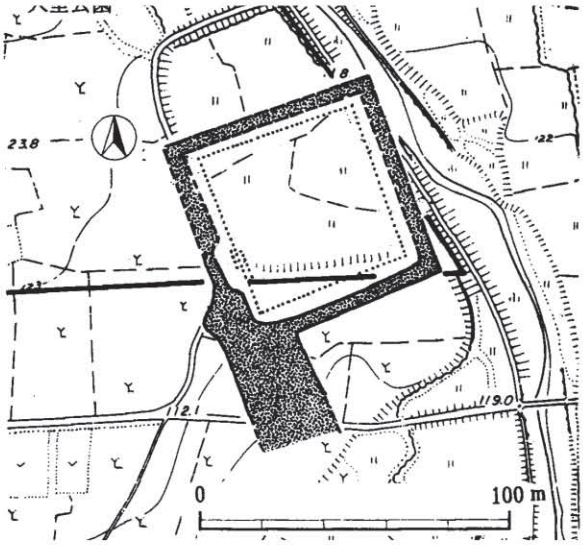


小笠原案

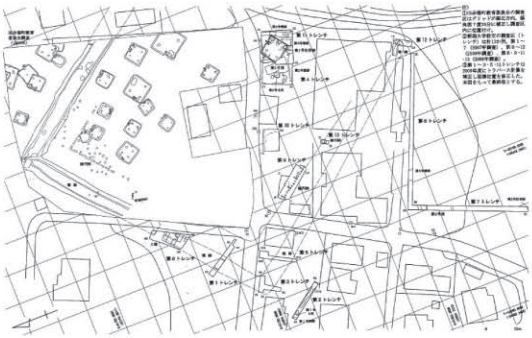


青柳案

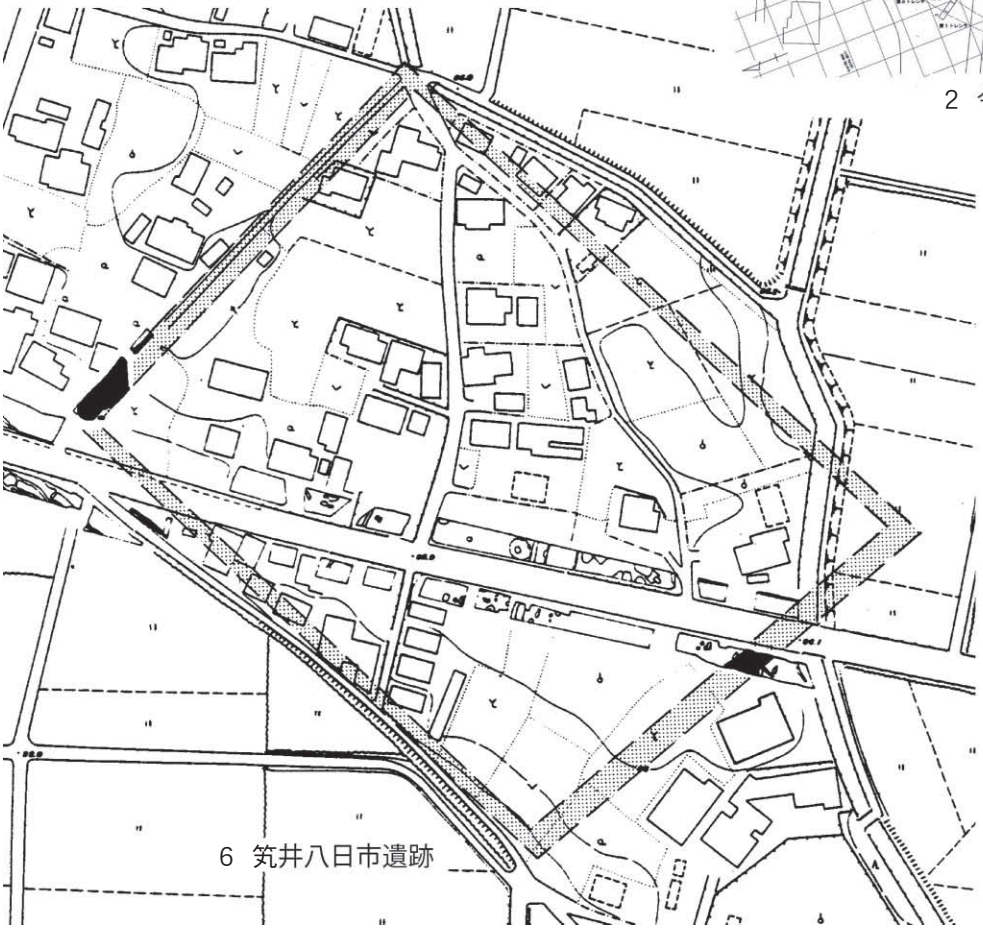
1　原之城遺跡



3　梅木遺跡



2　今井学校遺跡



6　笂井八日市遺跡

4　荒砥荒子遺跡

5　丸山遺跡

講座・赤城山南麓の考古学2015　第４回

赤城山南麓古墳めぐりバスツアー

深　澤　敦　仁（群馬県立歴史博物館）

はじめに

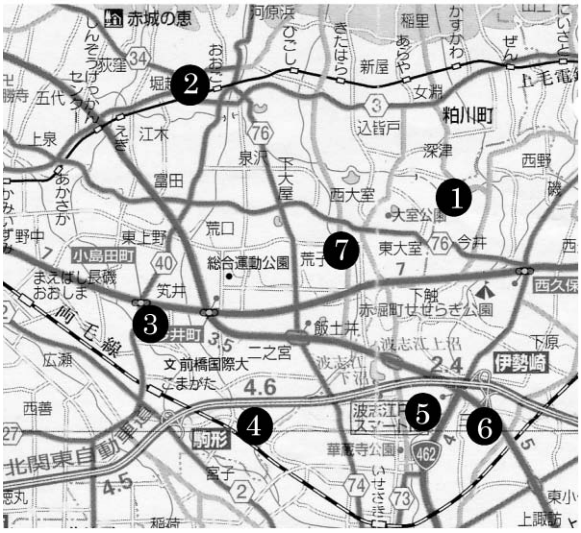
古墳王国と呼ばれる群馬県には１万基を超える古墳が存在したとされていますが、今回巡回する赤城山南麓地域は、特に古墳が集中する地域の１つとされています。その数多くの古墳の中から、今日の赤城山南麓古墳めぐりバスツアーのコースは、前橋市教育委員会文化財保護課の前原　豊さんと相談して決めました。厳選された古墳について、現地では古墳見学のポイントをできる限りお伝えできればと思っています。

そこで、今日はおすすめの本を３冊持ってきましたのでご紹介します。１冊目は、高崎市教育委員会文化財保護課の課長さんであります若狭　徹さんがまとめられた『ビジュアル版古墳時代ガイドブック』です。これは古墳めぐりガイドブックではないですが、日本全国の古墳の見方、あるいは古墳時代の色々な特徴をフルカラーで非常に分かりやすく簡潔に書かれている本です。何と言っても全国屈指の研究者である若狭徹さんが平易に書かれた、非常に分かりやすい本です。

次は、『別冊太陽　楽しい古墳案内』という本です。この本は国立歴史民俗博物館教授の松木武彦さんがまとめられた本です。これも群馬県地域だけの内容ではなく、全国的視点から古墳の形の変遷や石室の構造、そして日本各地の著名な古墳のことなどをすばらしい写真を満載で解説しています。なお、この本では若狭さんも分担執筆されています。

最後は、専修大学教授の土生田純之先生が編集された『古墳の見方』という本です。土生田先生については、皆さんすでにご存じの先生であると思われますが、日本を代表する古墳研究者のおひとりであります。その土生田先生が、古墳に関する各分野の気鋭の研究者を執筆陣に揃えて、古墳そのものや出土品などの見方について最新の研究動向を含めてまとめられた本です。

これらの著書は、今後の古墳めぐりには大いに役立つこと間違いなしです。是非ともお買い求め下さい。



バスツアー案内図

①　赤堀茶臼山古墳（あかぼりちゃうすやまこふん）

本日の資料には「古墳編年表」というものがあります。これは、どの古墳がどの年代のものかというのを示したものです。表右側が群馬県の有名どころの古墳、表左側が赤城山南麓の古墳です。本日は必ずしも古い古墳から順番にめぐるわけではありませんので、この表で古墳の年代や古墳の新古関係についてご確認ください。

最初に見る古墳は赤堀茶臼山古墳です。ご存知の方もいらっしゃると思いますけれども、この古墳は日本の埴輪研究のきっかけになった、非常に記念碑的な古墳なのです。ですから赤城山南麓にとって重要だという事はもちろんですが、日本の埴輪研究にとっても極めて重要な古墳なのです。赤堀茶臼山古墳は伊勢崎市史跡に指定されている前方後円墳ですが、現地に立つとどちらが前方部で、どちらが後円部か分かりづらいかと思いますので、資料の図と現地を照らし合わしながらご覧ください。なお、これからめぐる古墳についてはすべて同じです。

赤堀茶臼山古墳は、かつては墳丘長が50mちょっとと言われていたのですが、平成８年に実施された赤堀町教育委員会（当時）の発掘調査によって、墳丘長が

62mになることが判明しました。ちょっと大きくなったわけですね。そして、この古墳は、５世紀代に造られた古墳であり、６世紀代に連綿と造られた大室３古墳よりも古いということには意義があると考えています。古墳の大きさと形、そして築造年代というのは、古墳そのものやその時代を考えていく上でとても重要な情報です。ですから古墳の大きさがどのくらいなのか、どんな形をしているのか、いつごろに造られたのかということは、皆さんが古墳を見に行った時には、最初にチェックしてもらいたいことなのです。

ところで、この古墳の南南東約３㎞のところに釜ノ口遺跡（伊勢崎市）という遺跡があります。この遺跡からは、家形埴輪が出土していますが、この埴輪が赤堀茶臼山古墳出土の家形埴輪と本当に良く似ています。もしかすると、赤堀茶臼山古墳に納めた埴輪を作った集団が居た場所が釜ノ口遺跡ではないかと、思われるくらい埴輪は類似しています。

②　堀越古墳（ほりこしこふん）

堀越古墳は、先ほど訪れた赤堀茶臼山古墳と同様、群馬県の古墳研究の定点となる古墳の１つであり、群馬県史跡に指定されている重要な古墳です。

今回見学する古墳の中では一番北にある古墳です。資料にある「古墳編年表」を見ますと、堀越古墳は７世紀後半に位置付けられ、古墳築造の最終段階であることがわかると思います。その一方で、７世紀後半は群馬県内では山王廃寺（前橋市）、上植木廃寺（伊勢崎市）、寺井廃寺（太田市）など、お寺が造られ始めます。地域の象徴的建造物が古墳から寺院へと、大きく変化しはじめる時期が７世紀後半であり、堀越古墳はこの変革期の古墳ということになります。

この堀越古墳は、群馬県文化財保護審議会考古部会の松本浩一先生が昭和47年に発掘調査され、「前庭」と呼ばれる空間の様相を明らかにしたことでも有名です。古墳は直径25mほどの円墳であり、６世紀までの大型の前方後円墳と比べると大きな古墳とは言えませんが、加工した石（＝切石）を積み上げて構築した切石積石室は秀逸であり、地域首長墓の墳形が前方後円墳から方墳・円墳に変わる７世紀の古墳としては立派な造り方をした古墳と言えます。

横穴式石室内部は大きく２つの空間に区分されていまして、遺体を納める奥の空間を「玄室」といい、そこに導くための狭小な空間を「羨道」と呼んでいます。玄室の中は高さ２ｍくらいあります。ここに遺体を入れたわけです。石積み状況を見ていただくと、奥壁は２枚の石を積み上げて構成されていますし、天井石も２石で構成されています。当たり前のことですが、当時はクレーン車もない時代であり、人力で全部の石を積み上げたわけです。さらに、1,300年前に構築された石室が今もなお、このように姿をそのままにして残存していることには大きな驚きを感じます。なお、この石室の見学ポイントは切石積みという点です。石室石材をよく見ると、ノミで加工した痕跡があることが分かると思います。石材は四角く切ってから積み上げられたのでしょうが、積み上げたのちにも面を揃えるために加工していたことが読み取れます。

③　今井神社古墳（いまいじんじゃこふん）

今井神社古墳は、群馬県史跡に指定されている、墳丘長71mの前方後円墳です。東日本最大の前方後円墳は墳丘長210mの太田天神山古墳ですから、太田天神山古墳と比較すると今井神社古墳は１/３程度の規模しかなく、数値比較だけではあまり大きさを感じることはできないような気もします。しかし、こうして実際に墳丘に登ってみると、その大きさ、特に盛土のボリュームを感じることができ、その築造に多大な労働力と技術が投入されたことがお分かりになっていただけると思います。

この古墳は５世紀後半に築造された古墳であり、赤城山南麓地域の古墳としては早い段階に造られた古墳と言えます。おそらく、この地域をいち早く統括したリーダーのお墓だと考えられます。

埋葬施設については発掘調査されていませんが、解説板の横にある石材がこの古墳から見つかっていることから、組合式石棺が埋葬施設であったと考えられています。５世紀後半には、まだ横穴式石室が東日本では埋葬施設としては採用されておらず、こうした石棺が首長墓の埋葬施設に採用されていたと考えられます。なお、横穴式石室が東日本で採用され始めるのは６世紀になってからですが、東日本全体でいち早く導入された古墳としては、簗瀬二子塚古墳（安中市）、そして前原さんが調査された前二子古墳（前橋市）などになります。

前方後円墳は、平面図化すると鍵穴のような形状をしていますが、この位置（くびれ部墳頂付近）にたつと、前方部と後円部が認識できると思います。本来、埴輪はこれら墳丘上に立っているので、もしかすると破片が今でも見つかるかもしれません。

なお、古墳を見る時に重要な視点は「高さ」です。古墳をいかに高く造るかというのが、視覚的には、その古墳のすごさを当時の人に知らしめたのだろうと思われます。

～お昼休憩～

④　お富士山古墳（おふじやまこふん）

お富士山古墳は墳丘長125mの前方後円墳です。この古墳は前方部の一部が削平されてしまったという過去がありますが、前方後円形がしっかりと認識できるように、墳丘は伊勢崎市史跡に指定され、保護されています。そして、この古墳を名高くしているものが、長持形石棺の存在となります。群馬県のみならず、東日本において長持形石棺を有する古墳は、今のところ確実なものは、太田天神山古墳とこのお富士山古墳の２つのみです。長持形石棺は「王者の棺」という別名を持っています。近畿地方においても長持形石棺は、きわめて限られた人物のみにしか採用されることがなかったとされる棺なのです。その棺が、お富士山古墳の被葬者の棺として採用されているということからも、この古墳の存在意義がどのくらい高かったかということを計り知ることができるでしょう。この石棺は、よく観察すると、砂岩製であることが分かります。砂岩を非常に丁寧に加工して、長持形石棺を作っていることが分かると思います。

この古墳の立地を俯瞰すると、ここから南側は低地帯で耕作地が広がっていたと思われます。当時の光景を想像すると、目の前に河川を持ち、その向こうには黄金色に輝く稲が広がっていたことでしょう。そうした光景を眼下に置いた位置にこのお富士山古墳は存在していたと考えられます。

⑤　一ノ関古墳（いちのせきこふん）

一ノ関古墳は伊勢崎市史跡に指定されている、推定墳丘長が約50mの前方後円墳です。６世紀後半に築造されたと考えられています。ところが、資料を見ていただくとお分かりのように、本来の前方部が存在していた部分の大半が、現在の粕川の流路部分になっており、築造後のある時期に削平されてしまいました。

埋葬施設は横穴式石室であり、伊勢崎市教育委員会によって、発掘調査の情報に基づく整備がなされています。普段は施錠して伊勢崎市が管理していますが、こうした機会に内部を見学できることはとても素晴らしいことです。

横穴式石室は玄室と羨道とに構造上、機能上、分かれています。先ほどの見学した堀越古墳は切石積みでしたが、この古墳は自然石を積み上げて石室を構築しており、その違いがお分かりかと思います。この２つの古墳は、築造時期でいうと100年くらいの差があるため、石材の加工程度や積み方具合を基準に横並びに比較することはできませんが、２つの石室に共通することは、大きな石を積み上げて、内部に空間のある構造物を作り出した大掛かりな土木工事が行われたということです。

⑥　原之城遺跡（げんのじょういせき）

原之城遺跡は古墳時代後期に機能していたとされる豪族居館です。現在は、その存在を示す解説板が設置させており、おおよその居館エリアを確認することができます。

発掘調査に基づく居館の構造は、平面形状が長方形であり、周囲を堀で巡らされています。その規模は、堀の内側で見ると170m×110m。あくまで参考程度の目安ですけれども、先ほど見学したお富士山古墳の墳丘長が125mですから、そのことと比較するとこの居館の規模の大きさを感じていただけると思います。館内部については、伊勢崎市教育委員会によってその一部が発掘されていますが、大半は未発掘のままです。伊勢崎市教育委員会が実施した発掘調査だけでも、建物跡や祭祀用遺物の存在が確認されていることから、まだまだ多くの情報が土中に眠っていると思われます。

⑦　荒砥富士山古墳（あらとふじやまこふん）

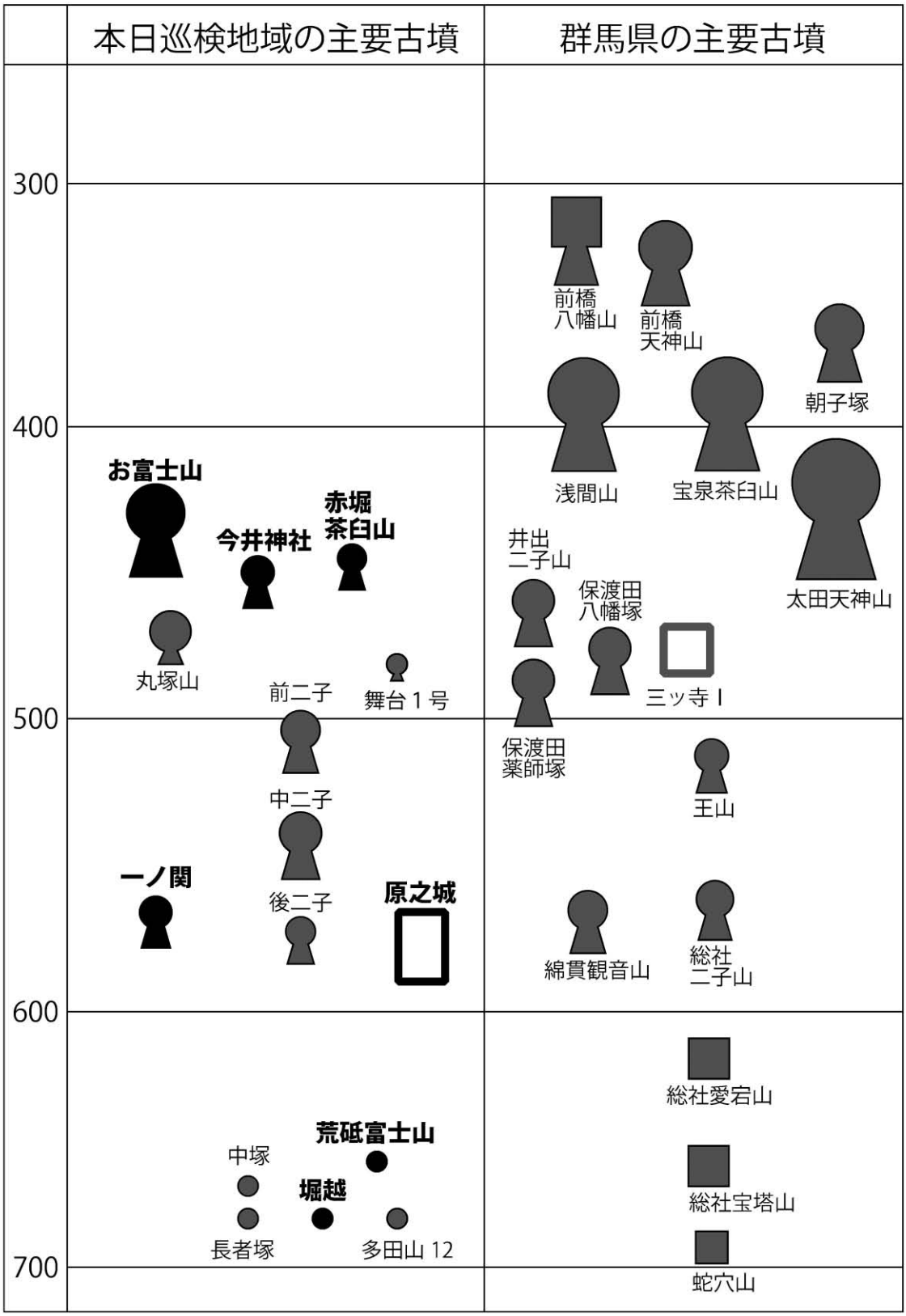
荒砥富士山古墳は、群馬県史跡に指定されている、７世紀後半に築かれた直径36mの円墳です。埋葬施設は、一部に切石を用いた横穴式石室です。現在は、閉鎖されていますが、ほぼ完存しています。この石室には、石室を閉塞する切石が伴っていたことが群馬県教育委員会の発掘調査によって明らかにされました。また、石室前面の前庭部からは、須恵器や土師器とともに銅椀が出土した点も注目されます。

この古墳がある荒砥地区は、群馬県有数の古墳密集地域の１つでありますが、現在にいたっては多くはその姿を失っています。そうした中、このように保護されている古墳があると言うことは、古墳王国群馬の姿を未来に伝えるために大変貴重だと言えます。

これで、本日の現地解説を終わりにします。

赤城山南麓の考古学 2015
赤城山南麓古墳めぐりバスツアー

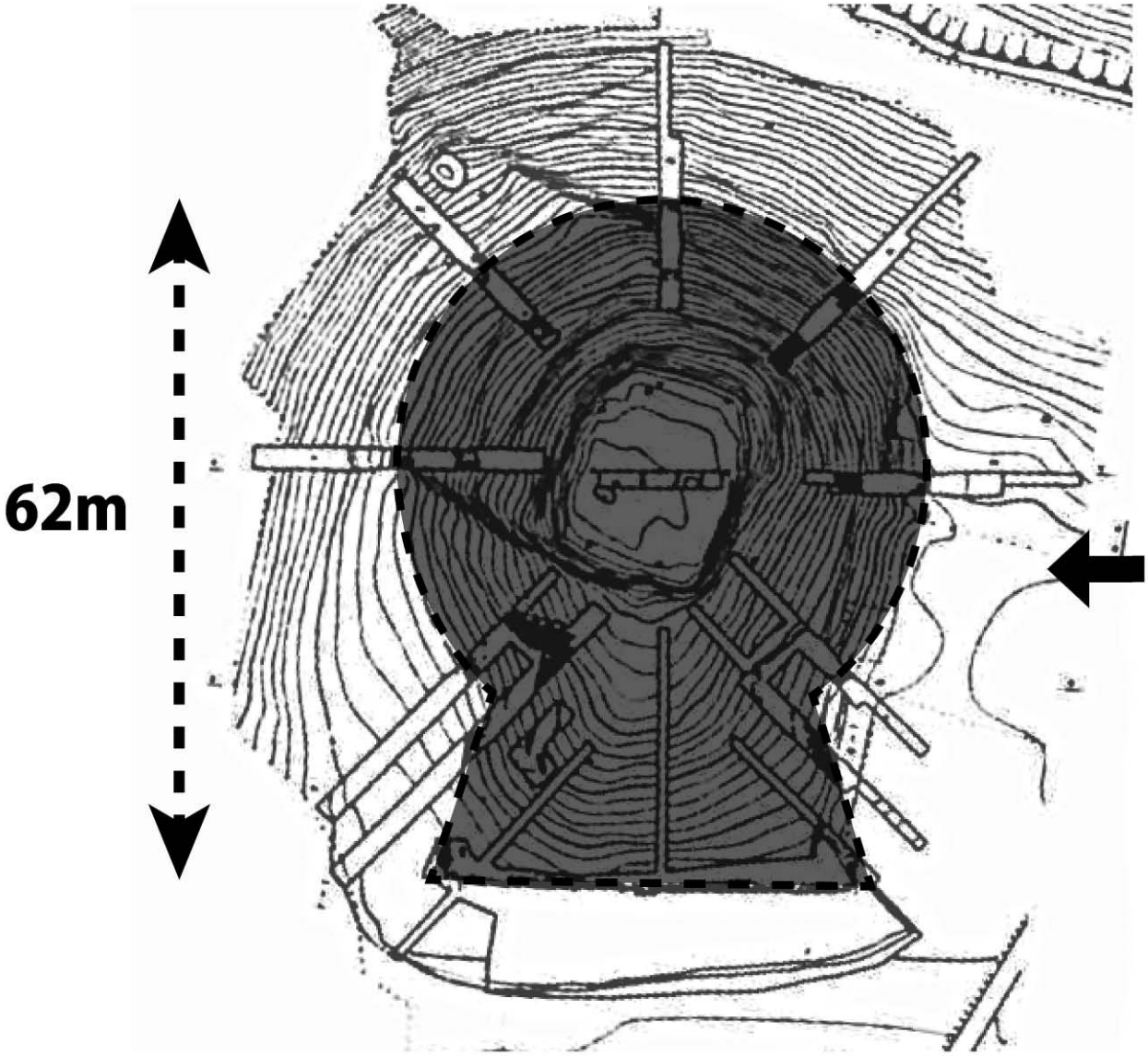
平成 27 年 9 月 19 日（土）
講師：深澤敦仁（群馬県立歴史博物館）



（右島和夫・徳江秀夫・南雲芳昭「上野」『全国古墳編年集成』雄山閣出版　平成七年　を再構成）

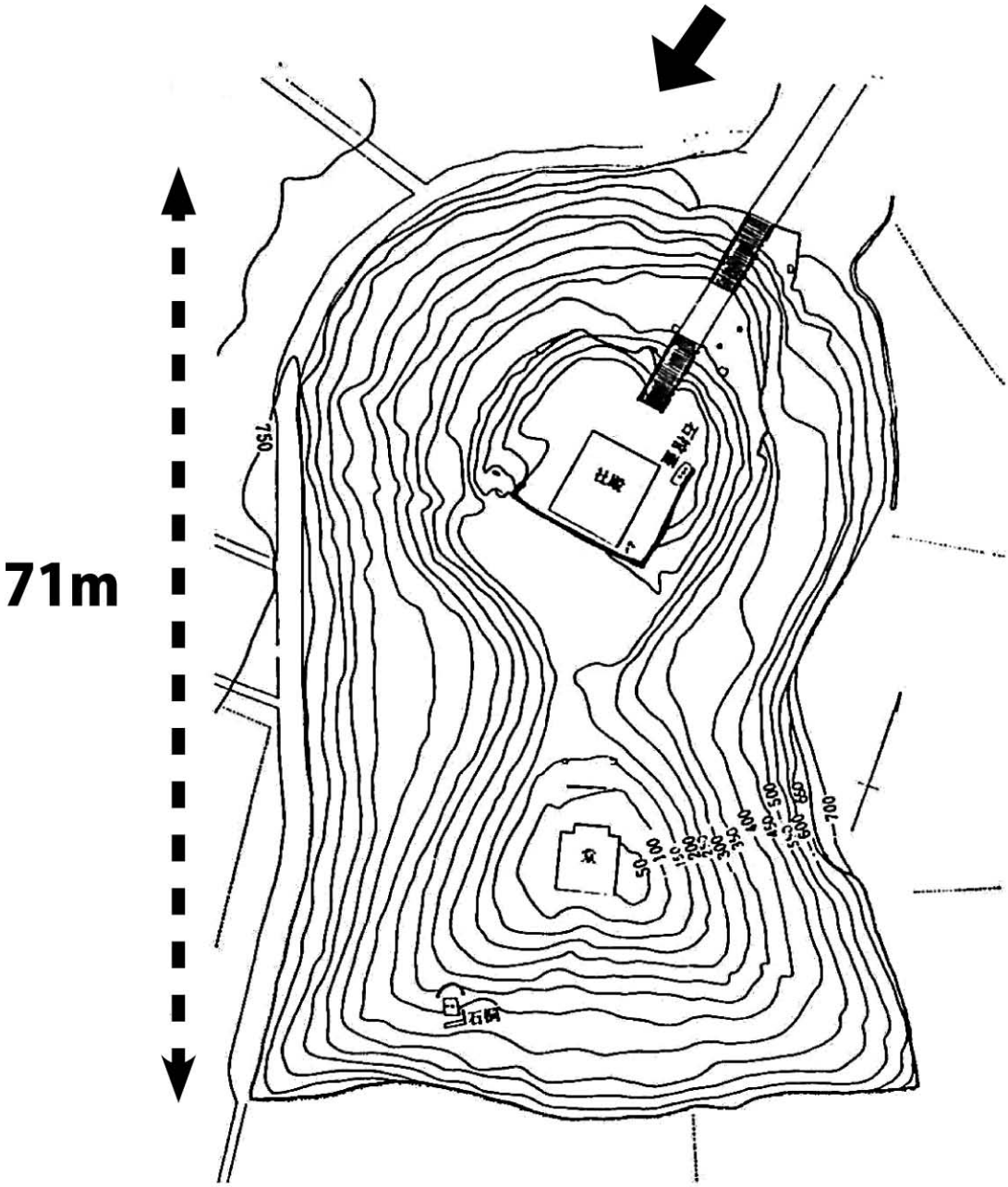
1　赤堀茶臼山古墳（あかぼりちゃうすやまこふん）

所在地…伊勢崎市赤堀今井町二丁目
墳形…前方後円墳　　**規模**…墳丘長 62 m
埋葬施設…木炭槨　　**築造時期**…５世紀前半～中頃
文化財指定…市史跡
古墳の特色…豪族の居館や祭司の様子を表したとされる形象埴輪
この古墳の埴輪は、東京国立博物館平成館に常設展示



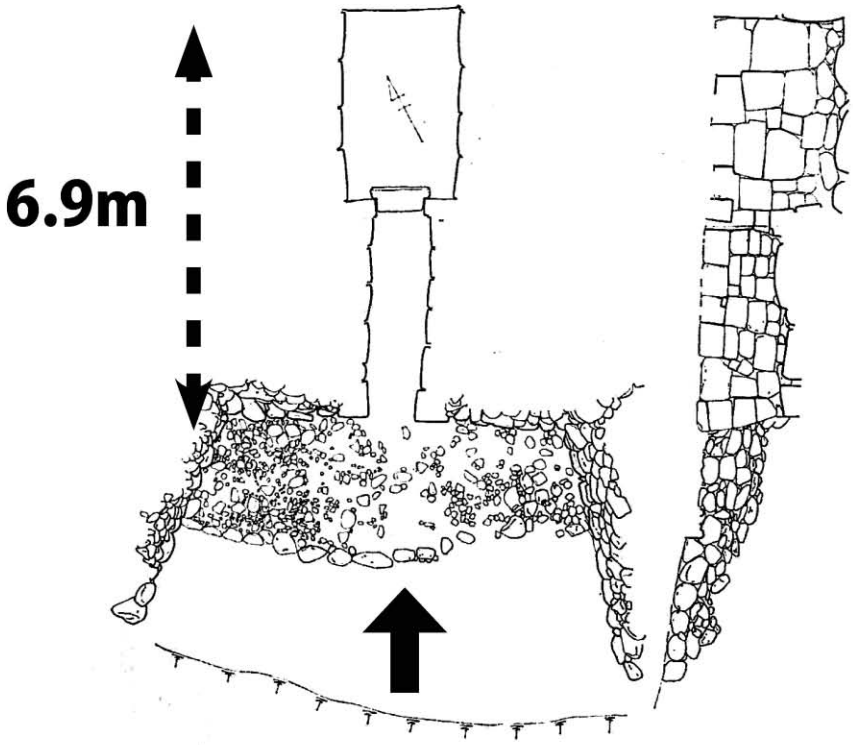
2　今井神社古墳（いまいじんじゃこふん）

所在地…前橋市今井町
墳形…前方後円墳　　**規模**…墳丘長 71 m
埋葬施設…組合式石棺　　**築造時期**…５世紀後半
文化財指定…市史跡（墳丘）
古墳の特色…赤城山南麓地域の５世紀後半の大型前方後円墳



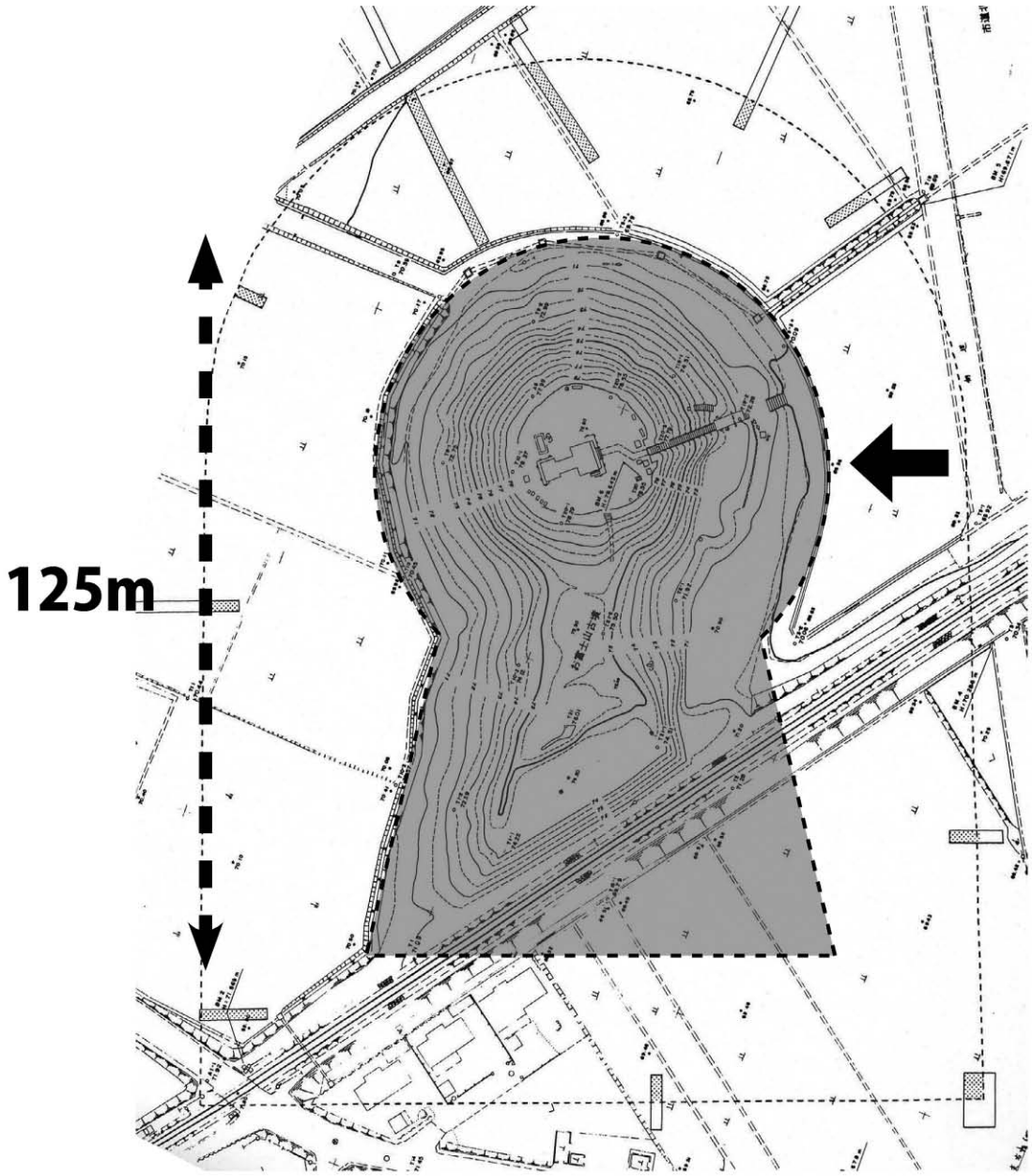
3　堀越古墳（ほりこしこふん）

所在地…前橋市堀越町
墳形…円墳　　**規模**…墳丘径 25 m
埋葬施設…切石積横穴式石室（全長 6.9m）
築造時期…７世紀後半　　**文化財指定**…県史跡（墳丘）
古墳の特色…赤城山南麓地域を代表する終末期古墳の１つ



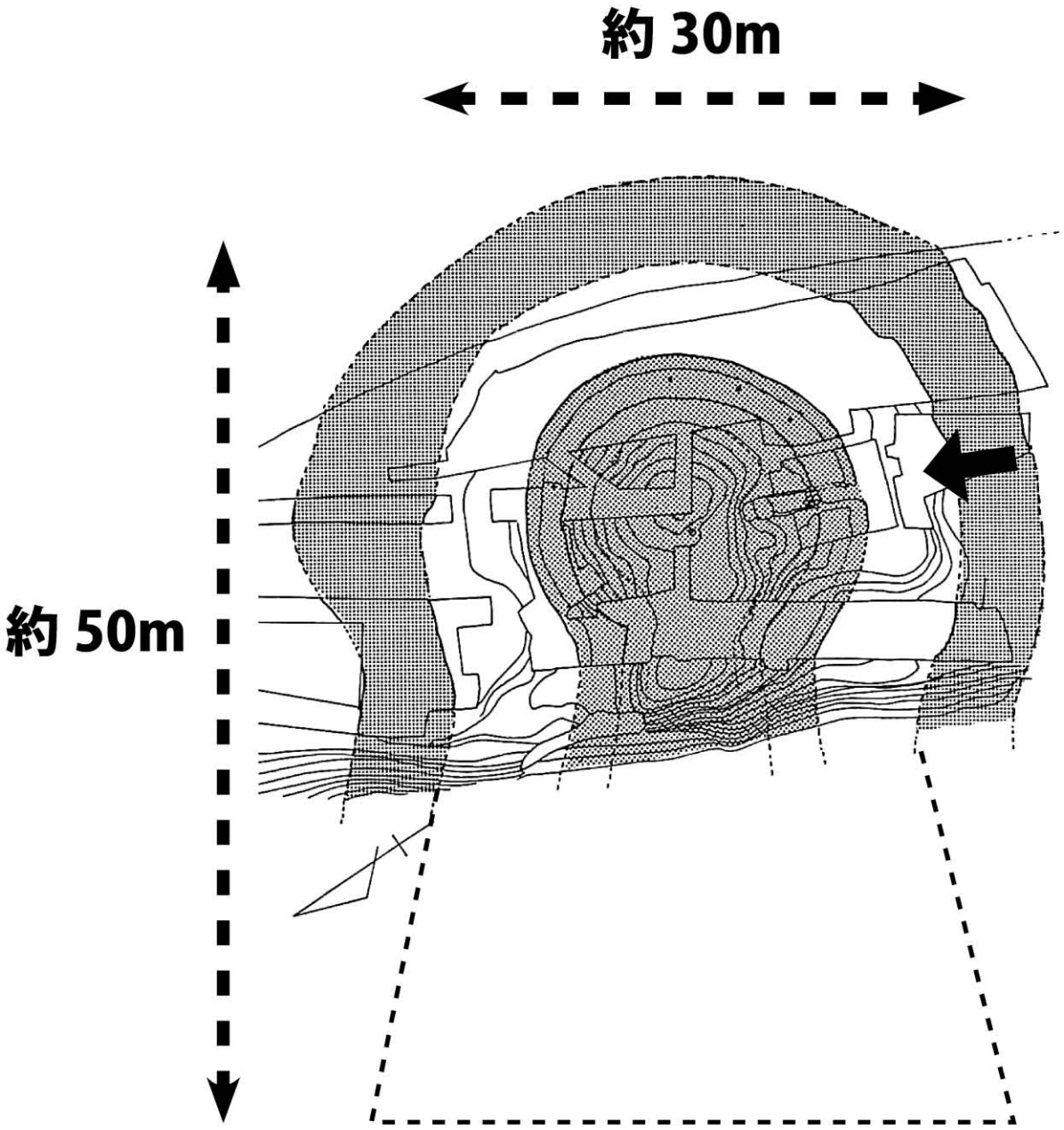
4　お富士山古墳（おふじやまこふん）

所在地…伊勢崎市安堀町
墳形…前方後円墳　　**規模**…墳丘長 125 m
埋葬施設…長持形石棺　　**築造時期**…５世紀前半
文化財指定…県重要文化財（長持形石棺）、市史跡（墳丘）
古墳の特徴…「王者の棺」と称される「長持形石棺」をもつ古墳



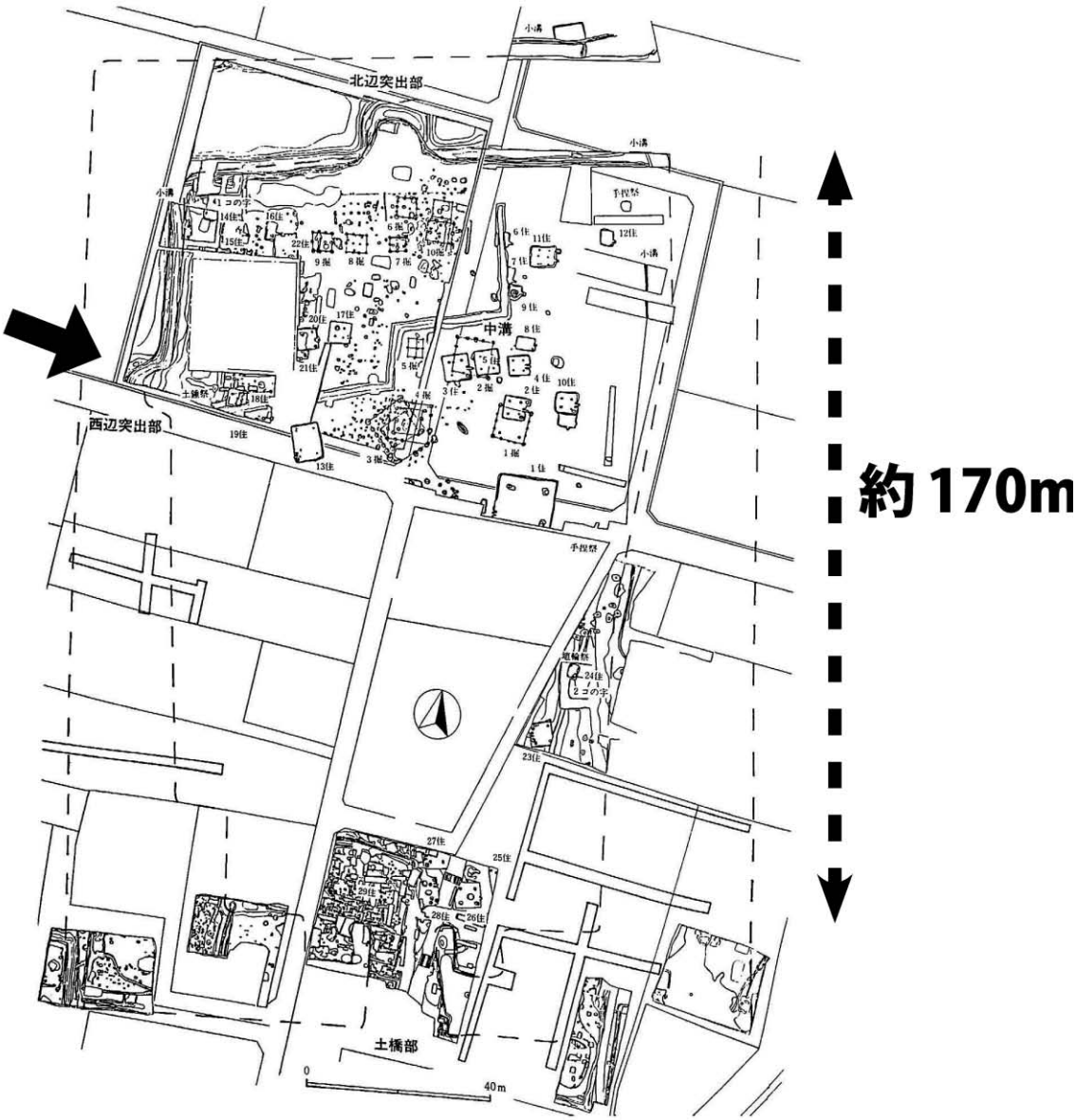
5　一ノ関古墳（いちのせきこふん）

所在地…伊勢崎市本関町
墳形…前方後円墳　　**規模**…墳丘長約 50 m（推定）
埋葬施設…横穴式石室（全長 6.24m）
築造時期…６世紀中頃～後半　　**文化財指定**…市史跡
古墳の特徴…伊勢崎市域に残る貴重な前方後円墳



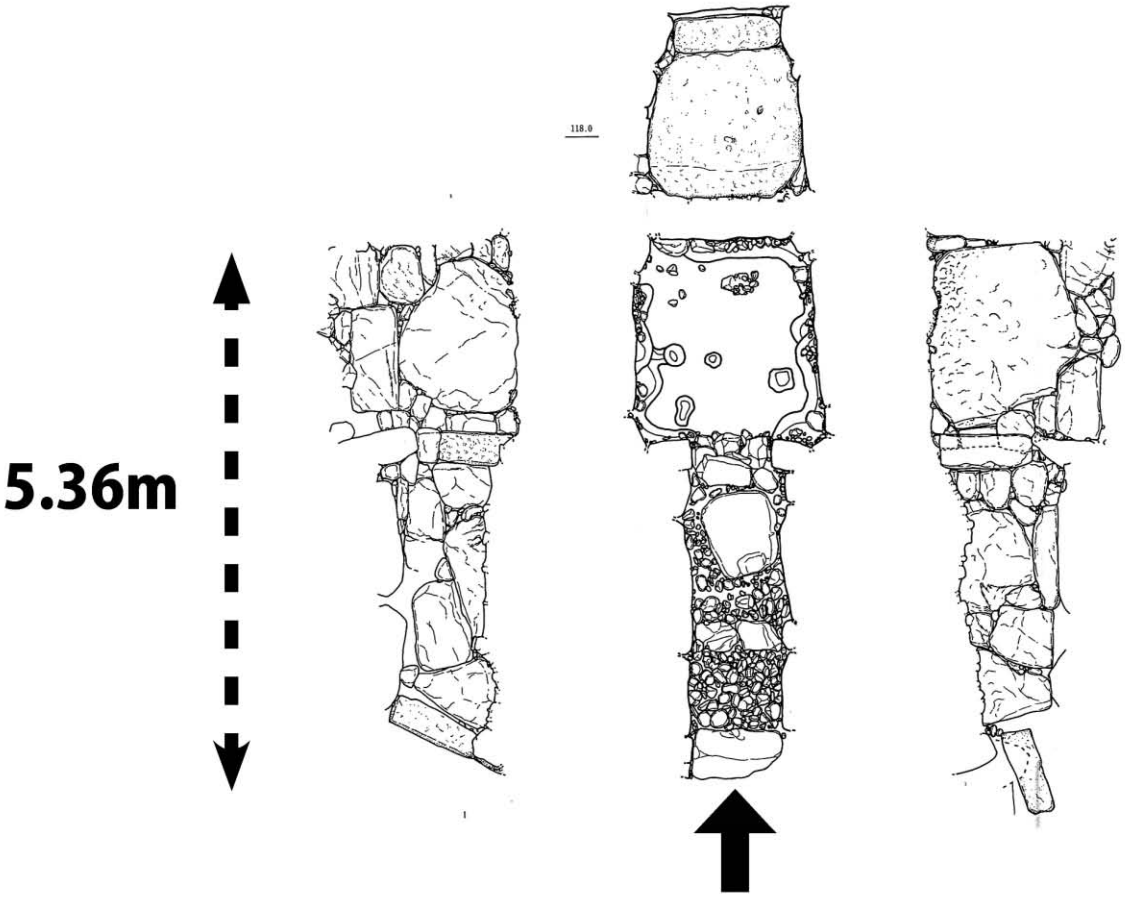
6　原之城遺跡（げんのじょういせき）

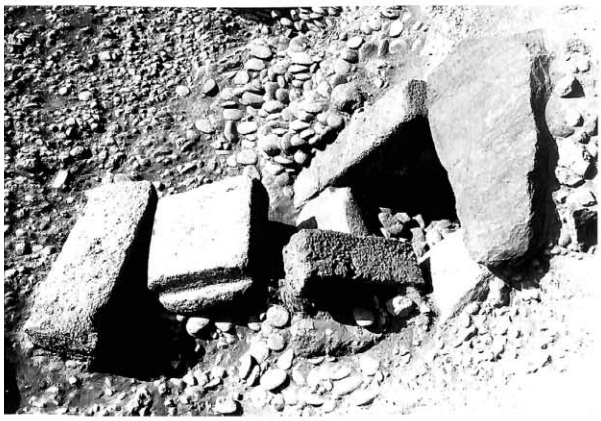
所在地…伊勢崎市豊城町
種類…突出部をもつ方形区画とその内部にある祭祀跡を含む遺構群
規模…南北長約 170 m、東西長約 110 m
機能時期…６世紀中頃～後半
遺跡の特徴…全国最大規模の「古墳時代の豪族居館」



7　荒砥富士山古墳（あらとふじやまこふん）

所在地…前橋市西大室町
墳形…円墳　　**規模**…墳丘径 36 m
埋葬施設…一部に切石を用いた横穴式石室（全長 5.36m）
築造時期…７世紀中頃～後半　　**文化財指定**…県史跡
古墳の特徴…赤城山南麓に残る貴重な終末期古墳





講座・赤城山南麓の考古学2015　第５回

櫃石と巨石祭祀
～赤城山南麓の巨石祭祀と土器集積祭祀の比較～

杉　山　秀　宏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）

はじめに

おはようございます。今日お話しする話は、前橋市の南麓を中心に展開する古墳時代の巨石を使った祀りについてお話します。それと、榛名山の東麓を中心に行われた土器を1,000個とか多数積み上げて祀りをする独特の祭祀があります。その２つを比較しながらお話をして、特に赤城南麓はこういった巨石を中心にした祀りに特徴があったことを皆さんに知ってもらえたらという思いを込めてお話をさせていただきます。それで、画像の枚数が120を超えるので、早口で進めていきます。資料もお配りしたのですけれども、パワーポイントを見てもらえたらと思います。この画像を中心にしながら、随時この資料のページ数をお示ししますので、それを見てもらってお話を聞いてもらえればと思います。よろしくお願いします。

話の流れですけれども、赤城山南麓の祭祀ということで、巨石祭祀についてまず話をします。櫃石、西大室丸山遺跡、それから遺跡として認定されてないのですが産泰神社とか石山観音と呼ばれる、やはり巨石を伴う所の紹介をします。また、赤城山の西麓ですが、西側の利根川を向いた所にあるやはり巨石祭祀の宮田諏訪原遺跡のお話をします。その後対比するように土器をいっぱい積み上げて行う祭祀遺構である、私が調査しました金井東裏遺跡、それから下芝天神遺跡、寺尾東館遺跡、３つの大きな土器集積祭祀の遺構についてお話をしていきます。その後巨石祭祀を日本全体で見るということで、三輪山とか沖ノ島とか天白磐座遺跡とか日本の中でも有数の巨石祭祀遺跡を紹介させてもらい、最後にまとめとして赤城南麓を中心とした巨石祭祀と、土器集積を行う祭祀をする榛名山東麓の祭祀の比較をして終わりたいと考えています。

古墳時代の祭祀は色んな形態があって、場所は例えば井泉というのは井戸・泉、要するに水場ですね。水のある場所。峠は境界ですよね。境界の神がある。あとは畑・水田であれば生産地。それからもちろん巨石、それから住居の竈ですね。竈のすぐ横に土器を置いてお供えするみたいなものがある。そんなあらゆる所に色々な神の依り代、依り代というのは神が宿る所ですね。そういったところがあって、そこにお祀りをするわけですね。そういった所に祭具を置く、祭具というのはお祭りの道具ですね。土器や木器、石製模造品、鉄器、様々なそういった祭具を置いていく祀りを行います。

１　巨石祭祀について

赤城山南麓の特徴的な祭祀は何かというと、巨石祭祀ですね。色んな祭祀がある中でなぜ巨石を選んだかというと、赤城の溶岩の泥流丘が原因です。もう何万年以上も前ですが、赤城の火山が大爆発を起こして、火山活動が活発な時に赤城山の南麓を降り下った火山泥流丘が赤城山南麓にいくつか残っている。で、そこは溶岩の塊なので土がだんだん積もってきますが、少し掘ったりすると露頭が見えたり、露頭がそのまま残っているのですね。それが実は産泰神社や石山観音です。今でも信仰の対象になっている、そういった所が各種に散らばっています。ですから、今の人だって、産泰神社や石山観音に行けば、あっと思いますよね。凄い石だなと思いますよね。それがそのまま古墳時代人にも当てはまって、彼らにも巨石が信仰の対象になったのだと思います。

確実に古墳時代で巨石祭祀の証拠となるのが西大室丸山遺跡です。私が調査をしたのですけれども、私が奈良県から群馬県に戻って一番初めに調査をした遺跡です。巨石祭祀遺跡としては全国的にもトップクラスの遺跡だと考えている遺跡です。それはまさしく溶岩泥流丘上の露頭の巨石の下に1,000点以上の土器が砕け散って置いてある。要するに割って散らばせてある。何か祀りをやってた。こういった痕跡が残っている遺跡がある。それで、他のそういった露頭が見えている所も同じ祭祀をやっていたのではないかと考えます。巨石が赤城山南麓には自然条件として風景の中にあったので、それを神の住んでいる所、依り処として

祀りをしたのかなと。赤城山南麓で独特のその巨石に対する信仰・祀りの形態があったのだと思います。それで赤城山南麓の巨石祭祀の位置ですね。赤城山南麓のこの部分。これ櫃石ですね。それからこの南を下ったところが西大室丸山遺跡ですね。今もう実は西大室丸山遺跡はないです。圃場整備で泥流丘ごと全部削平して平らにしてしまっていますから。それから利根川の端のほう赤城山西麓で宮田諏訪原遺跡。櫃石と西大室丸山遺跡と宮田諏訪原遺跡は全て調査をしており、実態としての祭祀の様子がある程度分かっています。そういったものを一応示しました。赤城山の山頂を中心に櫃石は高い所にあって、南麓に西大室丸山遺跡があって、西の端に宮田諏訪原遺跡がある、そんな感じですね。櫃石はここ。この北側ですね。三夜沢の赤城神社からずっと上っていくとあります。荒山という赤城山の峰々の山の一峰の一番裾の方にある平坦面の場所にある。西大室丸山遺跡はこちらです。これは５万分の１の地図ですからかなり距離があります。今居る場所から西南の方向であるということですね。それ以外でも遺跡と認定していないところはさっき言ったように産泰神社・石山観音・七つ石雷電神社です。これはみんな溶岩泥流丘です。赤城が爆発して溶岩が流れ下って、それがぐっと冷えて固まってできた、独立丘陵に似ている。高さは大して高くないですね。平坦面から８mから10mくらい。いずれもそういう場所です。

⑴　櫃石（図１）

櫃石についてお話をしますけれども、櫃石は江戸時代から既に赤城の神を祀った所だと記録が残っています。平坦面を形成して、標高878mの所に、かなり高い場所で平坦面を形成してます。石の構成は長径4.7mの巨石を中心に６つの自然石がある。そして石製模造品とか手捏ね土器が巨石の南側から出てきています。赤城山を祀る巨石遺構として捉えられる。これはこのレジュメの85ページ中ほどに書いてあります。これは後で読んでもらえればいいのですけど、図１は櫃石の平面ですね。向かって左側。等高線があって、上に行くほど高い、赤城山の頂上に向かっています、等高線の間隔が広いから緩やかだということが分かります。平坦面を形成して、この岩が露出しています。この点線で囲ったこの巨石のすぐ南に向かって右側に出ているのが手捏ね土器ですね。手捏ね土器はどういうものかというと、普通土器はきちんと轆轤で成形したり、あるいは回転台を使って丁寧に作るのだけれども、これは手びねりのような、手で作った痕跡をそのままわざと残します。それでお供えするのですね。だからこれは明らかにお祭り専用のために作られた土器が沢山使われているということですね。

櫃石に行かれた方はいらっしゃいますか？　いらっしゃいますね。一応行っていない方のために、これが三夜沢赤城神社ですね。赤城神社のこれが拝殿ですね。拝殿の向かって右側に細い道があります。これを上っていくのですね。これを延々と上って。地元の商店の人に聞いたら、かなりの時間がかかるということでした。実は20年前にも行っています。とりあえず行ってみようと思って行ったらやはり大変でした。石が崩れ落ちたりとか、水が流れ落ちた所をずいぶん歩いて、それでもやっぱり男の足なので神社から40分で行きました。櫃石の様子です。これが石ですね。前に木が倒れています。これは前橋市さんが提供していただいた写真、木が倒れる前の写真。非常に綺麗な状況で残っています。巨石は長径4.7mあります。石自身は神様ではないです。石に神様が宿るのです。それで神が宿る場所としてここにお供えしてお祭りをするということですね。巨石から南を望むと前橋の町並みが、木があるから見えないのだけれども、木がなければ綺麗に見えますね。前橋の街というか旧勢多郡とか粕川とかそちらの方も含めて、ずっと利根川の向こうまで景観が広がりますね。素晴らしい景観になると思います。そういう所に櫃石はあるということです。この景観も重要です。

⑵　西大室丸山遺跡（図２・３）

次は、西大室丸山遺跡です。資料の85ページ下段を見てください。で、この図面はレジュメの図２ですね。丘陵の頂部が、溶岩泥流丘の頂部全体に岩が露出していて、一部の石は動かされていた状況です。そしてこの岩の間とか下から膨大な数の、おそらく1,000個を超えると思う土器の破片が、割れて深さ30㎝くらいの厚みを持って破片の積もった層になって出てきました。土器塚ですね。土器以外にも、石製模造品、剣形とか刀子とか、円板形とか勾玉形の石製模造品がこの図２の下に出しておきました。それで土器は次のページです。図３全体に、上にあるのが手捏ね土器。櫃石から出た同じ手捏ね土器と、それから真ん中は普通の土師器ですね。土師器の坏とかお椀、所謂お皿ですね。それから高坏というこれはお供え用の土器ですね。このようなものが出ているということです

ね。かつてはだいたい８ｍくらい周りより高い泥流の丘があったのです。で、遺物が出ることは分かっていなかった。調査をして初めて膨大な量の土器とか石製模造品が出ることで、ここはお祭りの対象であったということが分かりました。で、あの例の産泰神社・石山観音・七つ石雷電神社、皆近くにありますよね。一連の泥流丘が残っています。もうこれはあくまで自然の地形です。だからこういう所も西大室丸山以外でも調査をできれば、祭祀遺構が見つかると考えています。この西大室丸山遺跡は５世紀後半くらいですけれども、面白いことにこれ以外にもこの地域は５世紀後半から６世紀前半にかけての時期に、例えば居館ですね。豪族の館、梅木・荒砥荒子・丸山という居館が三角形状に出てきます。ほぼこの時期です。しかも、古墳はどうかというと、６世紀前半の100ｍクラスの前方後円墳である前二子古墳がある。群馬で最も古いというのではないですけど、２番目くらいに古い横穴式石室を持つ古墳です。それから５世紀後半の舞台一号墳、ここから沢山の石製模造品が400点くらい出て、国の重要文化財指定になっています。祭祀遺跡だけではない、館の跡もあるし、有力な豪族の葬られた古墳もあるし、それから集落もたくさん出てきています。この当時人口密集地であり、産業も栄えていた場所のど真ん中に西大室丸山遺跡があるということが重要です。非常にシンボル的な場所です。で、これがその当時の写真。本当思い出しますね。群馬に戻ってきて、すぐに調査をした所ですけど、大変な調査でこれ以外でも舞台一号墳というさっき言った石製模造品が400点くらい出た国の重要文化財指定を受けたその古墳も40ｍクラスの帆立貝式古墳ですね。それも掘りましたし、集落・群集墳も掘りました。それを１年間で調査しました。

これが西大室丸山遺跡の巨石です。これが泥流丘本体の露頭です。図１の図面で見た全部が石の露頭です。特にこの黒線で書いた所が石山が露出しているので、岩の本体が見えている所。その部分にこの巨石が乗っかっていますよね。こういった周りにいっぱい土器が出てくる。これが赤城山ですね。丁度この辺りが櫃石です。ほぼ一直線上に向かって櫃石があります。丁度この辺りです。では、一体どんなお祭りをしたのかというと、お祭りをする際に、飲んだり食べたりして、その飲んだり食べたりした後に使用した土器を割って、こうやって撒いたのかなとか、色んな想像はできますが、実際のことはよく分からないです。

この西大室丸山遺跡で何が重要かと言うと、実は県内の本格的な巨石祭祀遺構で、かなり様相が分かったのはここと宮田諏訪原遺跡しかないですね。ここで分かったことはどういうことかというと1,000点は超えるだろう土器があったということです。実際に復元できたのは200点です。200点の土器を大体復元したのだけれども、復元できない破片だけのものがもっと５倍以上あるのですね。であればやっぱり1,000点近くの土器があったのかなと。1,000点というのは見込みなのでなんとも言えないのですけれども、そのくらいの土器はあったのかなと。器系は坏と高坏が中心です。特に坏が、お皿が圧倒的に多い。坏の中の比率とか色々書いてあるのですけれど、これは専門的なことですけれども、坏の種類には、内湾、内斜、須恵器模倣坏の３つがあります。かならずその３つがあって、図面を見ると、先ほどの図３をご覧ください。内湾口縁坏というのは、これは横から見た所です。口縁が内側にくっと曲がります。断面で、断ち割って見ると、これが内湾口縁杯と言います。これは伝統的な土師器の制作技法で、在来の杯の形です。それが１つ。それから内斜口縁杯というがあって、内斜というのは口縁内面に斜めの面を作る。ヘルメットみたいな感じですけれども、ここが平らな面を作るのです。内側にこんな風に入らない。スッと流れるような平な部分を作ります。あと、須恵器模倣坏というのがあります。これは面白くて、当時須恵器がもう入ってきましたから、その須恵器の形に似せた須恵器模倣坏です。内湾口縁杯、内斜口縁杯、須恵器模倣杯のこの３つ。５世紀後半から６世紀前半はこの３つです。この３つ以外ほとんどない。で、この３つの中でどの土器がどういう比率であるかということで時期が分かったり、地域性が分かったりします。この西大室丸山遺跡では何が多いかと言うと、内湾口縁の坏が一番多いのです。これが西大室丸山遺跡の特徴です。要するに在来の土器ですね。５世紀の前半からずっと作られていた土器の流れを汲んだ土器が圧倒的に多い。ということは時期がやっぱり少し古い時から祀りが行われている可能性が高い。これからお話する土器集積遺構の遺跡は内斜口縁杯が主流です。そして、後に述べる金井東裏遺跡は須恵器模倣杯の比率が異様に多い。これは、当時の最新の土器を積極的に導入したということを示すと思います。それから臼玉が10,000点を超えていますね。それから剣形の石製模造品が400点。これもすごい数ですよね。他に有孔円板、円板で穴が２つ空いている石

製模造品が20点。群馬県内の石製模造品出土遺跡では、一番多いのはこの西大室丸山遺跡ですね。その次に多いのは金井東裏遺跡です。それくらいの祭儀、お祭りの遺物がいっぱい出ているということですよね。こういった特徴がある重要な遺跡です。巨石祭祀遺構がどんなお祭りをして、どんなものをお供えしたかはっきり分かる。全てを調査した遺構としては唯一と言ってもいいでしょう、宮田諏訪原遺跡はごく一部しか掘っていませんので。

⑶　産泰神社・石山観音

それ以外だと遺跡とは認定していないのですけど、産泰神社を見てみます。皆さんも意外と見ていないのではないかと思います。産泰神社で七五三か何かで行ったりして、あるいは安産祈願で行ってお参りをするのだけれども、実は拝殿でお祈りしてそのまま帰ってしまう人が多くて、その裏を周って行かない場合が多い。拝殿の裏に本殿があります。これが巨石の本体。こういった岩山がここだけではなく、裏側も更に凄い。こういった溶岩泥流丘で残った露頭がそのままむき出しになっているわけです。だから神が宿る所として神社ができたのだと思います。で、背後から赤城山を見れば、この辺に櫃石があります。

石山観音をぐっと上っていくと、ここはずいぶん高いですよね。比高差10m以上あります。これが拝殿で、裏側に本殿があるのだけれど、この拝殿の裏の本殿の更に奥の方に巨石群がありますね。赤城山をこの溶岩泥流丘であるこの石山観音を横から見るとこんな感じで、ちょっと遠くになりますよね。こういったものは赤城山と合わせてセットで信仰の対象になっていた可能性が高い。

⑷　宮田諏訪原遺跡（図４）

宮田諏訪原遺跡というのがあって、これは86ページ上段ですね。これは発掘調査をしたものです。ただ、道の拡張に係わる調査なので、ごく一部しか、本当に帯状に細くしか掘っていないのですね。で、面白いのは先ほどの地図で見てもらったように赤城山の西麓なのですね。南麓ではなくて西側の端で、どちらかというとここから榛名が良く見えます。利根川も良く見えます。榛名は２回爆発するのです。６世紀ジャストの時期に、要するに西暦でいうと500年ジャストくらいの時に爆発を起こして、火山灰と火砕流が降ると。その後数十年経った６世紀の中頃、530年くらいですね。またもう１回大爆発を起こして、今度は軽石が山のように降って、黒井峯遺跡という村なんかは２ｍの軽石で覆われてしまう、それで村が廃墟となってしまう。そういった爆発を２つ起こして、２つともに被災する直前に祀りをやっているのです。初めのその６世紀ジャストの爆発はそんなに火山灰が降らなかったからその後また持ち直して、もう１回祀りをやったらまた爆発をして完全に埋まりました。これは６世紀初頭の火山灰の下から出てきました１回目の爆発に伴う１号祭祀です。小型青銅製変形乳文鏡、土器、武具、農工具主体の鉄器、鉄片100以上。これが重要です。鉄片が100以上も出るということは、普通我々が例えば古墳時代の住居を100軒調査しても、鉄器はどのくらい出るのかというと20点出たら良い方でしょうね。どういうことかというと、廃棄された住居だから鉄器は残さないということがあるのだけれど、基本的に鉄器はやはり貴重でそんなに出ないものなのに、このお祭りの遺跡から100点以上出ているということが非常に重要ですね。全国的に見ても類例は少ないですね。それから臼玉2,400、石製模造品170点という、かなりの量の遺物が出ている。これが石製模造品。石製模造品とは滑石と呼ばれる、所謂蝋石と呼ばれる、昔舗装道路に字を書いたりした、石の中で一番軟らかい石を使って、円板形の鏡を真似たり、三角形状に剣の形を真似て石を削り出して作った模造品のことです。実はその産地が藤岡にあります。藤岡の南側に三波川変成帯という石の帯がずっとありまして滑石の露頭があるのです。そこから沢山の滑石を取り出しては作っているのですね。それを作って、お供えしたわけですね。群馬は滑石製模造品が日本で一番出ていると考えています。それから臼玉ですね。このお椀の中にこういう臼玉が50個くらいあるでしょう。ここの軽石は１ｍくらいでしたが、それに埋もれて廃絶しました。これも１号祭祀ですね。大型の壺、これも壺ですね。これは鉄の鏃ですね。これは鍬先です。U字形鍬鋤先といいます。先の刃の部分だけ鉄で作っています。これが７個も出てきました。１つの遺跡で７個の鉄製U字形鍬鋤先は、群馬はおろか日本全国探しても無いと思います。鍬鋤先というのは当時の最新の農工具なのです。そして開拓道具ですよね。これでどんどん掘っていって開墾していった訳です。今まではほとんど木器ですから。木製の鍬でいくら掘ったって限界があるので、この鉄製U字形鍬鋤先の出現によってどれだけ変わったかということは、言うまでもないと思います。要す

るに開拓が急速に進んだということです。鉄製U字形鍬鋤先というのはその象徴なのです。ですからそれを７本も持っていてしかもそれをお供えしてしまう。ということはそれをお供えしても大丈夫なほど鉄器を持っている。神への感謝を示すと共に豊穣を願う、そういったお祭りを示すのであると思います。これは鏡。この裏側に文様がある。これは摘鎌で鎌の一種。穂摘鎌の一種です。金井東裏遺跡でも出てくる収穫具です。また鉄の鏃も出てきている。農具と武器ですね。

西大室丸山遺跡と宮田諏訪原遺跡を見ることによって当時の巨石祭に伴うお祭りはどんなものをやったかというのが明らかになってきます。

⑸　榛名山の巨石祭祀（図５）

正観寺遺跡という、スライドがないのですが、86ページです。これは高崎市の正観寺町にある遺跡で、これ６世紀の中頃以降ですね。だからちょっと時期的には新しい祭祀なのだけれども、ここの方からも図５にあるように巨石の下から土器とかそういったものが出ている。ですから巨石祭祀は赤城山南麓だけではなく、榛名山の南東麓にもあるということを一応知っていただきたい。あと１つ、皆さん榛名神社は行かれたことありますよね。榛名神社の御神体は知っていますか？　岩です。岩を覆い隠すように本殿があります。岩を覆い隠して本殿が造ってある。この本殿を開けると岩が見える。サイドからも分かります。サイドから見ると拝殿の裏側の本殿は榛名の山体の巨石を隠すようにしてあるのが分かります。だから巨石に対する信仰というのは日本全国あるもので、もちろん榛名山麓にもあったということを一応知ってほしくて正観寺遺跡や榛名神社の話をしました。ただ、赤城南麓には溶岩泥流丘の露頭というのがあるので、巨石祭祀がとりわけ盛んであったということは言えると思います。

２　土器集積祭祀（遺構）について

土器集積祭祀のお話をします。土器集積祭祀、まだこれは本当にこの用語を使って良いのか微妙な所があるのですけれども、土器を寄せ集めて積み上げたりするという行為が認められるお祭りの形態なので、一応土器集積祭祀とします。あるいは土器だけではなくて、他のものも多数集めるということもあるので、器物集積祭祀という言葉もあって、いろんな言い方があります。一応今回は、土器集積祭祀という用語で説明させていただきます。榛名山東麓に中心分布し、土器を破砕しない割らないものです。それが重要なことで、割らずに丸のまま、残ったまま置いて、あるいは積み上げていきます。そういったお祭りの形態なので、非常に特徴的ですね。実はこういったものは意外と無いです。丸のまま残して、置いておく形態は少なくて、割ってしまう場合が多い。先ほどの巨石祭祀でいうと、西大室丸山遺跡なんか良い例ですね。完全に割って粉々にしてしまうけれども、この場合はほとんど割ることがない。大型の土器も置くし、小型の土器も積み上げておくということですね。そういった特徴があります。小型土器の坏とかお椀とか皿類の積み上げというのは、どうもお祭りの行為をした時に使ったもの、使った道具を、使用後に片付けの意味で積み上げた可能性が高いということがだんだん分かってきました。どういうことかというと、積み上げ方がいい加減だとか乱雑だとか倒れているとか色々あるのですが、お供えで儀礼として積み上げるのだったら、きちんと丁寧に意識して積み上げるけれども、ジグザク状に積み上げています。高坏とか小壺とか不安定なものが真ん中に入っていたりする。そういったことからすると祭祀が終わった後の行為なのかなと考えられるのです。

金井東裏遺跡の話をまずします。それから下芝天神。寺尾東館。いずれも榛名山の東を中心に展開している遺跡ですね。これ以外にも富岡の久保遺跡。これもすごい遺跡で、鏑川流域にあるのですが、これは今回説明しませんけれども、これも積み上げの祭祀の１つかなと思っています。これは榛名山の南ですね。こういった所を中心に、基本的には榛名山系にこういった土器集積祭祀が多いということを示しています。その前に二ツ岳の大噴火の範囲ということでお話をします。このピンクの範囲が榛名山二ツ岳の爆発。１回目の爆発ですね。500年ジャストくらい。西暦６世紀ジャストくらいです。爆発した火山灰がこのピンクの所に降った。皆東側ですね。火砕流がこの下の方。榛名山北東録を中心に火砕流がばーっと広範囲に。この火砕流がものすごい威力で多くの村々を焼き尽くしたというか、廃墟にした火砕流だったのです。で、２回目の爆発が2、30年後に起こるのです。それがこのグリーンの線の範囲ですね。この範囲に軽石が降っていますね。特に軽石が多いのはこの塗りつぶした範囲。ここは50㎝くらい積もった、25㎝積もったということですね。だけどこの辺りに行くと1.8mとか、この辺りだと２ｍくらいとかものすごい量ですね。私が掘った金

井東裏遺跡は２m積もっていました。この１番が金井東裏遺跡。２番が軽石で埋もれた、日本のポンペイ黒井峯遺跡。旧子持村ですね。３番が中筋遺跡。これは金井東裏遺跡と同じ、６世紀ジャストの火砕流によって滅んでしまった、被災した村です。要するに皆火山灰とか火砕流の降下・流下した中心近くにある。特に金井東裏遺跡は火砕流の直撃も受けたし、軽石の直撃も受けた、２度の大被災を受けた村だということですね。で、二ツ岳の軽石・火山灰。この小豆色の所が火山灰ですね。この白い所が軽石。この火山灰火砕流で大体50㎝くらいの厚みがあります。その上に載っている土が黒いですね。この黒い土は数十年間安定した時にできた腐植土です。植物とか生え始めて、それが腐って黒色化した腐植土があって、その後また大量の軽石が降ったのです。これが２mあるのです。で、これは現代の面でこれは畑です。この厚みによってこの遺跡は守られたのですね。今だったら２mくらい機械で掘って、開発してしまいますが、少なくとも昔はこんな工事はできないですよね。で、結局完全に残されているということです。噴火の様子はこんなイメージ図ですね。雲仙普賢岳で皆さん覚えていらっしゃるかもしれませんけれども、少し中筋遺跡の話をします。これがイメージ写真です。こういう火砕流がやってきてこの村が被災したということです。これは凄いコラージュですよね。これは雲仙普賢岳の火砕流の写真に中筋遺跡の復元史跡公園の写真を組み合わせたものです。ぜひ皆さん中筋遺跡史跡公園に行ってみてください。古墳時代の村を復元した、群馬県内の唯一の古墳時代復元村ですから、当時こんな家に住んでいたということがよく分かる遺跡です。中筋の祭祀は石を置いて、その上に大きな壺・甕を置いて、猪の骨を置いています。巨石祭祀、土器集積祭祀だけではなくて、こういった祭祀を色んな所でやっていることの一例としてあげられます。ここは祭祀の土器を３つ置いて祈っています。

黒井峯遺跡の話も少しします。これは二ツ岳です。これが爆発して火砕流がここまでやってきたのです。この時の火砕流はたいしたことがなかったので村は壊滅しなかったのですが、その30年後の爆発によって、壊滅しました。これはバックホーで今掬っている所です。軽石を材料にしてコンクリートとかを作るから、軽石を取るのにどんどん掘っていきます。遺跡は非常に良く残っています。これは畠の跡で、これは家の土台の跡、竪穴住居だけではなくて平地の住居も残ります。普通の遺跡の発掘だったら絶対残りません。というのは、全部後世の畑の開墾か何かで壊されてしまいますから。だけど、軽石は1.8m積もることによって完全に覆い隠されて保護されることで残りました。道も全部残っていて、こういった例は日本でもほとんどない。それだけ貴重な遺跡だということです。だから国指定史跡で完全に保護されて、今史跡整備を待っています。高床倉庫にこんなお祭りの須恵器の壺、大甕、土師器の壺甕がある大型祭祀です。円形の平地の部分に石を置いたりして、その上にこういった土器を並べ置くのですね。

(1) 金井東裏遺跡

金井東裏遺跡の話をします。登沢川の扇状地の末端の端の部分に金井東裏遺跡がありました。ここから３号祭祀と呼ばれる土器集積遺構が出ました。これが断崖で、20mほどの絶壁です。この上に載っています。もう端っこの方ですね。ここが爆発して火砕流がやってきます。火砕流は川沿いに来るのではなくて、もう直線的に来るようです。火砕流による線状の衝撃痕跡が溝状に残っているから分かります。火砕流で被弾した石がガーンと地面を削りこむような感じでどんどん突き刺さったりバウンドしたりした線状衝撃痕が1,000個出ました。1,000個の方向を見ると直線方向に、この山間なんかを一切無視して来ています。それで、時速100キロ以上で襲ってきます。温度も100℃以上の火砕流ですから、あっと思ったときには来ています。来た時には亡くなっています。新幹線くらいだから、ぱっと火砕流のほうを見るともうやって来ているのです。だから何にも用意できないうちに死んでしまうということです。甲を着た成人男性が出てきました。これも火砕流で亡くなった者です。乳児、成人女性、幼児合計４人亡くなりました。また人の足跡、馬の蹄跡合わせて2,000くらいの多数の跡が出ています。ですが、これもやっぱり、私は祀りに係っていると思っています。なぜかというと、普段の生活の中で、甲冑を着た人が歩くことは無いです。当時の古墳時代人も甲冑を使う時はどういうことかというと、儀式ですよね。祀りです。そういったところしかまず着ないでしょう。公の儀式の時に武器武具を着装して完全武装をします。あとは戦闘。だけど日本の国内では戦争はほとんどありませんでした。日本書紀を見ると、明らかに分かる戦争は磐井の乱と、後は壬申の乱くらいですね。磐井の乱は６世紀前半だからほぼ同じ

時期かなと。北九州市の磐井という豪族が反乱を起こして、大和王権の連合軍が攻めて滅ぼしました。その時は戦闘を行ったことがはっきり分かります。あとは壬申の乱ですね。７世紀の後半。大友皇子と大海人皇子の争乱です。その時も明らかに馬に乗り、歩兵戦も行っている。だからそれ以外は武蔵国造の乱という６世紀前半の武蔵国内での内紛とそれに係わる上毛野の豪族と大和王権との争乱においても、直接の戦闘の記録は書かれていません。内乱ではなくて政治的な動きの中で、ちょっとした小規模の諍いがあったかもしれないですけど基本的には軍事的な衝突があったとは考えられない。だから日本の国内で戦争は磐井の乱と壬申の乱以外ほとんどないと私は思っています。唯一違うのは朝鮮半島です。朝鮮半島へ行って伽耶という所で、鉄の利権を求めていくらか軍隊を送っていたり、また百済の応援部隊として白村江の戦いなど行っています。しかし、国内ではほとんどない。ということは武器武具を使うことは国内では、ほとんどないということです。だけど甲冑を着ていたということはどういうことかというと、何らかに対する示威行動というものがあったということです。それはやっぱり榛名山に対する示威行動だったと思います。榛名山が爆発をして、火山灰がバーっと降って、２㎝くらい降り積もります。降り積もった後、足跡を付けながら人が動き回っています。900個以上足跡が残っているから、うろうろしていることが分かります。その中で、甲を着た人も動いています。多数の人が山から下りています。多数の人が山から離れているのに対して、この甲を着た人物は山のほうに向かっています。また冑をわざわざ地面に置き、しかも冑の正面を手前に回して据え置いています。そしてその冑の上に顔を押しつけるような形で膝をまげ両手を開いてうずくまっているのです。このような出土状況から言えることはどういうことかというと、山に対して鎮めようとする意識があったのだろうと思っています。普段は着ない甲冑を着ること自身がそういう意味合いがあって、しかもその甲以外にももう１領の甲の中から鹿角製の小札（日本初）が出てきました。弓矢の鏃も鹿角で加工した、鹿角製飾りを付けた鏃を持つ矢を25本持っています。それから銀と鹿角の飾りが付いている鉾（日本初）を持っている。本当に貴重なものを持って、そして何かしようとしていた。それは逃げるわけではないですね。宝物を持って逃げている避難のリーダーというより、やっぱりそれは何かをしようとして宝物的な鹿角で飾りつけた特殊な武器を持って行った対象は、榛名山だと思います。このことを考えるのに、参考になるのが、常陸国風土記行方郡条に、山の神を退治した話があるのです。水田を作って、一生懸命耕作していると山の神が度々来ていたずらをします。それを何とかしようということで、甲冑を着て、杖を持って立ち向かったということです。甲冑を着て、杖を持って立ち向かって、山の神を追い払ったというのです。で、その境界の溝に印を立て、これより先の溝の向こう側は山の神の世界で、こちら側は我々人間の世界だという風にしたという記録が残っています。もちろん風土記は８世紀前半くらいの記録ですからもう後の時代です。しかし、そういう意識を持っていたということを考えると、やはりその神とかそういった権威あるものに対して立ち向かう時には甲冑を着たり、武器を持って立ち向かうということをしたことがあったのではないのかなという風に考えられますので、この記録は金井東裏遺跡を考えるのに参考となるでしょう。

また、鹿角製小札が重要です。というのは、他に鹿角製のものはたくさんここから出ていますから。有数の鹿角製品の出土遺跡になります。まず鹿角装の鏃が出ていますね。それから銀と鹿角の併用装具を持つ矛、鹿角製の刀子があります。これだけの鹿角製品が集中して出土するのは本当に珍しく日本有数の出土量です。この地で、鹿角製品を製作していた可能性が高いと考えます。

それから、剣菱形杏葉も出ていますね。ちょっとまた話が飛びますけれども、杏葉は火砕流にやられた竪穴住居の周堤から出ています。須恵器の大甕の破片とともに出土しました。剣菱形杏葉は、前二子古墳でもちょっと変形したものが出ています。剣菱形杏葉は、大体100mクラスの前方後円墳とか、あるいは数10mクラスの円墳、方墳でも非常に特殊な副葬品が豊かな墓からしか出ないものです。ところが村の中からポンと出てきました。でも火砕流から流されて出てきたので、もともとあった場所は別の場所だったと思います。どういう場所かというと、いくつか想定できます。まずは、宝物蔵の可能性。蔵に収めてあったものが火砕流にやられて流されてきた。あるいは祭儀場。祀りの場所にあって、そこの祀りの場所に置かれた杏葉が流れ出てきたのか。あるいは飾り馬が歩いていて、それが火砕流で流されて転がって出たかもしれない。古墳の副葬品として剣菱形杏葉が出土した場合、その古墳の被葬者は100mクラスの前方後円墳から出

てきますから、剣菱形杏葉はそのような有力者の所有物であるということです。それが、単なる村から出ているということが重要な所ですね。ということはこの地に有力者がいたということを示すわけです。先ほどの甲冑もそうです。甲冑だって、矛だって、100mクラスの前方後円墳の被葬者か特殊な技能者（特に渡来系）しか持てないものです。甲冑を着用するということそれ自体が有力者であることの証明でもあるわけです。いずれにしても金井東裏遺跡にはかなりの有力者がいたことが出土遺物から想定されます。また、ウマ生産・鉄器生産などの生業や出土人骨の頭蓋骨の特徴から渡来人との関係が非常に深い遺跡であることも想定されます。

このような金井東裏遺跡で行われた土器集積祭祀について説明します。甲を着た古墳人から50mくらい北西方向に実は祭祀遺構があります。３号祭祀です。鏡とか、短甲形模造品、1,000点の土器、１万点の臼玉、170点の鉄器、200点のガラス玉、50点の装身具が出土しました。1,000点の土器に１万点の臼玉、これは圧倒的な量なのです。さきほどの西大室丸山遺跡もやっぱり凄かったのですけれども、西大室丸山遺跡に匹敵するほどの量のものがたった直径5.5mの円形の囲みの中から出てきたのですね。ものすごい量ですね。170点の鉄器。170点の鉄器は、この時期で県内最多の量ですね。古墳の副葬品も含めて170点の鉄器が出ることってまずありえないくらいのことです。そういったものが出ている。で、鏃が40点。鎌、鍬鋤先、袋状斧、摘鎌、鹿角装の刀子、素材片として鉄片が出ています。まあ、農工具と素材片が中心で、祭祀の内容は示しているかなと思います。基本的には生業の祭り。農業や鉄器の生産を示すのではないのかなと思います。大型土器はコの字型になっている。大型土器群の南側で祀りをやります。祀りの中心の南側には、火山弾か何かが飛んできて、バウンドしています。初めは樹木が立っていたのかと思いました。樹木の根元で祀りを行うということがあります。そうすれば面白いと思って色々調査したのだけれども、やっぱりどうも樹木ではないですね。樹木痕だと根っこが張って、根穴が出てきます。それはすぐに分かりますが、そういうものはない。ここは西からきた火山弾にドーンとやられて歪んで東側だけ隆起しています。東側だけ土器が粉々になっています。西側にある土器は完形でよく残っている。やっぱり火山弾の衝撃でできた穴なのだろうなと思います。これはお祀りで使用後の土器を積み上げていった跡です。ここだけで700点くらい出ています。１個１個上げていくのですけれども、全部図面を取りながら。本当に時間がかかりましたね。真上から取っていくと、断面を取っても、断面が取れないことがあります。途中から曲がったり歪んだりしているからです。図面化するのが大変でした。坏だけではなくて、小壺とか高坏とか、須恵器小型椀とか、様々な器種を含めて祭儀に使用した後の土器を積み上げています。これが土器を置いた痕跡です。土器を安定させるために少し掘ったりしていると思います。これがお祭りの中心です。ここにはほとんどものがないでしょう。しかし、このあたりの下から南にかけて集中して臼玉・ガラス玉・鉄器などが出ています。ここが祭儀の中心だと思います。これが二重瓶ですね。２段に透かし穴があって、中にまた別の壺が作ってあって、その周りに石を入れて、コロコロ音がする。だから祭具です。まさしく祀りの水を注ぐ道具ですよね。そのようなものも出ている。須恵器は18点も出ました。この時期に18点の須恵器が出るのは前二子古墳例も含めて、一番多いと思います。この白い白線が円形の溝です。円形のこの溝も、ただの溝ではないです。初めは火山灰が降ります。火山灰が降ってまず全体に火山灰が積もるのだけれども、屋根がある所には火山灰は積もりません。竪穴住居、平地建物、それから掘立柱建物。だから建物内の地面の床の土の色で真っ黒ですね。だけどここは屋根がないから、見てください。小豆色の火山灰が残っているでしょう。この小豆色の火山灰が全面に土器の上全面に積もっていました。要するに火山灰が全部、平等に円形の周溝の内側にも、外側にも降っていた。つまり屋根は無かったということです。そして面白いことに、この溝の中に火山灰がなくて、その後の火砕流はある。ということは、この火山灰が降った時には何か溝の中にあったのです。何があったかといえば囲いだと思います。板状か何かのもので、囲いをしているのです。だから火山灰は溝の中に積もらないのです。ここには構築物があったから。この囲いの意味は要するに隠すということです。ここで行う儀式を隠すということだと思います。入口は南ですね。というのは中に導入するように、ここに土器が一列に並んでいるからです。祀りをする前に大型土器で境界を作ったようです。囲いを立てて、見られないようにして、南から入って、臼玉・ガラス玉・鉄器とかそういうものを多量に使うお祭りをする。土器以外の祭具はその場所にそのまま置いた

ようです。また、その際に食べたり飲んだりして使った土器を片付けて積み上げていくという行為をしたことになります。残念なのは、北側と西側は発掘区外なので掘れないのです。

これは上から見たもので、この窪みが全部土器を置いた跡です。須恵器大甕の出土地点はど真ん中です。ここが中心で、そこに須恵器を置きます。当時は非常に貴重な、甕が４点ほど出ている。やはり重要なものだったのでしょうね。土師器の壺甕も多数置いてありました。手捏土器も５、６点しか出ず、非常に少なかったのですが、一番中心の所に手捏土器がありました。

坏皿の中に臼玉とか石製模造品とかガラス玉とか鉄器をお供えしています。鏡も出てきた。鏡は土器を取り上げた後、その下の黒い土を掘っていったら出てきた。祀りを行っている土の中から出てきました。短甲形の石製模造品は須恵器の下側から出てきました。これも非常に重要な例で、全国で10例くらいしかないです。群馬県では簗瀬二子塚古墳という、前二子古墳よりちょっと古い横穴式石室で群馬最古の横穴式石室だと思うのですけど、そこからもっと形態が形骸化した、形式化した短甲形石製模造品が出ています。ここから出土したものは、もっとリアルな造りになっています。そして、滑石の質も他の滑石製模造品と異なり良質のものを選んでいます。短甲は、小札甲よりも古い段階の５世紀の段階の甲の形を真似たものです。この坩は首にこういう剣形品を10枚くらい紐で結んでいました。それがバラバラになって出てきた。この中から獣の骨が出ました。獣の種類は小片のため不明です。特別な坩だったと思います。あとは、ガラスの勾玉も出ています。ちょっと他ではないようなもので、古墳の副葬品だったらありえます。古墳の副葬品で例えば、前二子古墳とか簗瀬二子塚古墳だったら出てくるような物です。そのようなものが豊富に出てくるということで、普通ではありえないです。これは鏃。これは鉄片ですね。素材片ですね。100片ほど出ました。農工具も出てきます。鎌・摘鎌・袋状斧・鹿角装刀子ですね。なぜ鉄器にこだわるかと言うと、祭祀遺跡で鉄器が出ることはあまりないからです。石製模造品とか臼玉とか土器とか手捏ね土器とかは良く出ますよ。鉄器を出すということはさっきの宮田諏訪原遺跡以外ほとんどないです。宮田諏訪原遺跡とここと、久保遺跡。鉄器を多く出す県内の祭祀遺跡は、その３つだけですね。それだけ重要ということです。しかも170点ですから、非常に多い数ですね。

農工具と武器としてそれと素材。そのうちの武器とした鉄鏃は、実際に武器はほとんど使っていませんから、狩猟具あるいは祭具かもしれないと思っています。猪や鹿狩りや儀礼でも使う、そういう狩猟具・祭具としての意味合いを持つ鏃かもしれないですね。面白いのは鉄器を作る素材がたくさん出たということですね。この当時から鉄器を自分たちで作り始めるのです。鉄は作れないです。群馬での鉄作りは７世紀の後半からです。だけど鉄の素材を大和王権だと思うのですけど、そこからもらって、それで自分たちで鉄器を作るのはこの５世紀の後半から多く作り始めている。４世紀にも少し製作しますが、本格的に始めるのはこの時期からです。この金井東裏遺跡は、その先がけです。170点もお供えしたら、貴重な鉄を消費してしまうことになってしまう。消費してもいいくらいに素材を持っていて、その一部をお供えして、お祭りの道具に使って、後は自分たちで鉄器を作って、実用の農工具や鏃などを作ったりしたわけですね。小型の農工具があります。小型の農工具は、神様へのお供えだから実用品ではないです。やっぱり小さくします。神様へ捧げるものとして、お供えするものの流れで６世紀前半に一番小型化します。金井東裏遺跡は、小型化の一段階前のものです。U字型鍬鋤先は、宮田諏訪原遺跡で７本出ている、群馬県最多です。金井東裏遺跡でもU字型鍬鋤先が実は２本しか出ていないのですけど、出ている。鍬鋤先は重要なもので、金井東裏遺跡にとっても宮田諏訪原遺跡と同じように、農耕地を開発する、非常に強力な開墾具としてこれをお供えしたのかなと思います。

⑵　下芝天神遺跡（図６）

土器集積遺構で、下芝天神遺跡も榛名山二ツ岳の１回目の爆発の伴う泥流の下から出てきました。FA泥流に伴った下から出てくる。土器が2,500個出たのはここです。群馬最多の土器出土遺構。大型の土器があって、やっぱりコの字型に区画する。その間から更に前の方に小型土器を積み上げるという、同じような在り方であったということですね。ただ祭祀をした痕跡がないです。なぜかというと、ガラス玉も臼玉も鉄器もほとんど出ていない。ほんの少ししか出ていないです。石製模造品が少しくらい出ているくらいで、どのようなものが出ているかは87ページに書いてありますね。臼玉302、石製模造品73、これだけです。本当

に極少量。土器はいっぱいあるけれども、臼玉、石製模造品の数はあまりにも少ないので、祭りはここではなくて別の所でやったのではないかという、整理担当者は判断をしています。で、ここは片付けの遺構だとしています。まだその判断については保留したいと思いますが、その可能性はあるかと思います。祭祀には色んな在り方があって、廃棄の場所なのかあるいはお祭りの場所はどこなのかという問題は、非常に重要です。

⑶　寺尾東館遺跡（図７）

寺尾東館遺跡。これはこの88ページの上側にある、これは高崎市の教育委員会で掘ったものですね。これも集積遺構。小型土器が積み上げている様子や土器を取った跡の窪みが残っているでしょう。この高坏があってその上に皿を置いて、重ねていく状況を見ることができます。寺尾東館遺跡も土器以外はあまり無いです。石製模造品の剣が55、有孔円板が10、勾玉が６、刀子３、盾２、臼玉1,872。まあ臼玉が2,000個近くあって、それ以外の石製模造品は少ないですね。土器の数はある程度あって、300個ですね。やはり土器以外のものが少ないです。石製模造品と臼玉、それから鉄器、ガラス玉。そういったものの総量は非常に少なくなっていますね。

⑷　祀りの様相・祭儀の場

それが多いのは基本的には宮田諏訪原遺跡と金井東裏遺跡とそれから久保遺跡くらいしかないですね。このことをちょっと注意してもらったらいいと思います。その場所でお祭りを行ったかどうかということに非常に関わっています。その場所で祀りを行って、だいたい祀りで使用するものは片付けてしまうのかもしれないですけれども、私はその場所にお供え物ですから置く場合もあるという風に考えています。だから祀りをしているのならばその場所に置いたままにしておいたからこそ金井東裏遺跡も宮田諏訪原遺跡もそこに大量の鉄器とかガラス玉とか石製模造品とかが置いてあったのです。使用した土器などを片付ける場所も外に持っていかずにすぐ横に置いたのが金井東裏遺跡です。もしかしたら下芝天神遺跡は祭儀の場所はどこかにあって、そこには大量の祭具があるのかもしれない。それはまだ何ともいえないです。まだ判断できるまでの検討はしていません。臼玉はこの土器の中に臼玉を置いて祭儀を行ったのではないかと思う人もいるかと思いますが、金井東裏遺跡もこういった杯の中に臼玉などを置いた状況もあったのだけれども、圧倒的大多数は下の黒い土（厚み40㎝）の中から満遍なく膨大な量の臼玉が出てくるのです。祀りをするときの臼玉の使用法も考えなくてはなりません。なかなか難しいですよね。そこまで明らかにできるほど情報が取れていないです。そこが厳しい所と思います。土器集積遺構には、祀りの具体的な様相、祭祀の場所、片付けの問題など様々な問題があるということをお分かりになっていただければと思います。

３　全国の代表的な巨石祭祀

⑴　三輪山（大神神社）

あとはおまけですけれども、私は奈良に勤めていたことがあるので、今でも奈良も年に１回は行きたいと思っています。神社の起源でもあり、巨石祭祀の代表例でもある三輪山（大神神社）は通算で20回くらい行っているのではないですかね。事あるごとに行きます。でも三輪山に上ったのは２回だけですね。三輪山を外から見るビューポイントは東か東南からですね。北に行くと神奈備山の景観が良くありません。三輪山の山体自身が巨石を各所に露出しているもので、拝殿の手前にもこういった巨石があって、神の磐座として、神の拠り所としてお祀りしている。これは神社本殿の西北の方向にある磐座神社ですね。これもまた別のもの。こういうものが各所にあります。これは三輪山の山麓で少し離れた西北側にあるのですが、山からずいぶん離れた所の裾野の端の方にある巨石です。山ノ神遺跡という有名な祭祀遺跡で、ここから石製模造品とか手捏ね土器が出ています。４世紀から５世紀にかけての三輪山祭祀の代表的な遺跡です。三輪山の登拝口は近くに拝殿があって、ここから登っていきます。ここから先は絶対に撮影不可です。ここから１時間掛かりました。１時間掛かっていくと、辺津磐座、中津磐座、そして山頂の磐座ですよね。その３ヶ所にあるのだけれども、磐座、神の宿る場所がそこら中に、沢山の巨石があるのです。ぜひ奈良へ行ったら、行ってみてください。大神神社というのは神社の起源となる所で、本来は山自身が神の山で、神の拠り所で、拝殿も本殿もなかったと考えられています。原初の日本人の信仰の形態を示す良い例ですね。中津磐座にも大きな巨石があり、山頂には大きな磐座群があります。巨石信仰の元祖として、日本の磐座信仰の拠点だろうということが良く分かります。

⑵　沖ノ島

あとは、航海の祭りということで、福岡県の沖ノ島。今、世界遺産申請で一生懸命福岡県は頑張っていますね。絶海の孤島ですよね。ここは未だに女人禁制ですよ。未だに神の島。で、どういう所かというと、要するに福岡から朝鮮半島へ渡る際に、対馬の前に通過する孤島です。だから航海するにあたり、必ず目印ともなるし、守り神にもなる。ここは航海のお守りをしてもらうための神の島として４世紀から、古墳時代の前期から祭祀遺物が出ています。巨石の上や下に鏡とか馬具とか山のような宝物が置いてあります。一般の人は１年に１回の大祭の時にしか入れない。そういう島です。今でも神聖な島として管理されています。宗像大社が管理していますね。

⑶　天白磐座遺跡

そしてもう１つ、天白磐座遺跡。これは静岡県の浜松市にありますが、非常に有名な遺跡で、同志社大学の辰巳先生が調査された遺跡です。写真で遺跡の景観を見たことがあって、どうしても行きたいと思って４年前に行ってきました。景観がすごいですね。でも産泰神社も石山観音もある意味引けをとらないですね。拝殿がもし無くて、巨石が一面に見えていれば同じような感じだと思います。ただ、ここはものすごく遺物が少ない。徹底的に調査をしたのに鉄製品が数点と土器が数点しか出なかったのです。お供えの形態とか違うのかもしれない。あるいは奉納したものを片付けて持って帰ってしまったのかもしれないですね。そのまま置きっぱなしにする祀りとか、いろいろな祀りの形があるのでしょう。これだけの遺跡、磐座で、鉄器数点はありえないと思います。鉄矛とか鉄剣、鉄の鏃数点しか出なかったのです。様々な祭祀の形態があるということです。

４　巨石祭祀と土器集積祭祀（遺構）

巨石祭祀はやはり巨石を中心にして土器・石製模造品等をお供えするものである。赤城山南麓の火山性の溶岩泥流丘があることから西大室丸山遺跡みたいな代表的な遺跡を初めとして、宮田諏訪原遺跡とかそういったものがいくつか出てくるということですね。ただ産泰神社・石山観音・雷電神社は古墳時代の祭祀の証拠はないですね。だから何とも言えないです。少し気になるのは天白磐座遺跡付近には同じような巨石の露頭は他にも何箇所かあります。でも遺物が出ていないのです。それで、いくつか祭祀を行う場所はあったのだけれども、その中でこの天白磐座遺跡を選んだ、そこに意味があるということを書かれています。もしかしたら産泰神社・石山観音・雷電神社も、今神社があって、観音様があって、信仰の対象だけれども、古墳時代には、選ばれなかったのかもしれないですね。そのあたりの所はまだ分からないです。もう１つ重要なのは、この巨石祭祀というのは、群馬の中でも赤城山南麓中心にできたもので、時期的には５世紀中頃くらいからです。後半でも早い段階から始まっている。これはやっぱり群馬県内の大規模祭祀遺構として非常に早い段階の遺構です。はっきり分かる大規模な祭祀として、しかも巨石を伴うということは三輪山の祭祀、要するに大和王権が祭った祭祀形態ですね。石上神宮にも巨石があります。石上神宮の古山という山に巨石があって、それが本来の石上信仰の原点ではないかと言われたのだけれども、そこは禁足地なので絶対に見ることができません。あとは、春日大社は今式年遷宮ですね。春日大社はどういう式年遷宮をするかというと、伊勢神宮みたいに全部移すのではなくて、仮の宮を造って一時的に御神体を移すのだけれども、また元の宮に戻すのですね。だからその間だけは元宮は空っぽになるから、元宮を見ることができます。見学してきました。３つの社があって、その中の１つに初公開で磐座がありました。その巨石は、あまり大きくないです。このスクリーンくらいですね。高さは4,50㎝くらいしかなくて、石の上に漆喰を塗り固めていました。漆喰を塗り固めた磐座は極めて珍しいです。そういう特殊な磐座があって、春日大社は新しくて、藤原氏に伴うものなので、時期的には７世紀以降だと思うのですけれども参考になります。石上神宮は元々物部氏、大神神社三輪山は大和王権のものだから、重要な大和王権の主要構成メンバーは、巨石祭祀を行っているということですね。で、そういった大和王権のグループ、大和王権の配下の大豪族たちの影響を受けて行った可能性がある。もちろん巨石に対する素朴な信仰心というのはどんな人にもあるだろうから縄文時代も弥生時代もやったのかもしれないですけど、明確な痕跡は残っていません。それがこの赤城南麓で大規模な遺跡として西大室丸山遺跡・宮田諏訪原遺跡で出たということが重要です。そこに大和王権との関わりが想定できる祭祀形態を導入したのではないかなと考えています。それは榛名山にも影響して、正観寺遺跡群とか榛名神社とか、そういった所に影響も与えたの

だろうと思います。

一方、榛名山麓を中心とした土器集積遺構は、大型土器で区画して、使用済みの小型の土器を積み上げていくものである。で、土器以外の遺物は少ない場合が多いですが、ただそれはここで祭りをしたかどうかという問題と関わっているのでなんとも言えないですね。これは今後の課題ですね。少なくとも榛名山東麓を中心にこういった土器集積遺構があることは間違いないだろう。渡来人との関係で５世紀後半頃に突然出て来て、６世紀中頃には消えてしまうお祭り形態で、一時的に盛り上がったのだけれども、それ以降はあまり繋がらなかった祭祀ではないのかと想定しています。反対に巨石祭祀はずっと続けていったのではないのかということを見通して述べていきたいと思います。そういった巨石祭祀がこの赤城山南麓を特徴づける祭祀としてあったということを強調してお話を終わりにしたいと思います。

～質問～

Ｑ１　桐生に賀茂神社があるのですけど、茶臼山に祭祀跡があって、それは神籬（ヒモロギ）という神が籠もるということで、今のお話のように巨石は一般的には磐座ですよね。この違いは何かあるのですか？

Ａ１　基本的には巨石祭祀は磐座ですね。ヒモロギという言い方はするとは思うのですけれども、基本的には磐座として神の宿る依り代ですね。宿る所なのですね。そこに神様が来ます、依り代ですということが本来の意味です。神に籠もると書いてヒモロギですけど、やっぱり傍に寄ることですから、寄ってそこに居つく。そういったことだと思います。

２０１５(平成２７)　年９月２６日(土)
赤城山南麓の古代を学ぶ　第５回　於 前橋市 大室公園 民家園離れ

櫃石と巨石祭祀

～赤城山南麓の巨石祭祀と土器集積祭祀の比較～

古墳時代　５世紀中頃～後半　　耕地の拡大に基づく、集落の拡大。
榛名山東麓を中心に文化が発展
石製模造品を使用した祭祀が流行
古墳時代後期　６世紀初頭～　　榛名二ツ岳爆発、噴火の影響
榛名山東麓　保渡田古墳群造営終了
赤城山南麓　大室古墳群造営開始

祭祀の二相
巨石を中心に祭祀を構成する赤城山麓　→　地形的要因
土器集積遺構を有する榛名山麓　　→　祭りの特性

１　巨石祭祀遺構

日本に古くからある自然崇拝の一つ。自然の巨石を信仰対象として、ご神体とする巨石を磐座として信仰する祭祀、奈良県の三輪山祭祀が代表例。

⑴櫃石（赤城山の中腹）前橋市三夜沢町

長径４.７ｍ、短径２.７ｍ、高さ２.８ｍの輝石安山岩の自然石である。周辺からはさらに数個の石があり、それら周辺の石付近からも遺物が出土している。

５世紀後半から６世紀前半と考えられる。

巨石の南下側から集中して、手捏ね土器５０、臼玉１１９、管玉３、勾玉５、子持勾玉１、石製模造品（有孔円板形１、剣形７）などが出土している。赤城山体中にあり、巨石を南から仰ぎ見ると背景に赤城山本体があり、山体への供献をしたものと考えられる。ただし、赤城山本体を目視できたかどうかは不明。

⑵西大室丸山遺跡（火山性の泥流丘）前橋市西大室町

巨大な巨石祭祀遺跡である。火山性の泥流丘の頂部にある祭祀遺跡で、石材の盗掘のためかなり攪乱されているが、本来巨石が露出している。

５世紀後半を中心とする祭祀。

大量の土師器が出土し、２００点以上おそらく１０００点は超える数の土師器が出土している。器形は坏・高坏が中心で、坏は内湾口縁の坏が最も多く、次に内斜口縁坏、少数の須恵器模倣坏がある。高坏は、長脚と短脚のものがある。他に椀・壺・甕がある。また重要なのは、５０個程手捏ね土器が出土していることである。須恵器は瑳２・甕数点の出土のみである。

土器以外では、臼玉１０,２００点、剣形石製模造品４００点、有孔円板形石製模造品１２０点、勾玉４０点の他に、少数の管玉・紡錘車・刀子形石製模造品・鎌形石製模造品が出土している。（ほとんど完成品、一部未製品や原品の剝片が含まれている。）

南から見ると背景に赤城山全体がはっきりと望め、赤城山体を意識した巨石祭祀と考えられる。

⑶宮田諏訪原遺跡（赤城山西麓）前橋市赤城町宮田

榛名二ツ岳の噴火により、火山灰・軽石により覆われた巨石祭祀遺跡である。

赤城山西麓の、利根川左岸河岸段丘面突端部にある。

６世紀中頃のＦＰより下

巨石（１.３×１.０ｍ）祭祀跡１　　破砕された土師器坏１３、甕６出土

６世紀初頭のＦＡより下

１号祭祀　小型青銅鏡(変形乳文鏡)・武器・武具・農耕具主体の鉄器・鉄片

１００以上、碧玉製の管玉３、臼玉２４００以上、石製模造品１７０

１号巨石（３.３×１.６ｍ）祭祀　土師器甕１、坏１、鉄鏃１・鎌１・刀子１

巨石・集石を依代とした祭祀跡１４ヶ所あり。様々な組み合わせで祭祀　を行う。

⑷正観寺遺跡（榛名山東南麓）高崎市正観寺町

榛名山東南麓、相馬が原扇状地端部にある。巨石は、２ｍ×２ｍで高さ１.１ｍの不正形な自然石で、掘り下げた穴に据え置いていた。

６世紀中頃～後半の祭祀。

巨石の南東を中心に南から北東にかけて大・小の礫とともに土師器坏・甕・高坏、須恵器蓋坏・高坏・瑳・短頸壺・甕など４４点の土器出土。

小型勾玉・臼玉・剣形・有孔円板形石製模造品が出土。

同じような巨石祭祀は、産泰神社(前橋市下大屋町)・七つ石雷電神社(前橋市粕川町深津)石山観世音(伊勢崎市下触町)などがあり、いずれも赤城山を望む地点にある。遺物は出ていないが、いずれも巨石を背後に見るもので近似した性格を持つものと考えられる。

赤城山麓の祭祀は、地形的な要因もからみ、赤城溶岩泥流により形成された巨石群から生じた巨石祭祀を行ったものと考えられる。三輪山の巨石祭祀と近似する祭祀形態と考えてよいだろう。

２　土器（器物）集積遺構

大型の壺・甕をコ字形に配置し、その中に坏を中心とする小型土器を何段にも積み重ねていく祭祀の形態。通常、臼玉などの祭祀品は伴わず、祭儀終了後の容器を片付ける中で形成された遺構と考えられる。

⑴金井東裏遺跡（渋川市金井）

榛名山起源の登沢川の扇状地端部、榛名山北東麓にある。

北側にほぼ同時期の屋敷地あり、南には境界溝と考えられる例の甲を着た人骨が出た溝や道あり。ムラの境界に位置するか？

５世紀後半～６世紀初頭と考えられる。

祭儀を土器集積のすぐそばで行い、その祭儀終了後、坏などをまとめて積み重ねて置いたものと考えられる。積み重ねの後、ＦＡの火山灰が降下して機能を停止する。径５.５ｍの円形の囲みあり。南側に入口ある可能性あり。

コ字形に大型の壺・甕を配置して、その中心には須恵器の大甕を４点置く。須恵大甕は祭儀全体の中心地となる。

中心やや南の地点で、臼玉１万点、ガラス玉２００点、石製模造品１５０点、勾玉１０点、管玉６０点、鉄器・鉄片１００点などを祭儀で使用。１０㎝の土層の中の径２ｍほどの範囲を中心に万遍なく出てくるので、具体的な祭儀の復元は困難。ある程度の期間祭儀を行った可能性が高い。土

器以外の遺物の量は、他の遺跡に比べて圧倒的に多く、この遺構が祭儀を行った場所であることと、祭りの規模が大きいものであることを想定している。

土師器坏を中心にして、土器を積み重ねていく。約７００点。祭儀が終了した後の行為と考えている。なお、須恵器も１５点以上と豊富で、須恵器の量も多い。

土師器１２００点ほど。坏・椀・甕・壺・高坏・瑳・坩がある。

中央の土器集積遺構の器種比率を見ると、坏６００、椀８、甕５０、壺１０、高坏１０、坩１である。

さらに中央の土器集積の坏を分類すると内湾口縁坏２１％、内斜口縁坏３７％、須恵器模倣坏４２％となる。つまり、須恵器模倣坏が一番多く、次にほぼ拮抗する形で内斜口縁坏があり、須恵器模倣坏の半分の比率で内湾口縁坏となっている。明らかに後述する下芝天神遺跡の坏と器種構成が異なり、新しい様相を示す須恵器模倣坏が主体となっており、下芝天神遺跡より１段階新しいことを示している。

⑵下芝天神遺跡（榛名山東南麓の南部、緩傾斜面）高崎市箕郷町下芝字天神）

FA 泥流下の地形は相馬が原扇状地の一部として捉えられる。

埋没住居の窪地がすぐ西にあり、さらにその西には畠が存在する。土器集積遺構は集落の縁辺近くに立地している可能性が高い。６世紀初頭。

土器集積遺構の土器総数は２４７４個ある。１～５群に分けられる。

２群が最大の集積で、東西幅３ｍ、南北幅４ｍを測る。扇形の形状である。１３３３個体の土器が出土しており、南部において壺・甕等が列状に並ぶ。

集積遺構は、FA の噴火及びそれに伴う洪水層により覆われている。

土器は７７％が完形品で、接合率も高く、本来破砕行為などはなく、完形品を置いたものであろう。

甕・壺の中に坏などを入れている場合が多くあり特徴的である。坏を中心にして積み上げる場合も１０段を超える重なりもある。一部の土器中からは、臼玉や石製模造品が出土している。しかし、多い例でも１０個以下である。

土器の種類は坏・高坏・坩・壺・甕・広口甕・鉢・瑳・甑・蓋・片口・台付坏・粗製坏・手捏ね土器・須恵器は計５点で、内訳は坏蓋１・壺１・甕１・瑳２である。

坏１７６８・高坏２６１・壺７９・坩６４・甕１３９・鉢７５・瑳２・甑２・蓋４・片口１・台付坏１１・粗製坏８・小型土器３９・手捏ね土器５、土器の中での器種構成比　坏７０％、高坏１０％、甕・鉢８～９％、壺・坩５～６％となる。この構成比は１～３群でほぼ同じ。

一方、坏や高坏の類別の構成比率が群で異なるものがある。

内湾口縁坏４３％、内斜口縁坏５０％、須恵器模倣坏７％となる。須恵器模倣坏の比率が少なく、１割未満である。間に洪水層を含みそれがＦＡ層降下前と考えられるので、やや古い様相を示すことが分かる。

臼玉３０２　石製模造品７３　剣形２２・勾玉５・斧１・単孔円板１・破片４４　うち臼玉２点が蛇紋岩製でそれ以外は滑石である。

土器は大型の壺・甕をコ字形に置く形で、その後、隙間などに小型の坏を中心とする土器群を積み重ねていく。また、大きい土器群を配置したときに、石製模造品や臼玉などを祭儀に使用したものと考えられる。その後、重ね合わせした土器を持ち込んで積み上げていく行為を行っている。そういった意味では、金井東裏遺跡とほぼ同じ形態を示す。ただ異なるのは、土器以外の遺物の質・量で、圧倒的に金井東裏遺跡のほうが優れている。

⑶寺尾東館遺跡　（観音山丘陵東端）高崎市寺尾町字東館

観音山丘陵東端で、北東に小坂山あり。東西１.８ｍ×南北２.０ｍの平地。本来傾斜地であるので高いほうを若干削平した可能性高い。また、器物の安定をはかるため、遺構内表面を５～１０㎝の深さで掘り起こしたか、あるいは土器の周囲を土盛りしていった可能性が高い。

土器の器種は、坏・高坏・甕・壺・鉢・手捏ね土器・甑などである。土器総量は３００、坏は２００、甕・壺・鉢５０、高坏５０、須恵器１１となる。

大型の甕・壺は、遺構の外側に多く、規則的な配置を示す。初期段階に設置したものと考えられる。さらに、最下層の土器の下層から臼玉が出土している。２０点以上あり、設置の初期段階で臼玉の供献が行われていたと考えている。坏や高坏は、大型のものの間を埋めていくような形で坏などは多い所で８～９枚積み重ねられている。坏は全体に広がるが、須恵器模倣坏や高坏は中央付近に集中する。須恵器は、遺構の周辺あるいは南東部で出土しており、すべて破砕された状態である。坏の器種は内湾口縁坏３３％、内斜口縁坏５３％、須恵器模倣坏１４％である。

石製模造品は、土器内底面や、重ね置きされた坏の下段の土器内部からも出土しており総数１０００点に上る。遺構内には、多量の礫(３～５㎝)が意識して置かれている。

剣５５・有孔板１０・勾玉６・刀子３・盾２・梭？１・臼玉１８７２がある。土器内に模造品は置かれ、甕・壺・坏・鉢・高坏など全器種から出土する。土器内に供献された模造品の数量や種類が個々の遺物により異なっており、祭祀行為上での目的別の相違が感じられる。

祭祀の回数は、甕などが割れた胴部の上に間層を５㎝ほどはさんで、完形の坏を数枚置くなど、時間差を置いての坏の供献が行われた可能性がある。

祭祀の向きは、南北方向で、その先には神奈備形の山である小坂山を向いている。また、祭祀遺構東側には支谷状の沢になっていて常時水が湧きだすような状態である。南側の眼下には、雁行川が東流している。

土器の様相から祭祀遺構とほぼ同時期と考えられる１５号竪穴建物が西南５ｍのところに出土している。祭祀との関連性を考えてよい住居である。

土器集積遺構は、埼玉県深谷市 城北遺跡では、土器２８０点・滑石製模造品剣１１・円板１１・臼玉６３０がある。他に長野県松本市高宮遺跡など長野県青木下遺跡・埼玉県川越田遺跡・山梨県大蔵経寺前遺跡など大量の土器を置く遺跡はあるが、金井東裏遺跡に代表されるように、大型甕・壺を区画状に配置し、一部に杯を中心とする小型土器の積み重ねを伴う集積という形態は独特である。この土器集積遺構が時期的・地域的に限定されたものかどうか今後検討する必要がある。

３　群馬県における祭祀の二相

巨石を中心に祭祀を構成する赤城山麓→地形的要因。三輪山型の祭祀導入
土器集積遺構を有する榛名山麓→土器を集積することの意味。祭りの課程の一段階を示すもの。
巨石祭祀は、赤城南麓にとどまらず、榛名山にも存在する。例：榛名神社

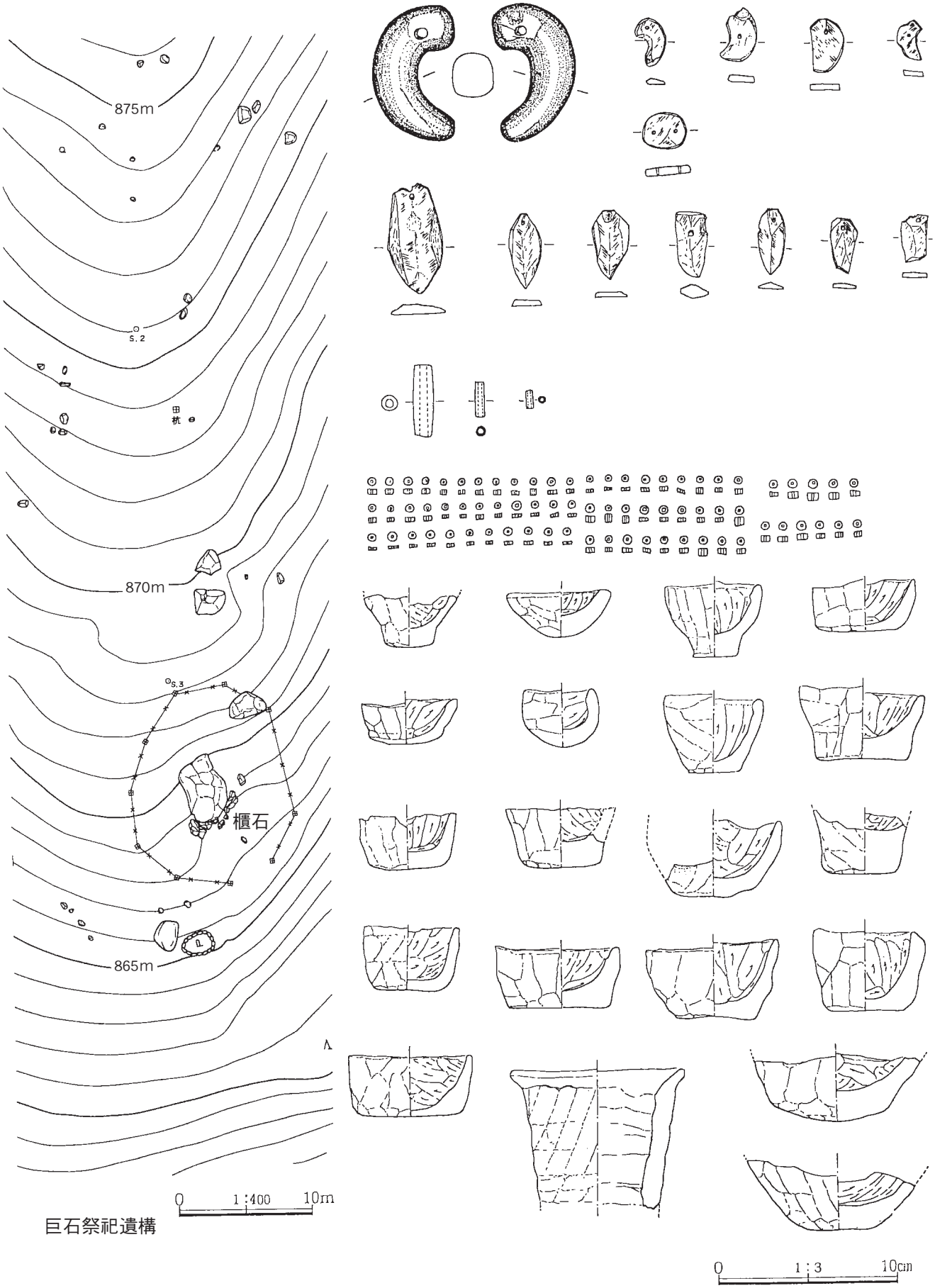


図１　櫃石（井上 1983、細野・杉山 1993）

井上唯雄 1983「赤城山櫃石と群馬の祭祀遺跡」『群馬文化』192号　群馬県地域文化研究協議会

細野高伯・杉山秀宏 1993「櫃石」『古墳時代の祭祀』第Ⅱ分冊　東日本埋蔵文化財研究会

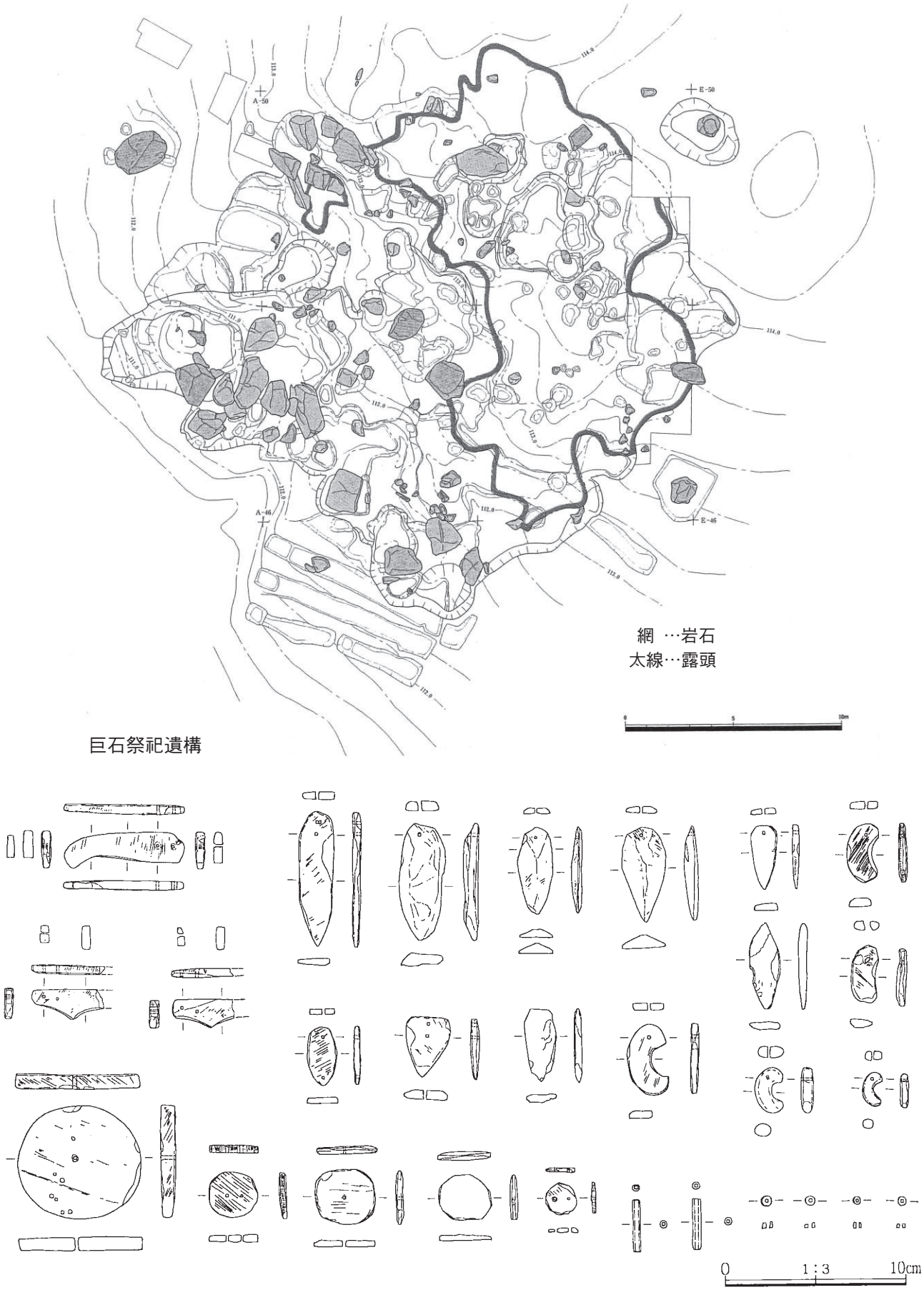


図２　西大室丸山遺跡（西田・杉山 1991、松田・西田 1997）

西田健彦・杉山秀宏 1991『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会

松田　猛・西田健彦 1997『西大室丸山遺跡』群馬県教育委員会

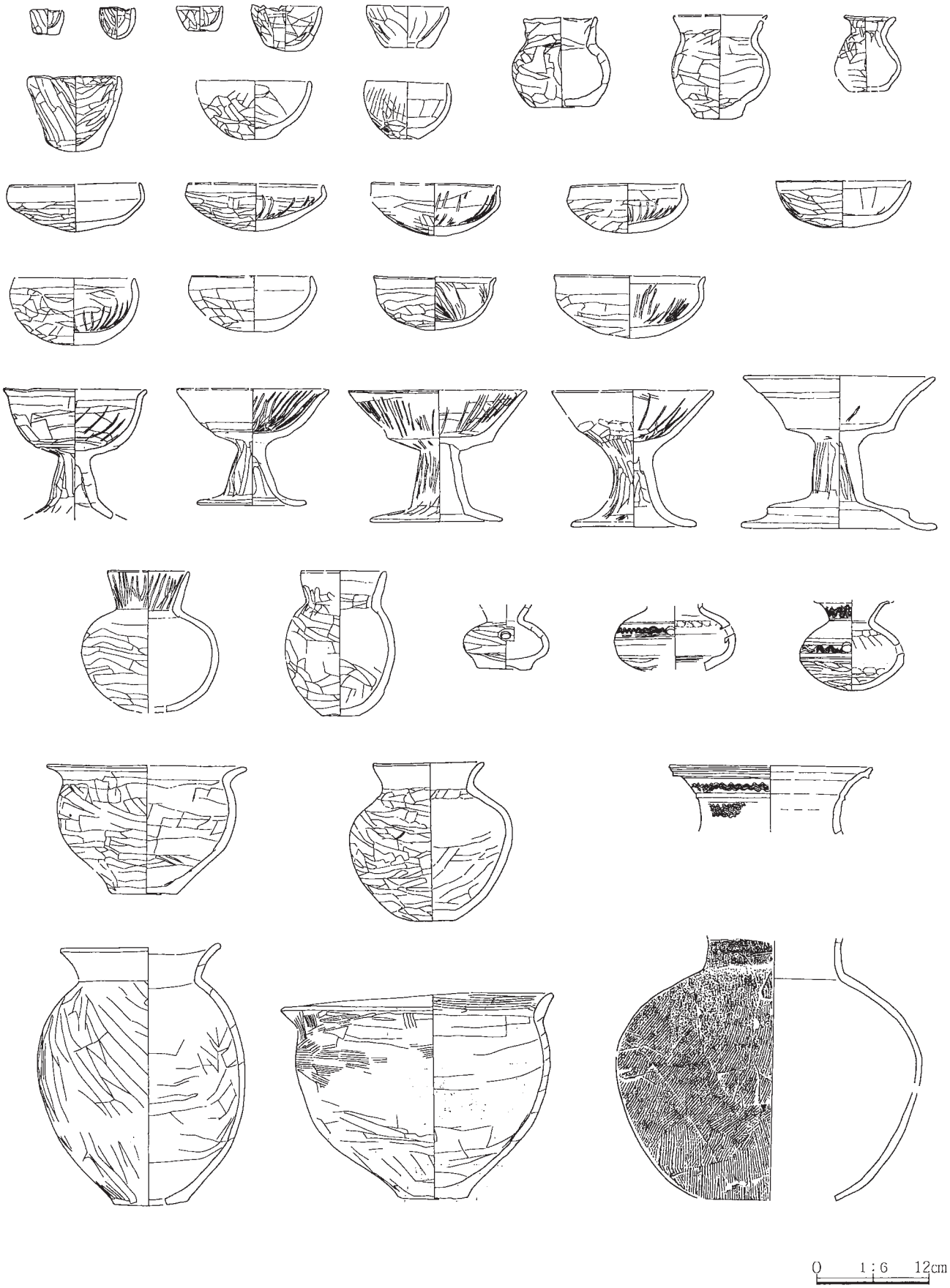


図３　西大室丸山遺跡（西田・杉山 1991、松田・西田 1997）

西田健彦・杉山秀宏 1991『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会

松田　猛・西田健彦 1997『西大室丸山遺跡』群馬県教育委員会

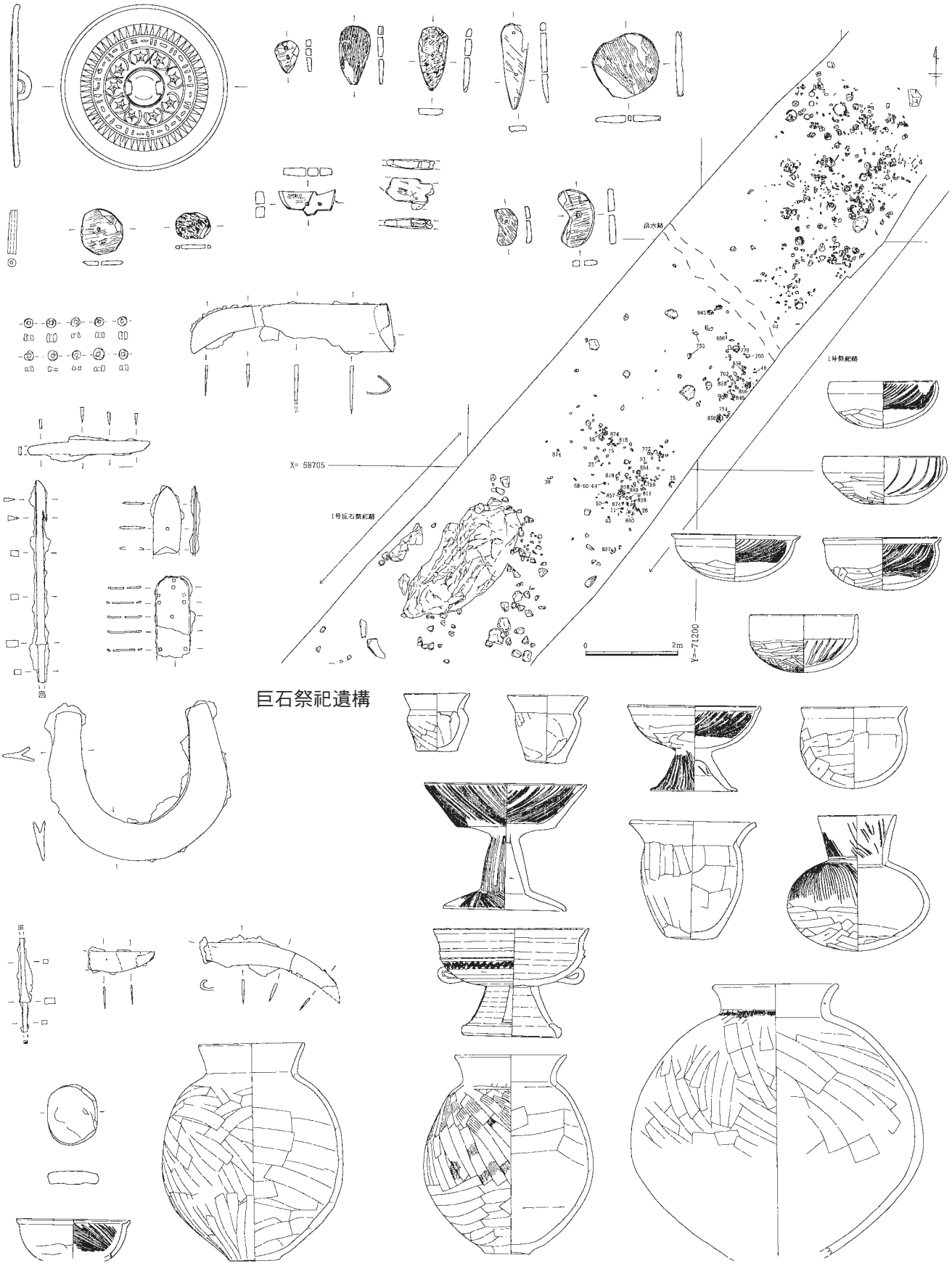


図４　宮田諏訪原遺跡（小林 2005）

小林　修 2005『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』勢多郡赤城村教育委員会

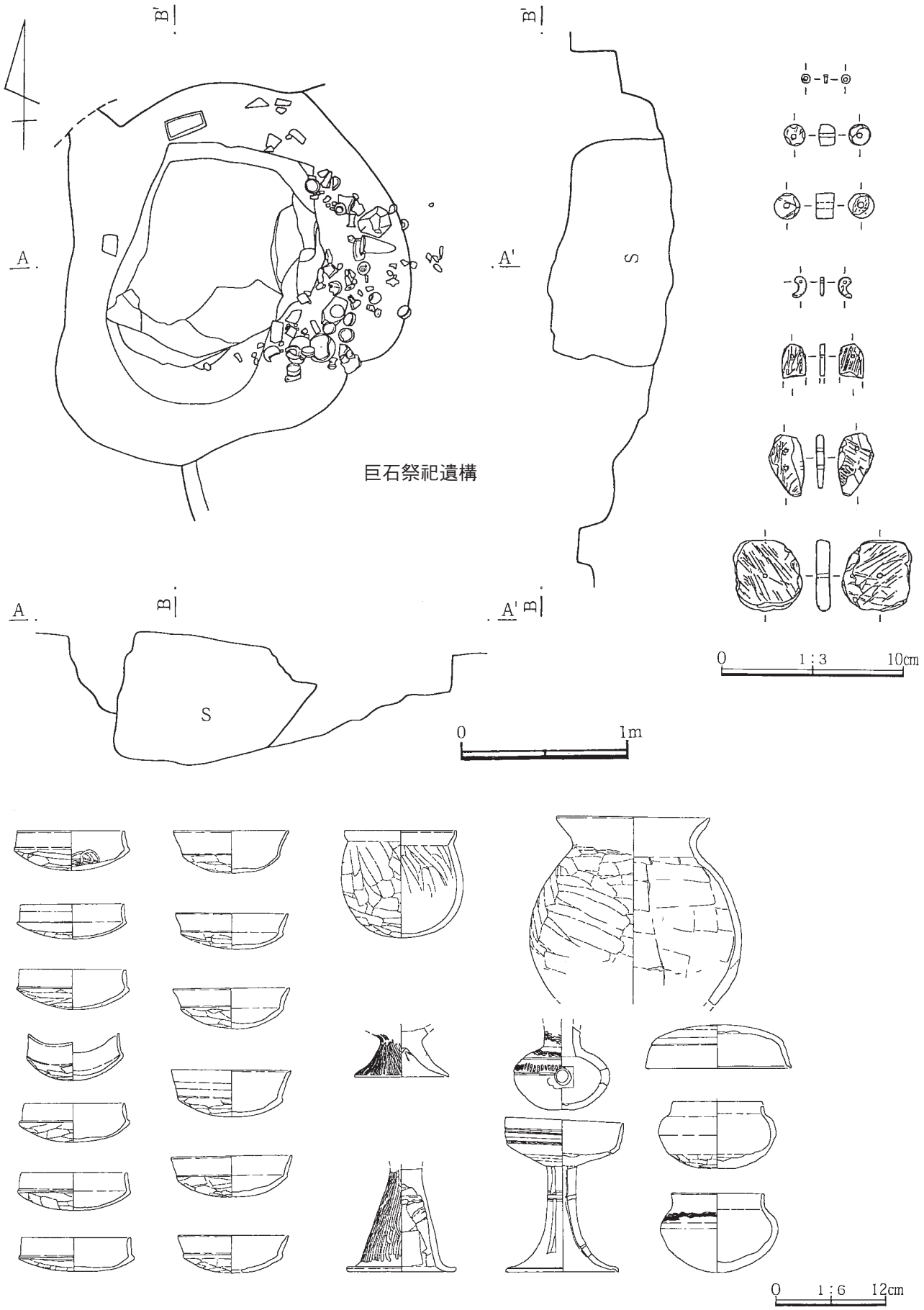


図５　正観寺遺跡（久保 2000）

久保泰博 2000「正観寺遺跡群」『高崎市史』資料編２　原始古代Ⅱ　高崎市

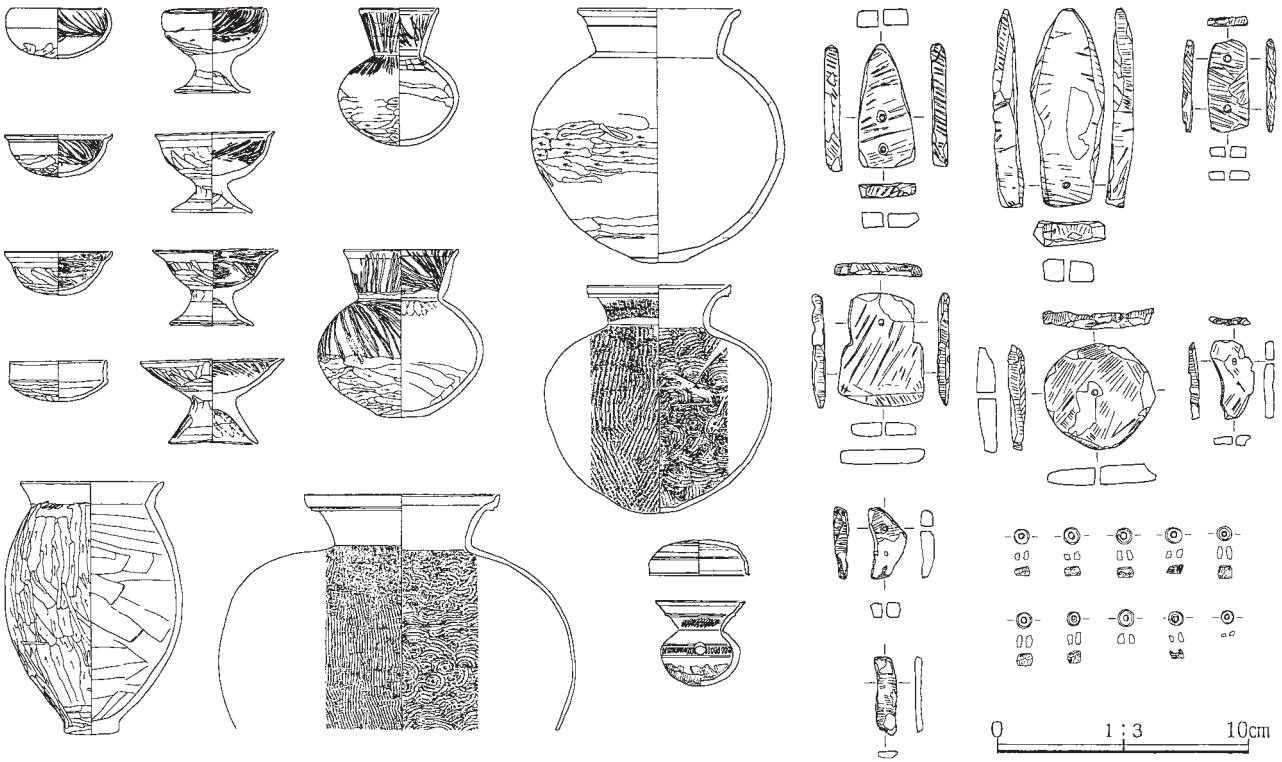


図6　下芝天神遺跡（洞口 1998）

洞口正史 1988『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

土器集積遺構

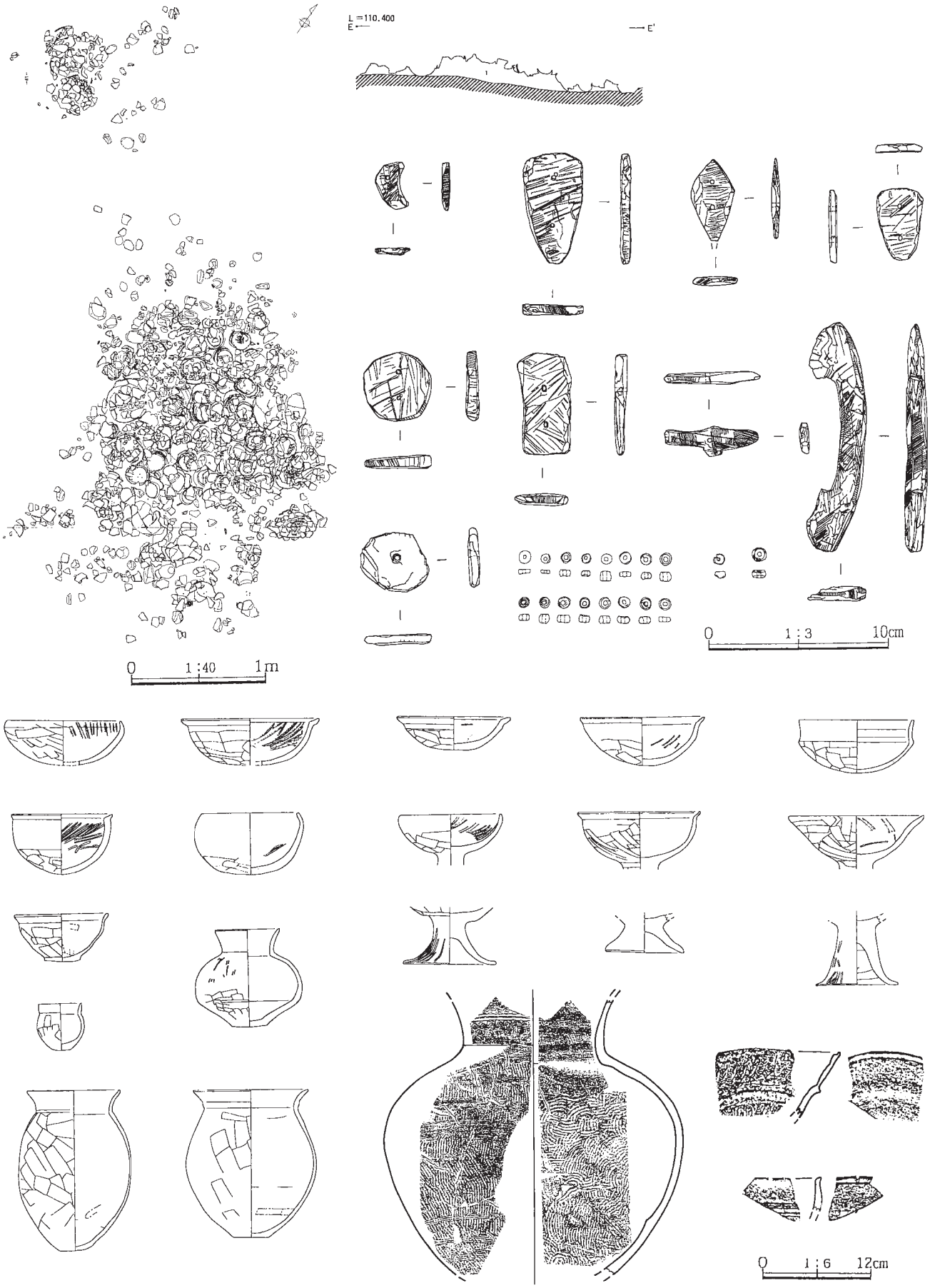


図７　寺尾東館遺跡（黒沢 1996）

黒沢元夫 1996『寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』高崎市教育委員会

講座・赤城山南麓の考古学2015　第６回

赤堀花しょうぶ園の女堀を掘る

川　道　　亨（伊勢崎市教育委員会）

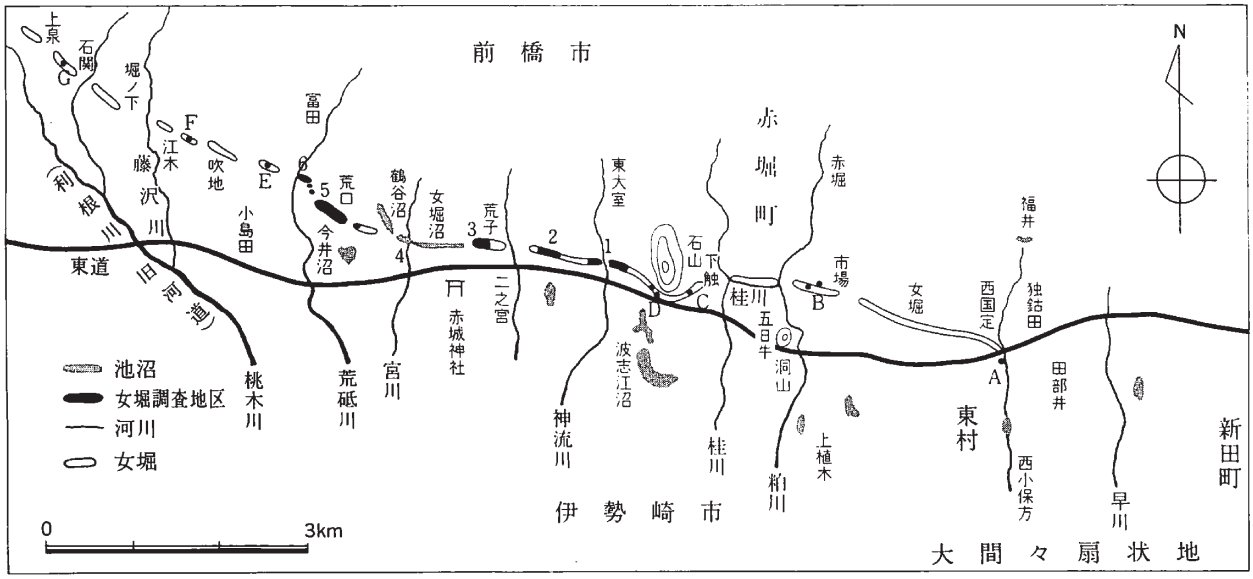
はじめに

ご紹介いただきました伊勢崎市役所文化財保護課の川道です。伊勢崎市では、史跡整備を目的に今日ご紹介する史跡女堀の発掘を始めて５年目になりますけれども、その担当をしております。よろしくお願いします。

伊勢崎市では史跡女堀に花しょうぶを植栽して史跡の活用を図っておりますが、正直女堀と言ってもなかなか通じません。花しょうぶ園と言った方が通じているのが正直なところです。花しょうぶが咲く毎年６月に、花しょうぶ園まつりを開催し、我々文化財保護課でもの方もテント１張り出して、パネル展示やクイズラリーをやっております。女堀の堀に２万４千株の花しょうぶが植栽され、時期には見ごたえのある所ですが、訪れていただく方々のほとんどは花しょうぶを見に来るので、史跡であることが十分に周知されていないのが課題であります。今日は、平成23年度から実施している発掘調査の成果をご紹介いたしますが、ご存知のとおり前橋市の女堀とつながっている点、過去の発掘調査の事例も含めて、今まで捉えられていた女堀というのはどういうものなのか、どういう風に考えられていたのか、その上で私が担当した伊勢崎市の発掘調査では実態が分かってきたのかご紹介ができればと思います。

女堀のルートを見る

まず女堀とは何か。非常に簡単に言いますと、前橋市上泉町から伊勢崎市田部井町までの約13kmに及ぶ中



発掘調査地点

1　東大室地区
2　飯土井宇地区
3　二之宮地区上ノ坊
4　二之宮地区大日塚
5　荒口地区前原
6　荒口地区前田

ボーリング地点

A　東村西国定
B　旧赤堀町飯堀下
C　旧赤堀町下触
D　旧赤堀町片田
E　前橋市富田町
F　前橋市江木町
G　前橋市上泉町

『よみがえる中世５　浅間火山灰と中世の東国』平凡社　1989より

世初頭の大規模灌漑用水路です。資料の地図にピンクや緑、赤で塗られている所がありますが、そこが女堀のルートです。その中で、赤い所が国史跡、緑がこれまで発掘調査を実施した箇所です。一番左側に斜めに流れているこの川は桃ノ木川です。女堀の取水点に関しては諸説あるのですけれども、桃ノ木川から水を取水して、荒砥川を渡り鶴谷沼の南をかすめ、二之宮の女堀沼に至ります。さらに東へ向かうと国道50号を横断して、史跡女堀の国指定史跡飯土井地区です。さらに神沢川を通過し史跡東大室地区の女堀に隣接して、伊勢崎の花しょうぶ園となっている史跡女堀です。ここから石山を周り JR 両毛線の国定駅付近までの約13㎞に渡る遺構が、女堀です。GHQ が戦後撮影した空中写真では、遺構の状況がよくうかがえます。画面は前橋市上泉町の女堀の取水点の付近の写真です。右側には桃ノ木川合流する藤沢川があります。上電の線路のあたりに見える細い筋が女堀です。時折地割で現地に行くと確認ができるくらいで、かなり戦後の状況から一変してしまって、現在ではこのような写真の状況ではないですけれども、過去の写真を見てみると掘割が残っている状態というのが見えます。さらに東側の写真です。森になっているこの箇所が、史跡女堀の富田地区です。それから荒砥川を渡り女堀が低地や川を東に横断しているのが見えます。次の写真の中央が前橋の総合運動公園です。この鶴谷沼の南に土手がありますが、これも女堀の土手の一部だと思います。東へ行くと、女堀沼として残っている史跡女堀の二之宮地区です。国道50号を超えたところが国指定史跡女堀の飯土井地区です。その東には、かなり蛇行している神沢川です。今では河川改修をして真っ直ぐな川になっていますけれども、かつてはかなり蛇行した流れになっていたようです。神沢川の西側は盛土が両岸に残っている史跡女堀の前橋工業団地地区。神沢川を渡ったこの辺りで、やや南に向けて女堀がカーブする地点が史跡女堀の東大室地区です。その隣が今日ご紹介する現在花しょうぶ園として活用している伊勢崎市の史跡女堀赤堀地区です。赤城山南麓には赤城山が20万年とか30万年前に爆発し、崩れて流れてきた山を流れ山と呼ぶのですが、史跡女堀赤堀地区の北側には流山の石山があり、その山裾を避けるように女堀が南へ大きくカーブしている。また、史跡女堀赤堀地区の南側には波志江沼があります。石山の裾から湧き出た湧き水によって、史跡女堀と交差する谷が形成されています。波志江沼はこの谷を人工的に塞き止めて造った灌漑用の溜池です。石山の丘陵を大きく迂回し、東へ行くと、桂川が女堀の中を現在流れ、この両岸には盛土が残っています。桂川となった女堀はさらに東側で粕川と合流します。粕川より東側となると、痕跡が明確ではなくなりますが道に沿って掘割の跡が若干確認でき、JR 両毛線国定駅付近までつながってきています。国定駅の北西には堤沼という沼があります。この地域は大間々扇状地で、今では桐生市内をを渡良瀬川は流れていますが、かつてはこの赤堀、笠懸、藪塚の辺りを流れていました。この大間々扇状地の先端部、扇状地の真ん中から南にかけて湧き水が沢山あり、堤沼はその１つです。堤沼の湧水は小さな谷を形成し、この谷へ女堀は落水させたと考えられています。今までの既存の水では足らなかった部分を、新たな用水を掘って水を補い、新たな水田を開削するためにこの女堀が掘られたのではないかと考えられています。女堀は荒砥川、粕川といった河川を女堀は横断していますが、水が欲しければ、それまでの周辺の河川から水を取れば事が足りるのかもしれません。そうすると赤城山南麓の水を使うということになります。しかし、赤城南麓の河川は、台風等で増水する一方、渇水期には少なく、非常に不安定な水であったということから、女堀は赤城南麓の河川からでなく、安定した利根川の水である桃ノ木川の水を取水して13㎞も開削をして用水を掘ったものが女堀と考えられています。それまでの赤城山南麓の縦に流れている川は、縦の水系から大きく変えて横の水系に持っていくというのは、それまでの既存の水系から灌漑政策の大きな一大転換があったのだと思います。戦後 GHQ が撮影した写真からは、女堀の堀割をうかがえるのですが、何時、誰が、何の目的で掘ったのかという記録は一切ないため、謎の女堀とされてきました。昭和50年代になりますと土地改良事業が後半はいろんな所で行われるようになり、女堀のある前橋市域も対象となり、いよいよ発掘調査が実施されました。その成果により昭和58年に保存状態が非常に良好な、前橋市の富田、二之宮、飯土井、前橋工業団地、東大室、前橋ではこの５ヶ所。それと同時に赤堀の花しょうぶ園となっている赤堀地区も史跡に同時に指定をされました。

女堀の年代

女堀は記録に一切ない謎の用水路とお話しました。そのため、いつの時代のものなのかということがよく分かっていませんでした。記録に一切ないので、平安

時代から南北朝時代の頃などと言われていたのですが、決め手がありませんでした。その年代の決め手となったのが、浅間山です。この浅間山が女堀の年代についての大きなポイントになってきます。発掘調査をしていますと、この浅間山の1108年の浅間Ｂテフラを見ることがあり、伊勢崎市で10㎝程度確認できます。現在確認されるのは当時噴火をした火山灰や軽石が圧縮された状態であることを考えると、相当な量が降下したことになります。この写真は、史跡女堀赤堀地区の発掘調査で実際に確認された、浅間Ｂテフラと、浅間粕川テフラです。この浅間粕川テフラは浅間Ｂテフラよりも上位にあることから浅間Ｂテフラよりも明らかに新しいテフラです。しかしこの浅間粕川テフラについての記録は、1129年の文献に記載があるのですが、その内容が「前年、先の年に降った火山灰が」、と言っています。前年は1128年のことを指すのか、それとも大規模に噴火した1108年のことを指すのか、結論は出ていません。ただ、浅間Ｂテフラが1108年に降ったことは、ほぼ間違いはないと考えられますので、12世紀初頭に降った火山灰の後に、黒色土が堆積する時間があり、その後女堀の掘削された排土がこの上に搬出されていることから、女堀は12世紀初めに降った火山灰以降の12世紀中頃から後半までその可能性を含むのではないのかなと近年では指摘されています。この写真は、史跡女堀赤堀地区の掘削された排土調査地点で、この排土下から浅間Ｂテフラを多く含んだ畝が残る畠が検出されました。浅間山が噴火した後に、Ｂテフラを鋤き込んだ畠が営まれることから、女堀は浅間Ｂテフラ降下直後ではなく、浅間Ｂテフラが降下し一定期間の後ということになりますので、12世紀中頃でいいのではないかと考えています。

荘園の開発

では、12世紀中頃はどういう時代だったかというと、時代は古代から中世へと移る時代です。中央では白河上皇が院政を開始し、この院政が本格的に始まりをもって中世と捉えられています。それから天皇家や貴族。それから武士たちはそれまでの古代の社会の中では、国から地方から給料を貰えたのですけれども、当時の国の組織の崩壊によってだんだん少なくなくなるため、経済的基盤を確保するために荘園を形成します。いろいろな時期に荘園と呼ばれるものがあるのですけれども、中世の王家領荘園が丁度、12世紀中頃から本格的に始まってくるという時代です。群馬県では浅間Ｂテフラが広域に降っていますが、12世紀中頃の半世紀程経過してから荘園の開発のラッシュを迎え、その一つが淵名荘です。

淵名荘は1130年以降に渕名氏が在地領主として関わった荘園とされ、女堀の流末に淵名荘があることから、渕名氏が女堀の開削に携わったのではないかと考えられています。

ただ、渕名氏だけが荘園形成に関わっていたのではないようです。鳥羽上皇の正妻の待賢門院璋子という人物がいます。なぜこの人物が急に出てきたかというと、渕名荘は、これも待賢門院璋子の発令によって荘園が造られたと考えられています。仁和寺法金剛院が1130年に落慶します。それ以降のこの寺の経営維持、基盤への財源としてこの渕名荘は形成されました。私が高校で習った時の荘園というのは、寄進地系荘園。地方の武士が自ら開墾して、そういう土地を中央の貴族、武士、天皇家に寄進をする。それによって庇護を受けて、在地の経営をする、寄進地系荘園というのを私は習いました。ただ、現在の歴史学の中ではそれは１つの荘園の形に過ぎないんだそうです。寄進地系荘園は下から上へ上げています。そうではなくて、上からトップダウンで発令される荘園の形、それは王家領荘園と言われています。渕名荘は王家である待賢門院璋子の発令によって開発が主導され、現地で開削に当たったのが淵名氏だと捉えられています。その開発の中で女堀の掘削計画も立案実施されたのでしょう。

女堀の発掘調査

では女堀の発掘した状況についてお話したいと思います。先ほどお話しました女堀には文献資料がありません。いつの頃からか、「男の人が戦争で出ている時に女性が掘ったのが女堀」といったことも言われています。さらには、女性が一夜にして掘ったとか、簪で掘ったとか、女性の初めての持統天皇もしくは北条政子といった女性権力者が掘ったのではないかとも言われてきました。女堀という名称からこういう話がまことしやかに出てくることは、裏返せばそれだけ女堀の実態がよく分かっていなかったということです。そして、ようやくその謎を紐解く発掘調査が前橋市市域の土地改良事業に伴って昭和50年代から始まりました。飯土井の昭和50年代に発掘をした女堀の写真ですが、堀の幅が28から30m程あり、中央５から７ｍの溝が掘られていて、これが完成した姿だと考えられています。今我々も女堀を発掘調査しますけれども、掘ると

水が湧いてしまうため、ポンプで排水しながら掘っていかなければなりません。女堀の掘削も水をどう処理するかが大きな問題だったわけです。一度にすべて掘り下げてしまうと、湧水で水浸しになってしまうので、女堀はまず大きく右と左に堀の中を縦に区分し、掘削排土を出したい方の反対側からある程度の深さまで掘り始め、反対側に搬出路を確保しておきます。次に搬出路としていた反対側を同じ高さまで掘り下げます。これを２～３回段階的に最後に先ほどの写真にあった通水溝をつけて完成をさせたという、段階的に掘り下げを行いながら女堀の掘削をしているというのが発掘調査で分かったんですね。この掘削の際にも作業分担を行って掘削をしていたことを示す小間割が確認され掘削の状況を示しています。

これは二之宮地区の発掘調査の写真です。ここも中央に通水溝が掘られ、堀の左右に掘削排土が乗っています。飯土井地区の写真でも通水溝が敷設されていますが、女堀の上幅が曲がっています。ここを境に工事区が分かれていて両工事区をつなげる際に無理やりつなげたと考えられています。

東大室地区の写真ですが、畠が確認されています。畠は掘削排土したから確認されていますが、おそらくこの一帯に広がっていたのでしょう。その畠の畝をつぶすような白線がありますが、女堀を掘った際に土を運ぶ際に通った作業道です。最初に掘削した排土は遠くへ搬出しながら徐々に手前に搬出されるため、作業道ができています。その左側は女堀の堀跡ですが、左側と右側で掘削された堀底の高さが異なっています。また、水を迂回させるための配水溝や作業分担を示す小間割が残される状況から、掘削は完成しておらず途中であることが分かります。

これまでの写真からは、水が流れた痕跡はなく作業が途中の状態であることから、女堀は完成をしていなかったと考えられます。何かの理由でその大規模工事はストップしてしまったことは明らかですが、その理由は大きく３点が言われています。

まず一つ目が、女堀の堀底を測ってみると、通水溝が付けられた二之宮地区などは堀底面の標高が高い一方、それ以外の地点は堀底がもっと低い状況に掘削されています。本来は緩やかな勾配を保って掘削されることが計画されたが、測量を誤り中間地点の二之宮地区で堀底が高くなってしまう施工ミスが発生したため、女堀は失敗したのではないかとされています。

２点目は、政治的な内乱によって女堀は中止になったのではないかという点です。女堀の掘削の中心を担ってきた一族が野木宮合戦で頼朝方に敗れるんです。棟梁を失った一団は、この作業を中止に追い込まざるを得なかったのかもしれないという解釈もあります。近年の調査で浅間粕川テフラが女堀掘削排土下から検出されたことにより、女堀の年代観がやや12世紀後半までの可能性を含むことが指摘されていますが、まさにその時期と符合する点が興味深いです。

３点目、台風などの自然災害です。発掘調査では、女堀が土砂で埋っている状態が発掘された所もあります。なぜ女堀は工事が途中なのか最大の謎ですけれども、もし完成していたとすれば、女堀には今でも用水が流れて、今私が発掘をするなんてことはなかったのかもしれません。そこでストップしたからこそ、この謎を含みながら今現在に至ると思います。

～休憩～

史跡女堀赤堀地区の発掘調査

まず資料の間違いがありまして、資料の３ページ。下の火山灰を説明している写真ですが、浅間Ｂテフラと浅間粕川テフラと書いてありますそれが逆でした。

伊勢崎市ではなぜ今史跡女堀の発掘調査をしているかというと、前橋市での昭和50年代の発掘調査成果をもって国指定されており、史跡に指定された当時は発掘していません。現在花しょうぶ園として活用していますが、史跡を保護して活用するためには基本的な情報は不可欠です。そのため発掘調査初めとした諸調査を平成22年度から着手し、平成23年度から６ヵ年計画で調査を実施しています。

史跡女堀赤堀地区ですが、北側に石山万徳寺という山がありまして、その山裾からの湧水により谷が形成され、その谷に女堀が交差するように掘られています。それこそが赤堀地区の特徴と言えます。女堀がGHQの写真でも川や谷を越えていましたが、谷を越える所の構造について女掘の工事自体が途中なので、その辺があまり具体的には分かっていないのが現状です。赤堀地区については保存状態が良好なので、谷と女堀の交差点が分かるのではないかと期待をされている所です。

赤堀地区の調査は、平成23年度から去年度までの４年間をかけてＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ区の４地点の調査をしてきた状況を見ていただこうかと思います。前橋市の東大室地区に近接した25年度調査のＣ区から紹介しま

す。堀底調査では花しょうぶが植栽されている現況から深さ２ｍくらい掘りましたが、上幅が７ｍ溝状の遺構が検出されました。昭和50年代に調査が実施された東大室地区ではこれと同等の規模の溝が確認されております。調査では完成形と考えられる通水溝と指摘され、Ｃ区で確認された溝も東大室地区につながる同じ通水溝と考えられるのですが、通水溝は作業範囲を示す小間割りが残され、もう少し掘削する必要があったと考えられます。また、南側の小間割の東端には階段状遺構が確認されていることから、この階段を使用して掘削排土が搬出されたのでしょう。Ｃ区から50m南の23年度調査のＡ区ですけれども、堀の中のＡ３区Ａ５区を調査しました。両区の中央に溝状に低い箇所が確認でき、その東側では小間割による掘削途中の状況がうかがえます。現段階では、中央の低い部分を溝状に先に掘削し、排水施設を整えた上で東側を小間割によって掘削中であったと考えます。またその目指すところは、Ｃ区と同様に中央の低い部分と小間割りを合わせて通水溝としようとしたのかと想定しています。

更に南側の女堀と谷が交差する地点のわずか南側の26年度調査のＤ区では、堀底がＡ，Ｃ区とは対照的に溝や小間割は確認されず平坦です。ちょうど谷底の深さにあわせて女堀の底面としているようです。史跡南端の24年度調査のＢ区堀底も、Ｄ区同様に平坦でしたが、堀底には女堀とは直交しないやや斜めに直線的な10㎝程の段差が確認されました。段差は堀内の西端から東端まで直線状のもので、大きく区画したこれも作業単位を示す、小間割と考えられます。何故女堀に直交しない小間割なのかと考えたのですが、前橋市荒砥地区でも同様な状況がうかがえていまして、堀に対して小間割の段差が直交していないです。ある地点から女堀の作業工区を均等割りすると女堀が曲がった所では、堀に対して直交した作業区が設定されなくなってしまうため、Ｂ区の大型小間割では女堀と小間割が直交しないのだと考えています。この大型小間割の西側に掘削排土が幅25m、高さ4.5mも搬出されます。掘削排土の断面の中央を見ていただくと黒・黄色・黒・黄色と当時の地表面から関東ローム層までの上層の土の単位が４度繰り返されています。先ほど小間割は底面付近の灰色粘土層を掘削した際に残された痕跡ですが、この区画はおそらくは地表面から区画が設定されそれが踏襲されて底面までに及んでいると考えています。つまりＢ区の掘削排土の４度繰り返された掘削排土は、この大型小間割内を掘削排土から遠い東側から表土付近の土を４分割をして、順次西側へと掘削したことを表していると考えられます。掘削排土の東端には硬く締まった土層が幾重にもなっており、ここを作業道として大型小間割から搬出したのでしょう。

これまでの調査で、Ｃ区とＡ区では溝を掘っていて掘削が進行中であった状況がうかがえました。一方、谷を挟んだＤ区とＢ区の堀底面は同一レベルに掘削された上に平坦であり、谷を挟んだ北側と南側では状況が異なることが分かってきました。当初Ｃ区やＡ区で溝状遺構が確認できたので、Ｄ区でもその延長が確認できるかと考え設定したが確認できず、堀底面の様相も大きく異なっていた。Ａ区やＣ区の溝状遺構は、完成形と言われている通水溝の形に近づけようとしている段階ではないかと想定しているところです。しかし、Ｃ区やＡ区での溝状遺構行き先はＤ区やＢ区では確認できなかったため、谷の方へ水を排水して、Ｄ区やＢ区に水を入れないようにする。違う作業区に水を入れないようにしているのだろうと思います。ということはＣ区やＡ区、東大室地区を含む一帯というのは、１つの作業工区が設定されたのだろうと思います。一方でＤ区やＢ区を含む南側の地域は、掘削されている状況が全く異なっています。実はＤ区西側で溝が発見されていますが、トレンチ調査で一部が確認されただけですので、この溝が堀内へつながるというような判断はすぐにはできませんが、その北側の等高線の地形を見る限りでは急激に上がっています。Ｄ区の溝が急激に上がる自然地形へとつながっていくとはあまりにも不自然で考えられないんです。Ｄ区の溝は、おそらく大きく東へ向きを変え堀内を通っていると考えています。この溝が、現在でも湧き出る湧水へとつながるのか、堀内のＡ，Ｃ区の工事の排水溝であるのか、それを来週月曜日から調査を始める予定ですので、丁度良いタイミングで呼んでいただいたかなと思います。

今までの調査の成果ではやはりこの史跡女堀の赤堀地区について、水が流れた痕跡はやはりなく、工事はやはり途中で止まってしまっている。谷を挟んだ北側と南側の堀底の状況が異なることから、谷を挟んで工区が異なっていたのではないかと想定しています。

女堀の年代について、浅間Ｂテフラと浅間粕川テフラが赤堀地区でも確認できています。年代については決定的な所はまだ得られませんが、12世紀の中頃と私は今のところ考えておりますが、12世紀後半まで含むのかどうか、議論によってはもう少し新しい段階まで

含んでもいいのではないのか、13世紀までいく可能性はないのか、その辺の所も、可能性はなくはないのかもしれませんが、12世紀中頃、いっても後半の所で留めていくことが今の段階ではいいのかなと思っています。また赤堀地区でも掘削排土下より畠跡が確認されています。土壌分析の結果陸稲の可能性が非常に高いという結果が出ています。

図で黄色く示した女堀が堀の部分です。今回の調査で確認できた女堀の上幅を測ると27mになります。これまでの調査で30mとかそういう所もあったようですけれども、この赤堀地区の３箇所の調査では上幅が27mで一定しています。調査する前からずっと疑問だったのですけれども、何故これほどの上幅が必要なのか。Ｃ区では旧地表面から５ｍも掘削され女堀全線の中でも最も掘削深のある箇所だったようです。最大の掘削深があって、必要な勾配を保ち、かつ底面では必要な幅を確保するためには、上幅が27mということになるのではないかと考えております。路線決定をした際に最大の掘削深を考慮した上で27mの幅で設定をして、掘削し、着手した。そのために上幅が全部だいたい27mで統一されているのかなという風に考えています。

今年もこの10月から12月まで発掘調査を予定していまして、今まで調査をしてきた中での一番核心的な所を調査する予定です。現地説明会も開催予定ですので、ぜひ足を運んでいただけたらと思います。それからもう１つ。今日はこれから３Ｄの映像を隣でお時間のある方は見ていただこうと思うのですけれども、なぜそのようなことをやっているかといいますと、女堀の発掘調査は史跡整備を目的として今回やっています。ただ発掘調査をして報告書を出して終わりではなくて、その先の史跡整備をするための、情報を得るために発掘をしています。現地を整備するだけではなくて、今日ここで大室古墳群を活用して皆さんに来ていただいているように、史跡女堀ではそういうデータを使って小学校の子供達ですとか、地域の皆さんにそういった情報を分かりやすく見てもらいたいなと考え、東京福祉大学柴田研究室の協力の下、女堀の３Ｄ映像制作いただきました。

またお話できる機会があれば呼んでいただければ幸いです。これでお話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

～質問～

Ｑ１　今の測量技術から見て、当時よくここまでやったなとか、これは不可解な測量でとか、高低さを見るとその辺が見えるような気がするのですけれども、その技術の差というのは？　もう１つは道具をどのように使っていたか？

Ａ１　等高線に沿って女堀が設定されている点から、精度といえば今のデジタル技術とは及ばないかもしれないですけれども、かなり当時とすれば精度の高い測量技術が用いられていたと思います。では実際にどんな道具でやっていたか。残念ながら当時の測量具はよく分かりません。当時は95mという認識はなかったと思うのですけれども、取水からの女堀のルートが、水を使ったなんらかの測量技術が用いられたのではないのかなという風に考えています。

大室古墳の教室　講座・赤城山南麓の考古学 2015
『赤城山南麓の古代を学ぶ』第 6 回　平成 27 年 10 月 3 日（土）

「赤堀花しょうぶ園の女堀を掘る」

伊勢崎市教育委員会
川 道　亨

１．はじめに

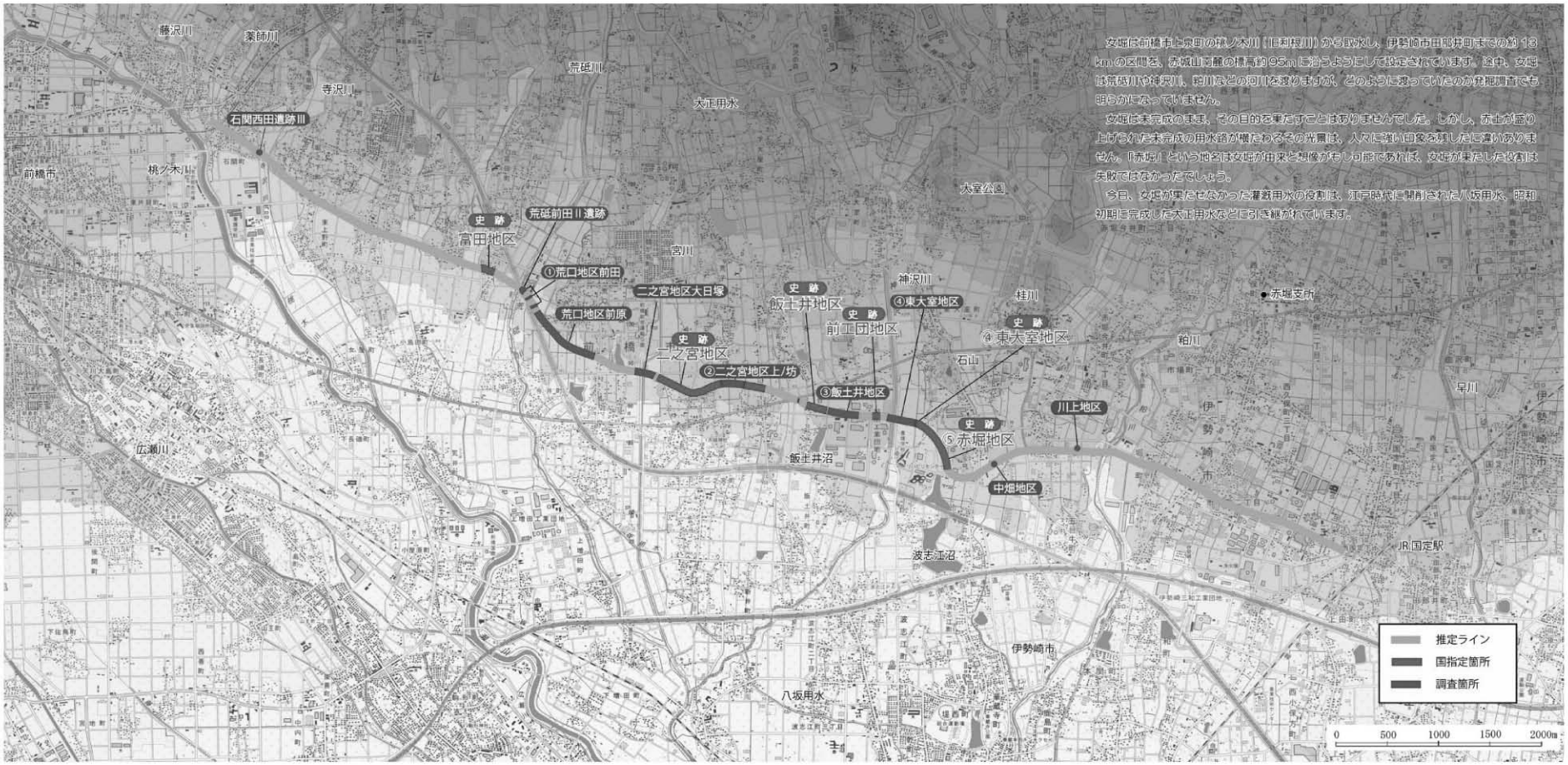
２．巨大用水路「女堀」

３．国指定史跡女堀

４．女堀は何時開削されたのか？

５．女堀の開削者とその目的

６．史跡女堀赤堀地区の発掘調査



2. 巨大用水路「女堀」

女堀は何時、誰がそして何の目的で掘削したものであるか文献にはその記載は一切なく、赤城山南麓に遺された遺構だけが多くの労働力を投入したであろうことを物語っていた。しかし、昭和 50 年代に群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われた発掘調査によって、中世初頭（12 世紀中頃）の巨大な灌漑用水路との見解が出され、その規模は前橋市上泉町から伊勢崎市田部井町までの総延長約 13 キロに及ぶ長大な遺構であったが、完成した姿ではなく未完の水路であることが明らかとなった。その成果は考古学のみならず歴史学、土木史、農業史と多くの分野から注目をあつめ、当該期の灌漑を目的とした地域開発の垣間見ることのできる極めて重要な遺跡であると結論付けられた。

3. 国指定史跡女堀

昭和 50 年代の発掘調査成果により、保存状態の良好な前橋市 5 箇所、伊勢崎市 1 箇所が、昭和 58 年に国指定史跡となった。伊勢崎市（旧赤堀町）では、平成元年より花しょうぶを植栽して保護し、赤堀花しょうぶ園としてその活用を図り、毎年約 10 万人が訪れる名所となっている。

史跡女堀　富田地区

史跡女堀　二之宮地区

史跡女堀　二之宮地区

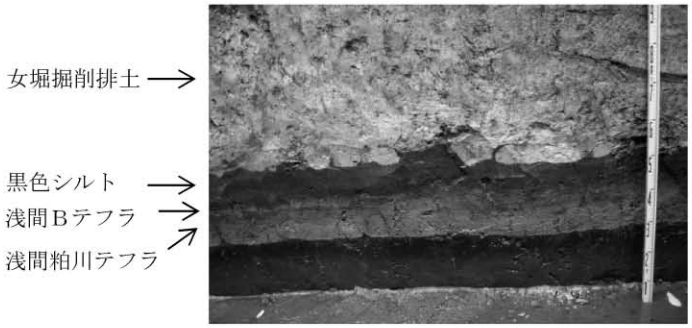
史跡女堀　飯土井地区

史跡女堀　前橋工業団地地区

史跡女堀　赤堀地区（赤堀花しょうぶ園）

4. 女堀はいつ掘削されたのか？

開削時期については、浅間山を給源とする 1108（天仁元）年の浅間Ｂテフラ及び、1130(大治 3)年？の浅間粕川テフラが女堀掘削排土下に確認できることから、女堀の開削はそれ以降となる。また、浅間粕川テフラ上には 15 ㎝程の黒色シルト層が形成されていることからテフラが降下した直後ではなく、やや時間が経過した後に女堀の掘削排土が置かれているため、12 世紀中頃から後半と考えられる。



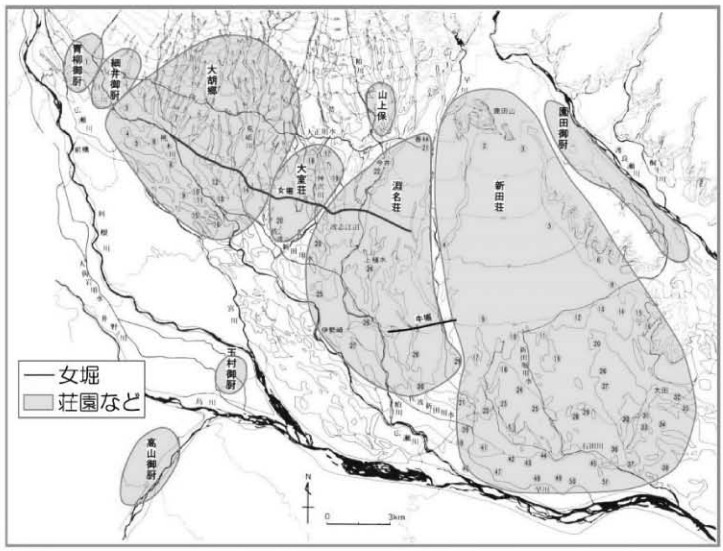
史跡女堀赤堀地区　掘削排土下の浅間Ｂテフラと浅間粕川テフラ

■浅間Ｂテフラ降下範囲図
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団「女堀」より

5.女堀の開削者とその目的

女堀の開削が行われた 12 世紀、中央では白河上皇の院政が始まり時代は古代から中世と新たなステージとなった。この頃、貴族や武士たちは経済的基盤を求め荘園の開発を行うようになり、上野国でも次々と荘園や御厨が立荘されるようになる。

当時、伊勢崎市の北部域占めた淵名荘は、鳥羽上皇の正妻待賢門院璋子が 1130（大治 5）年に建立した仁和寺法金剛院の御願寺領である。この淵名荘の在地領主となり、現地の経営にあたったのが淵名氏で、淵名荘の立荘もしくは経営維持のために新たな灌漑用水路の開削が計画され、さらに浅間山火山灰の再開発も一つの契機となって、女堀の開削が計画されたと考えられる。



■赤城山南麓の地形と荘園・御厨・郷

平凡社　よみがえる中世５　より

待賢門院璋子

6. 史跡女堀赤堀地区の発掘調査

伊勢崎市下触町に所在する史跡女堀赤堀地区は、現在花しょうぶを植栽し、その活用を図っている。しかし、史跡内をこれまで発掘調査した経緯がないことから、史跡整備を目的とした発掘調査を平成 23 年度から 6 年計画の発掘調査を実施することとなった。

現在すべての調査は終了しておらず、４年次までのＡ～Ｄ区の調査成果の概要を説明したい。

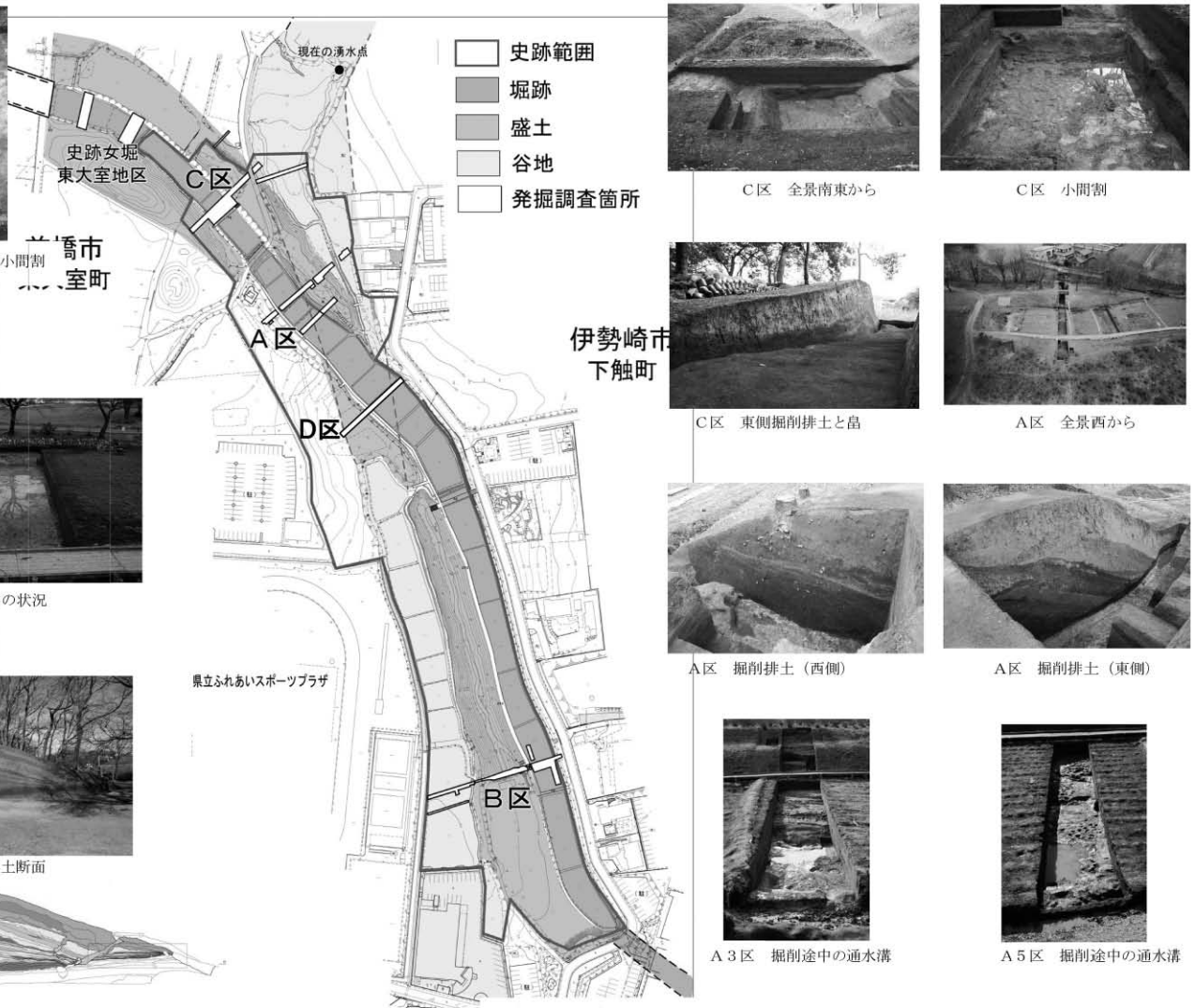
すべての調査区において女堀は掘削が着手されているが、堀底には水が流れた痕跡はなく、やはり未完であったことが追認できた。また、開削時期についても女堀では２例目となる浅間粕川テフラが確認でき、12 世紀中頃から後半と推定する。

Ｃ区では幅７ｍの通水溝が確認でき、西側の東大室地区の掘削完了直前と考えられている通水溝とつながるものとなり、Ａ区では排水溝と小間割によって掘り下中の箇所は、通水溝と考えられる。一方、Ｄ区やＢ区では堀底が平坦をなしＣ区やＡ区と大きく様相が異なるため、作業工区が異なるためではないかと推測される。女堀と谷地が交差する地形は赤堀地区の特徴でもあり、工区の設定に大きく影響していると思われる。また、女堀と谷地の交差地点は、これまで確認されていない女堀の分水構造の存在の指摘がされているが、現段階では確認できていない。

6. 史跡女堀赤堀地区の発掘調査

史跡女堀赤堀地区西側から

史跡女堀東大室地区通水溝小間割



C区　全景南東から

C区　小間割

C区　東側掘削排土と畠

A区　全景西から

A区　掘削排土（西側）

A区　掘削排土（東側）

A３区　掘削途中の通水溝

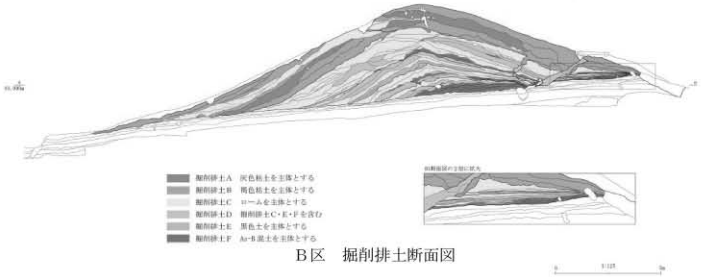
A５区　掘削途中の通水溝

D区　全景西から

D区　堀跡内の状況

B区　堀跡内の状況

B区　掘削排土断面



B区　掘削排土断面図

■A区　女堀の断面図

付録

後二子古墳範囲確認調査出土の円筒埴輪について

前　原　　豊（前橋市教育委員会）
永　井　智　教（日本考古学協会会員）
横　澤　真　一（伊勢崎市教育委員会）

1　はじめに

平成３年度に後二子古墳で大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査を実施した。その成果については前橋市教育委員会1992で報告した。しかし、この報告書は１カ月半という短期間の整理作業で作成したため埴輪実測図掲載が数点にとどまった。そこで今回、埋蔵文化財の普及・啓発および活用の目的で円筒埴輪実測図を紹介することとしたい。

2　後二子古墳の概要

国指定名称：後二子古墳附小古墳
墳形：前方後円墳（85m）・２段築成
指定年月日：昭和２年４月８日
所在地：前橋市西大室町2616−１ほか
指定面積：12,283㎡

後二子古墳は赤城山南麓の裾野先端部にあたり、東を桂川、西を神沢川にはさまれた標高135mの丘陵上に位置する。また、本墳の南には中二子古墳（111m）、前二子古墳（94m）の大型前方後円墳が並んで存在する。

本墳は、明治11（1878）年に石室が開口され、大刀４振・耳環11個・須恵器（高杯１、提瓶１）・轡１などが出土した。

平成３年度の調査では、主軸をＮ−70°−Ｗにとり、墳丘長85m、高さ11mを測る２段築成の前方後円墳で盾形に全周する周堀を持つことが判明した。葺石は使用していなかったが、幅広い基壇面（１段目）に推定800本の円筒埴輪、墳頂に推定150本の円筒埴輪列が存在することが想定された。

石室は、基壇面（１段目）から下がり、さらに地山を掘り込んだ半地下式の構造を持つ両袖型横穴式石室であり、墳丘主軸にほぼ直交し長さ9.0mを測る。石室は、羨道と玄室からなり、羨道には框石が設けられ、玄室に向かって１段下がる構造となっている。玄室には「間仕切り石」が設置される。また、天井面には「疑似まぐさ石」がある。両袖の構成も床面から１mの高さまで設置され、それより上は無袖の形状である。

また、基壇面（１段目）より下がった石室に出入りするため、石室前面に全長12mの墓道、周堀には土橋の渡りが存在する。

平成３年度の出土品には、図化した円筒埴輪79本の

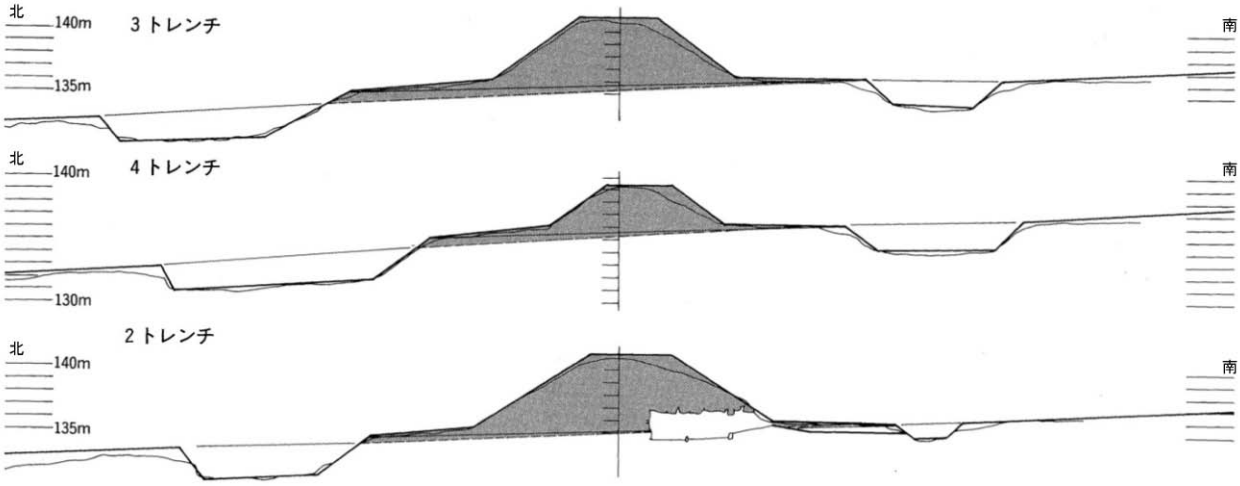


図１　後二子古墳横断図

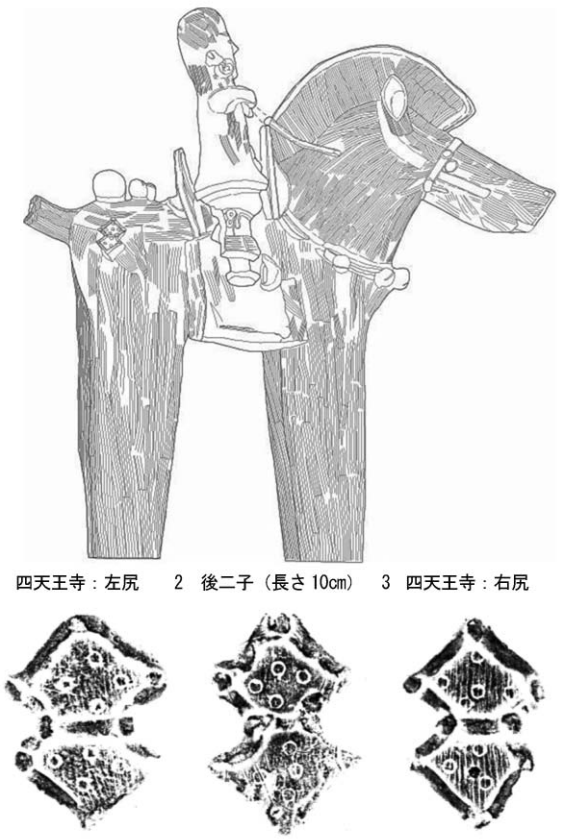


図２　盛装した人が乗る飾り馬と尻に付けられた剣菱形杏葉（四天王寺宝物館蔵）

ほか多数の円筒埴輪片、形象埴輪は人物、馬、家、盾、靭、鞆、蓋、大刀が出土している。前庭部からは６世紀第３四半期の土器群（土師器甕１、鉢１、杯15）が一括で出土し、小刀１、鉄滓２、焼土跡３が見つかったため、『古事記』にある「黄泉戸喫」に類似した葬送儀礼を想定している。

また、前方部北側の１Ａトレンチから馬形埴輪に付けられた剣菱形杏葉片が出土した。この破片は、大阪府四天王寺宝物館に収蔵されている「盛装した人が乗る飾り馬」の杏葉と極めて似るため、四天王寺の馬と同一作者により制作されたことが判明した。想像を逞しくすると、四天王寺宝物館蔵の盛装した人が乗る飾り馬は、後二子古墳の埴輪であった可能性が高い。

３　円筒埴輪の配列

基壇面の埴輪列を把握したトレンチは10本を数える。基壇面に配置された埴輪は、４条突帯と２条突帯の普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪で構成されていた。

なお、49は小像がつく円筒埴輪であるが、ほかに動物の足がついた破片が存在することから小像付の円筒埴輪は２個体以上存在する。

４条突帯円筒埴輪の配列…４条突帯の円筒埴輪列はZT東、１Ｂ、２Ａ、４Ａ、３Ａ、16、１Ａ、14トレンチと前庭部東側から北列、西列の８本のトレンチから確認されている。ただし、２Ａトレンチでは16の２条突帯の円筒埴輪が４条突帯に割り込む形で設置されており、後に挿入したものとも思われる。また16トレンチの50は２条突帯の可能性もある。これらは例外的なものととらえられ、北から西側にかけては４条突帯が基本的に配置されたもの思われる。

２条突帯円筒埴輪の配列…ZT西、４Ｂ、３Ｂトレンチといった古墳南側には、４条突帯と２条突帯が混在する形で使用されていた。26、36、53、54と９本中４本という半数近くの円筒埴輪が２条突帯である。

朝顔形円筒埴輪の配列…設置された状態で確認できた朝顔形円筒埴輪は３Ａ、16トレンチの22、48の２本である。また14トレンチの38も底径が小さく直立していることから朝顔の可能性が極めて高い。このように朝顔形円筒埴輪はコーナー部に用いたほか、３Ａトレンチの状況から等間隔で規則性を以って配置されたものと思われる。

形象埴輪の配列…形象埴輪群は明確に検出できなかった。種類は人物埴輪（ZT、３Ａ、４Ａトレンチ）、家形埴輪（ZT、１Ｂ、10トレンチ）、盾形埴輪（ZTトレンチ）、靭形埴輪（ZT、３Ｂ、４Ａトレンチ）、大刀形埴輪（ZTトレンチ）鞆形埴輪（ZTトレンチ）、翳形埴輪（ZTトレンチ）馬形埴輪（１Ｂ、３Ａ、16トレンチ）で破片が検出された。16トレンチから見つかった小像が付いた４条円筒埴輪は、３Ａトレンチでも出土している。このほか１Ｂトレンチからは須恵器大甕の破片が見つかっている。

以上のことから形象埴輪がZTトレンチから多数見つかったことから家形埴輪を含む器財埴輪群は墳頂部から転落した可能性が高いことが指摘できる。このほか16、３Ａ、４Ａトレンチの出土状態に注目したい。16、３Ａトレンチの小像付円筒埴輪や剣菱形杏葉片、３Ａ、４Ａトレンチの人物群である。３Ａ、16トレンチは盗掘痕跡が見られ、多くの埴輪が持ち去られていたが、古墳の北西部一帯に人と馬を主体とする形象埴輪群が設置されていたと考えられる。

このように見ていくと後二子古墳では主体部である横穴式石室が南に開口するにかかわらず埴輪の設置は北面を中心に配置されたものととらえられる。

それは図１の横断図に見るように後二子古墳の地形が北への急斜面を利用した結果に大きく起因してい

る。結果として、北から見た方が雄大な眺望とならざるを得ない結果、北側に優先して４条突帯円筒埴輪列や馬や人物を含む形象埴輪群を設置したものと思われる。

なお、古墳の眺望視点について中二子古墳は、南からの眺望を意図したことが判明している（前原）。

４　円筒埴輪の様相

図化された円筒埴輪は全79点である。このうち底部から口縁部まで、ほぼ全容を知ることができたのは32点である。これに底部・口縁部を少し欠いた程度の個体を入れた47本を、ここでは後二子古墳の円筒埴輪の代表的なものとして取り上げる。墳丘規模に対する調査区の偏りや面積比率の低さ、調査直前まで頻発した盗掘によって失われた個体を勘案すると、この47本が果してどれだけ後二子古墳の埴輪様相において一般的な存在なのかは言うまでもないが、以下の検討の根幹に関わることなのでここに明記しておく。

取り上げる円筒埴輪は、大きく普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の二者があり、後者の占める比率は当然ながらかなり低く、47本中４本、一割程度であろうか。また、普通円筒の中には、既によく知られた小像の付いたものがあり、明らかに「普通」でないものだが、ここでは普通の扱いとしておく。

普通円筒埴輪は図を一見した限りかなりのバラつきがある一群であるが、墳丘全長が80mを越え、推定円筒埴輪樹立数が800本という規模の古墳から、トレンチ調査によってランダムサンプリングされた結果と考えれば、その印象は当然とも思われた。

１）普通円筒埴輪の分類

既に作成された実測図による机上論で、実物を手元に十分な観察が困難な今回、注目したのは単純に器形、特に突帯間隔である。これは普通円筒43本中、確実な２条３段の２個体を除くと、全て４条５段であったからである。また、実見個体には突帯設定の痕跡を認める個体は無く、その点では企画性に乏しい、寛容な制約下での製作であったことが予想される。従って突帯間隔の同じ個体は、製作時の作業者グループの最少単位を示す可能性が高いと思われる。

結果として２条３段を含め、普通円筒埴輪は15類に分類された。各類型相互の関係については掘り下げることができなかった。将来的には各類型相互の関係について、実物の検討をもとに統合する必要があると思われる。冗漫となるが、以下各類型について詳しく説明する。

１類…４個体で、全体に細身、各個体は其々焼成等の雰囲気が異なる。また、下から２段目に透孔が無い４・46に対して８は下から２段目に透孔を有している。

２類…２個体で、中２条の突帯の位置はややずれているが、透孔の配置や切り方は類似している。

３類…よく似た３個体で、下から２段目に透孔が無く、最下段の間隔が狭い「低位置突帯」的なものである。

４類…５個体で、突帯間隔はかなり近似だが太身から細身まで差が目立つ。

５類…４個体で、４類同様突帯間隔は近似だが、底部と口縁部の高さにブレがあり、突帯貼付の起点が底部でなかった可能性がある。

６類…突帯間隔のブレがやや目立つが、透孔が方形という特異な共通点で括られる。猿の親子と犬の小像が貼付される49は特徴的である。

７類…１～６類に比べて一回り小さい５個体で、55・34・68は透孔の切り方も類似する。

８類…一回り小さいもので、全体に良く似通った３個体である。

９類…７個体で、41・18・42は良く似ているが、反面14・30は歪で突帯間隔のみが共通する。

10類…１個体のみで、器高は本古墳の普通円筒の中で最大である。雰囲気は全く異なるために別類型としたが１類の突帯間隔に近似で、１類の亜種とすべきかも知れない。

11類…口縁部が短く特徴的な１個体で、突帯間隔からは５類とすべきだったかも知れない。

12類…１個体で、全体に歪で突帯間隔は７類に近似である。

13類…２条３段の可能性がある２個体で、４条５段とすれば１類の範疇である。

14類…２条３段で、突帯間がやや長く間抜けな印象を受ける１個体である。

15類…１個体で、全体に突帯が上寄りである。

以上の普通円筒埴輪15類の内、単に個体数では大ぶりな４・５類、一回り小さい７類が、後二子古墳において普遍的な４条５段の普通円筒埴輪と言えそうである。また、３類、あるいは１類も含めても良いかも知れないが「低位置突帯」気味の底部は、他の古墳と比較して何らかヒントを与えてくれそうである。６類は方形透孔が古様である反面、小像は独創的な製作が許される環境を想像することも可能で、極めて少数派とは言え後二子古墳被葬者の性格を暗に示しているかの

ようである。２条３段である14・15類はごく一般的なもので、隣接する小二子古墳のそれと類似している。年代観のクロスチェックとして有効なものと考えられる。

２）朝顔形円筒埴輪の分類

普通円筒埴輪と同様の視点で、Ⅰ～Ⅲ類に分類された。

Ⅰ類…胴部４条５段で、肩部が比較的丸い。突帯間隔からは普通円筒４類に対応すると考えられ、普通円筒７については細身であることから、むしろ朝顔の可能性がある。朝顔Ⅰ類の頸部が、ちょうど普通円筒４類の口縁部と同じ高さとなる。

Ⅱ類…下半を欠く１個体のみで、短い肩部と段間の下寄りに穿たれた透孔が特徴的である。普通円筒３類に対応すると考えておきたい。

Ⅲ類…胴部が３条４段で、２条３段の普通円筒14・15類に対応するようである（永井）。

５　円筒埴輪の年代観

後二子古墳の築造年代については、既往の調査所見によって前二子古墳、中二子古墳に後続するものとされている。これらは主体部である横穴式石室の構造や副葬品、前庭部から出土した土器等が根拠としたものである。

三古墳からは全容のわかる円筒埴輪も出土しているので、以下、簡単に各古墳の埴輪様相を説明しておく。

前二子古墳の円筒埴輪は４条５段構成で、器高61～64cm、底径31～33cm、口径39～44cmとなり大型の埴輪である。突帯間隔に統一感はなく、突帯設定の痕跡は確認されない。破片資料中には、Ｂ種横ハケが施された個体も少ないが確認される。形象埴輪は、石見型埴輪、大刀、蓋、靫、馬、人物、家等が出土している。蓋は笠部と円筒台が一体化したものであり、５世紀後半以降、群馬県に多く見られる形態である。

中二子古墳の円筒埴輪は５条６段構成で、その大きさから３種類に大別される。一つ目は器高60cm以上、底径33cm前後、口径40cm前後で、二つ目は器高60cm以上、底径30cm前後、口径34cm前後、三つ目は器高55cm前後、底径20～25cm、口径30cm前後である。前二子古墳同様に突帯設定の痕跡は確認できず、突帯間隔は不統一である。形象埴輪は、盾持ち人、人物（双脚）、靫、鞆、盾、大刀、翳、馬、家等が出土しており、前二子古墳よりも器財埴輪の種類が増えている。

後二子古墳の円筒埴輪は４条５段構成と２条３段構成のものがある。前者は器高47～64cm、底径18～32cm、口径21～32cmである。後者は器高33～38cm、底径11～15cm、口径26cm前後である。前２古墳と同様に突帯設定の痕跡は確認できず、突帯間の長さは不揃いである。詳しくは前節を参照されたい。形象埴輪は、人物、馬、家、翳、鞆、靫、大刀等が出土している。三古墳の埴輪を比較すると、前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳の順に小型化する傾向が指摘される。突帯の貼付け方や内外面の調整の結果による「仕上がり」も、徐々に省力化される印象を受ける。こうした様相は埴輪の時期差を示すと思われ、従来の三古墳の変遷観（前二子→中二子→後二子）との齟齬はない。

後二子古墳は、埴輪以外の様相から藤岡市七輿山古墳（TK10段階）から綿貫観音山古墳（TK43段階）の間に収まるものと考えられる。しかしながらこの時期における多条の円筒埴輪は、調査事例の少ない大規模古墳に伴うことが一般的であるが故に、不明な点も多い。また、樹立数も多く個体差が激しいことも、理解を困難にしている。一方で小古墳に樹立される２条３段構成の普通円筒埴輪については、調査事例も多く、群馬県内での編年もある程度導かれている（島田2001・中里2002）。

改めて後二子古墳における２条３段の普通円筒埴輪（16・53）に注目し、上記の編年に照らし合わせてみると、おおむねTK43段階であると想定される。ただし後二子古墳の２条３段の普通円筒埴輪は、その出土状況が本来の円筒埴輪列中に強引に割り込ませるかのように樹立された出土状態を示しており、いわゆる追加樹立の可能性が高いものである。それを踏まえるなら、４条５段の普通円筒埴輪は、一段階前のMT85段階と考えるのが妥当であろうか。今後は群馬県内における多条の円筒埴輪について、形式論的な視点で分析を重ねていく基礎作業の必要性を痛感する。なお、今回の埴輪の観察には高橋実果女史の協力を得た（横澤・永井）。

参考文献

前橋市教育委員会　1992　『後二子古墳・小二子古墳』
前橋市教育委員会　1995　『中二子古墳』
前橋市教育委員会　2015　『東アジアから見た前二子古墳』
島田孝雄　2001　「群馬県東部の円筒埴輪について」『埴輪研究会誌』第５号
中里正憲　2002　「群馬県西部の円筒埴輪編年―２条３段円筒埴輪を中心に―」『埴輪研究会誌』第６号

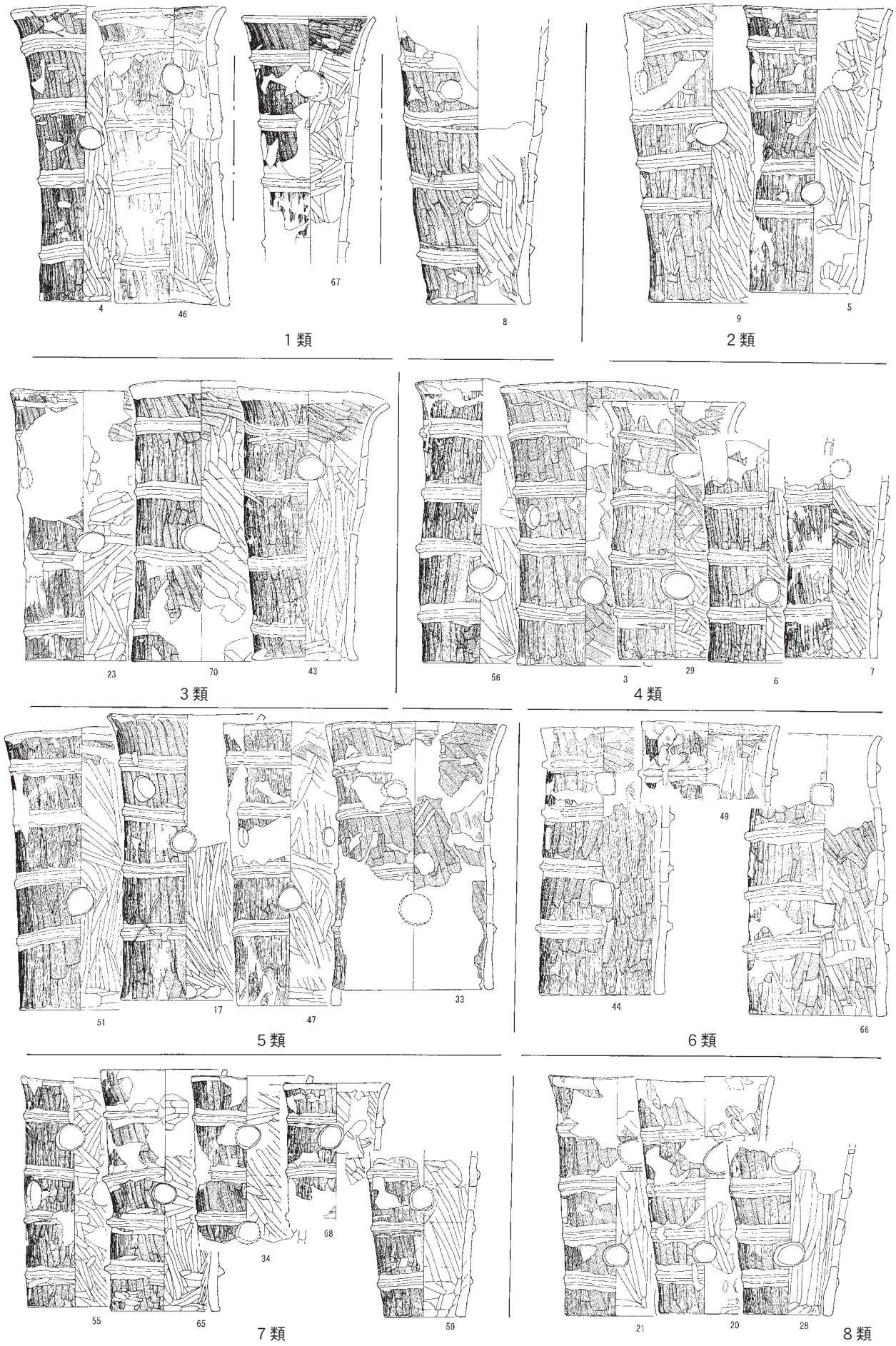


図３　後二子古墳円筒埴輪分類図（1）

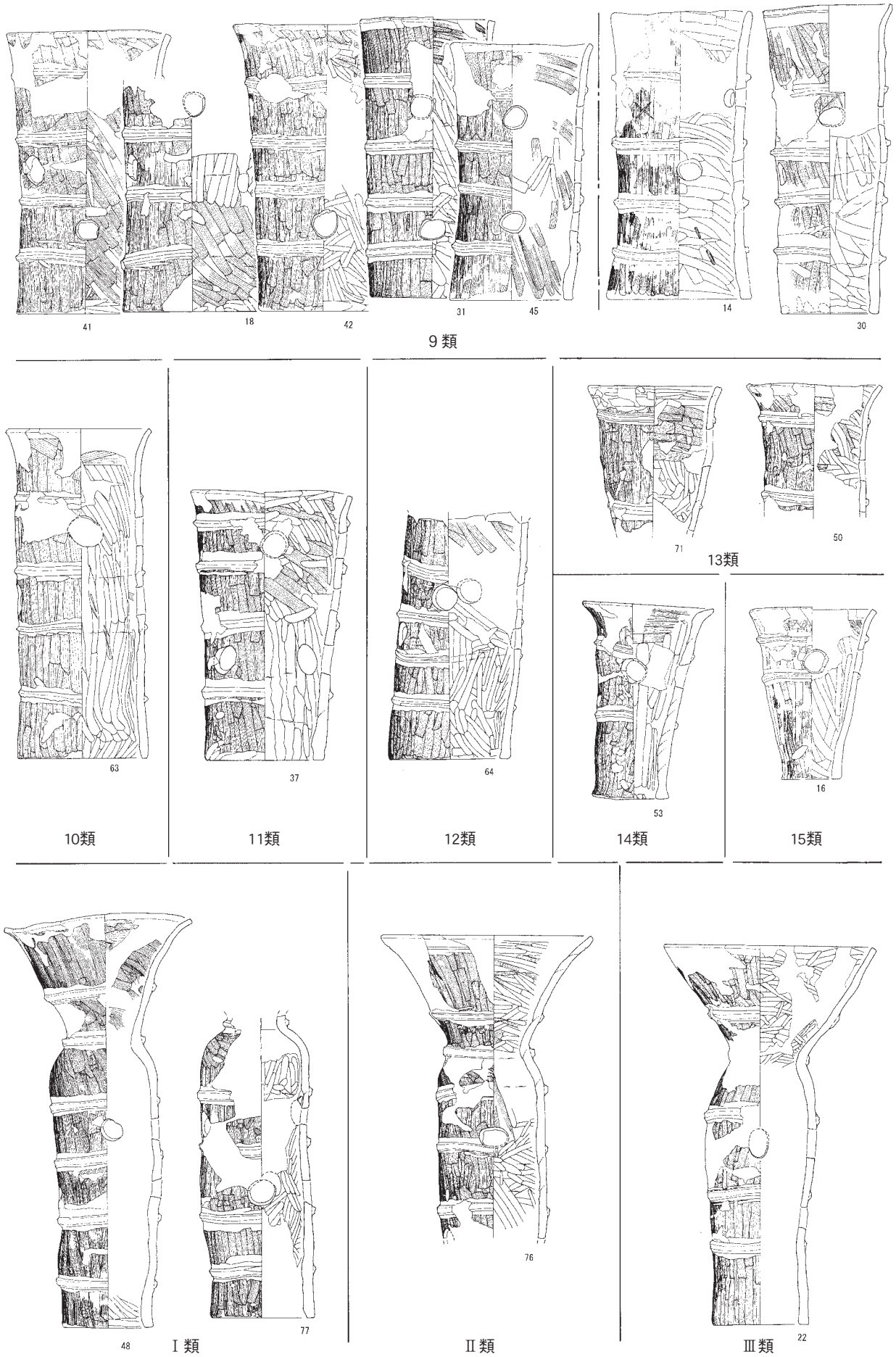


図４　後二子古墳円筒埴輪分類図（2）

後二子古墳埴輪計測表

通番	トレンチ	個体番号	種類	突帯数	透孔形	口径	高さ	底径	地点
1	1A	A1	円筒	4	円	31			西列
2	1A	A2	円筒	4	円			26	西列
3	1A	B	円筒	4	円	35	55	27	西列
4	1A	C	円筒	4	円	28	58	17	西列
5	1A	D	円筒	4	円	29	55	22	西列
6	1B	A	円筒	4	円			28	東列
7	1B	B	円筒	4	円			18	東列
8	1B	C	円筒	4	円			21	東列
9	1B	D	円筒	4	円	27	59	24	東列
10	1B	E	朝顔	6	円	37			
11	1B	F	円筒	4	円			25	
12	1B	G	朝顔	6	円	36			
13	1B	H	円筒	4	円	30			
14	2A	A	円筒	4	円	27	55	28	北列
15	2A	B	円筒	4	円			25	北列
16	2A	C	円筒	2	円	25	33	11	北列
17	2A	D	円筒	4	円	31	56	26	北列
18	2A	E	円筒	4	円			29	
19	2A	G	円筒	4	円	31			
20	3A	A	円筒	4	円	27	47	18	北列
21	3A	B	円筒	4	円	28	47	20	北列
22	3A	C	朝顔	5	円	40	73	18	北列
23	3A	D	円筒	4	円	30	53	23	北列
24	3A	E	朝顔	6	円	45			
25	3A	F	朝顔	6	円			17	
26	3B	A	円筒	2	円			13	南列
27	3B	B	円筒	4	円			20	南列
28	4A	A	円筒	4	円			17	北列
29	4A	B	円筒	4	円	28	50	21	北列
30	4A	C	円筒	4	円	25	59	19	北列
31	4A	D	円筒	4	円	26	54	24	北列
32	4A	E	朝顔	6	円	33			
33	4A	F	円筒	4	円	35	53	32	
34	4A	G	円筒	4	円	24			
35	4B	A	円筒	4	円			20	南列
36	4B	B	円筒	2	円			16	南列
37	14	A	円筒	4	円	31	52	23	西列
38	14	B	朝顔？	6？	円			20	西列
39	14	C	円筒	4	円	23			
40	14	D	円筒	4	円	20			
41	16	A	円筒	4	円	32	54	27	北列
42	16	B	円筒	4	円	32	55	25	北列
43	16	C	円筒	4	円	30	52	21	北列
44	16	D	円筒	4	四角	27	52	25	北列
45	16	E	円筒	4	円	28	49	24	北列
46	16	F	円筒	4	円	26	57	23	北列
47	16	G	円筒	4	円	26	55	20	北列
48	16	H	朝顔	6	円	37	80	18	角
49	16	I	円筒小像	4	四角	28			西列
50	16	J	円筒	2？	円	26			西列
51	16	K	円筒	4	円	27	55	24	西列
52	ZT	A	円筒	4	円			24	西列
53	ZT	B	円筒	2	円	26	38	15	西列
54	ZT	C	円筒	2	円			15	西列
55	ZT	D	円筒	4	円	21	45	19	西列
56	ZT	E	円筒	4	円	27	56	21	西列
57	ZT	F	円筒	4	円			19	東列
58	ZT	G	円筒	4	円			23	東列
59	ZT	H	円筒	4	円			16	東列
60	ZT	I	円筒	4	円			24	東列
61	ZT	J	円筒	4	円			21	東列
62	ZT	K	円筒	4	円			23	東列
63	ZT	L	円筒	4	円	28	64	25	東列
64	ZT	M	円筒	4	円			23	東列
65	ZT	N	円筒	4	円	25	47	22	東列
66	ZT	1	円筒	4	四角	27	55	27	
67	ZT	2	円筒	4	円	26			
68	ZT	3	円筒	4	円	21			
69	ZT	4	円筒	4	円	37			
70	ZT	5	円筒	4	円	29	55	27	
71	ZT	6	円筒	2	円	26			
72	ZT	7	円筒	2	円			14	
73	ZT	8	円筒	4	円	36			
74	ZT	9	円筒	4	円			21	
75	ZT	10	円筒	4	円	29			
76	ZT	11	朝顔	6	円	41			
77	ZT	12	朝顔	6	円			20	
78	ZT	13	朝顔	6	円				
79	ZT	14	朝顔	6	円				

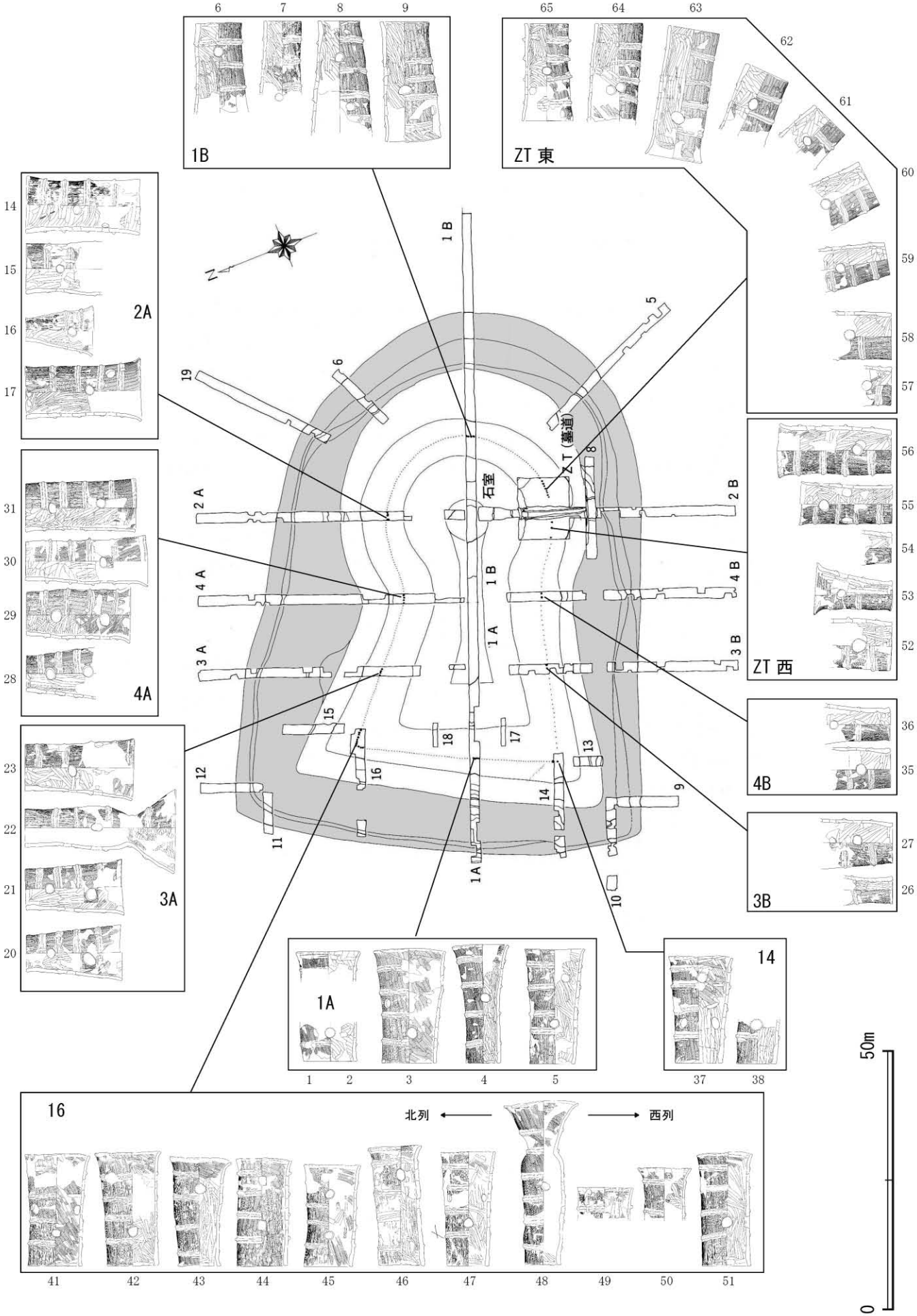
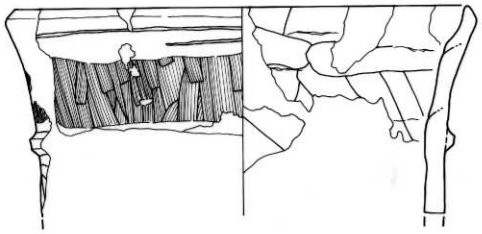
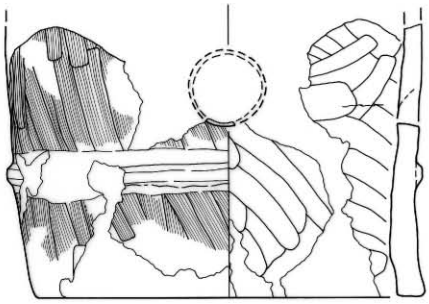


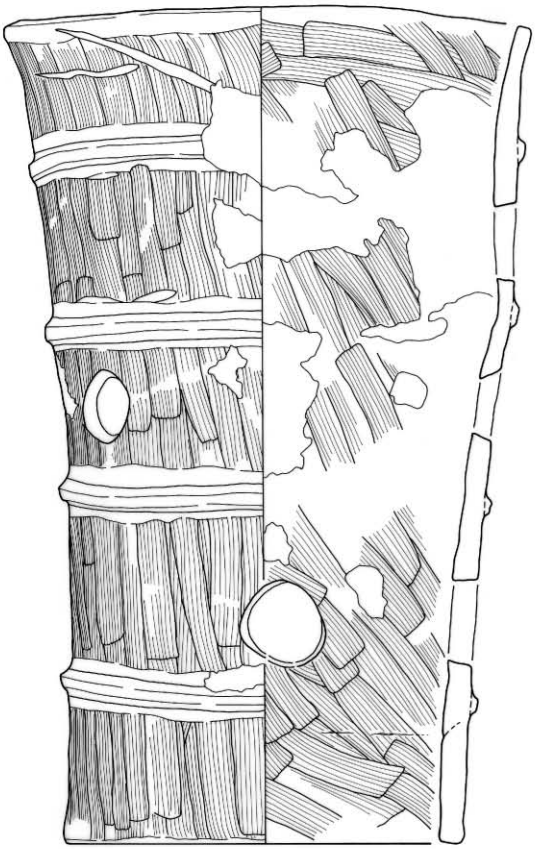
図５　後二子古墳のトレンチと円筒埴輪列



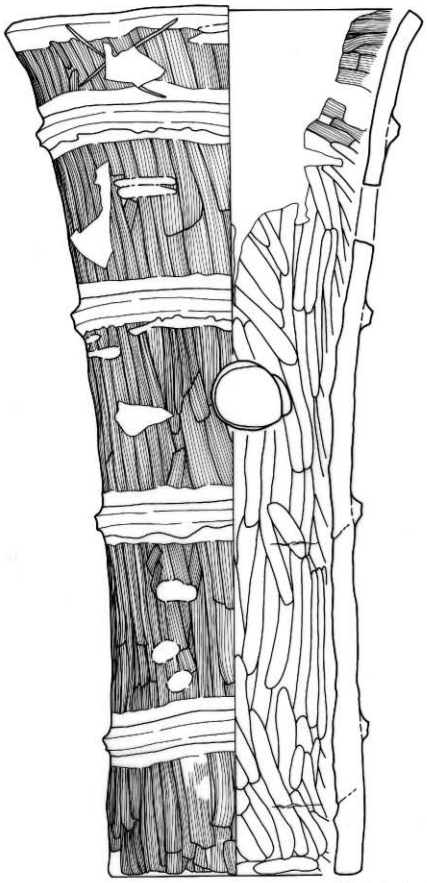
1(1A トレA1)



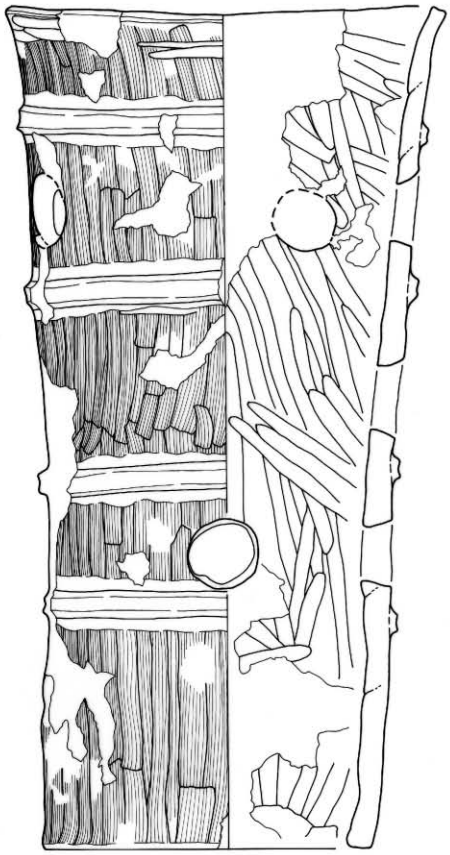
2(1A トレA2)



3(1A トレB)



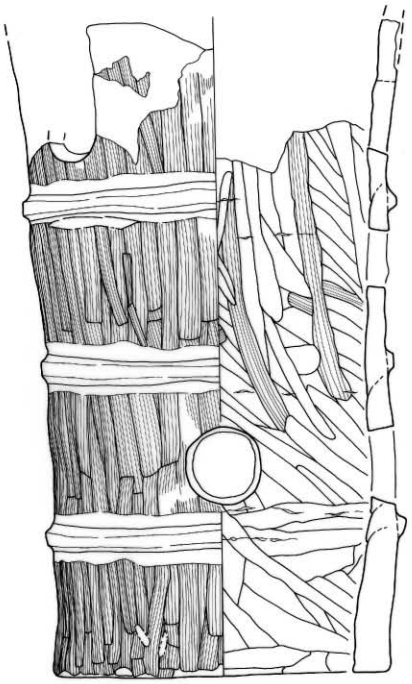
4(1A トレC)



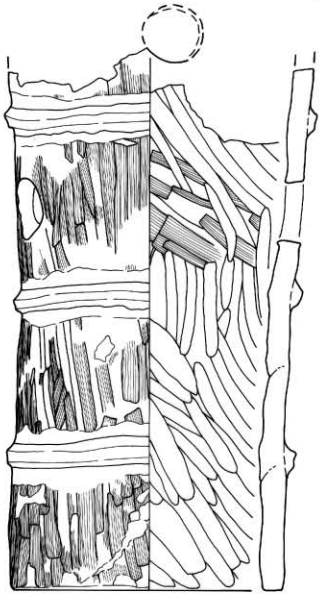
5(1A トレD)

0　　25cm

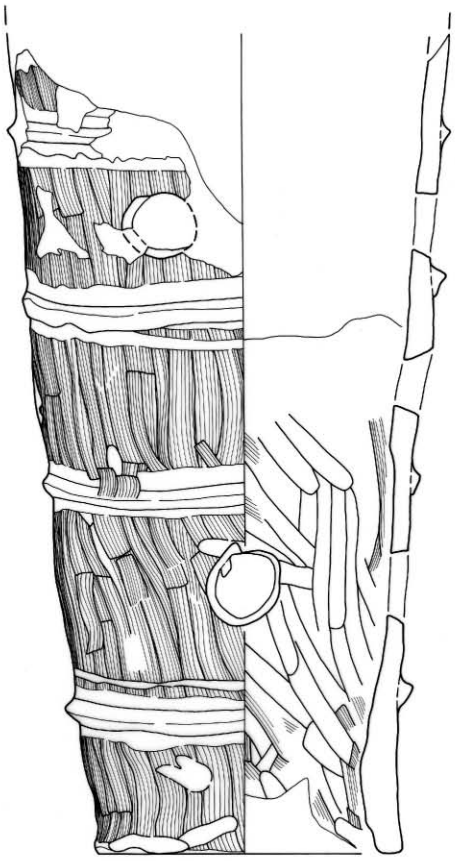
図6　1Aトレンチ



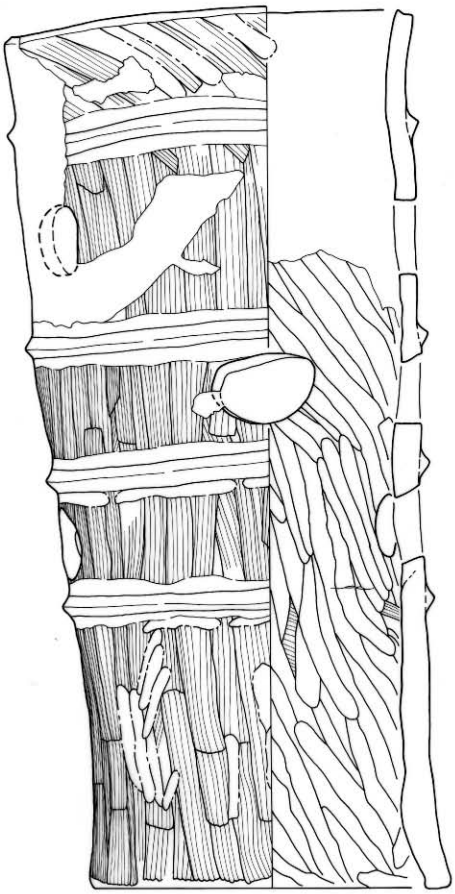
6(1B トレA)



7(1B トレB)



8(1B トレC)



9(1B トレD)

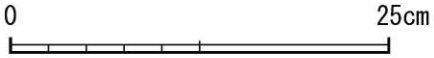
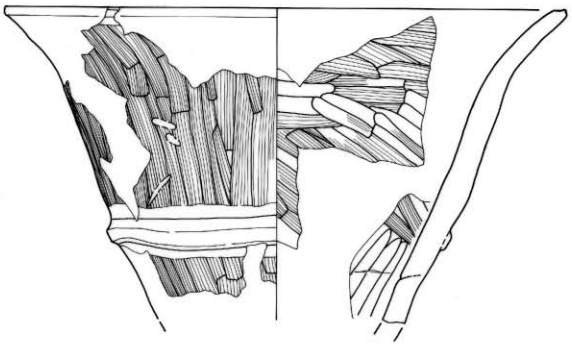
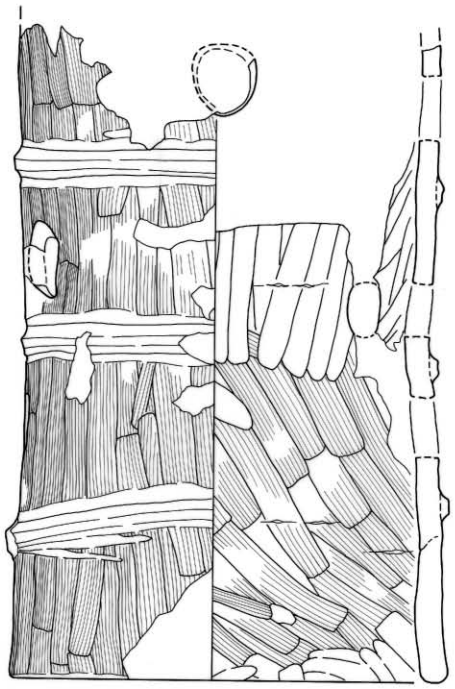


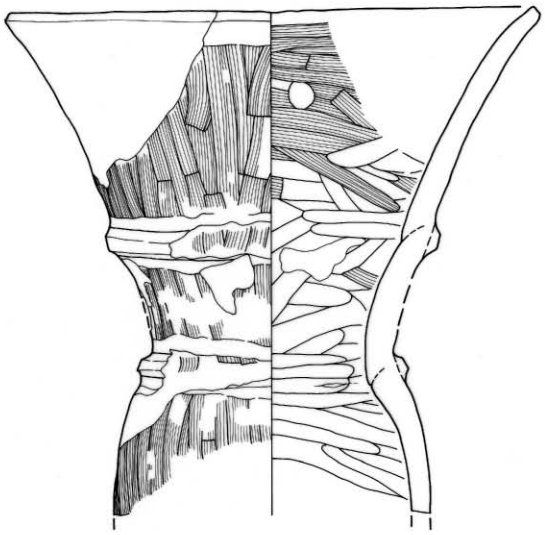
図7　1Bトレンチ（1）



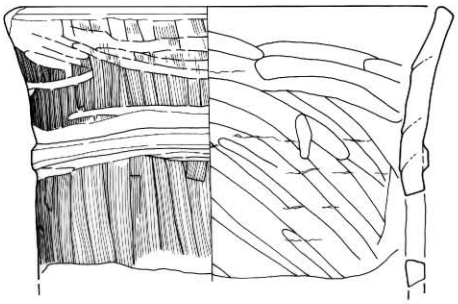
10(1B トレE)



11(1B トレF)



12(1B トレG)



13(1B トレH)

0　　25cm

図8　1Bトレンチ (2)

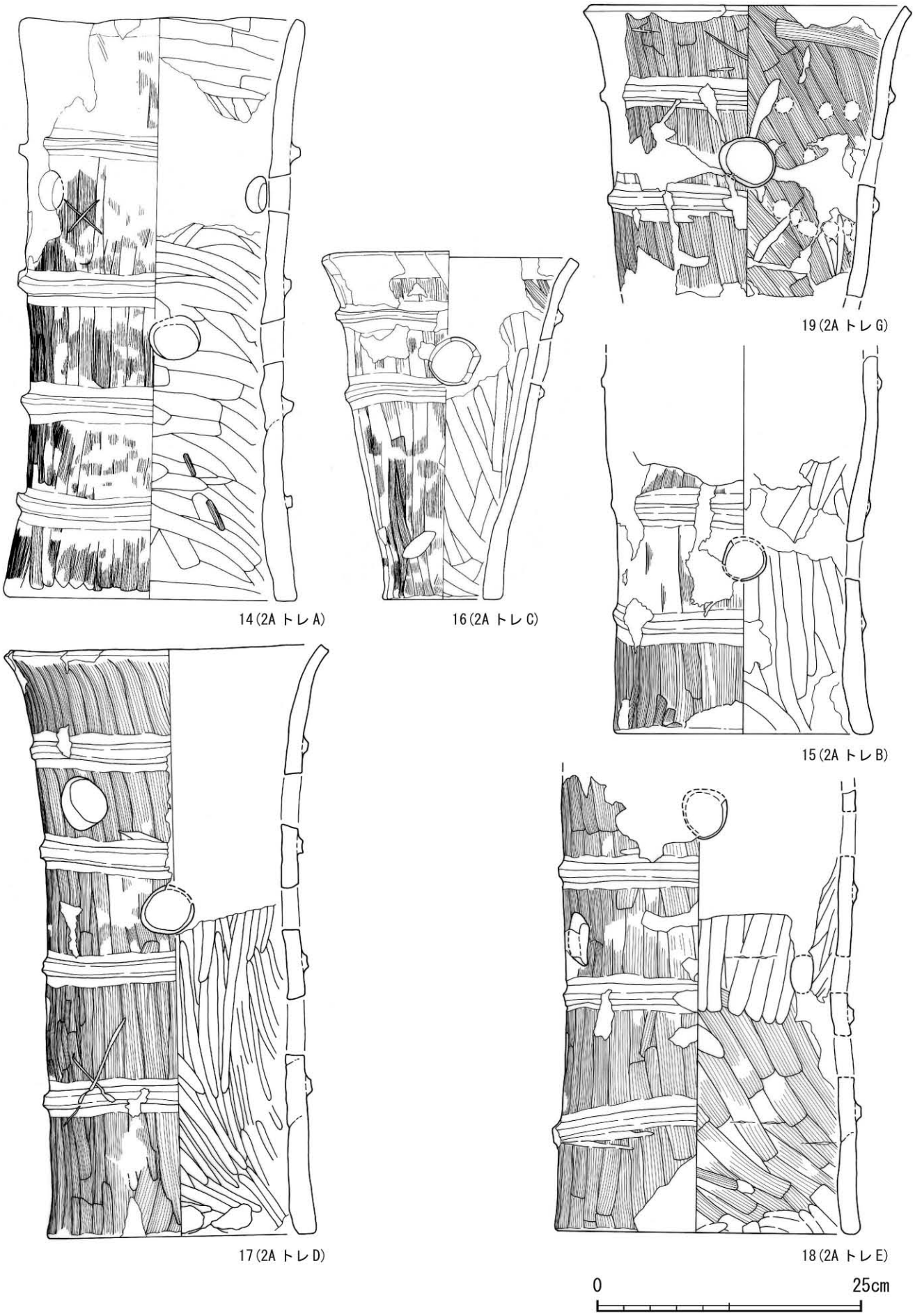
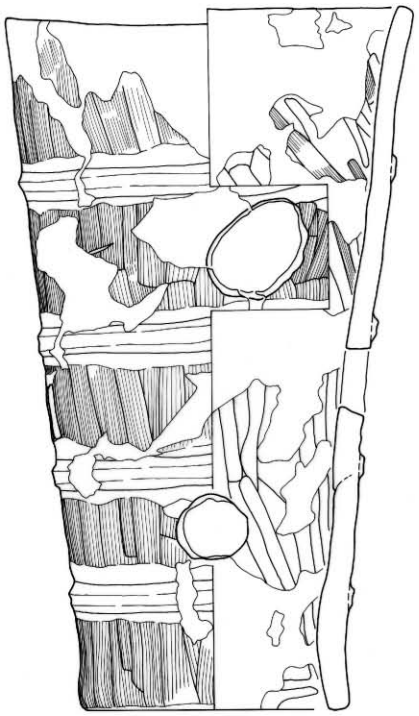
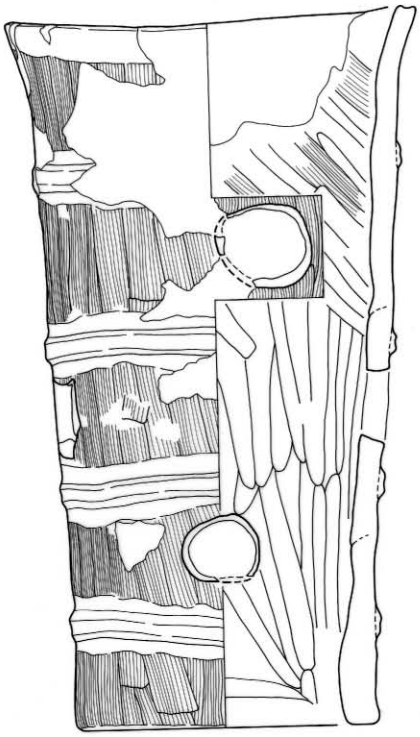


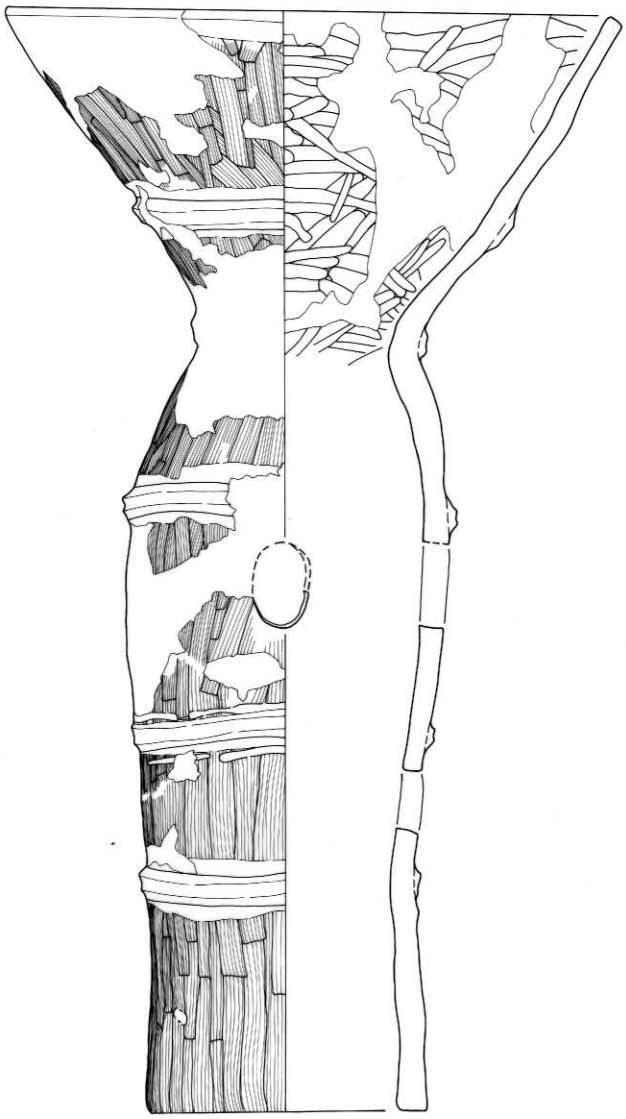
図9　2Aトレンチ



20(3A トレA)



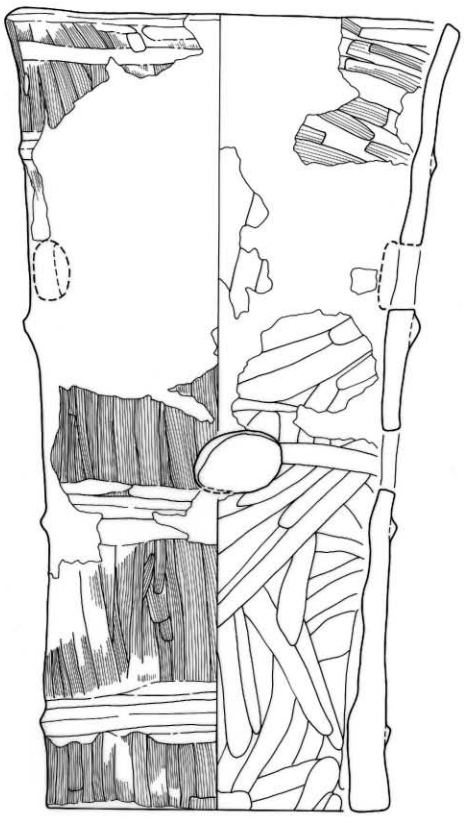
21(3A トレB)



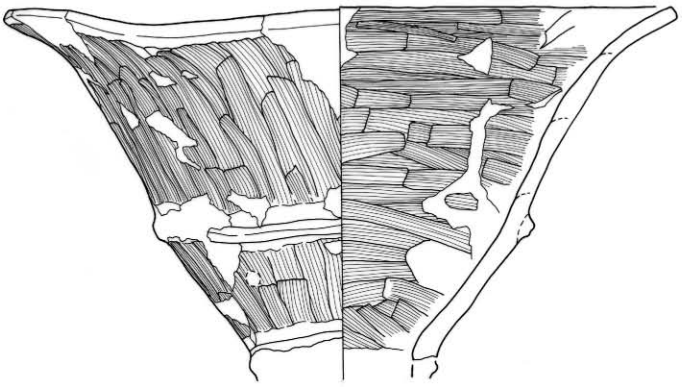
22(3A トレC)

0　　25cm

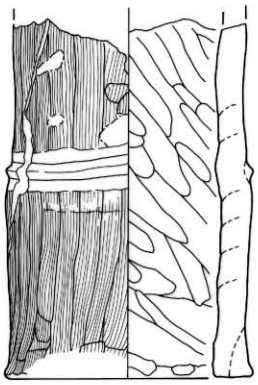
図10　3Aトレンチ（1）



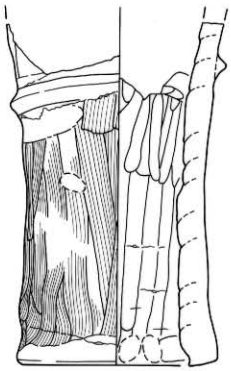
23(3A トレD)



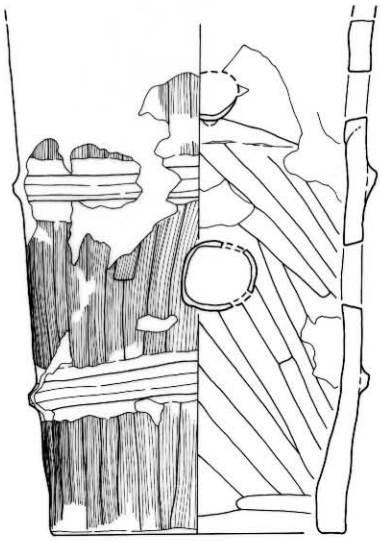
24(3A トレE)



25(3A トレF)



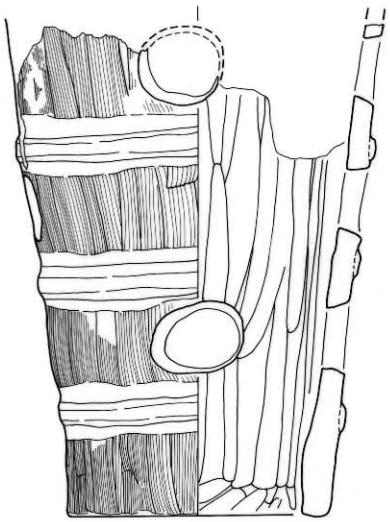
26(3B トレA)



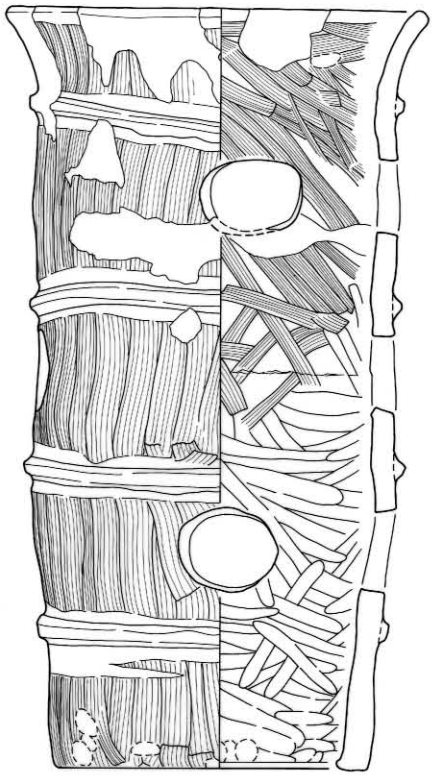
27(3B トレB)

0 25cm

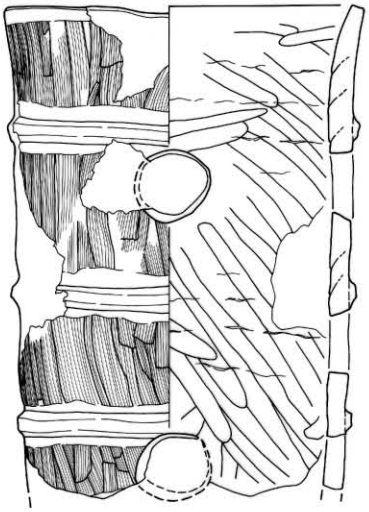
図11　３Ａ・３Ｂトレンチ（2）



28(4A トレA)

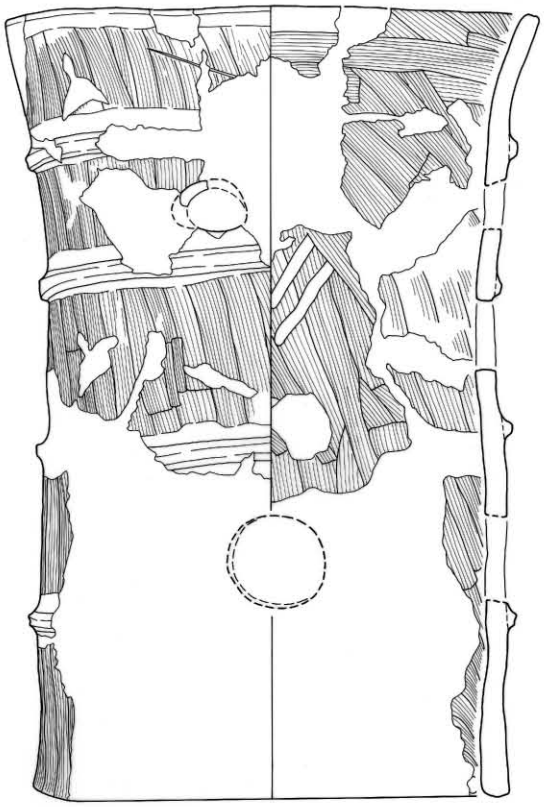


29(4A トレB)



34(4A トレG)

32(4A トレE)



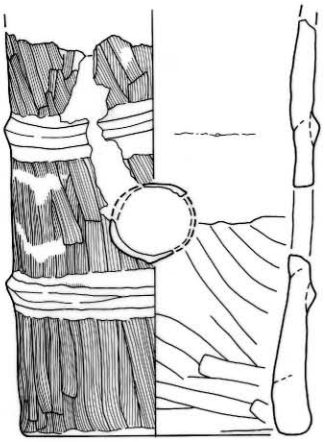
33(4A トレF)

0 25cm

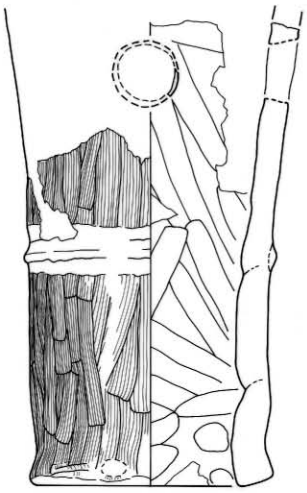
図12　４Ａトレンチ

30(4A トレC)

31(4A トレD)



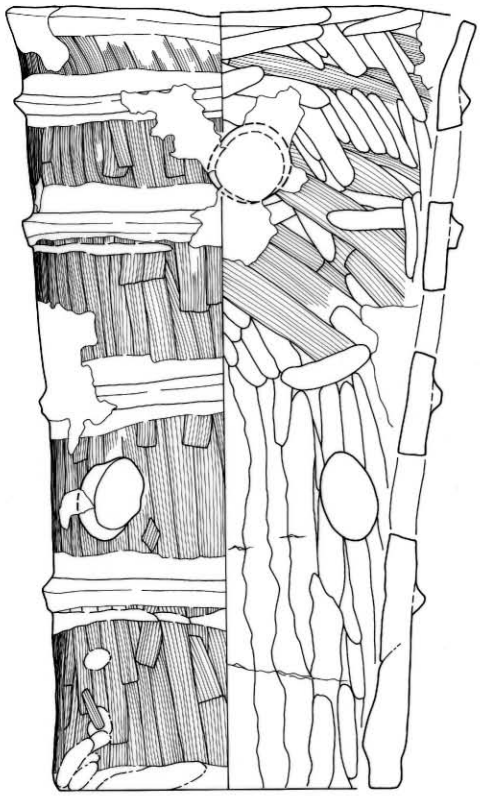
35(4B トレA)



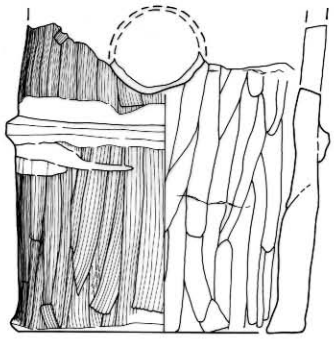
36(4B トレB)

0　　25cm

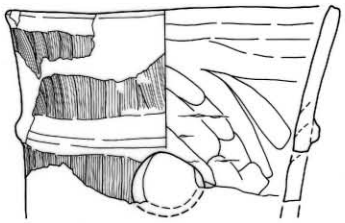
図13　４Ｂトレンチ



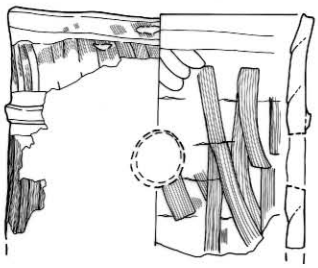
37(14 トレ A)



38(14 トレ B)



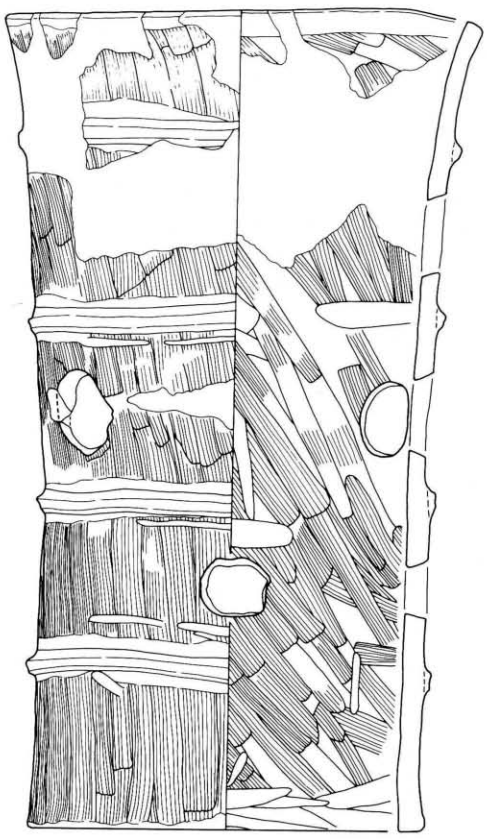
39(14 トレ C)



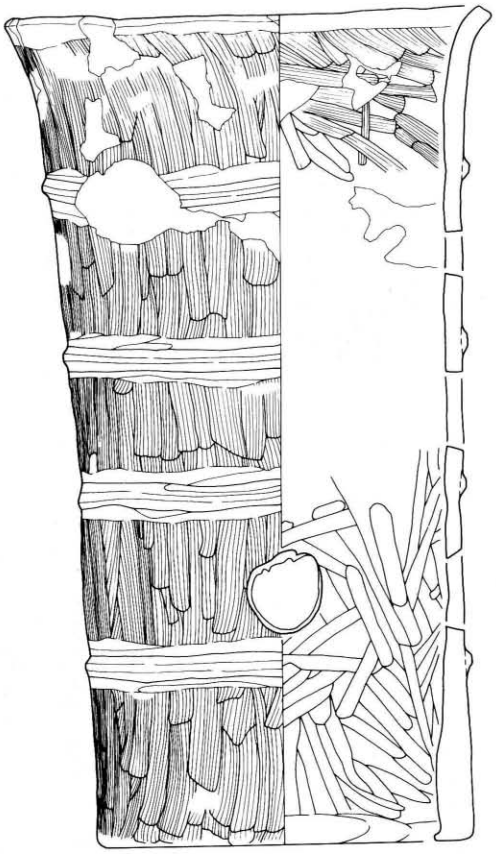
40(14 トレ D)

0 25cm

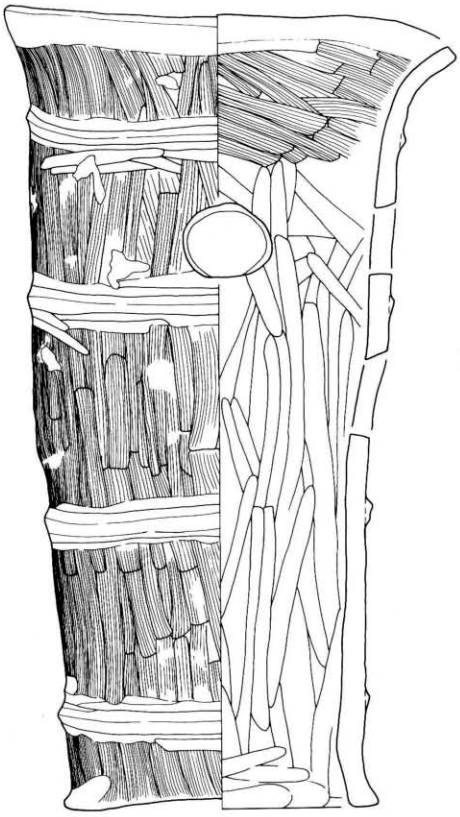
図14　14トレンチ



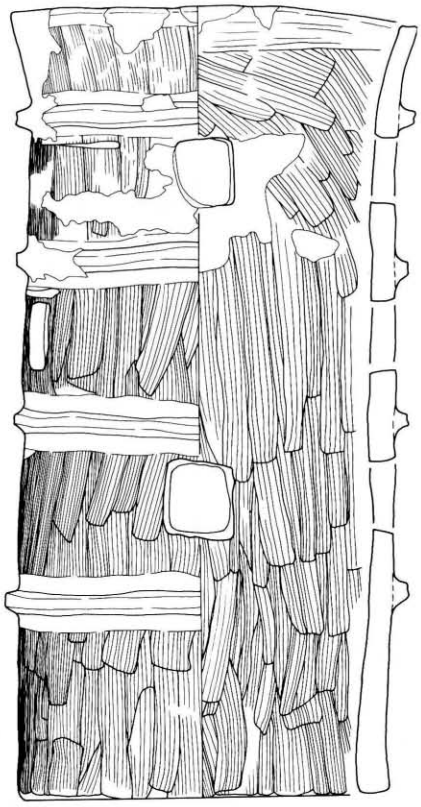
41(16 トレA)



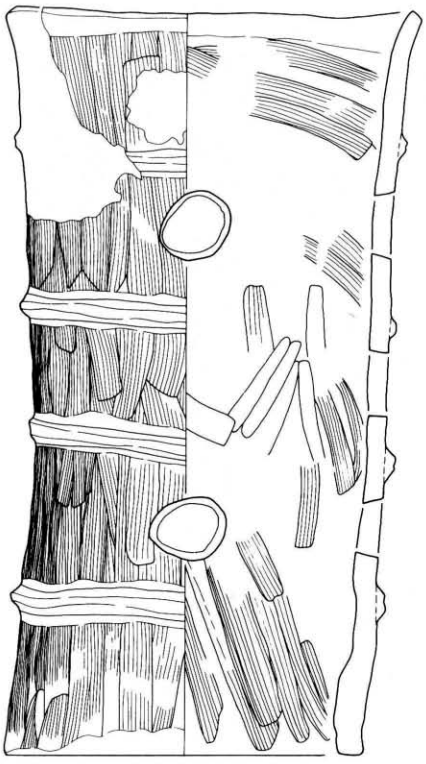
42(16 トレB)



43(16 トレC)



44(16 トレD)



45(16 トレE)

0　　25cm

図15　16トレンチ（1）

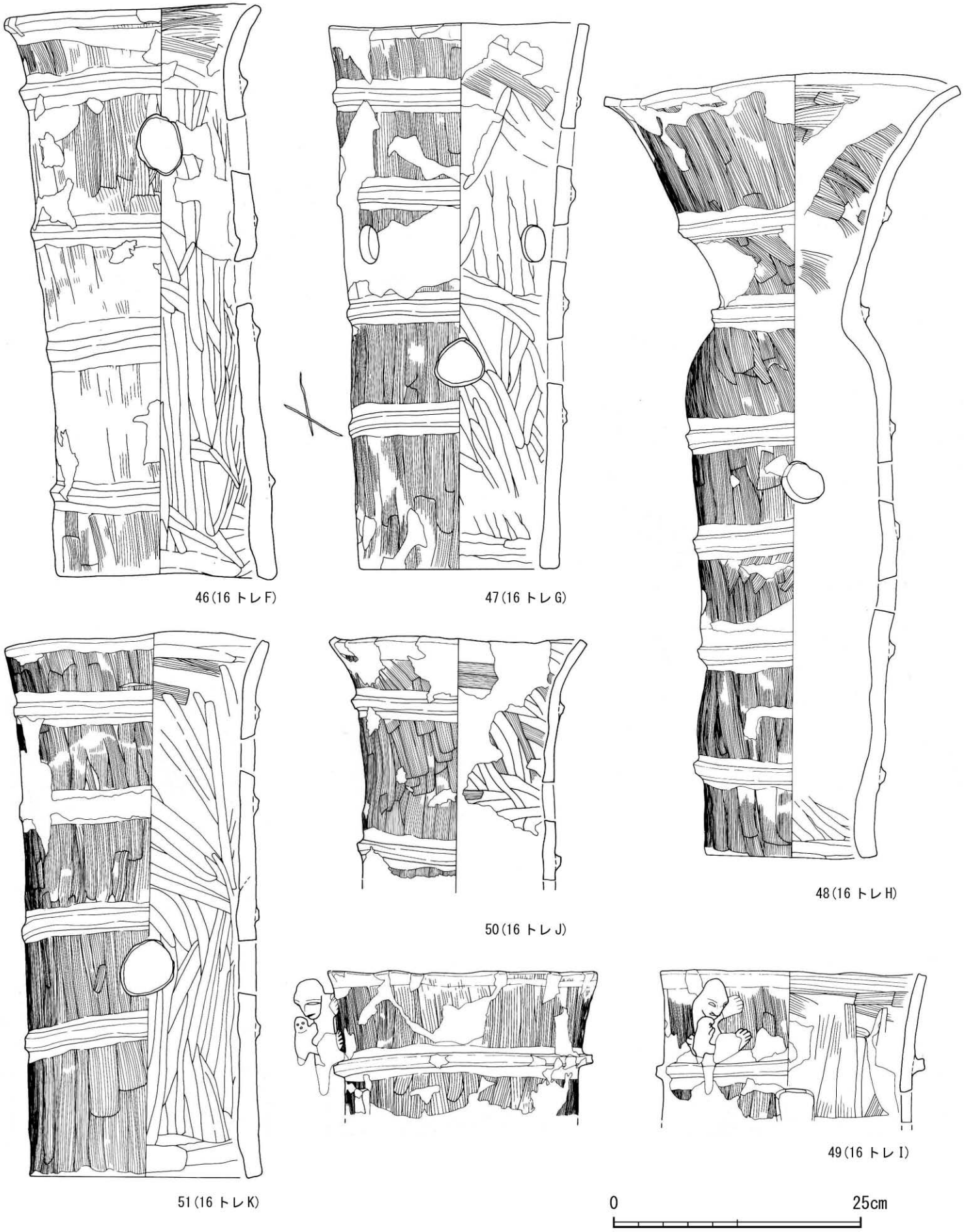


図16　16トレンチ（2）

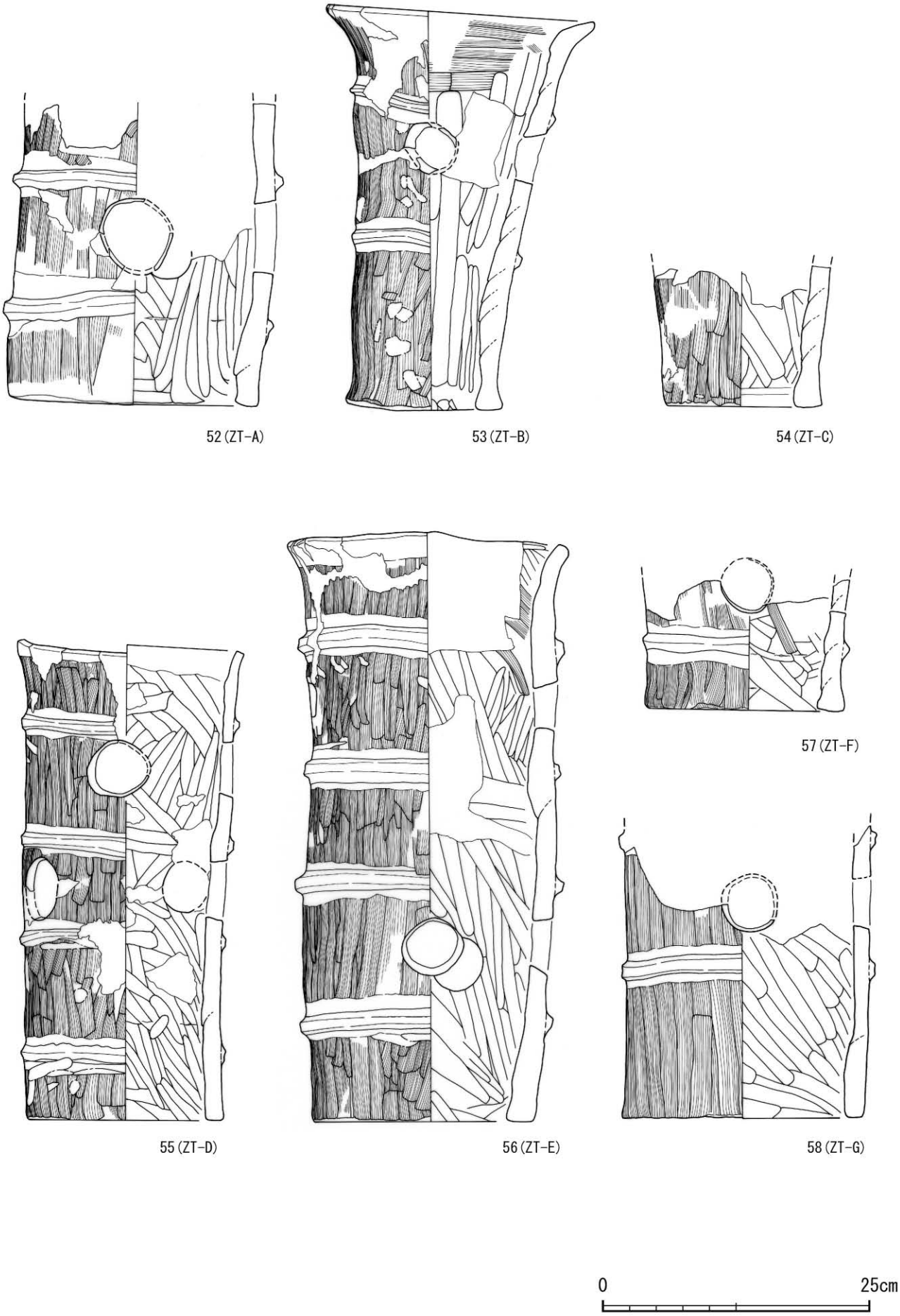


図17　前庭部（1）A～E西側・FG東側

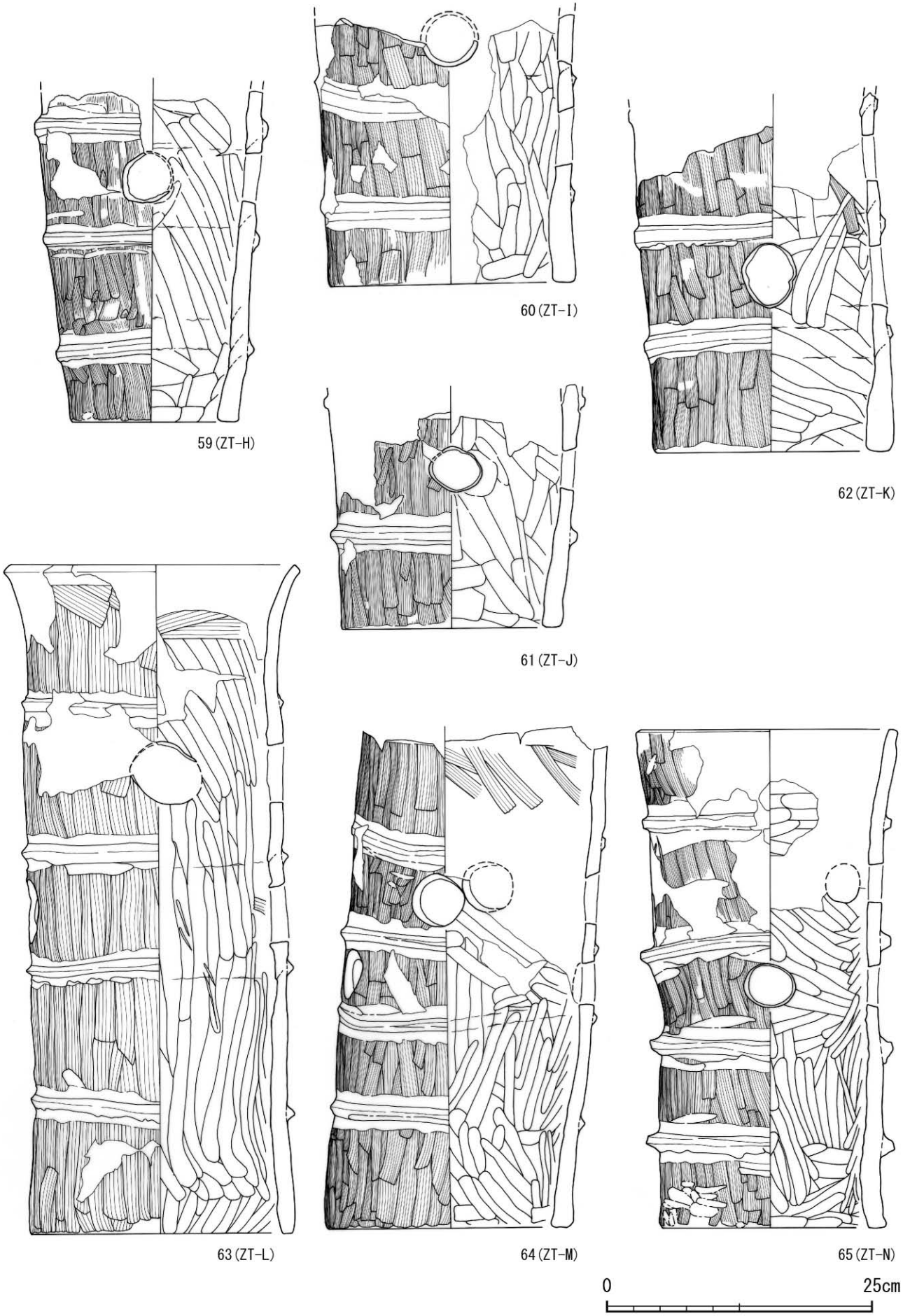
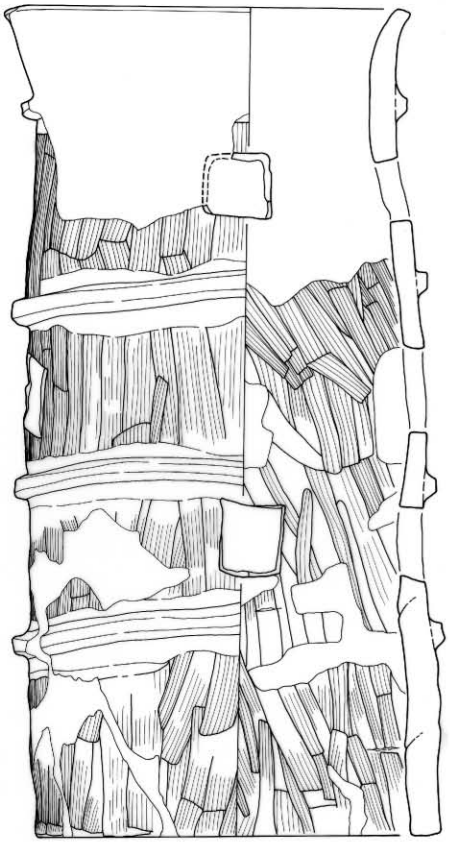
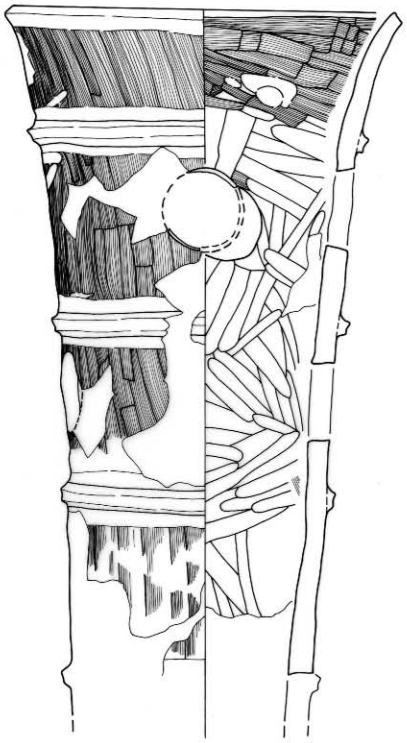


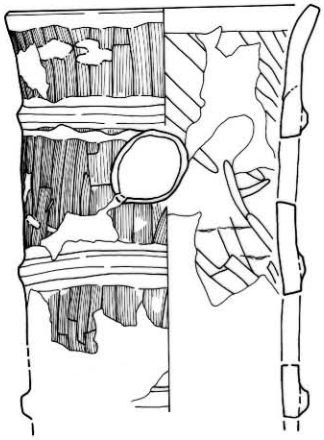
図18　前庭部（2）Ｈ～Ｎ東側



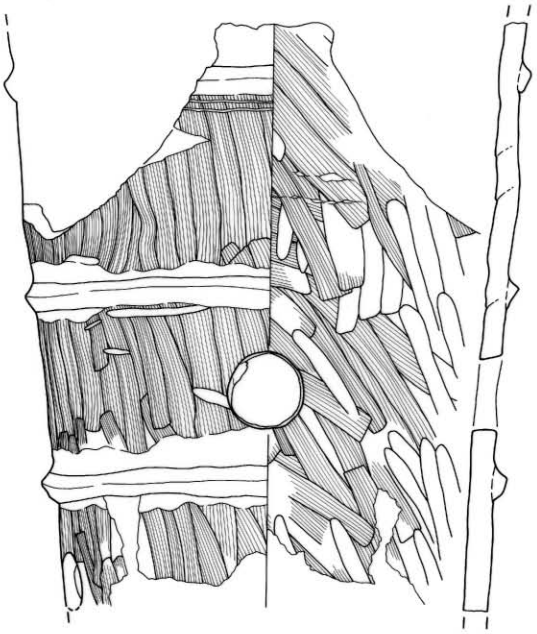
66(ZT-1)



67(ZT-2)



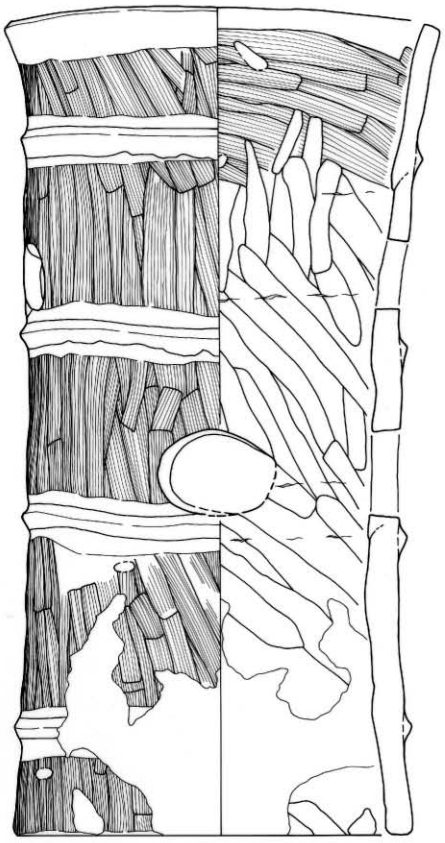
68(ZT-3)



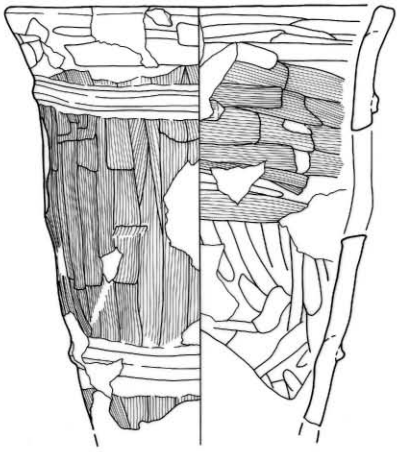
69(ZT-4)

0 25cm

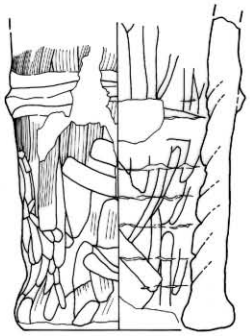
図19　前庭部（3）



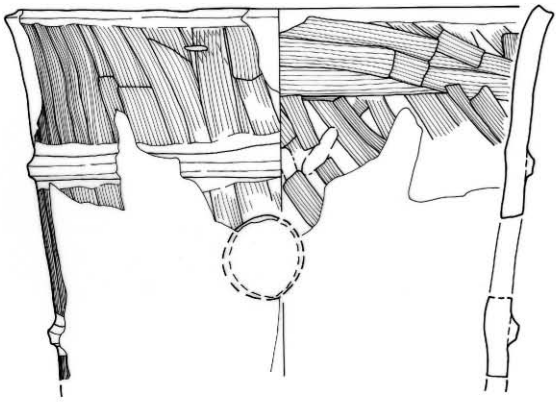
70(ZT-5)



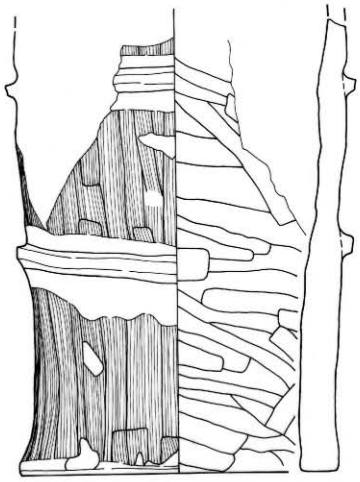
71(ZT-6)



72(ZT-7)



73(ZT-8)



74(ZT-9)

0 25cm

図20　前庭部（4）

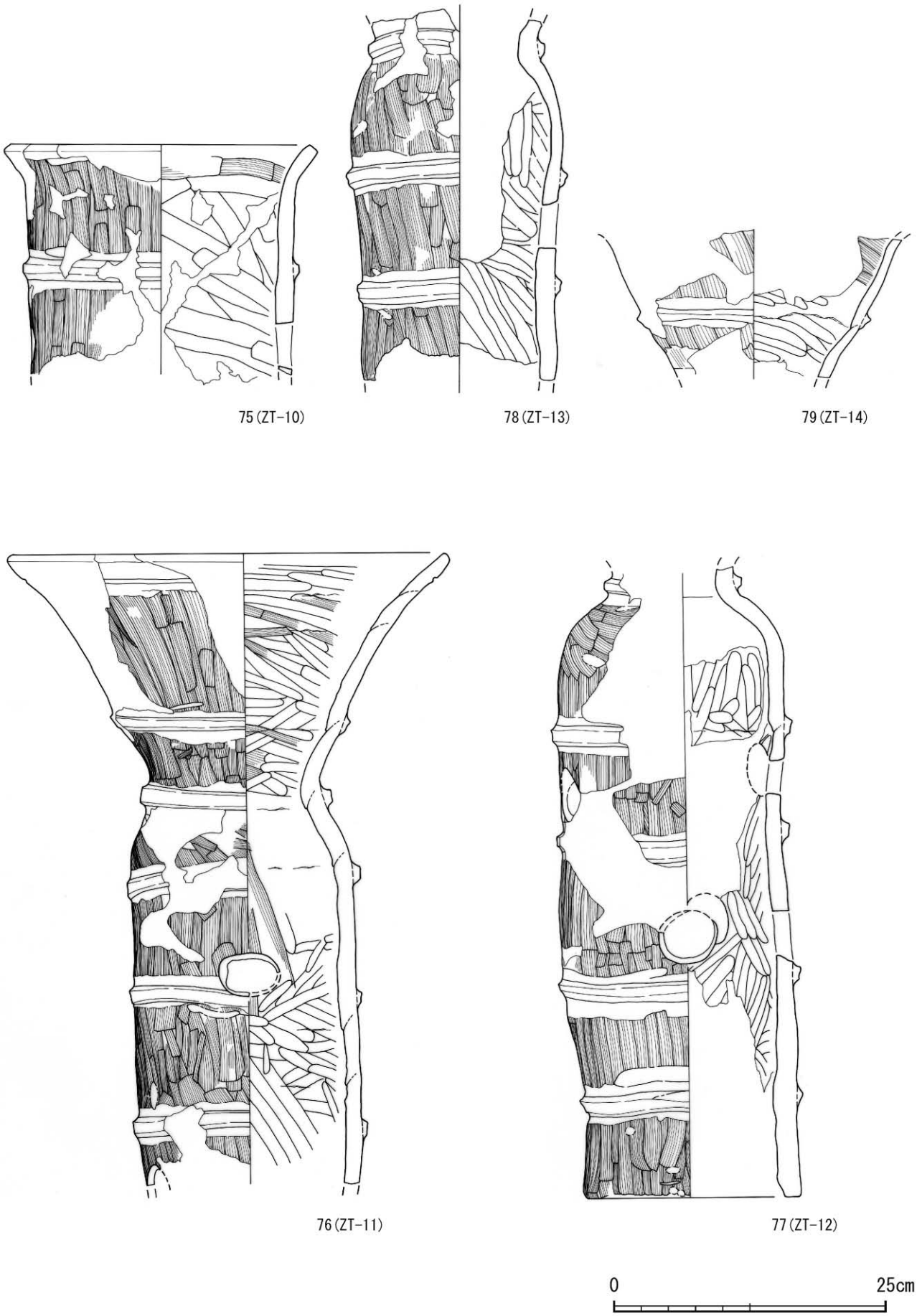
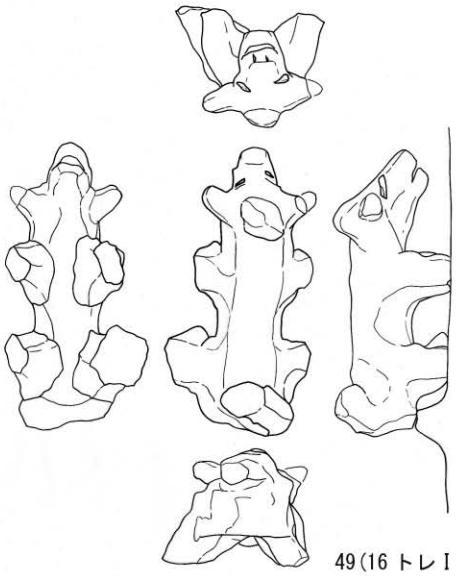


図21　前庭部（5）



49（16 トレⅠ
708 外）

49（16 トレⅠ
850 外）

0　10cm

親子猿

犬

49 親子猿と犬のついた円筒埴輪

図22　16トレンチⅠの親子猿と犬

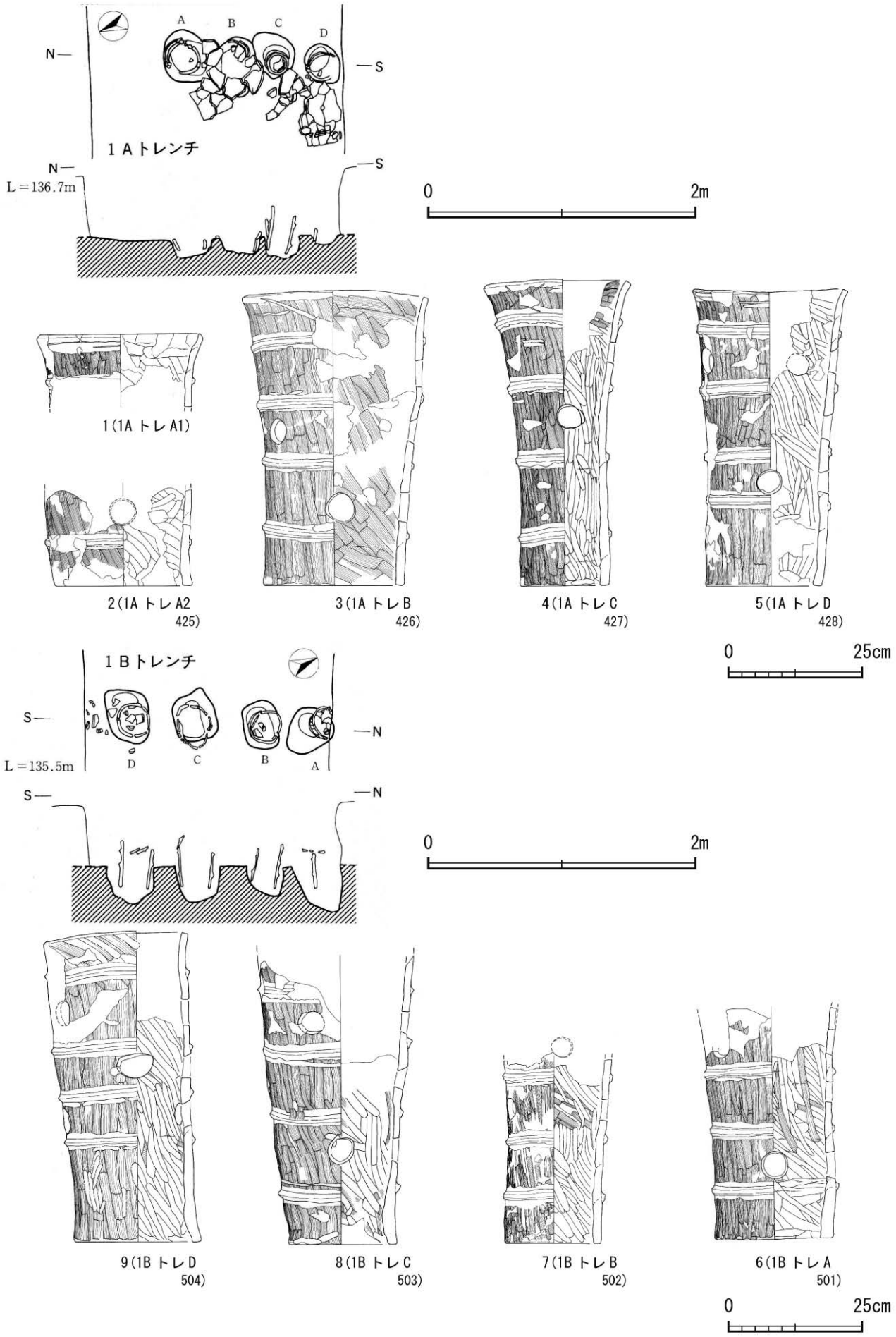


図23　１Ａ・１Ｂトレンチ埴輪列

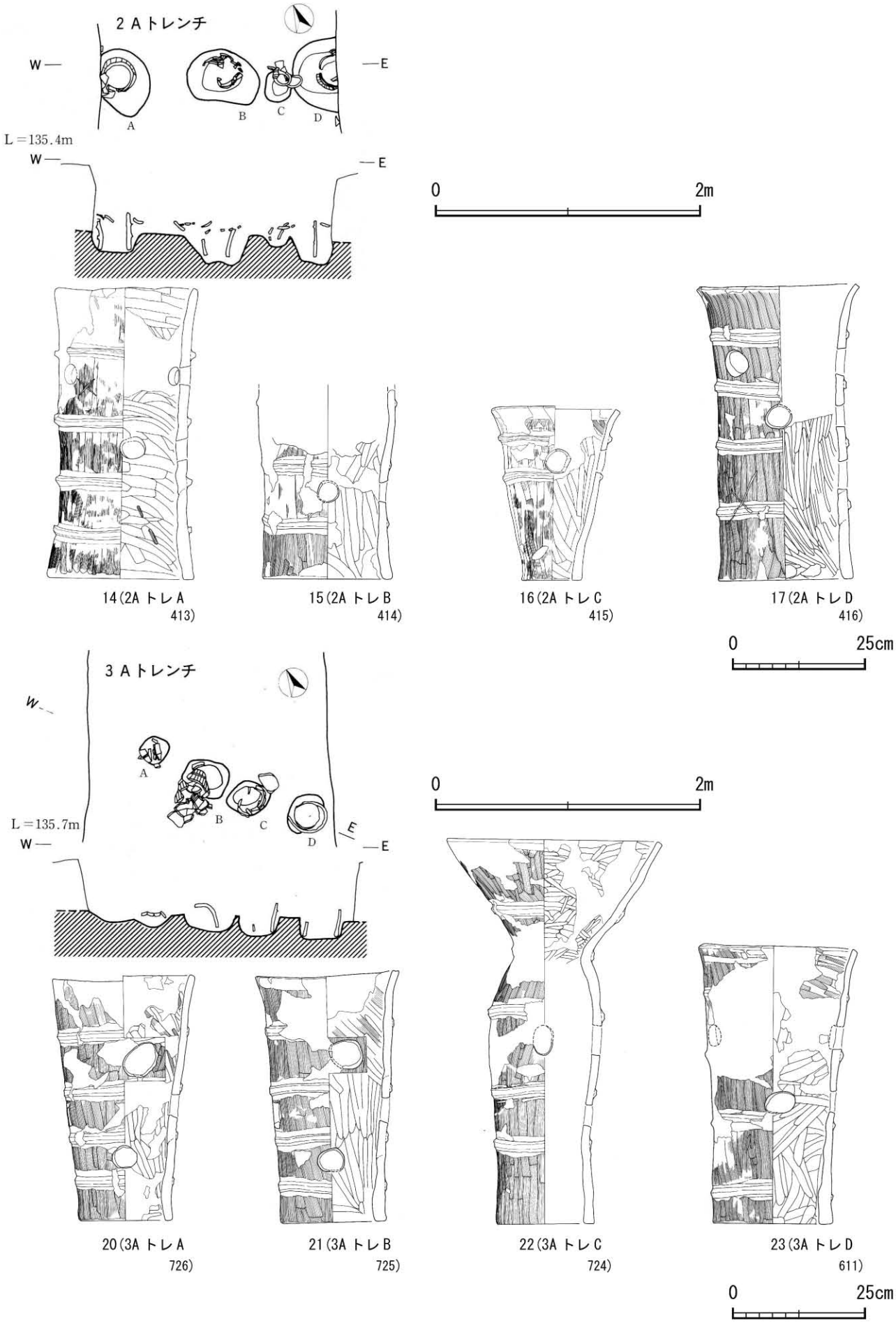


図24　２Ａ・３Ａトレンチ埴輪列

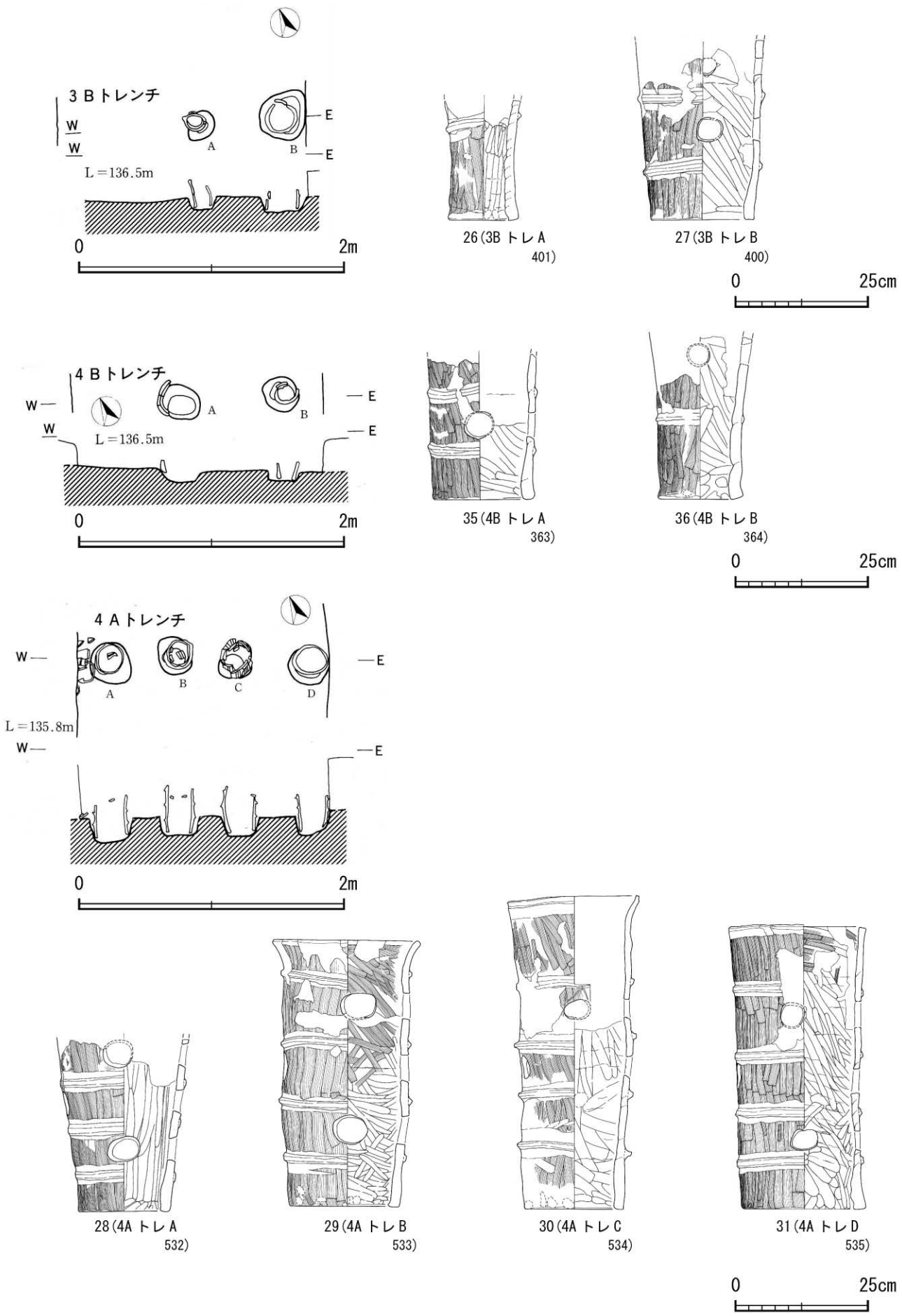


図25　３Ｂ・４Ａ・４Ｂトレンチ埴輪列

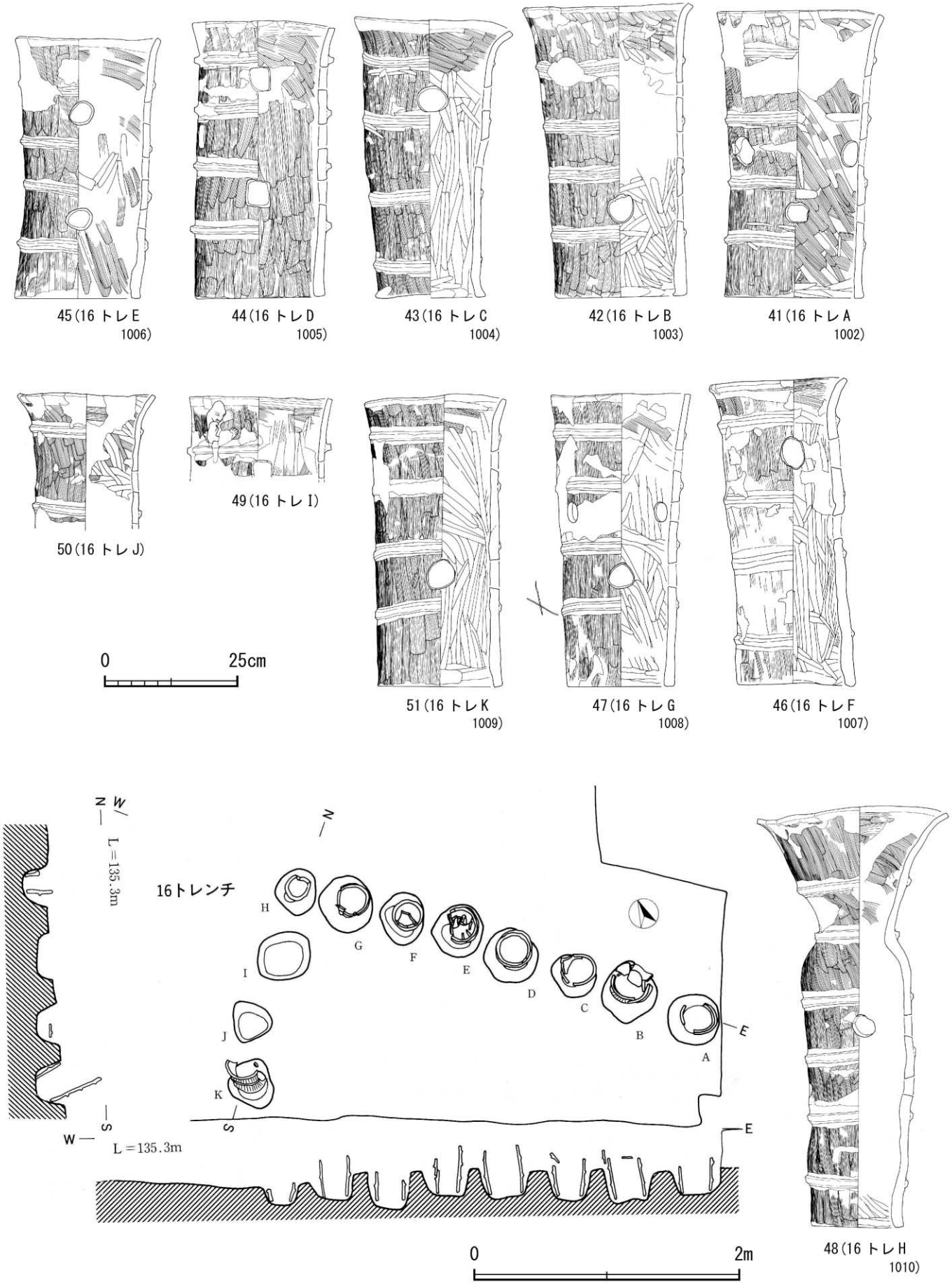


図26　16トレンチ埴輪列

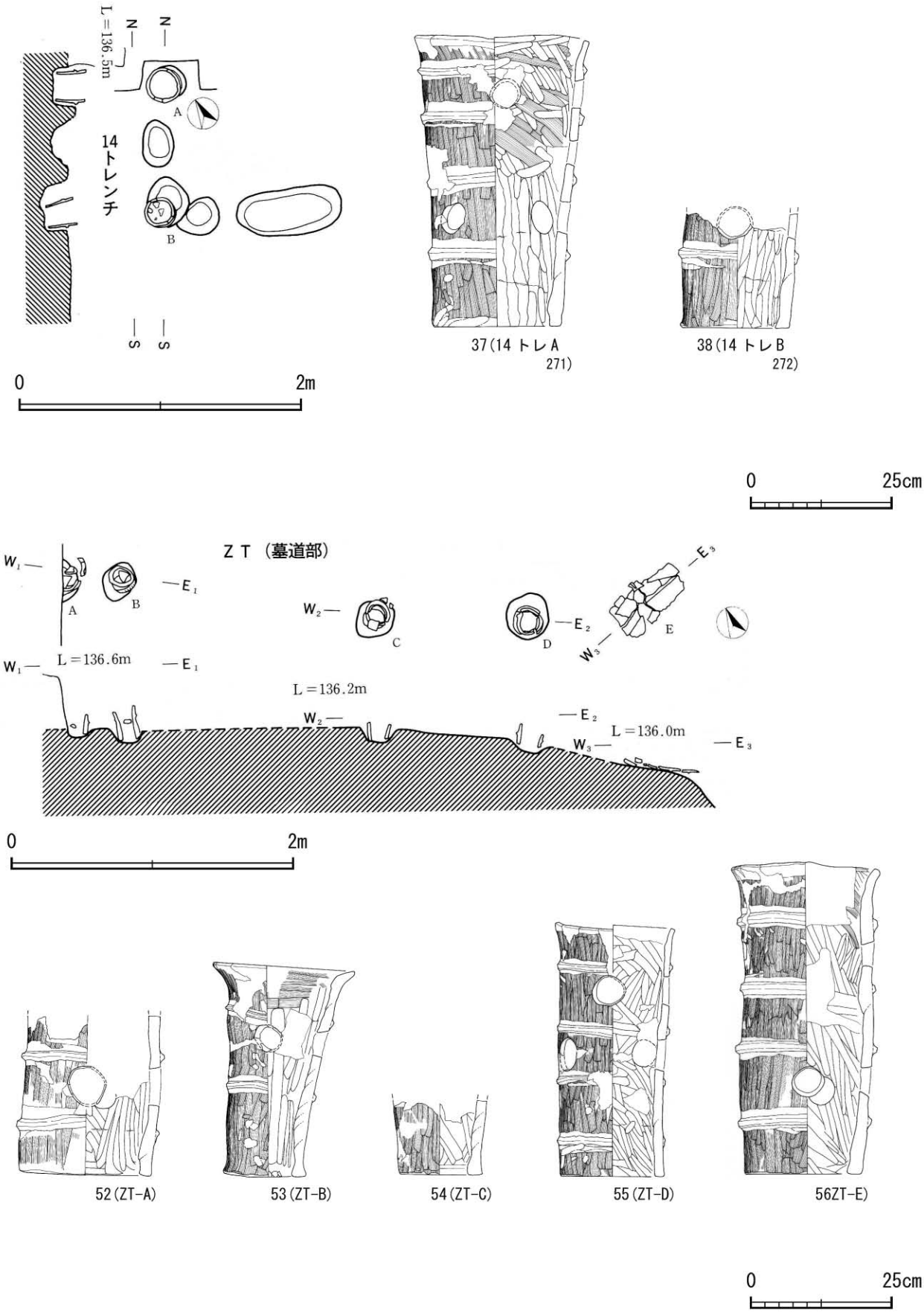


図27　14トレンチ・前庭部墓道西側埴輪列

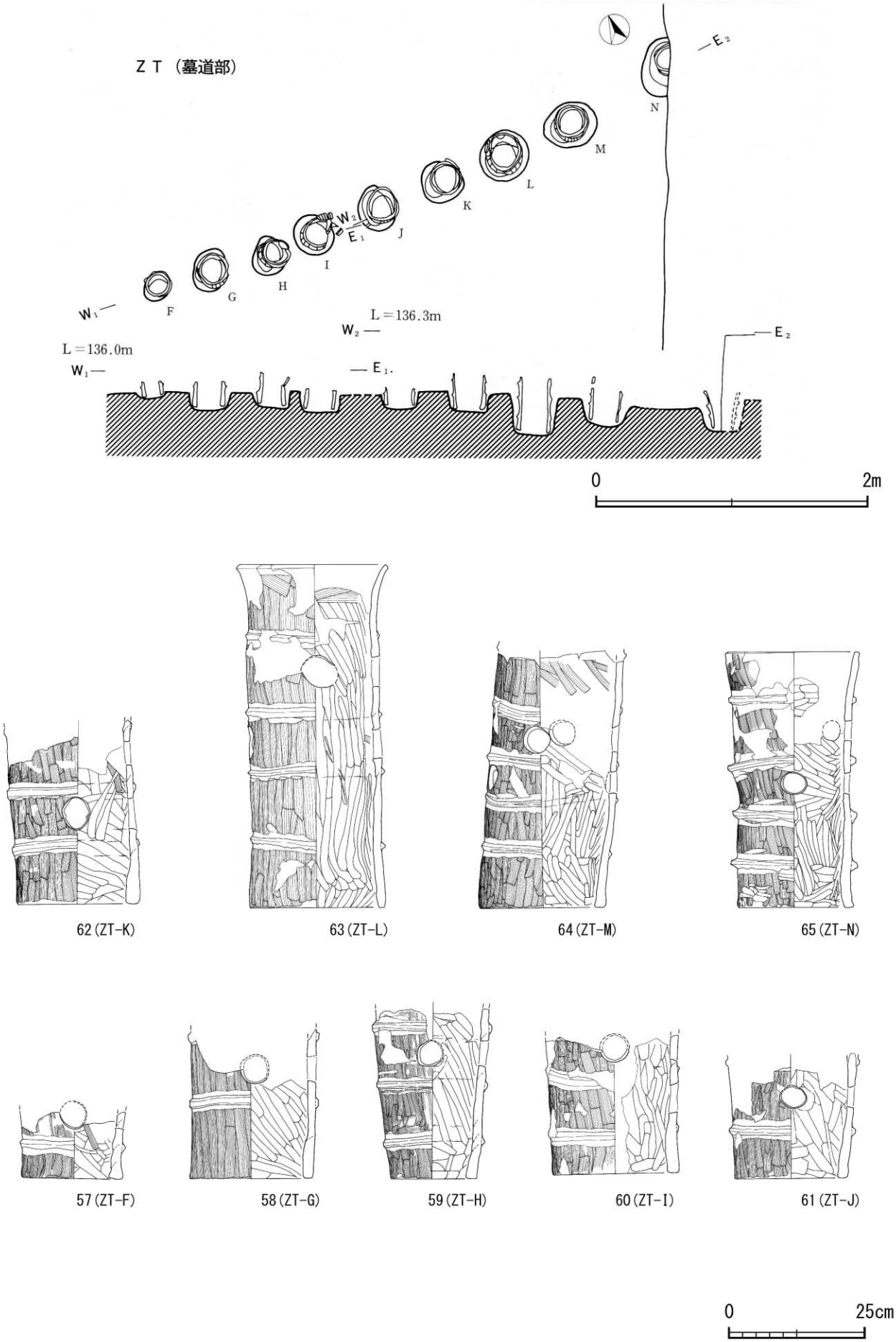
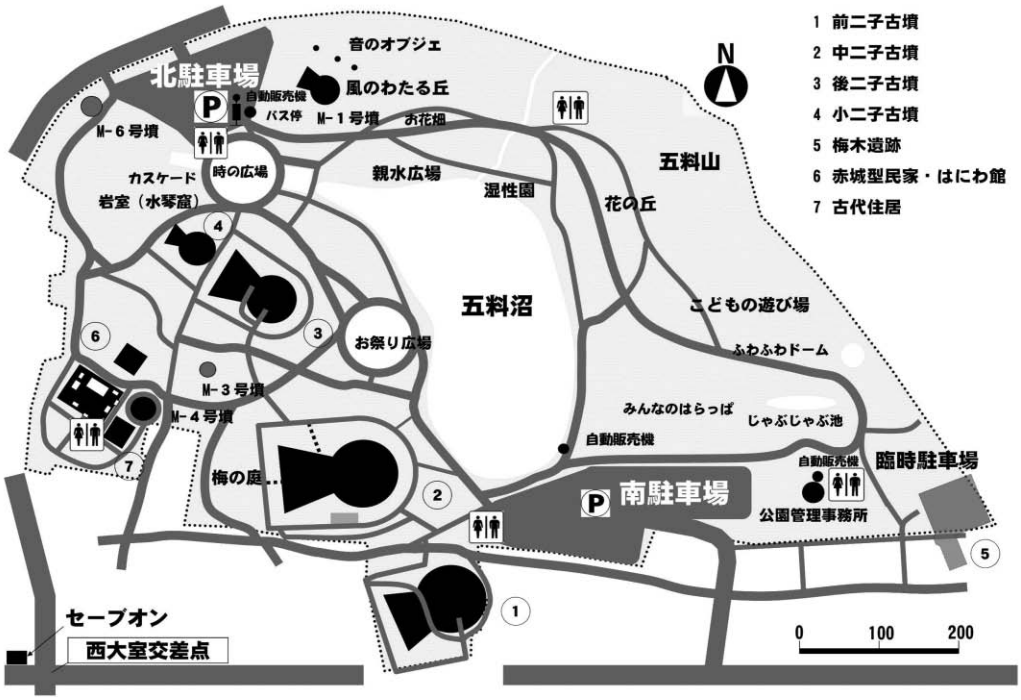


図28　前庭部墓道東側埴輪列



大室公園案内図

平成27年度　史跡　前二子古墳等　歴史活き活き！ 史跡等総合活用整備事業
平成28年度　地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

大室古墳の教室
考古学講演会・講座の記録２

発行日　2016（平成28）年12月22日
発　行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853　群馬県前橋市総社町三丁目11－4
電話　027－280－6511
印　刷　朝日印刷工業株式会社